
GATE 2:FLAME DRAGON
2.炎龍編
ゲート
自衛隊
彼の地にて、
斯く戦えり
柳内たくみ
Yanai Takumi
アルファポリス


GATE 2:FLAME DRAG
2.炎龍編
ゲート
自衛隊
彼の地にて
斯く戦えり
柳内たくみ
Yanai Takumi
アルファポリス

ゲート ―2. 炎龍編―

自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ

主な登場人物紹介

日本

伊丹耀司（いたみ ようじ）…… 33歳。陸上自衛隊二等陸尉、第三偵察隊隊長。いわゆるおたく趣味の持ち主。同人誌やネット上の小説や漫画を愛読する。仕事は生活と趣味のための収入源と割り切っている。

倉田三曹（くらた さんそう）…… 21歳。第三偵察隊に所属。伊丹の乗る高機動車のドライバー。猫耳萌（ケモノ系萌）の趣味を持ち、先輩の伊丹ともおたく話で盛り上がる間柄。

黒川二曹（くろかわ にそう）…… 23歳。第三偵察隊の女性自衛官。看護師でもあり、身長190㎝の美女。ゆったりとしたお淑やか口調だが、なにげに毒舌を放つ。

栗林志乃（くりばやし しの）…… 24歳。第三偵察隊の女性自衛官。陸上自衛隊二等陸曹。小柄ながら豊かなバストを装備するが、格闘徽章を有する猛者でもある。

富田章（とみた あきら）…… 27歳。第三偵察隊に所属。陸上自衛隊二等陸曹。レンジャー、空挺徽章の二つを併せ持つ。通信制の大学で天文学を学んでいる。

森田総理大臣（もりた）…… 辞任した本位の後を継いで総理大臣に就任する。事なかれ主義者の上に、深く物事を考えている様子が見えないので、周囲からは不安視されている。

嘉納太郎（かのうたろう）…… 日本の外務大臣。おたく趣味の持ち主として国民に知られ、かつては伊丹ともおたく仲間だった。

菅原浩治（すがわら こうじ）…… 外務省のエリート官僚として将来を嘱望されている。官僚トップの座を狙って冷徹な野心家を演じているが、意外にも熱血漢だったりする。

梨紗（りさ）…… 伊丹と離婚した元妻。女性向け同人誌作家。

アメリカ

ディレル…… アメリカ合衆国大統領。『特地』から得られる利権拡大を狙って、様々な陰謀を巡らせている。

中国

薑徳愁（とう とくしゅう）…… 中華人民共和国国家主席。『特地』に移民を送り出すことによって、利権独占を狙っている。

ロシア

ジェガノフ …… ロシア連邦大統領。『特地』からの資源流入によるロシアの影響力低下を懸念して、様々な策謀を巡らせている。

異世界（特地）

テュカ・ルナ・マルソー ……165歳（外見は16～17歳）。金毛碧眼のエルフ上位種族の娘。父ホドリュー・レイ・マルソーとともに、コワンのエルフ村で生活していたが、古代龍の襲撃によりコワンの村は全滅し、一人生き残る。

レレイ・ラ・レレーナ ……15歳。ヒト種の賢者、魔導師。老賢者カトーの二番弟子。理知的で優れた才能を持つが、それだけに情緒に欠ける。細い体つきのため、年齢より幼く見られることがある。

ロゥリィ・マーキュリー ……961歳（外見は13歳）。亜神、神エムロイの使徒。死神ロゥリィとあだ名され、華奢ながら巨大なハルバートを操り容赦なく敵を切り裂く。異世界の神官服であるフリフリの黒ゴスを纏っている。

モルト・ソル・アウグスタス ……異世界の帝国皇帝。帝国の覇権拡大を図るために、ゲートを越えて日本にまで出兵を試みる。

ピニャ・コ・ラーダ ……19歳。モルト皇帝の美人娘。帝国と日本との間にある国力の差にいち早く気づき帝国を守るために奔走する。伊丹と関わったため、おたく文化に接触して強い影響を受ける。

ヤオ・ハー・デュッシ ……315歳（外見は20代後半～30代前半）。ボンテージ鎧のよく似合う肉感的な美人ダークエルフ。猟に出れば罠を踏み、買い物に出れば店が閉まっていて、恋人は親友に奪われてしまうという不運な人生（エルフ生?）を送ってきた。炎龍によって滅びに瀕した一族を救うために、我が身も省みず「緑の人」を捜す旅に出る。

ジゼル ……400歳超（外見は20代前半）。亜神、冥府の神ハーディの使徒。竜人族出身。大鎌を武器とし、新生龍を従えてロゥリィに挑戦する。深縹色の肌を持ち、全身にトライバルのタトゥーを入れている。神官服はフリルたっぷりの白ゴスだが、着崩しているのでいろいろ隠せていない。

01

帝国皇女ピニャ・コ・ラーダが目を醒す。

すでに執務室内は明るくなっていた。開かれた鎧戸から、朝の陽射しが差し込んで閉じた瞼にも眩しいほどだった。

帝都は、碧海と呼ばれる海から内陸に徒歩で二日ほどのところにある。陽射しこそ強いが、その暑さは北の氷雪山脈から流れてくる涼やかな風が和らげてくれるので、非常に過ごしやすい。

皇宮は帝都五つの丘のうち最も東寄りの丘、サデラ中腹にある。

そのさらに東麓の緑苑が彼女の居館として割り当てられていた。ここは風通しに優れていて東の森からは清々しい糸杉の香りが運ばれてくる。頭がすきっとするこの香りが、ピニャは大好きだった。

「姫殿下。ベッドでお休みにならなかったのですね」

執務室の鎧戸をつぎつぎと開いていく書記のハミルトンは、ため息混じりにお小言を並べた。

言われてみれば、この世界で「トュニ」と呼ばれる婦人用正装をまとったまま、ピニャは机に突っ伏していた。

机の上には、各種の書類が山と積まれていた。それに加えて、あちこちから送られてきた手紙類。その殆どが羊皮紙だが、最近はアルヌス協同生活組合から購入するようになった『コピィシ』と呼ばれる『紙』が便利なので愛用している。

「あっ、しまった」

枕にしていた羊皮紙がくしゃくしゃに成り果てていたので慌てて皺を伸ばす。代官から送られてきたフォルマル伯爵家の財務状況報告書だった。目を通している内に眠ってしまったのだろう。

見れば手指が羊皮紙から移ったインクで汚れていた。服や顔まで汚れていないかも気になるところだ。そう思って見ると、服もしわくちゃになっていた。顔や体もべたついて気持ちが悪い。

「姫殿下。食事の前に、沐浴をなさったほうが宜しいようですね」

「すまん。そうする」

部下の忠言を受け容れ、ピニャは降参とばかりに諸手を上げた。

「本日の予定ですが、大きな物としては午餐を元老院のキケロ卿と一緒にされるお約束になっています。晩餐はデュシー侯爵家令嬢の誕生お祝いのパーティーです。午餐と晩餐の間に時間がありますので、シャンディーとの面談を入れておきました。白薔薇隊長の後任人事について意見具申があるそうです」

「パナシュとシャンディーは姉妹の契りを交わした仲だったろ？　ならば、白薔薇隊の隊長はシャンディー・ガフで決まりじゃ駄目なのか？」

「彼女としては白薔薇隊の隊長に就任するよりは、パナシュと一緒にアルヌスに行きたいというところではないですか？」

ピニャは理解できないとばかりに切れ長の美しい眉を顰めた。姉と呼ぶパナシュの信頼に応えて留守を守ることこそがシャンディーの役割である。それを今更嫌だというのは隊の習慣と規律を乱す我が儘と言えるからだ。どんな意図でそんなことを言い出したのだろうか？　ハミルトンの言う通りなら許し難いが、いずれにせよ会ってみれば分かるだろうから判断は後に回すことにする。

「今日はキケロ卿に、スガワラ殿をお引き合わせしなければならなかったのだな。それと、デュシー家のパーティー。うんうん」

「デュシー家のパーティーには、第一陣返還希望名簿に名を載せた捕虜の親族が集まります。名簿は親族を代表して侯爵よりスガワラ様にお渡ししていただきます。名簿の草案にはお目通しいただけましたか？」

「ああ、昨晩確認した。それでなんだが十五名定員のところに、十四名しかなかったのは何故だったかな？　一名分あけておいた理由が思い出せない……」

ピニャは机の上に積まれた書類の山から目的の紙の束を引き抜いた。途端、山積していた書類がドサドサと土砂崩れを起こして床に散らばっていく。

「あ～あ」

急ぎ拾い集めようとする皇女を制して、ハミルトンは書類を整理しつつ拾い始めた。

「殿下……一名分は、キケロ卿用に空けておいたものです。キケロ卿ご自身には、捕虜となられたご家族はおられませんが、傍流の甥御が捕虜名簿に載っていました。本日の会見でご希望が出れば、第一陣の名簿に載せます」

ピニャは頭をかかえるようにしてハミルトンの言葉を反芻していた。記憶容量が一杯なのか、それともまだ頭の回転数が上がらないかのどちらかだろう。

「大丈夫ですか？　お疲れのようですが」

「大丈夫じゃないと言ったら、代わってくれるか？」

「無理ですね」

「ならば、妾が頑張るしかないだろう」

ピニャはため息混じりに紙の束をハミルトンの胸に押しつけると、沐浴するために執務室を後にしたのだった。

沐浴をして紅い髪を結いあげ、薄い化粧をし、衣類をまとう。これだけの身支度を済ませたピニャが食卓に姿を現すには、ハミルトンに起こされてから一時間ほどの時を必要とした。貴婦人の身支度として考えるならば、これでも結構速い方になる。

それでも菅原浩治はピニャが姿を現すのを待たずに、先に朝食を摂っていた。メニューは小麦粥に火で炙った干し肉を入れたもの、そして柑橘系の果物だった。

ピニャの館には、召使い……所謂メイドさん達が大勢居て、彼に不自由がないようにしてくれている。食事の支度も、こちらの正装であるトュガの着付けもしてくれる。だから困ることは一切ない。ただ、仕事だけは、彼女が居ないと全く始められないのだ。

外交とは相手と会うことで始まる。この帝都に知る者のない彼にとって、誰と会うにしてもピニャの紹介が必要なのだ。外務省から特地問題対策委員会に出向している菅原の仕事は、この帝都における人脈を広げることである。人の縁を結び、後からやってくる本格的な交渉団が活動するための下準備として語学を磨き、帝都の統治機構における人間関係の機微を把握するのだ。

「おはようございます。殿下」

「おはよう、スガワラ殿。そなたは相変わらず早いな」

あんたが遅いんだよ、という言葉を飲み込んだ菅原は、職業的な笑みを浮かべながらピニャの美しさを賞賛する言葉を添えた。これは彼がフランスに留学している時に身に付けた習慣だが、こちらでも反応が悪くないので婦人に対する挨拶に付け加えている。

ピニャは食卓の前に座ると、出された小麦粥をほんの一口と、果物のみを食べるだけだった。見る限りでも胃の負担を軽くするように作られた朝食を、ことさら少量に抑えておく理由は、後に続く呟きが物語っている。

「今日は、キケロ卿のところで午餐、晩餐はデュシー家。はっきり言って、胃袋がいくつあっても足りない」

接待に関わる苦労は、どこに行っても同じようである。菅原も似たような経験を積んでここまで来ているので大いに同意できることであった。

「我が国にも腹も身の内って言葉がありますよ。腹を庇ってばかりいられないのがこの仕事だと分かってはいるのですが、結構きついんですよねぇ」

「ああ」

特に女性の場合は、肌とかスタイルとか美容面への影響も少なくない。

菅原はいろいろと気にしている様子のピニャに、我が国には良い胃薬がありますよ、と告げた。よかったら取り寄せましょうか？　と付け加えて。

「それは是非。ありがたい。本当にありがたい」

帝国では、宴席ですることは話すことの他、食べることと飲むことに集約されている。他に娯楽はないのかと思う向きも多いが、我が国だって、パーティーに料理と酒は不可欠だから他人のことは言えないのである。ただこちらでは、出された料理はひと通りは手をつけることが礼儀とされているので、それがきついのだ。

案の定、キケロ邸の午餐には、豪華な食事が並べられた。

山羊を丸ごと焼いたものとか、魚と野菜を鍋に溢れるほど詰め込んで煮込んだスープとか、鳥、魚、獣肉、野菜がふんだんに使われていた。果物は氷雪山脈からとってきた雪に冷やされて美味しそうだ。しかしそれにしても種類と量が凄い。食べることが客側の礼儀なら、これを迎える側は、

食べきれないくらいの料理でもてなすことが歓待の証とされているのだ。

このような歓待を受けることが出来るのも、皇女ピニャが仲介に立っているからだ。もし、菅原が一人でのこのこやってきたら、頭から水をぶっかけられておしまいだったろう。

キケロ・ラー・マルトゥスはその名が示すように帝国開闢以来の名門マルトゥス家の流れを汲むが、家柄としては傍流であったため、どうにか貴族の末席を占めているに過ぎなかった。しかし、優れた弁舌と政治力が評価されて、今では元老院議員に任ぜられ政界の重鎮役を担っている。元老院にはマルトゥス本家の者も在籍するため、混同を避けて彼を指してはキケロ卿と呼ぶ。

今回の戦争について彼が与するのは、主戦論・皇帝派である。つまり「現在は非常事態である。従って皇帝陛下の大権下に、帝国の総力を結集して可及的速やかに軍事力を再建すべし。そして、アルヌスを占拠する蛮族を武力でもって追い出すべし」という意見の持ち主なのである。

これに相対するものが講和論・元老院派である。こちらは「今回の無謀な戦争は皇帝の指導下で始まったのだから、皇帝の権力を弱めて元老院の集団指導の下、軍事力を再建する。また、アルヌスを占拠する敵に対しては、『門』の向こうにお引き取り願うにしても、軍事力とは別の選択肢、例えば講和などの方法も探るべきだ」とする意見である。

そのキケロを交渉の相手として選んだのは、彼が主戦論者の中では比較的話が通じるタイプだと見られたからである。

講和論者は何も言わなくても講和に乗って来るものだ。だが、いかんせん数が少ない。皇帝の意

思決定に影響を及ぼすには、やはり大勢を動かしていかなくてはならない。従って主戦論者を切り崩して講和論の勢いを増すことこそが、講和交渉を進める上で必要となる。

菅原はそんな説明の下で、誰かを紹介してくれないかとピニャに求め、彼女は前述した理由でキケロという人物を選び出したのである。

「キケロ卿。こちらをご紹介したい。ニホン国の外交を担当するスガワラ閣下だ」

いろいろな都合で、菅原の身分を勝手に格上げするピニャである。菅原もピニャの心遣いだと分かったので、大使扱いされてもあえて訂正せずそのままに聞き流した。

「はじめまして」と互いに挨拶を交わす。

キケロは「失礼ながらニホンという国について、あまり存じ上げていない。どのような国であったかな？」と尊大な態度で語りかけた。

帝国は強大な国だ。周辺の諸侯だけでも十数ケ国。外国や属国、辺境の諸部族といった国の体を成していないものも含めると百余りの地域と外交関係がある。元老院議員であっても、外交官僚の出身でもなければ、知らない国があってもおかしくはないのだ。

「そうですね。四季があって森や水の綺麗なところです」

これを聞いたキケロは小さく嗤った。彼の細君も、馬鹿にするような視線で肩を竦める。

文明の遅れた蛮地からの使者がどんな国だと問われて、森や水の美しい国と答えるようでは、他には何もありませんと言っているようなものだ。パッと見では切れ者のようだが、所詮は山出しの

田舎者。語学力も帝都の貴族を相手に弁舌を振るうにはまだまだ。キケロは菅原をそう評した。いや、彼の属する国が遅れているのであって、彼個人は悪くない。常に公正でありたいと自戒しているキケロは、軽率に突き落とした菅原の評価を、少しばかり持ち上げることでバランスを取った……つもりである。

これを横で見ているピニャは、キケロの胸中が透けて見えるようだった。

思わずため息が出てしまう。「注意めされよ。もうやられていますぞ」と囁きたくなるのだ。だが彼女は仲介者である。外交の当事者ではないから口を挟まないようにしていた。

「我が国の産物を手土産として持って参りました。ご笑納いただければ幸いです」

このあたり実に手の込んだ演出である。彼が指を鳴らすと、従者役兼護衛として随伴している陸自の直江二等陸曹が、ピニャの従者達の手を借りて、手土産の入った箱を運び込んで来た。

冷笑していたキケロ夫妻の表情がだんだんと変化していく様子は、ピニャをして思わず頬を綻ばせてしまうほどだ。

キケロの前に積み上げられる友禅染の見事な絹布、金糸銀糸で彩られた京都西陣織の反物、黒や朱の美しい金沢の漆器類、螺鈿の細工物、錦絵の鮮やかな扇子、薩摩切子のガラス杯。職人が時の天皇陛下に対して「世界中の婦人の首を、コレで絞めあげてみせましょう」と豪語したという伝説の残る志摩の養殖真珠。関の刀工が打った日本刀。そして和紙、洋紙、ペン等一度使ったら手放せない便利な文房具。金銀鮮やかなカトラリーに、陶器、磁器の食器等。

物作り日本を代表する工芸と実用の逸品揃いである。

ピニャはここ数日の菅原のやり方を見て、謙遜から入る彼のやり方を鮮やかな物だと思っていた。侮らせ、そして隙を見せた途端に切り込むやり口にやられない者はいなかった。

帝都でも入手不能の美しい品々を見せられれば、誰だろうと日本とはどんな国だと思う。思わない訳にはいかないのだ。贅沢に慣れた貴族だからこそ、目の前に積まれた品々が、どれほどの手間と技術によって作られたかが理解できるのだから。

キケロの細君は、色鮮やかな西陣や友禅に関心を奪われ、キケロは日本刀の鮮やかな刀身を魅入られたように見つめていた。弁舌を専らとする政治家とは言えやはり男である。武具に目がいくようであった。

「素晴らしい。これらはニホンから？」

「全て、我が国の職人の手によるものです」

「ニホンとは、どれほどに優れた国であろうか？　いや、失礼した。侮っておりました」

キケロは、ここで態度を改めた。尊大な態度もなりをひそめて相応の敬意を示す。優れた文物を見抜く鑑識眼と、文化に対して敬意を表すことができる素直な姿勢は尊敬に値すると言えるだろう。

「しかし、スガワラ閣下もお人が悪い。森や水の美しい国などと言われては、自慢するものがそれしかないのかと思ってしまいますぞ。さあ、教えて下され。ニホンとはどのような国でしょう？」

ピニャは思わず額を抑えた。また、やられている。

ここで、胸襟を開いて心の防備を解いた途端……。

「我が日本は、帝国とただいま戦争中です。場所は『門』の向こうでございます」

キケロはあんぐりと口を開いたまま閉じることが出来なくなっていた。

後の交渉が、菅原のペースで進んだのは言うまでもない。

キケロは、主戦論・皇帝派という自らの説を固持し、突っ張るだけで精一杯となっていた。そして、敵の使者をここに連れてきたピニャの行為を、売国とまでは言わないが、それに近い行為だと詰った。

それればかりか、精神的劣勢を覆すために再度『門』を越えて日本を征服すると、威勢のいいことを口にしたほどである。軍の再建も着々と進んでいて、あと数ヶ月で完了するだろうとか、新たに徴募した兵数が十万になるとか、本来なら伏せておくべきことまで喋ってしまった。

だが、それはキケロが日本という国の存在を認め、そこに住む者が侮りがたい敵であると認めたことを意味する。菅原としては、キケロにこちらを対等な交渉相手と認めさせることが出来ただけで成果充分と言えるのだ。これで、今後彼が一人でやってきても門前払いされる恐れはない。あとは何かにつけて、少しずつ現実を知らしめていけばいい。

ここで、菅原が差し出した一枚の紙が、ピニャを非難するキケロを黙らせる。そこには、帝国の文字でキケロの細君の妹の息子……つまり甥の名前が記されていた。

「うかがった話では、キケロ殿の甥御になられるとか？　この方はただいま我が国で捕虜となっております」
「なんと、生きているのか!?」
「まぁ！」
傍らで聞いていたキケロの妻が、その嬉しい知らせに感極まって倒れてしまい、メイド達があわてて彼女を宴席から運び出した。
「実は、ピニャ殿下に仲介の労を担っていただくことの引き替えとして、殿下からご要望をいただいた数名に限って、無条件で返還する約束を取り結んでおります」
「無条件だと？」
「はい。無条件です」
「身代金の類は必要ないと？」
「強いて言えば、殿下のお骨折りが身代金に相応することとなりましょう。あくまでも殿下のお口添えのある数名と限らせていただいておりますが……」
この一言は、ピニャの立場がなくなるような言動はするな、という意味をもってキケロの耳に届いた。
ピニャは捕虜の命を人質に仲介者として働かされているのだ。そう考える方がキケロにとっても受け容れやすかった。ならば仕方のないことである。売国行為と詰ったのは間違いだ。彼女は貴族

の子弟を守るために、我が身と名誉を犠牲にして働いているのだから。

これが「捕虜を返して欲しくば、講和に応じろ」、とか「負けを認めろ」というような話だったら、キケロも大いに拒絶しただろう。だが、相手がピニャに求めたのは交渉の仲介でしかない。どのような相手だろうと、どのような状況だろうと、交渉すること自体は悪いことではないのだから受け容れても良いのである。

仲介者たる彼女の活動を邪魔すれば、捕虜が帰って来れなくなる。また、返還される数名の枠とやらも、ピニャと日本との交渉次第で、多くもなれば少なくもなるのだろう。とすれば、いかに主戦論者たる身でも彼女の邪魔は出来なかった。しかも、自分の甥が帰って来るかどうかはピニャが決めるのだ。

キケロとしては、ピニャの袖にすがってでも頼みたいところである。だから、彼は何も言わずに彼女の手を取った。ピニャも表情を穏やかにして頷く。

「実は、今宵デュシー侯爵家令嬢の誕生お祝いのパーティーがあります。後刻、こちらにも招待の知らせが届きましょう」

「失礼だが、何をおっしゃられているか分かりかねますが？　デュシー侯のご令嬢とは面識もありませんし……」

「実は、デュシー家には悲しい出来事がありました。その憂いを払おうということで、侯爵はご令嬢の誕生祝いを盛大になさることにされたのです。妾はそこに良き知らせを届けたいと思っていま

す。ご出席なさりませんか？」

ここまでの話の流れで、ピンとこなければ政治家は出来ない。

おそらくデュシー家の者が『門』の向こうに出征したのだ。ならば、良い知らせとは当然彼の存命と帰還のことだ。出席する以上、キケロの甥のことも期待して良いだろう。というより、出席するかどうかが意思表示になるのだ。

キケロは恭(うやうや)しく頭を下げると、ピニャの手甲に接吻をする。

「是非とも良き知らせが届くその瞬間に、私もご相席(あいせき)させていただきたいと思いますよ。殿下」

＊　＊

帝都で、外務省の菅原がその活動に本腰を入れ始めた頃、アルヌスの難民キャンプたる仮設住宅の群れも、数ヶ月という短い期間にもかかわらず大きく様変わりしていた。

それは、帝国皇女ピニャ・コ・ラーダから語学研修生として派遣されてきた騎士団の隊員とその従者達（その全員が女性だが……）の滞在場所として選ばれたことに始まった。

当初、彼女達はピニャが夢見心地の表情で熱く語った、摩天楼と芸術で溢れた都市での研修を希望していた。

だが、その国の言葉を片言も話せないのに海外留学することが無謀であるように、いきなり東京

で受け容れるのも乱暴な話である。まして警護にはじまる諸々の事情もある。そこで日常会話くらいはこなせるようになるよう、日本政府はアルヌスの難民キャンプでの教育を施すことにしたのである。

こうすれば、日本側も受け容れの準備にも時間をかけることが出来る。

それに、ここには『特地語』←→『日本語』通訳の権威となりつつある賢者や、それに追随する勢いで日本語を修得している子ども達も多く住んでいる。日本語を学ぶだけなら、東京より適しているかも知れない。

日本側の人材としても、伊丹耀司(いたみようじ)ら陸上自衛隊各偵察隊の面々が特地の言葉をある程度解せるようになっていたし、さらに外務省の官僚もここで特地の言葉を学ぶ予定なので、いろいろと都合が良いのである。

だが、倍以上に増える人口を支えるには、どう見ても棟数が足りない。

いくら露営の訓練も受けているとはいえ、騎士団に属するような高貴な女性達にとっては、狭い部屋に相部屋というのもストレスの大きいことだ。それを正面からぶつけられる従者達のストレスはもっと大きいということで、インフラの充実がとても強く叫ばれたのである。それに加え、外務省の官僚も難民が仮設で暮らしていて自分達がテント暮らしなんてまっぴらゴメンだと言い出した。そこで臨時の予算が組まれ、仮設住宅よりはちょっとマシな造りの建物が並べられることになった。

さらには井戸を掘って浄水設備を置き、排水路を敷設し、浄化槽等の下水を完備し、これらを動

かす為のソーラーパネルも設置した。こうして小ぶりながらも、日本的な生活ができる環境が整えられた。

ついでに、これまでの生活必需品の無償配給も終了することにした。翼竜の鱗が避難民達の収入源として確保されたから誰からも文句は出ない。

ただ、遠く離れた町まで買い出しに行かないといけないというのも不便である。そこで小型ながらも各種の消耗品等を扱う商店が設けられることとなった。もちろん、その運営はアルヌス協同生活組合への委託である。

ところがである。難民のお年寄りや子ども達がのんびりと店番をしている風景は数日と保たなかった。というのもこの商店が『PX（駐屯地購買部）』と呼称されて、出入りの都度に煩雑な手続きが必要な銀座よりも、便利に立ち寄れる店として見られてしまったからである。

避難民達には、店を大きくしようという気はなかった。

アルヌス協同生活組合を大きくするつもりもなかった。全ては、自分達の必要を賄えれば良いと思っていただけである。

鱗の販売事業とて、自分達が消費するのに必要な食糧や衣服を買い、いずれコダ村に帰村した時の再建費用として、幾ばくかの蓄えを作り、あとの残りは事業の元手（防毒面とか、防護服、各種の消耗品などの一切）を快く出してくれた自衛隊に渡せば良いと考えていたのである。

だが、ＰＸの買い物客は増えた。騎士団に所属する貴族の令嬢がやってくる。そのお付きのメイドもやってくる。彼女たちには、『門』の向こうから運ばれて来る日用雑貨、衣類、茶などの嗜好品、菓子類等が飛ぶように売れた。

語学研修の外務官僚もやってきた。そして、アルヌスの丘にいる自衛官達もやってきた。彼らには東京から送られてくる日用品だけでなく、イタリカで仕入れた、ありふれた民芸品が土産としてこれまた売れた。

店が客であふれかえり、スペースが足りなくなった。

店舗の増築。要望を受けて品数を増やす。だが販売数が増える。仕入れに手が足りない。販売に手が足りない。荷出しに手が足りない。

こうして、子どもや老人がてんてこ舞いしているところを見かねたのか、貴族のお嬢様の従者たる女性数名が手伝いを申し出てくれた。（この背景には、『門』の向こうで売られている珍しい商品のカタログ……主に婦人用の下着等とかを見ることが出来、自分が欲しいものを発注できるというメリットがあった）

これがまた、若き男性たる自衛官達を引き寄せることになってしまう。客がさらに増えて、ますます手が足りなくなるという悪（？）循環。手伝いの女性達も本業を疎(おろそ)かにするわけにもいかず……わずか数日で、専従のスタッフを雇う必要が出来てしまったのである。

特地では、人の雇い方はコネクションが主流だ。ハローワークもないし、人材紹介サービスもな

い。だから「誰か気の利いた人はいない？」と有力者に頼むことになる。すると、その人伝てで人材が紹介されてくる。紹介する方もされる方も、信用がかかっているから変なところに紹介できないし、変な人材を送れない。

アルヌス協同生活組合は、商取引で関係を深めつつあるイタリカのフォルマル伯爵家を通じて人を紹介して貰った。そしてやって来たのは猫耳の女性達だった。フォルマル伯爵家では貧困対策として、彼女達のような亜人をハウスメイドとして雇用しているくらいだから当たり前と言えば当たり前かも知れない。こうして悪循環が加速する。

さらに悪いことは重なる。

竜の鱗は扱いの単価が非常に高くて利幅も大きい。そのために、各地の行商人を招き寄せる魅力があった。竜の鱗を仕入れようと、商人達が次々とアルヌスを訪れる。そこで彼らが見た物は、『門』の向こうから取り寄せられた珍しくも貴重で便利な品々。

例えば、『紙』だの『鉛筆』だの、伸縮性のある生地で作られた衣服だの……といったものに商人達が飛びつかないはずがない。飛びつかないようなら商人たる資格はない。こうして、これらの品を大量に仕入れたいという粘着質な要望に（泥棒する奴も出た）、お年寄りと子どもの集団であるアルヌス協同生活組合も、断り切れなくなってしまったのである。

レレイは、ため息をつきながらも日本語で注文書を書いて伊丹に託し、伊丹が東京の問屋とか企業に送りつける。売っては仕入れ、また売るという繰り返し。いっそのこと、電話回線を引いてF

AXを置こうという話も出ている。一部外務官僚からは光回線を引いてくれという希望も出ていて、前向きに検討中である。

そして気が付いてみると、その経済活動の規模はとっても大きくなっていたのである。

利益が大きくなってしまえば、また商人が集まってくる。だが、あんまりやって来られても迷惑なのだ。何しろ、宿もなければ食事を出す店もないのだから。集まった商人達は、難民キャンプの外で危険な野宿と野営である。当然悪事を考える奴も出てくる。そのために、警務隊が交代で常駐する羽目になった。

商人達に来ないようにしてもらうには、商品をこちらから運ぶしかない。その為には人を雇わないといけなくなって、隊商を送るなら護衛も必要になる。流石にそこまでは自衛隊に頼めないので、傭兵を雇うことになる。そうすると彼らが寝起きする場所も必要で、また建物を増やす必要が出てきた。

ここまで来ると「また、仮設住宅を建てて」とおねだりもできないので、自分達で大工や職人を手配して建物を建てることとなった。こうして集まったドワーフの職人とか大工、それと組合で雇った行商人、ちょっと荒くれた感じの傭兵達……彼らに食事を提供する場所が必要になって、屋台村みたいな食堂をつくって料理人を雇う。料理人が色気を出して酒を出したりすることを始めてまた客が増えたりして、店が夜間も稼働し始めると自衛官達も客として来たりする。酒を出す店としての従業員が必要になって、またまたフォルマル伯爵家を通じて人材を紹介して貰う。すると来た

のは、やっぱりウサ耳とか狐耳とか、犬耳とか……獣系の娘達だったりする。
そんな感じで、アルヌスの難民キャンプは、いろいろな種族が流れ込んで来る、上げ潮的な気配があって、しかも特地と日本文化が混ざり合ってアナーキーに発展中……こうしてここは、いつしかアルヌスの街と呼ばれるようになったのである。

＊　＊

アルヌスの街は賑(にぎ)やかになった。そして更に賑やかに成りつつあった。
数ヶ月前は人口三十名に満たない難民キャンプだったと誰が信じるだろうか？
日中は槌音(つちおと)とノコギリの音が響いて、弟子を叱咤(しった)する親方の声が時折轟(とどろ)いたりする。
荷物を満載にした商人の荷車が盛んに出入りし、それを護衛する傭兵達が装備のぶつかり合う金属音を響かせながら外へ行き、また帰って来るという風景が、もう当たり前のものとなっているのだ。
どこから潜り込んできたのか、行商人が勝手に露店を開いている。見ると民芸品とか、どこで拾ってきたのか分からないような宝石貴石の原石を並べ、戦闘服姿の自衛官とか、メイドさんとかに「ちょっと見てかない？」と声をかけていた。
陽が沈む頃合いになると、屋台村のような店のまわりで薪が焚(た)かれ、闇の中に明るく浮かび上が

る。

オープンカフェよろしく二十くらいのテーブルが並べられ、そこに太ったドワーフとか、ホビットとか、ＰＸ勤務の猫耳娘とか、お嬢様付きのメイドさんとか、組合で雇ったヒト種の商人とか護衛兵とか、職を求めてやってきた傭兵とか、行商人とかが、自衛官達と肩を寄せ合うほどの狭さの中で、泡立つビールジョッキを片手に乾杯しているのである。

奥の方では、筋肉質の白髪のおっさんが、料理をして威勢のいい声で注文を受けていたりする。

もちろん、それぞれのテーブルもにぎやかだ。

あるテーブルを見れば、元兵士っぽい男が、腰から剣を外しながら木製の椅子にどっかりと腰を下ろしている。男はホッとした感じの息を吐いて、テーブルの上に剣をどちゃっと載せた。

「おいっ、面接どうだった？」

「おいよ。なんとか護衛の仕事にありつけた。イタリカと帝都間の交易路の護衛だとよ」

正面に座っていた髭男が、ジョッキ片手に身を寄せてきたので元兵士っぽい男は破顔して、面接結果を述べた。

喉を潤すために、まずは一杯とばかりに「おいっ、エール！」と注文する。ところが、店のウサ耳姉ちゃんに「ここじゃあ、エールなんてもん扱ってないよ。ビールならあるけどねっ！」と言われてしまう。

「ビール？」

「美味いぞ。ここでしか飲めねぇしろものだ。騙されたと思って飲んで見ろ」
そこまで言うならと不承不承ながら注文する。そして出てきた冷えた泡麦酒を口にして一言。
「美味いっ！」
「イタリカ往復の隊商護衛は今のところ全部で八個隊がある。俺と一緒ならいいな」
「もし一緒だったらよろしく」と、二人の男は握手を交わす。すると、髭男は辺りを見渡してから声を低くした。
「前は何してた？」
「折角仕事にありつけたってのに、んなこと言えるかよ。イタリカを襲った連中の末路を聞いて、俺は身が竦んだぜ」
「で、真面目に職探しってか？　へっへっ」
「心を入れ替えて真面目に生きるのが一番だぜ」
「そだ、そだ」
などという会話を交わしていると、「なんだい、大の男が内緒話なんてしちゃってさぁ」と気っぷの良い声が割り込んだ。
「はいよっ、お待ちぃ」
ウサ耳の姐さんって雰囲気の女性が、大皿に盛りつけた肉や野菜を、彼らの頭越しに「ほら、とっとと喰え」とでも言わんばかりにテーブルにデンと置いた。粗野な感じの髭傭兵が、魅力的な曲

線を描く彼女のおしりに手を這わせて、回し蹴りをくらって吹っ飛んでいく。
一撃で昏倒させられた傭兵を見て、間抜けな奴だとみんなが笑い、ウサ耳の姐さんが「おとつい来やがれってのっ！」と、拳骨を震わせた。
切ったタンカが、「あたいの尻はね、安くないよっ！」である。
そんな中、「よお、デリラ。いくら払えば触らせてくれるんだい？」などと不埒なセクハラ発言をかましながら伊丹がやって来る。黒ゴス神官のロゥリィ・マーキュリーや黒川二曹、桑原曹長も一緒だ。
すると威勢の良かったデリラも、顔を真っ赤にして「イ、イタミのだんな。嫌だぁ、もうっ！」と両手で顔を覆うと店の奥へと逃げ去ってしまった。そこへ「イタミの旦那！　奥の貴賓席が空いてますぜっ！」と料理長をしている白髪のおっさんが声をかけた。下にも置かない待遇だ。
「いいよ。ここがいいんだ」
屋台村とは言いながらも、一応奥には屋根と壁で囲まれた食堂スペースがある。というより、本来の食堂はそっちだった。だが利用者の急増によって、客が入りきれなくなり、食堂の外にテーブルを置くようになったのだ。
現在は貴賓席と呼ばれて、元から居た難民とか、外務省派遣の官僚連中とか、騎士団のお嬢様方とか、自衛隊の幹部連中専用の場所という扱いになっている。要するにお上品に食べたり飲んだりするためのスペースだ。

伊丹も、二尉で幹部なのだから貴賓席を利用する資格があったが、個人的にはこうした粗野な喧噪が好きなのでこちらを利用するようにしていた。

「で、話ってのは？」

伊丹が座り、その向かいに黒川が腰を下ろす。ロゥリィは伊丹の隣で、桑原のおやっさんは黒川の隣だ。このメンバーでは、第三偵察隊とその関係者の人事や人間関係について話し合われることが多い。

ロゥリィがとりあえずということで、全員分の生ビール大ジョッキを注文する。店の奥に逃げ込んで出てこないデリラに代わって、ドーラという狐耳ふわふわしっぽ娘が注文をとって去っていった。

届いた大ジョッキを、一口あおってから黒川は低めの声で言い放った。

「もちろん、テュカのことですわ。いつまで放っておくおつもりでしょうか？」

ふと、黒川の背後に視線を向けると話題のエルフ、テュカが小走りに駆け寄って、店の様子を見渡している。見るからに『誰か』を捜している様子である。

「テュカぁ！　何をしているのぉ？」

ロゥリィが声をかけた。

「う、うん。ちょっとねぇ」

「誰か人捜しぃかなぁ？」
「えっ？」
「もしかしてぇ、男だったりぃ？」
テュカは「違う違う」と手を振ると、苦笑しつつ屋台村から去っていった。
それを見送った黒川は「ああして、毎日これくらいの時間になると居るはずのない人を捜して歩いているのです」と告げた。そして、伊丹にどうするつもりなのかと重ねて尋ねた。
隣では、桑原が目の前の黒ゴス少女がジョッキを口に運んでいるのを眺めて、ため息をついていた。外見は少女の彼女が生ビールをあおっているというのは、良識派の桑原にとって非常に抵抗感のある風景なのだ。だが、かつてそのことを指摘したところ、ロゥリィからこっぴどく『坊や』扱いされてしまった。そりゃ九百歳過ぎを前にしては、いかに五十歳でも子どもだろう。とは言え酷く屈辱的だったのも確かで、それと同じように彼女も感じていることに気付いて胸中複雑である。
「でも、無理矢理現実を認識させる必要、あるのかしらぁ？」
嘯くように言うロゥリィに、看護師でもある黒川は強く言い放った。
「あるに決まってます」
「そうかしらぁ。現実を受け容れることが出来ないからこそぉ、父親が生きていると必死になって思い込んでいるのではないのぉ？」
「それは逃げですわ」

「逃げてはいけないのぉ？」

「いけないに決まってますわ。人は、現実をしっかりと見つめて、受け止めてこそ、明日を目指して生きて行くことが出来るのですわ。現実の否定で、『今』を誤魔化すことは出来ても、明日は来ません。いえ、誤魔化せば誤魔化した分、『明日』は過酷なものとなるでしょう。テュカのお父様はここにはいないのです。多分……おそらくあの焼け跡から見ても……もう亡くなられたことでしょう。そのことをしっかりと受け止めなければ、彼女が、それを認めなければ、現実と妄想の狭間で、『今』という時を消費するだけの毎日になってしまいますわ」

ロゥリィは肩を落として疲れたような息を吐くと、手にしたジョッキの中身を飲み干した。彼女の背中は、正論と理屈を並べる子どもを前に「人生はそれだけじゃないんだよ」と、どう言い聞かせたらいいだろうと思い悩んでいるかのようにも見えた。

黒川が考えているようなことはロゥリィも考えていたことがある。いや、正しいと今でも思っている。だが、それは『正しい』というだけなのだ。

正しさでは人は救えない。

黒川の今立っている場所は自分も通ってきた道だった。そして、誰に言われてもそれと気付くことが出来ずに、結局のところ自分で悟るしかなかったのだ。痛い思いと共に……。それを我が身で知るからこそ、どう語ればよいのかと、悩むのである。

伊丹が、口を開いた。

「なあ、黒川。俺たちが、よってたかってテュカを取り囲んで、みんなでお前の父親は死んだんだと言い聞かせて、現実を認めさせたとしよう。そうしたらどうなる？」

「どうなる？　『喪の仕事』と呼ばれる悲しみの期間を過ごして、やがて父親が亡くなったことを受け入れて生きていきますわ。彼女の人生は私たちのものより長いのです。永遠に近い時を、ただ死者を思い描いて生きるだけでは寂しすぎます」

「それはぁ、確かにそうなんでしょうけどねぇ」

ロゥリィは頭の後ろで手を組むと、星の瞬く天を仰ぎ見た。九百六十年かぁ。長かったって言えば長いし、短かったと言えば短かったしぃ……と呟く。九百六十年の間に出会ってきた親しい者達。そして必ず訪れるそれらとの別離。自分は乗り越えることが出来た。だからといって、他人にも出来ると思うのは傲慢と思う。と、同時に他人には出来ないと決めてかかるのは不遜ではないかとも思っていた。答えは未だに出ていない。きっと出ないだろう。

「黒川、お前の言うようにしたとしよう。テュカは、悲しみを受け止めきれると思うか？　今は、現実と妄想の狭間で生きているが、現実を突きつけることで、決定的に現実から目を逸らして、いよいよ『あっち』の方向に行ってしまわないとどうして言えるんだ？」

その言葉にロゥリィは驚いた。伊丹からそんな言葉が出てくるとは思わなかったのだ。

『正しさ』は劇薬に似ている。誰をも黙らせる力があり、よく効くからこそ頼りたくなる。だがそれ故に、人を絶体絶命の窮地に追いやることもあるのだ。伊丹のような最も現実に背を向けている

男が、どうしてそのことを知っているのかと思うとロウリィは思わず苦笑してしまった。伊丹という男、以前から興味深くはあったが、ますます興味を感じる。

「そ、それは……」

「大丈夫だと言い切れるほど、お前はテュカのことを知っているのか？　俺たちは、そしてお前には彼女を支える力があるのか？　俺たちは臨床心理士でもなければ精神保健福祉士でもないんだぞ。テュカの『こころ』に寄り添い続けてやれる立場じゃないんだ。今日真実を突きつけて、明日撤退命令が出たらどうするよ？」

「……つまり、このままにしておけとおっしゃるのですね？」

「ああ。悪いことは言わない。最後まで責任を持てないなら何もするな。余計に拗れるだけだ」

伊丹は、冷たく黒川に言い放つのだった。

第三偵察隊は、帝都に滞在している外務官僚への連絡任務のために、明日出発することになっている。その支度があると称して、黒川が腹立ち混じりの表情で中座し、隊舎まで送るということで桑原が付き添っていった。

残された伊丹とロウリィは、差し向かいで飲み続けていた。

「飲みなさいよぉ。お馬鹿さぁん」

ロウリィが、伊丹にもっと飲めと、ジョッキを突きだした。伊丹は、苦笑しつつ自分のジョッキ

をコツンと合わせる。
「あんな言い方する必要なかったんじゃなぁい？　随分と冷たい感じぃ。クロカワからの評価は、断崖絶壁急転落ねぇ」
「誰にも彼にも優しくできるほど、懐が広くないんでね。仕方ないよ」
「ふ～ん、その懐の定員は少ないのねぇ」
そう言いつつも、ロウリィは内心では「嘘つきぃ」と呟いていた。
この男、わざと冷たく振る舞ったのだ。黒川の好きなようにやらせてみて、最悪の結果が出ても「上手く行かなくて残念だったな」で、終わらせることも出来るのだから。
「一人か二人が精一杯かな」
「一人にしておきなさぁい。または、一人だけだと思わせなさぁい」
「どうして？」
「女にモテるからよぉ」
「優しくないとモテないんじゃないのか？」
「逆よぉ。女から見て、誰にも彼にも優しくする男ってぇ……そうねぇ、男から見たらぁ……誰にでも股を開く女に似てるかもぉ」
「はぁ？」
「優しさに飢えている時はてっとり早くて都合がいいけれどぉ、伴侶にしたいかって言うとぉ、ち

ょっとねぇ。優しくしてもらえるのが一人だけならぁ、その一人だけの座が欲しいって思うのが女なのよぉ」
「ふぅん。そんなもんかねぇ……ロゥリィは優しいな。死と断罪の神様エムロイだっけ？　その使徒の一柱で死神なんておっかないアダ名がついてる癖に」
「あらぁ？　誤解があるわねぇ。死を司るということは、生を司ることを意味するの。死とは生の終焉、どのように死ぬかは、どのように生きたかを意味するわ。最良の死を迎えるには、生きることを尊ばなければならない。どうでも良いような人生の果てにある死は、どうでも良い死に成り果てるのよぉ」
「そうなのか」
ロゥリィは「そうよ」と微笑むとジョッキの中身を飲み干した。
「おかわりっ！」
「おいおい、そのへんにしておけよ。酔っ払っても知らないぞ」
「いやぁよぉ。優しくしてよぉ」
「じゃ、とりあえずは、寝床までは運んでやります」
「けちぃ」
ロゥリィのつま先が伊丹の脛を蹴った。
「痛ってぇなぁ、もう！」

脛を撫でる伊丹を指さして、ロゥリィは鈴を転がすように笑う。
そんな二人のやりとりに、ハスキーな女声が割り込んだ。
「なんだここは？　ガキに酒を飲ますのか。それと、そこの男、幼気な少女を酔わせて何を目論んでいる？　まさかとは思うが卑劣なことを考えているのではあるまいな!?」
突然、その場が水を打ったように静まりかえった。
喧噪が途絶え、灯火の薪がはぜる音だけが、響いている。
荒くれの傭兵連中も、無骨なドワーフも、顔面を蒼白にして黙り込み、少なくとも、このアルヌスでは、絶対に口にしてはいけないとされている言葉を吐いた強者の姿を盗み見ようと、ゆっくりと視線をめぐらせた。
くすんだ白のターバンを巻いた痩身の男……いや、女か。
褐色の肌に、銀髪。そして長穂耳。
それはこの世界にて、ダークエルフと呼ばれる種族の女だった。

02

「なんだここは？　ガキに酒を飲ますのか。それと、そこの男、幼気な少女を酔わせて何を目論ん

でいる？　まさかとは思うが卑劣なことを考えているのではあるまいな!?」

その女声が響くまで、ロゥリィはこの上ないほどにご機嫌だった。

伊丹耀司との逢瀬が、楽しかったからだ。

雰囲気もまずまずだし、ビールも美味しい。このまま伊丹を際どい冗句でからかい続け、酔っ払って眠りこけたフリをして見せれば、ベッドまで運ばせることに成功するだろう、いや成功したはずだった……。

……眠っているロゥリィを、伊丹は壊れ物でも扱うかのように慎重に運ぶ。

彼女の身体を優しくベッドに横たえ、その頭を柔らかな枕にそっと載せる。

長い黒髪が絡んだりしないようにという配慮で、指先で上手に梳るようにしながら捌き置いて、神官服には皺をつくらないように、その裾を丁寧に整える。そしてブーツだけは脱がす。

伊丹はロゥリィの左足首からふくらはぎをそっと撫でるようにして包み持つと、右手で彼女の膝裏の辺りを支えて、『く』の字に曲げさせた。当然、フリルスカートの裾が乱れて、彼女の腿……その付け根近くまでが顕わになった。

だが、伊丹は気付かない。あるいは気付いていても黙殺する。

左手で靴紐の先を摘み持って、あたかもプレゼントの箱を開くような面持ちでツツッと引き解いた。

十分に靴紐をゆるめたら、ふくらはぎとブーツの狭い隙間に、伊丹の指先がいよいよ分け入った。

「……あっ……ん」

その感触は足裏マッサージのそれに近くて、思わずため息が漏れてしまうかも。

こうして、靴とロゥリィの素肌との間に充分な空間が開いたら、伊丹はブーツの踵を掴んで「いくぞ。いいな」と声をかけた。

目を閉じたままのロゥリィは、頬を紅色に染めつつも、頷いたか頷かないか程度の小さな反応を見せただけだった。

だが、伊丹にはそれで充分だった。いや、反応がなくとも伊丹は待たなかっただろう。意を決した伊丹はもう後戻りしない。やや強引なまでに、彼女の左足からブーツを引き抜いていった。こうして、それまで漆黒の革靴で隠されていた、白いレースの生地に包まれた足が顕れる。

「いたぃっ……お願い……乱暴にしないでぇ」

ロゥリィは小さな声で懇願した。だが、冷酷な伊丹はロゥリィの声を無視していよいよ右足のブーツへと手をかけた。

……事を終えた伊丹は、彼女の部屋から出ていこうとする。寝台の横には、彼女のブーツがきちんとそろえて置かれていた。

でも、彼女の手は、伊丹の袖を硬く掴んで離さない。

「しょうのない奴だ」

とかなんとか言いながら、伊丹はロゥリィの指を優しく解きほぐそうとするかも知れない。とい

うか、是非して欲しい。そうしたら両手を伸ばして伊丹の頭をがばっと抱きかかえ、ベッドへと引きずり込んで寝技へと持ち込む。

後は、いろいろとムフフな展開を朝まで……と思っていたのだ。

すなわち、相手を酔わせていろいろ目論んでいたのはロゥリィなのであった。卑劣かどうかは別にして……。

なのに、なのにそれなのに。邪魔したあげく、このロゥリィ・マーキュリーをガキ扱い。

ロゥリィは、震える拳を隠しながら声の主へと振り返った。

見ればダークエルフの女だった。

三百歳前後だろう。ヒト種で言えば二十代後半から三十代前半の外見である。

南方の部族なのか、旅塵を避けるために頭にターバンを巻いて、身体はマントンで覆っていた。

マントンは魔導師のローブにも似ているが、それよりももっと簡素な構造をしている。ただの布きれを身体に巻いただけなのだ。ある程度の意匠をこらすこともあるが、この女の場合はすり切れそうな無地の生地をそのまま纏っていた。だからだろうか、布の隙間から彼女の肢体が微妙に垣間見えるのだが、それがまた気に喰わない。

見た感じ、いかにも肉感的で男好きのしそうな身体なのだ。しかも、ダークエルフ特有のボンテージ鎧を纏っている。

ボンテージ鎧とは俗称であり、防具としての分類は革鎧に該当する。鞣した革に鋲や金具をとり

つけてデザイン性と若干の防御力強化をはかっている。身体にぴったりとした扇情的とも思えるデザインも、戦闘時の動作の邪魔をしないためであり、敏捷性への負荷が極力少なくなっている。

南方に棲むダークエルフの部族は、軽快かつ俊敏な戦闘術を伝承していると伝え聞く。そのために、このような防具が発達したのだろう。

そんな女が、ロゥリィと伊丹の二人を前に仁王立ちしていた。

彼女の右手はサーベルの柄にかかっていて、すぐにでも伊丹に斬りかかりそうな剣呑な気配を放っていた。

「あなたは、誰ぇ？　何しにここにぃ？」

ロゥリィは、怒るよりも前に、いや既に充分に怒っているのだが、その事を表明する前に、女についての情報を得ることにした。この容姿だ。間違えることは仕方ないと思う。だから、ぶん殴ったり、斬りかかったりするような理不尽なことをするつもりはなかった。だけど、意地悪くらいはしてやりたい。

ダークエルフの女は、怯えで身体を震わせている（ように見える）少女を、安心させようとしてか、その質問に丁寧に応えた。

「我が名はヤオ。ダークエルフ、シュワルツの森部族デュッシ氏族。デハンの娘、ヤオ・ハー・デュッシ。こちらに緑の人がおられると聞き、用件ありて参った次第」

途端、ロゥリィはその瞳を輝かせた。

彼女はヤオと名乗ったダークエルフの女に、救いを求める無力な少女のように駆け寄ると、その背中に隠れて言い放った。

「お願いっ、助けてっ！　この男、もう飲めません、許してくださいって頼んでいるのに、俺の酒が飲めないのかとしつっこいんですっ！」

……もとより静まりかえっていたが、場は更に静まりかえった。

誰かの唾を飲み込む音すら聞こえるほどである。

伊丹は「えっ！　オレ？」と自らを指さして周囲に救いを求めるように視線を巡らせる。だが、誰も助けてはくれない。他の客達は数人がかりで料理の載ったテーブルを持ち上げると、えっちらおっちらと避難を始め、伊丹独りがポツンと残された。

「やはり、そうであったか」

「この男、女を酔い潰して、その後で手込めにするつもりだったんですっ！　あともう少し飲まされていたら、わたしぃは前後不覚に酔っ払って、明日になって目が醒めたら、きっと純潔も操も何もかも奪われた上で、ボロくずみたいに捨てられていたんだわぁ！」

よよよ、と両手で顔を覆って崩れ落ちて見せるロゥリィ・マーキュリー。

ヤオはその痛ましく見える姿に「可哀想に、恐かったであろう？」と慰めた。その声色は、悪行三昧（ざんまい）の男に対する正義の怒りで震えていた。

伊丹の目には、顔を覆う両手の隙間から、ペロリと舌を出しているロゥリィの素顔が見える。そ

の瞳は伊丹に「ゴメンね」と語っていて思わず天を仰ぎたくなった。
ある種の女性は時として、親しい男に対してこういう振る舞いに及ぶ。例えば車の運転中に、いきなり目隠しをしてきたりして、叱りつけると「怒っちゃ嫌」と泣いたりする。こうしたことに耐えることもまた、男の甲斐性の内に含まれているのだ。女性がこうした振る舞いに及ぶのは、多くの場合で女性側の無言の期待に男が応えない時という。
「己の薄汚い獣欲を充たさんとして、少女に酒を無理強いするなど不埒千万。断じて、許せぬ」
ヤオは伊丹との距離を詰めつつ、ゆっくりとサーベルを引き抜いた。
彼女の右手には見るからに斬れそうな刀身が、篝火(かがりび)の光を受けて輝いている。
「安心するがいい。今すぐこの不埒者を成敗し、おまえの安逸(あんいつ)を取り戻してやる」
ヤオは、ロゥリィを安心させようと微笑みながら語りかけた。
そして、再び目標へと視線を向けたのだが、その時には座る者の居ない椅子と、中身のないビールジョッキが転がっているだけだった。
「は、はやっ」
「ダンナ、見事なもんだねぇ」
一部始終を見ていた観客達を代表して料理長とデリラが呟いた。
「あばよ〜とっつぁん。飲み代はツケといてくれ」
見れば、夜の闇の向こうへと伊丹の背中が消えていく。ちょっと振り返って手を振っているとこ

ろなぞ、小気味の良さを感じさせるほどであった。
あまりの逃げっぷりに、一同しばし身動きが出来なかったが、しばらくすると何事もなかったかのように酒盛りと食事を再開した。
料理長は、カウンターの柱に画鋲で留められている何枚かのカードから、伊丹のカードを取り出すと、鉛筆でツケに入れる今回の代金を書き込んでいた。
振り上げた剣の降ろし場所を失って、呆然としていたダークエルフのヤオも、我に返ると「コホン」と咳払いをして「よし、悪は逃げ去った」とまとめる。
サーベルを鞘に戻して、「もう大丈夫だぞ……」と少女に声をかけようとしたところ、もう少女の姿も見あたらない。
ついさっきまで自分の腰にしがみついて震えていたはずなのに、まるで幻であったかのように、黒ゴス神官服の少女の姿が見えなくなっていたのだ。別に礼を言って貰いたかったわけではないが、一言あってしかるべきだろうとも思えて、つい「随分と礼儀を知らないガキだ。年格好や服装からするとエムロイを祀る巫女見習いだろうが、どこの神殿の所属だろうか？」とひとり愚痴をこぼしてしまうのだった。
「ほら、注文するならさっさと座りな。それともただの冷やかしかい？　冷やかしなら出ていっておくれっ。邪魔だから」
デリラに声をかけられて、元々食事をするつもりであったことを思い出したヤオは「ああ、すま

ん」と招かれるままに、カウンター席に腰を下ろした。
包丁をふるっていた料理長が、ヤオに尋ねた。
「お客さん。何にする？」
「晩の食事がまだだ。肉と野菜の焼いたものを適当に見繕って欲しい。それと飲み物は軽いものにしてくれ」
「酒精は入っていていいのか？」
「ああ」
「デリラ。こちらダークエルフのお姐さんにビールだ」
「はいよっ！」
隣の席のドワーフが、相当酔っていることの分かる赤鼻顔で「よっ、ダークエルフの女。お前、緑の人を訪ねてきたんだって？　なんでだ？」と語りかけてきた。
ヤオを挟んで反対側の猫耳の娘も「わざわざ、緑の人を訪ねてこんなところまで来るニャんて、訳ありだニャ？」と気安く肩を叩いてくる。
自分という存在が、酔っぱらい共の酒のつまみとなっていることに気付かないヤオは、その気安い態度を好意的に誤解した。
「ふむ、垣根が低くて良い人達のようだ。丁度良い、話を聞いて貰いたい。緑の人を探してここまで来たのは、頼みたいことがあるからなのだ。諸君は、緑の人がどこにおられるか知っている

か？」
「頼み？」
「そうだ。是が非でも、彼の者達の力を借りなければならないのだ」
……なるほど。それでロゥリィはあんな芝居をやらかしたと。
死神ロゥリィの復讐がこのように為されたことを理解した一同は、無言で「あんたは、その緑の人にサーベル抜いたんだよ。ご愁傷様」とヤオを哀れむのだった。
誤解にしろ何にしろ、自分に向けて剣を抜くような人物の頼み事を、快く引き受ける人は少ないだろう。彼女が目的を達成するには、誤解を解いて謝罪をして、さらに機嫌を取ってと、最初から高いハードルがさらに高くなってしまったと言える。
ドワーフの男は、思わずヤオから目を背けると呟いた。
「もしかすると、無理かも知れんなぁ」
猫耳娘も、ヤオから目を背ける。
「そうだニャァ。非常に難しいと思うニャ」
「何故だ？　緑の人は高潔な者達と聞き及んでいる。ならば困っている者を見捨てることはないと思うのだが……諸君がそのように言うには、何か根拠があるのか？」
そこまで語ったところで、デリラが「はい、お待ちっ!!」とヤオの前にジョッキを置く。泡立つ黄金の液体を前に、ヤオは「これがビールか」と呟いて、まず一口含んだ。

「うむ。美味い」
そこに料理長の料理が、ヤオの前に並べられていった。
ヤオはそれらに舌鼓を打ちながら「無論、無料でものを頼もうとは思っておらぬ。報酬も、族長よりこれこのとおり、預かってきている」とテーブルの上に、ドンと、人の頭サイズの革袋を置いた。ちなみに盗難除けに冥王ハーディの護符も括り付けられている。正当な所有者以外が手にすると、呪いをかけるというものである。
「金剛石の原石だ」
これには、傭兵達が騒いだ。ちょっとした一財産どころではないからだ。これだけあれば爵位が領地付きで買える。しかもダークエルフ謹製ハーディの護符付きだ。これ単体でも相当な高値がつくはず。
「それに、もしこれでも足らないということであれば、我が身を捧げることも厭わぬつもりだ。すでに覚悟は完了している。親類縁者とも、別離は済ませてきた」
「おおおおっ！」
今度は、傭兵のみならず男達と一部の女が騒ぎだした。
ヤオの肢体はそれほどに魅力的だった。これを好きなように出来ると聞いて心動かない男はまず居ないだろう。
傭兵の一人が、俺では駄目かと言い出し、他の傭兵達も「オレも、オレも」と後に続く。ヤオは

大人の女としての余裕からか「困った男達だ」という感じで小さく微笑んだ。その上で、「申し訳ないが、おそらく諸君では力不足だろう」と告げた。
「ま、それだけのお宝に加えて、我が身すら差しだそうってんだから、頼み事って言うのも簡単なことではないってことだろうな」
「そうだ」
「で、頼み事というのはどんな内容なんだ？」
周囲の視線が集まる中、ヤオはジョッキのビールをさらに一口含んで喉を潤してから重々しく語った。
「手負い炎龍の、退治だ」

シュワルツの森に炎龍が飛来したのは、数ヶ月ほど前だった。
それは突然だった。それでも集落に住まうダークエルフ達の殆どが、たまたまの祭祀で村から出払っていたために留守を守っていた少数の男女が犠牲になるだけで済んだのである。
だが、その程度で炎龍が満ち足りることはない。空腹になる度に飛来する炎龍によって、多くの同胞が次々と犠牲になっていった。
このままでは部族が滅んでしまう。
ダークエルフ達は、炎龍の狩り場と成り果てたシュワルツの森を捨てて、周辺の荒野や渓谷、山

岳地帯へと分散して隠れ住むことにした。
炎龍の襲撃から逃げまわる生活が始まった。
毎日毎夜、空を警戒し飛ぶものなら小鳥にすら怯え、空襲を警告する角笛が響けば、地に掘った穴にモグラのごとく逃げ込んでは恐怖に身を震わせる。
だが、ほんの僅かな油断に炎龍は襲いかかった。
穴ごと焼き払われ、ほじくり出され、時に踏みつぶされる。
朝、挨拶を交わした同胞が、夕刻には炎龍の鋭い牙に噛み砕かれ、咀嚼され、嚥下される。
耳にこびり付く悲鳴、断末魔の絶叫に背を向けて両手で耳をふさいで、友の犠牲が生み出した貴重な時間を使って、より険しい山へ、より深い谷底へと彼らは隠れ家を移していったのである。
しかし、逃げ隠れしているだけでは生きて行くことは出来ない。
毎日の糧を得るには、狩猟なり採集なりをしなければならなかった。だが、エルフにとっての狩り場とは、炎龍にとっても狩り場であった。
狙いながら狙われ、獲物を捕った瞬間に自らが獲物となる。こうした危険を避けつつ、得られる糧など、量質共にたかが知れた。
木の皮を削り薄皮を蒸して食べ、泥水をすする。そんな毎日が続く。
集落から持ち出した蓄えは次第に乏しくなっていく。次第に軽くなっていく麦櫃(むぎびつ)や果物籠(くだものかご)に不安を抱き、悲壮な覚悟で弓を手に狩り場へと出ていく若者達。

犠牲者が毎日のように出る。
両親を失った子供のすすり泣きや、娘や息子を失った親が炎龍を呪詛する声が止む日は、一日とてなかった。
復讐の怒りから剣を取り、弓を持って絶望的な戦いに挑む者もいた。
だが、卵をいくら束ねても巨岩を阻むことが適わないように、彼らの挑戦もまた、犠牲を増やすだけに終わった。
精霊の加護も、神銀（ミスリル）の鏃（やじり）も、強靭な鎧にも似た炎龍の鱗を貫くことは出来ない。
魔法の剣にわずかな可能性が見いだされたが、その切っ先も届く間合いに入れなければ、全くの無力である。炎龍の巣に無数に転がっている魔法の剣。その中に、新たなる一本が加わることとなった。
絶望と虚無がダークエルフ達の心を捕らえていく。
冥王ハーディへの信仰が、彼岸への憧れとすり替わり、処刑台の笑いにも似た絶望微笑が不治の疫病のごとく部族中へと蔓延していく。生きることに希望を失い、自暴自棄の振る舞いに及ぶ者も絶えない。
このままではいけない。こころある一人が、言った。
「あの炎龍にだって弱点はある。あの片目に突き立っている矢がその証拠だ」
炎龍に一矢報いたであろう神業のエルフの存在が、彼らの勇気をわずかながら呼び覚ました。

「炎龍だろうと、必ず倒す術がある。あのもぎ取られた左肩がその証拠だ」

時を同じくして風とともに流れてきた『緑の人』の噂。

『鉄の逸物』と名付けられた魔杖は炎龍の左肩すらうち砕き、滅びに瀕したヒト種の村を絶体絶命の窮地から救い上げたという。その噂は、滅びに瀕したダークエルフにとって最後の希望となった。

そして、部族の総意を託す遣いが立てられることとなる。

遣いの者に託された任は重い。

炎龍の魔爪から逃れ、噂だけを頼りに緑の人の下へとたどり着かねばならないのだから。強靭な精神力と責任感、そして優れた生存力が求められる。

遣いの者に託された任は想い。

緑の人を援軍に請い願い、いかなる手段を用いようとも助勢を引き出さなければならない。失敗は部族の、同胞や友人の滅びを意味してしまう。

これだけの責務だ、到底凡夫では成し遂げられない。

相応の武芸、知性の双方に恵まれて、さらには中途で投げ出したりしない、使命感に篤い者でなければならない。

部族中から若者が集められ、篩いにかけられていく。

そして二名の者が残った。その片方が、ヤオ・ハー・デュッシである。

剣の腕と知性に優れ、精霊を使役する技にも精通する。

その不器用なまでの生真面目さは、部族中に知らない者はいないほどだ。彼女ならば使命を途中で投げ出すことはないだろう。

候補者は二人。だが技量、才幹、そして人柄。全てにおいて同じ水準ならば、女性であるヤオが有利であった。なぜなら彼女の魅力的な容姿は、異性を交渉相手とする際に、重要な武器となり得るからだ。そして、緑の人の指揮官は男だとも聞いている。

しかし、事は簡単ではなかった。部族の長老達はヤオの顔を見るなり、「う〜ん」と唸ってしまったのである。というのも、彼女には運が悪く幸が薄いという重大な欠点があったからである。

猟に出れば、誰かの仕掛けたワナを踏み、木を切れば彼女の居るところへ倒れてくる。

遊びに出れば雨が降り、買い物に町に出れば店が閉まっている。

親友とも言える女性に彼氏を寝取られ、幼なじみの男性と紆余曲折の果てに結婚することになってみれば、婚礼前夜に夫が急死するという有様である。

その後喪の明ける頃に、未婚の未亡人に愛を囁く男が現れたが、その男も狩猟中に崖から転落して死亡してしまう。こうして、彼女に近付く男はいなくなってしまった。

さらには、普段クジ運などまったく無いのに、友人の婚礼の宴会をヤオが仕切った時に限って、余興のくじ引きで一等賞を引き当ててしまうという間の悪さ。

正直言えば、女性であることのメリットも消し飛んでしまうように思われた。だが、運は悪いけど、その運の悪さを乗り越えて、強く正しく逞(たくま)しく生きてきた事を見てくれと、彼女は自己アピー

ルする。

それは誰もが認めるところであったから、長老達も運が悪いという理由で彼女を落選させることも出来なかった。

そこで、長老達は女性を遣いとして選ぶ意味を切々と説いた。そして、必要となれば自分自身すら報酬として相手に捧げる覚悟があるかを問うたのである。その言い様たるや、必要以上にしつこくて、もしかして嫌がらせかと思うほどであった。実のところ、辞退させたかったのではないだろうか、とヤオは思っている。

だが、ヤオはそれに諾(だく)と応じた。どうせ、男運無いし。相手が求めるなら、奴隷だろうと、愛人だろうと、娼婦だろうと、メイドだろうと言われるままにやってやる。ただし、絶対に安売りはしない。炎龍一頭が代価なら、本懐であると胸を張った。

長老達は一抹の不安を抱えつつも、ヤオを遣いとして選んだ。

部族の未来は生か滅びかの二つに一つだ。ならば報酬を吝嗇(けち)っても意味がない。ということで、部族の保有する最高の財宝が宝物庫から引き出されて彼女に託された。

こうして旅に出たヤオは、様々な不運困難を乗り越えて、アルヌスの丘へとたどり着いたのである。

＊　＊

ヤオの眠りは、耳を劈く轟音によって打ち破られた。
何事かと飛び起きて、周りを見渡してみれば、そこは木漏れ日の美しい森であった。
折角街に着いたのに、宿屋が無いと聞いてがっかりしつつも、夜も遅くなった全ては明日ということで野宿の寝床として選んだアルヌス麓の森。
このあたりを仕切っているというエルフの手が入っているせいか、そこは緑と水と、風の精霊の恵みが豊かで非常に快適であった。
そんな森の上空を、轟音と共に二本の剣が飛んでいた。
大空を切り裂くように、天をめがけて駆け上がっていく翼は、Ｆ４ファントム。
退役間近な白銀の翼は、規制のうるさい国内と違って離陸した途端管制官より通知された言葉『他に飛んでるのは鳥ぐらいだ。墜落しなければ、好き勝手に飛んで良し』に象徴される自由を、大いに楽しんでいた。
彼らはパイロットとしては超ベテランで飛行時間も千の単位だ。だがＦ15やＦ２への機種転換訓練を受けるには歳を取りすぎていると自ら判断し、ファントムの退役と共に教育隊か、陸へと腰を落ち着けることを選んだ四十代の古強者だった。分解されてこの特地に運び込まれたファントムも、

もう向こう側に持ち帰られる予定はない。

彼らに最後に与えられた空は、常に道を譲らないといけない旅客機も、米軍機もいない自分達だけの空であった。それは、全ての空自パイロットが涎を垂らして羨ましがる大厚遇である。

離陸して、脚を引っ込めた瞬間からアフターバーナーを全開にして高度一万メートルまで駆け上るインメルマンターン。

百八十度ロールして大地と天を逆様に、背面飛行から大地に向かって突き刺さるように加速して次第に機首をあげるスプリットS。

中途で音速を突破させ、衝撃波を響かせても苦情を言う市民団体もない。とはいっても、駐屯地の陸自や、アルヌスの街に住まう住民に対しては一定の配慮はして、頭の上で雷みたいな音を響かせないようにはしているが……。それにしたってみんな仲間だ。スロットル全開で、空中の模擬戦に遠慮は要らない。横転をかけて姿勢を戻し、振り回されないように両の膝でステックをぐいっと挟んで、がつんと叩くようにして、機首を引き起こす。

急旋回のGは、身体を締め上げる。その瞬間に呼吸など出来るはずもない。「ふんっ」と腹筋に力を入れ、満身の力を込めて身体を支えた。

Gが止んだ瞬間に、ぜいぜいと呼吸をして酸素を取り込む。戦闘機動はこの連続が果てることない我慢比べだ。

後席が叫ぶ。「後方を取られた」

「こなくそっ！」

急制動に、シザー。後方に食らいついた仮想敵を振り払おうと、あらゆる機動を駆使する。大地が周り、世界が転がる。敵を引きはがしたら、逆に後ろを取りに回る。

ナイフエッジ、横転コルク抜き……今なら、ラプターだってロックオンしてみせる。空自の空戦技術は世界的に見ても非常に高い水準にある。かつて、F104という旧型機で、米軍のF15から撃墜判定をもぎ取った名パイロットがいたほどなのだ。

あらゆる枷から解き放たれた無頼達は、自由な空で、無邪気にはしゃぐ子どものようであった。

空を飛び回る、銀色の剣。

その風景は、空を舞う剣が鬼ごっこを楽しんでいるかのようにも見えた。

呆然と見上げていたヤオは、すぐにこれが人が操る物であることに気付いた。エルフの優れた視力が、彼女の視界をフライパスしていく巨大な剣に騎乗する者の姿を捕らえたからだ。

そして、笑みがこぼれた。笑いながらも涙が流れた。

「噂は、本当だった」

天を我が者のように飛び回り、大地に生活するあらゆる生き物を喰らいつくす炎龍。

だが、大空の支配者は最早、炎龍ではない。速さ、鋭さ、すべてにおいて炎龍を凌駕する、空飛ぶ剣。こんなものがあるのなら、炎龍の腕を喰いちぎったという鉄の逸物もあるだろう。当然だ。

唯一の希望としてすがる気持ちこそ持っていたが、正直言えば半信半疑でもあった。噂とは人々の願望を受けて、膨れあがるものだからだ。そして、絶望によって心が打ち砕かれることを防ぐために、始終、噂が間違いであった時のことを考えていたのである。

噂を疑いつつも、半分信じ、希望を託して旅してきたヤオにとって、大空を自在に舞う剣の存在は、自分の旅が無駄でなかったことの証明であり、希望の保証となった。

こうなれば、彼女の使命はほとんど果たされたも同然である。ヤオはそう感じていた。

このままあのアルヌスの街へ戻り、緑の人の代表者に会いさえすればいいのだ。

援軍を請い願い、説得することの困難さなど、これまでの労苦に比したら些細なことのように思われた。これで故郷の仲間は、一族は救われる。それがもう約束された既定事項のように思えていた。

ヤオは、「よしっ」と心を決めると、街へと向かって歩き始めた。

草を分け、歩く足取りは軽くて、次第に早足になる。まるで、待ちきれないかのように、つい小走りになってしまう。そして最後には、風を切って走り出していた。

＊　＊

アルヌスでは、伊丹率いる第三偵察隊が完全武装を済ませて、整列待機していた。

傍らでは、柳田二等陸尉がクリップボード片手に、三台のリヤカーに積み上げられた荷物の最終点検をしている。

「反物、漆器、陶器、磁器、真珠、おおっ！　日本酒なんてものまであるぞ。しかも、寒中梅の特級と来てやがる。一本ぐらい、ちょっぱったろうかなぁ」

「止めてくださいよ、柳田さん。これらは俺たちにとっての武器弾薬なんですから」

傍にいたスーツ姿の外務省官僚、藤堂が冗句と理解しつつも、真面目に応じた。

「本当か？　自分達で消費してるんじゃないだろうな？」

「その辺は、信じて貰うしかないですね」

リストを見ればデパートで開かれる全国名産品展でもあるかのような品揃えだ。これらは贈答あるいは贈賄として用いることになる。

壊れ物が多いのできちんと梱包してあり、さらに量が多いために、ちょっとした引っ越し級の大荷物となってしまった。

「それと、金貨、銀貨、銅貨の詰まった箱。それぞれ中身もずっしりです」

帝都における各種の活動資金も必要で、これらも木箱に詰められて積み上げられていた。活動資金の使い道は、帝都における活動拠点として借りた家屋の家賃、情報収集のために雇った人間への報償、それと各種の工作活動、交際費等々で、常に不足気味だ。

「抱かせ、喰わせ、飲ます。このあたりは、商社の接待と似たようなもんです。あとは、没落した

貴族とか、体制に恨みを抱いている連中を見つけ出して、そいつらを使って各種の噂を流したり、足を引っ張ったりとかの工作をしたりと、基本通りです」

語学研修中とはいえ、特地にいる以上は働かされている若手官僚の一人が、金貨の詰まった箱をポンと叩きながら語った。

日本政府はこれらの貨幣を、アルヌス協同生活組合から『購入』して賄っている。

アルヌス協同生活組合は、これらの貨幣を売った代金の『円』で、さまざまなものを輸入しているわけである。

「発展途上国の役人なんて露骨ですよ～。あからさまに賄賂を要求してきますから。中国の外交官なんて、春暁の交渉の時に『軍艦を出すぞ。それでも良いのか？』とあからさまに恫喝してきましたよ。何度羨ましいなぁって思ったことか。一度でもいいから『やれるもんならやってみな。どっちが強いか試してみようじゃないか』って言ってみたいですよ」

「言えばいいじゃん？　ここで」

「そういうわけにはいかないのが、外交ってものです。植民地時代じゃないですからねぇ。まして、この特地の政体は残して、それと親密な関係を維持するという方針に定まる可能性も無い訳じゃありませんから、後々に禍根を残すようなことは出来ません。今は、講和派を増やすことに専念しますよ……」

さて、そんな会話がされている内に、ＣＨ－47ＪＡチヌークが降下してきた。

ローター風に地面の砂塵が巻き上げられていく。
降着するころになると、立ちこめた砂煙で周囲が見えなくなってしまうほどだ。
後部ハッチが開かれると、第三偵察隊は桑原曹長の号令で、チヌークに向かって一斉に進み出す。
柳田も、外務省の官僚達とリヤカーを押し出した。
荷物を積み込み、機体が動揺しても内部で転がり回らないように固定する。それが済むと、機内側面に畳まれたシートを降ろして各位腰掛けていった。
外務省の連中が座るのを確認して、柳田は伊丹に言った。
「んじゃ、後は頼むわ。無事に送り届けてやってくれ」
伊丹は親指を立てて頷く。
ローターの回転が速くなり、再び砂塵が舞う。
柳田が降りると同時に後部ハッチが上がっていき、チヌークも離陸して高度を上げた。
こうして彼らは帝都へと向かって飛び立っていったのである。
アルヌスと帝都の距離は馬で十日行程だが、チヌークならばわずか半日だ。とはいっても都市の近くに降ろしては目立って仕方ないので、帝都から離れた山中に降りて、そこから徒歩で一日半ほどかけて帝都に入る予定であった。
ヤオは、アルヌスの街手前で、自分の頭上を飛んでいく箱船の騒音に思わず首を竦めてしまった。

空を舞う剣、鉄の逸物、そして空を飛ぶ箱船……ここまでくると、緑の人達には何でもありだなと感心しつつ、ヤオは街へと入ったのである。

03

ヤオは、困っていた。

街の中を歩きまわっては行き会う、それっぽい濃緑色の服とか、まだら緑の服を着ている人に、片っ端から「済まないが、少し話を聞いて欲しい」と話しかけてみた。

ところが、どうにも言葉が通じない。

みんな一様に、なんとも形容しがたい苦笑というか、引きつった笑いというか、複雑な感情の混ざった表情を浮かべ、こっちの話が分かるのか分からないのかはっきりしない態度をとるのだ。

顔を見ると、多少は分かっているんじゃないかなぁと思えるので、一生懸命話をして、終わってみると、結局通じていなくてがっかりする羽目になる。

徒労感に苛まれながらも、中には言葉の出来ない者もいるのだろうと思って、手当たり次第に声をかけた。

そうして半日。おそらく、二十～三十人くらいに声をかけたのではないだろうか。

ようやく、緑色の服を着ている者には言葉が通じない、いや、言葉が通じないのが基本であって、多少話せたとしても片言程度なのだという事実を、思い知ったのである。

挙げ句の果てに、こんな奴も出てきた。

「ダークエルフのお姉ぇさん。緑の人を捜しているのかい？」

流暢な語り口に「言葉が通じるのか？」と、喜んでみれば緑の服は着ていない。見た目でも、この国の住人であることが分かる男だった。

見た感じ傭兵というには線が細い。多分、行商人か、あるいはこの街に雑用の仕事で雇われている者だろうと推察した。

この男が、ヤオにこう言った。

「緑の人なら、俺が居場所を知っているから案内してやるよ」

それはとてもありがたい申し出だったので、ヤオは親切を受けることにした。

すると男は、ヤオの手をとると街を出て、森の暗がりへと連れて行こうとしたのである。

「どこへ行く？」

「こっちさ。緑の人は、こっちにいるんだ」

ヤオの手首を握ってくる汗ばんだ感触に「なんだろう、この手は……」と思う。

もしかして、春を売る職業と間違われたんじゃないかなぁ、それだったらやだなぁ、と思って見ていると案の定、人気のないところに来た途端「金ならあるんだぜ。それに、俺は結構顔が広いん

だ。緑の人に口を利いてやるからよ」とか何とか言いながら、いかがわしくも押し倒そうとして来たのだ。

「力ずく、金銭ずく、というのは頂けないな」と出来る限り加減して股間を膝で蹴り上げる。するとその男性は己の間違いを痛切に理解してくれたようで、ペコペコと頭を下げながら、逃げ去っていった。

何故か財布を落としていった。後で届けてやらなくてはいけないだろうと思って拾っておくことにする。

普通の女性なら「なんて酷いことをっ」と追撃して、とことん痛めつけているかも知れない。だが、ヤオはそうはしなかった。若い男なら、ま、しょうがないか……と、話の分かるところを見せたのである。

自分の容姿が（しかもボンテージ鎧を着ている）異性に与える影響というものを、ちゃんとわきまえているのだ。この手のことに余裕があるのだろう。あるいは、似たような誤解もこれが初めてではないから、悪慣れしているだけなのかも知れない。

ヤオは、酒で酔わせてとか、力ずくとか、金銭ずくの独りよがりな女の扱い方を好まない。しかし、礼儀正しく誘いの言葉をかけたなら、考えるくらいはするのだ。なのにそれをしなかったばっかりに、男は股間へ痛撃を喰らう羽目に陥ったのである。

結局は、時間の無駄遣い。しかも、手を引かれるに任せていたら街を出てしまった。

こうしている今も、同胞達は炎龍の脅威にさらされている。この程度では挫けては居られないと、ヤオは気を取り直し再び緑の人を探すべく、街へと引き返した。

ただ、真っ直ぐ逆戻りをするのも惜しい。そこで、今度は大通りから路地に入ってみることにした。

だが、裏通りは、緑色の服を着ている者の姿はほとんど見られなかった。

代わりと言ってはなんだが、荷物満載の荷車がずらっと列んでいた。どうやら、通りの裏側は倉庫街のようだった。まだ、殆どの倉庫が建築中だが、とりあえず屋根だけはできあがっていて、物資が所狭しと置かれていた。そして吹き込んでくる塵や雨風を防ぐためか、厚手の布が被せられていた。

そこでは作業員達が、荷車から倉庫へと荷物を移す作業をしていた。

品物は麦袋とか、干し肉干し魚といった食糧品が多い。生きた家禽類のはいった籠もあった。こうしたものが、加工調理されて、食堂で出されるのかも知れない。

その傍らでは、様々な種族の傭兵連中が屯(たむろ)して休息していた。汚れた旅装を身につけているところを見ると、今さっきこの街に帰り着いたばかりのようだ。彼らの馬が、飼い葉桶に群がって水を飲んでいる。

そんな傭兵の一人がヤオを見つけて、ちょっかいを出して来た。

「よお、ねぇちゃん、何やってるんだい？　暇なら俺たちと遊ばない」

ちゃんと言葉で申し入れて来るだけ、先ほどの無礼者よりはマシである。ただ、少々品というものに欠けていた。しかも、少しばかり猥褻な発言を付け加えてきたので、ヤオは冷静に視線を降ろして「ふむ。君の持ち物では、無理ではないだろうか？」と、ほがらかにあしらった。

すると男は、酷く傷ついた表情をすると涙ぐみながら走り去っていった。

どうやらヤオの一言は、その男の精神に対して相当の破壊力を有していたようである。もしかしたら、非常に強いコンプレックスを抱いていたのかも知れない。

これは申し訳ないことをしたなと、ヤオはそそくさとその場を後にした。

しばらく移動すると、今度は木箱が山積みになっている一角に出た。

その前で、商人がなにやら値段交渉しているのが見える。箱の中にあるのは非常に薄くて光沢のある布だった。ヤオですら、一目で貴重品と分かるほどの美しさだ。

「これは何だ？」

好奇心から尋ねてみる。すると商人が「『さてん』とかいう生地らしい。非常に光沢があって、しっとり滑らかな感触が特徴だ。これで服を作ったら、さぞ美しく仕上がるだろう」と説明してくれた。これが欲しくて、商人はわざわざこのアルヌスまでやって来たという。

「ここじゃ、小売りはしないんですがねぇ」

倉庫番のような男が、渋い顔で交渉その物を打ち切ろうとしていた。

アルヌス協同生活組合では、あちこちの商人がこのアルヌスに押し寄せるのを嫌ってイタリカや、

帝都、あるいはログナン、デアビスといった周辺の街に置いた支店でのみ、小売りをするようにしているのだ。

「そこを何とか、是非」

商人も、当然そうした支店を訪ね歩いたという。だが、どこも品薄状態。気に入った生地を入手できなかったらしい。しかし商人は諦めるわけにはいかなかった。ノンビリと品物が届くのを待っているわけにもいかなかった。急ぎの仕事のために、どうしてもすぐに生地を手に入れる必要があったのだ。

商人は語る。

今、帝都の貴族社会では大変革が起きている。

貴族の婦人方が纏うドレスにとんでもなく豪奢で鮮やかな、金糸銀糸の絢爛な織物や美しい染め物で仕立てられたものが現れたのだ。

その鮮やかさに心奪われたご婦人方はおずおずと「そのお召し物はどちらで？」と問う。だが問われた本人は、優雅に微笑むだけで決して教えてくれない。

貴女が左手で自らを扇ぐ、その見事な小物（扇子）は何？

「たいしたものではありませんわ。おほほほほ」と言いつつ、これ見よがしにパタパタ扇いだりする。

その身を飾る、美しい真珠は何？　しかも、そのハンパ無い量は？

「それほどのものではありませんわ。おほほほほほほ」と言いつつ、これ見よがしに真珠のネックレスをジャラジャラと、そして真珠のイヤリングを見せびらかしたりする。
あんたそのスタイル（注　バスト）はどうしたのよ？
「いえいえ、いつの間にか育ったようですわ。おほほほほほほほほほほほほほほほっ」
その化粧品はどこで買ったか言えっ！
「普段使っているものと同じですわ。美しく見えたとすれば、元が良いからでしょう。おほほほ、けほっけほっ」
女性は知性や気品には嫉妬しないというが、逆に財力とか、美しさの類にはものすごく嫉妬するそうである。そして優越感とは他人の嫉妬心を栄養として肥え太るものなのだ。だから、そりゃぁもう見せびらかすこと見せびらかすこと……。とある貴族のご婦人など、その口惜しさで、ハンカチを食いちぎってしまったほどだという。
こうして、嫉妬と羨望と憎悪に駆られた婦人方の激情は、矛先を求めて駆けめぐり、最終的には帝都の服飾業界、すなわちお針子や布地を扱う商店へと向けられたのである。
しかし、お針子や商店主も「あれより凄いものを作りなさい。お金に糸目はつけません。出来なければどうなるか、分かってますね」とか言われても、材料が無くてはどうすることも出来ないのである。
彼女たちが仕立てるものと言えば、貴婦人等の纏うドレス、メイド服、神官服など。どれも、普

通に織られた生地に、さして種類のない染料で染色し、刺繍をしたり、縫い取りをつけたり、あるいはフリルを寄せたりという手間で勝負するしかなく、技術的にはドングリの背比べなのだ。だからこそ、元の材料たる生地から負けていては、どうすることも出来ないのである。

そこで、生地商人やお針子達はひとまず情報収集に走った。

どこで入手したにしても、生地からドレスに仕立てたお針子がいるはず。まずはそこからということで、貴族のお屋敷に出入りするお針子が、仲間から締め上げられ白状させられた。（本当に締め上げられて、命の危険をとても強く感じたと、お針子嬢は涙ながらに語った）

そして、集められた情報の全ては「アルヌス」の方角を指さしていた。

これと似たようなことは宝飾業界でも化粧品業界でも起きている。その後の推移も似たようなことだったので、割愛したい。

こうして、アルヌス協同生活組合・帝都支店に、お針子や布地商店主達が殺到するに至ったわけなのだが、アルヌス協同生活組合では友禅染や、西陣織といった贅沢品は扱っていなかった。

だが、その代わりとして見せられた商品サンプルが、光沢のあるサテン、透けるほどに薄いオーガンディー、張りの強いタフタ、感触の柔らかいビロード、伸縮性のあるストレッチ素材等である。しかも染色の技術が素晴らしく、色彩も非常に豊富だ。染料の高価さから王家の色と言われた貝紫に似た色ですら、当たり前のように扱われている。

ちなみに伸縮性のある素材でつくられた『てぃしゃつ』と呼ばれる製品は、吸湿性に優れ着心地

も良いため、高価ながらも人気商品として流行の兆しを見せている。

「これだけの生地を材料に出来るならデザインで勝負できる！」

絶望の地平線を越えたお針子達は、ぐっと拳を握った。参考となる『図絵』も、何故かアルヌス協同生活組合・帝都支店の片隅から発見された。

一冊だけ、ポツンと置かれていたその図絵には、人間がそのまま吸い込まれたのではないかと思うほど、精微に描写された絵と、どこの国の言葉とも分からない字がズラッと列んでいたのだ。

誰も読むことは出来なかったが、それはさしたる問題ではない。彼女たちに必要だったのは、服飾デザインの参考となる図絵の方だったからだ。斬新に過ぎるデザインや色遣いは、自分なりにアレンジすればいい。「ちょっとこれは……」と思えるほどの露出も、加減すればいいのである。こうして異国の図絵は帝都のお針子達の間で、密かに、そして大切に、長きにわたって保管されることとなる。

ちなみにその書籍に書かれた字を日本人が見たら、「コスプレ」とか「レイヤー」などの文字を発見することが出来ただろう。何故そのような書籍が特地に持ち込まれ、帝都まで運ばれてしまったかは、アルヌス協同生活組合と縁の深いとある日本人男性約一名だけが知っている。

――数週間前。

「俺の雑誌、知らない？　コスプレインターナショナルの特集号なんだけど」
「見ませんでしたよ」
「どこに、やったのかなぁ？」
「隊長。ちゃんと掌握してないからですよ」

こうして、帝都の貴族女性のファッションは、入手先不明な絢爛豪華な素材で作られたドレスと、これまた製法不明の美しい生地で作られた非常に斬新かつ奇抜なデザインのドレスの二大流行によって、完全支配されることになったのである。

さて、商人は説明を続ける。

お得意の、とある貴族の令嬢が社交界にデビューしようとしている。その押し出しをよくするためにも、是非『アレより素晴らしいドレスを』と頼まれたのだと。上手くいかなかったらどうなるか……という父親からの脅し付きで。

そこで、我が身と嫁さんと子ども達の生活のためにも、商人はあちこちの布地を探して歩き、やっと『さてん』という生地に出会ったのだ。商人は切々と語った。この生地を使ってドレスを仕立てたいと。

「でもねぇ……」

担当の男は腕を組んで唸った。アルヌス協同生活組合に繊維部門担当者として雇われる前は、彼

も生地の行商人をしていたので、貴族連中がいかに傲慢で強引であるか身に染みて理解していたのである。だから助けると思って、売ってやりたいとも思うのだ。しかし、上からのお達しに従うなら、小売りは支店でしなければならない。

そんな風に困り切っている二人を見て、ヤオは「ならば、こうしたらどうだろう」と口を挟むことにした。

商人の男は、どちらにしても帝都に帰らなくてはならない。繊維担当者は品物を帝都の支店に送らなくてはならない。ならばこの商人に品物を、帝都の支店へと届けて貰えばよいのだ。商人は、品物を預かる代わりに保証金を積む。そして帝都の支店に届けたその場で品物を引き取るわけだ。形をそのように整えて置けば、商人は約束は守れなくてもいい。ちゃんと届けて、保証金の預かり証と引き替えに、品物を受け取っても良い。どっちにしても組合側には損は発生しない。ただ、商人として今後の取引を考えるなら、信用のためにきちんと届けた方がよい。しかし、届ける間も惜しいとあれば、それもまた可能となる。

商人と繊維部門担当者は、ヤオのアイデアを聞いてポンと手を叩いた。

「なるほど。それなら問題ありませんな」

「いやいや、誰も損をしない名案。とはいえ、規則の裏をかくことに関しては、流石はダークエルフですな」

「いかにも、奸智（かんち）に長けてらっしゃる」

おぬしも悪よのう、という視線がヤオへと向けられた。
「そ、そんな、普通のことではないのか？」とヤオは思いつつも、役に立ててよかったとその場をそそくさと後にするのだった。

再び大通りに戻って、緑色の服を着ている者を捜すべく売店を覗き込む。
すると、売店のメイド服猫耳娘が、緑色の服を着た連中と会話を交わしているのが見えた。
談笑していると言って良い。彼女が微笑みかけると、男性達は顔を赤くしたりしながら、勧められるままに、あれもこれもと買い物の品数を増やしている。
すわ、言葉の通じる男か？　と思ったのだが、様子が違った。猫耳メイド娘の方が向こうの言葉を喋っているのである。
ヤオは考える。彼女は何故、緑色の服を着ている者達と言葉を交わすことが出来るのか……。物怖じせずに尋ねてみることにした。そして声をかけてみればその猫耳娘は、昨日ヤオの隣で飲んでいた娘だった。
猫耳娘は「緑の人はみつかったかニャ？」とちょっと皮肉そうに言いつつも、ヤオの問いに親切に答えてくれる。
「これがあるニャ」
彼女が見せてくれたのは、小さな書籍であった。

それは、緑色の服を着ている者達（猫耳娘が言うには『ニホン人』というらしい）……彼らの使う言葉の、簡単な日常会話の手引き書であった。アルヌス協同生活組合編集／カトー・エル・アルテスタン監修／学陰書房出版。その表紙の色から、皆『赤本』と呼んでいる。

「こ、これは買えるのか？」

その赤本の表紙には、金字でこう書かれていた。

『本書は部内専用であるので次の点に注意する。教育訓練の準拠としての目的以外には使用しない。用済み後は確実に焼却する』

「組合員か、組合の従業員として雇われた者なら無料でもらえるニャ。それと語学研修生とか、その使用人ももらえるニャ。でも、外部の人にあげていいかどうかは分からないニャ。売ることも考えてないから値段が決まってないニャ。残念だけど売ってあげられないニャ」

「何とかしてもらえないだろうか？　昨晩話したように、なんとしても緑の人を探し出して、話しをしなければならないのだ。……だが、今朝から何人も声をかけているのに、言葉が全く通じず困っている。伏して頼む」

ここまでくれば、ヤオも必死である。猫耳娘に深々と頭を下げた。

猫耳娘も出来ることならヤオに赤本を渡してやりたかった。だが、彼女も雇われている身の上である。勝手な判断を下すことは出来なかった。

無料で支給されているとはいえ、書籍とは本来非常に高価なものなのだ。これを手渡された時、

数ヶ月分の俸給がさっ引かれることを覚悟したほどだ。仕事で必要な物……例えば今着ているお仕着せ（メイド服）とか、住み込みの場合なら家賃、食費、各種の消耗品の費用が給料から天引きされるのは、この世界では当たり前の事なのである。それが、ここでは違った。

必要な物は大抵支給してくれる。食費は格安（職員割引）。寮も完備。勿論、備品を乱暴に扱って壊したり破ったりすれば、それ相応の弁償をしなければいけないが、普通に使ってくたびれた分には、給料から天引きされることはないのである。

これは、どこに行っても見られない好待遇であった。まさに革新的と言っていい。雇用条件について書かれた書類を見て「有給休暇って何、それ美味しいのかニャ？」と思わず叫んでしまったほどである。

それだけに彼女たちは、仕事に対して真剣に、そして責任感を持ち、信用を失わないように気を配っているのである。気性の荒い傭兵達ですら、自分達が掴んだ幸運を手放さないために、仕事には真剣に取り組んでいる。

ここで下手をして信用を失えば取り返しのつかないことになる。これほどの理想的な職場を紹介してくれた、フォルマル伯爵家の顔に泥を塗ることになるし、彼女たちの一族の信用をも失いかねない。

ヤオ達、ダークエルフ一族の存亡がかかっているのも分かるが、キャットピープル一族の生活もかかっているのだ。彼女たちの故郷は、今や彼女たちの仕送りで成り立っているのだから。

なので「たかが書籍一冊くらいくれてやる」というわけには、いかないのである。
普段ならこのように判断に困る時は、上司……つまり組合の幹部である老人や賢者かエルフに、「どうしたらいいニャ？」と尋ねることになるのだが、具合が悪いことに今は居ない。だから、待って貰うしかない。なのに、ヤオは「待っている余裕がない。今すぐ」と迫って来た。
「無理だニャ」
「そこを伏して頼む」
「頭をさげられても無理だニャ」
「なんとかして欲しい」
こうして猫耳娘が困っている丁度その時、ドアから警務隊の隊員（警務官）二人が入って来た。一般の陸上自衛官と同じ戦闘服姿だが、右肩に『警務／ＭＰ』と書いた黒腕章をしていた。警務官による、定時の巡回であった。
「どや？　メイヤちゃん。何か、困ってたりしとらんか？」
気さくな関西弁で、警務官は声をかけた。メイヤこと、猫耳娘もたどたどしい日本語で、特別困ってはいないと答える。
ヤオのしつこい依頼に困っていると答えれば、警務隊はヤオを不審人物として調べたり、店どころか街から追い出してしまったりするかもしれない。けれどヤオがどうしてこのアルヌスに来たかは聞いていたし同情もしていたから、そういうことにはならないようにしてあげたかったのだ。

ところが警務官の一人が、ヤオの容姿に視線を巡らせて眉を寄せた。
「ん？　こちらのエルフ。報告のあった女じゃないか？」
「ホンマや。カラメル色の肌に、銀髪。エルフ耳の美人で、革鎧。……なんや、鞭でも持たせたくなるようなすこぶるつきのべっぴんやな。ターバンにマント姿……報告のあったカツアゲ犯の特徴に合致するわなぁ」
「訴え出たのが、素行の悪い奴だから与太話だと思ったけど……ホントにいたんじゃしょうがない。一応話を聞かないとな」
実は、警務隊に被害の申し立てがあったのである。「艶っぽいダークエルフの女に誘われて、ついつい森まで行ったら股間を蹴られ、財布を取られた」と。
特別地域自衛隊派遣特別法施行令では、特地は自衛隊の施設内という扱いになっているので、警務隊が犯罪捜査、犯人逮捕等の治安維持に携わることになる。
警務官はヤオに「ちっと、話を聞かせて欲しい」と告げた。アルヌスの街の治安に関わる重要な仕事なので、結構熱心に勉強し片言ぐらい話せるのだ。決して、猫耳メイヤと親しくなりたいとかいう下心からではない……と思う。
言葉が通じる日本人!?
ヤオとしても嬉しい瞬間であった。しかも話を聞こうとすら言ってくれる。
朝から、いったい何人に声をかけたことか。きちんと話ができる者が居ないことに絶望すらしか

けていた。だがこうして、きちんと会話できる相手が現れたことに、幸運が訪れたような喜びを感じた。

思わず、涙すら浮かぶ。やったぁと叫びだしたいくらいだった。

「すまんが、ちぃと、ついてきてくれるかぁ？　話があるからのぉ」

いいとも、いいとも、話を聞いてくれるならどこへでもついていこう。

こうしてヤオは、警務官の求めに素直に任意同行するのであった。カツアゲ事件の参考人として……。

＊　＊

森の中。

木立の合間に、小さな泉が一つ。その淵に鎮座ます大岩に、一人の老人が座していた。

その手にするは魔法の杖。その双眸が見つめるは彼の教え子。

孫娘といっても通じそうな弟子の成長を、老賢者にして魔導師カトーはじっと見計らっていた。

レレイ・ラ・レレーナは泉の畔にあって静かに佇みながら、杖を七分三分の位置で掴み、魔法行使の支度を整えていた。オカリナの音色にも似た喉声が、意味あるモノフォニー（一人和声）を滔々と紡ぎ上げていく。

「abru-main!」

まずは『起動式』を建てる。

『現理』の支配する世界を『法理』で開豁して、『虚理』を展開するべく『陣』を敷設。

空気の動きとしての風ではない『何か』。それは『虚理』の担い手たる『偽氣』の揺らめき。魔法の行使者の志操を受けて、沸き立つように蠢く『法理』が彼女の銀髪を静かにそよがせる。

魂魄が、その根源たる『在理』へと触れる。

静寂なる森に、真空が横たわったごとく絶対無音の真なる静が場を支配した。

レレイの突きだした掌を中心に、小さなプラズマ円が描かれる。その光円は、腕輪のごとくレレイの前腕周囲を浮遊。その円が静かに分裂して二つに、四つにと増えていく。しかも、肘から掌へと数を増やしていくに従って、その円は直径を大きくしていった。

数珠繋ぎとなった光の円は、レレイの指先を越えてさらに三十個ほどにその数を増やし、メガホンのごとくその径を大きくしながら、やがて彼女の小柄な体躯をもしのぐ大きさへと至る。

「duge-main」

レレイは中空に描かれた連環から、腕を引き抜くと、指を鳴らした。途端……。

光の円が、連鎖的に弾けた。

その炸裂は次第に加速、増幅されていく。連鎖爆燃する大きなトランペットから一条の紫光が飛び出す。

その光の矢は、熱の塊そのものであった。それは泉の水面を突き破ると、瞬時にして周囲の水を大量に蒸発させた。これが一瞬にして為されると水蒸気爆発とよばれることになる。

轟音と共に噴水のような大きな水しぶきをまき散らすに至った。

突然の驟雨(しゅうう)の如き水を浴びながらも、カトーはしばし身じろぎすることが出来なかった。予測を遙かに越えた『効果』に、肝を冷やされてしまったのである。衝撃も、周囲に立ちこめる高温の蒸気も、そして降り注ぐ冷たい水も、どれもこれも彼の心臓によくなかった。

レレイは空から堕ちてくる水しぶきを浴びながら、静かにいつもの無表情で、カトーの講評を待っていた。

「う〜む」

カトーは濡れそぼった髪をたくし上げ、水滴を払いつつ唸った。

「レレイよ、見事すぎて言葉もない。汝が展開した『理』を語るが良い」

レレイは静かに一礼すると、学会発表のごとく語り始めた。

我々リンドン派の魔導師は、戦闘魔法を用いると世に恐れられているが、実のところそれほどたいしたものではない。

魔法を戦闘に用いていると言っても、それは魔法によって干渉された『現理』たる自然現象を、戦闘に応用しているのに過ぎない。

「このように」

レレイは拾った小石を浮遊させると、近くの朽木に銃弾のごとく打ち込んだ。

『虚理』は、小石という物質が静止しているという『現理』に干渉した。しかし、このようなことは、石弓や投石機にも出来ること。だから、我々はこの現実を応用と洗練で克服してきた。

レレイは今度は十個ほどの石を浮遊させた。この石を目標の周囲に漂わせ、四方八方の全周囲から襲いかからせて、倒木の幹に無数の穴を穿つ。

この技芸は、一丁の石弓や投石機には不可能な現象。故に、戦闘魔法は人々の畏怖を勝ち得てきたのだ。

だが、観客はそれでいいとしても、タネを知る奇術師の側から見ればどうか？　火の魔法は、要するに火を浴びせるだけ。ならば火のついた薪や油を相手に浴びせるのと同じではないか？　水の魔法は、結局の所水を浴びせるだけと分かってしまうのだ。

……これらは全て、機械や道具を用いることで再現できることだ。しかも『虚理』の効果範囲は短く、また発揮される力もより大規模な機械によって軽く凌駕されてしまう。

これまでの規模の小さな戦闘においては欠点たり得なかった問題だが、最近の戦場は、激突する戦力が大きくなって、魔導師の重要度は低下する一方なのである。無論、無用の長物と化したわけではない。医療や間接支援において、今なお不可欠な役割を担っている。だがしかし、魔法戦闘の大家リンドン派としてはその現状に甘んずることは許されない。先達が努力を積み上げて来たように、我々もまた研鑽を続けなければならない。

しかし、自衛隊が用いる『銃』や『砲』のような強力な武器が登場した今、これまでと同様の努力では、時代の変革に対応できないかも知れない。

これは『現理』に干渉する形で『虚理』を行使している限り、かならずつきまとう問題だ。『現理』に働きかけることに関しては、『現理』のほうがより効率的なのだから。結局技術の発達に必ず追いつかれ、追い越されることとなる。

ところが、門の向こうの『現理』の探求は、我々の遙か先を行って深く広かった。その『現理』に添った形で魔法を展開すれば、今以上の威力を魔法において発揮できないか？　それがレレイの着眼だった。

例えば、門の向こうに『炎』についての研究があった。

それによると、『炎』とは空中の『焼素』と、物質のもつ『然素』が結合する現象である。それは燃焼と呼ばれる。

そして、爆発とはこの燃焼が一瞬の時間で為されることである。我々の研究が行き詰まっていたのは、密封した容器が熱されて起きる破裂と、爆轟（ばくごう）とを取り違っていたからだ。

「そこで、爆轟を起こすことを試みた」

レレイは、中空に光の球を作り上げた。

「焼素は、門の向こうでは酸素と呼ばれる。然素は、門の向こうで炭素や水素と呼ばれる物質があてはまる。そこで『虚理』を持って、『焼素』と『然素』を引きはがし、集めることにした。これ

を力場に封じ、適度な密度を持って中空に浮かび上がらせる。そして『虚理』から一気に解放する」

指を鳴らすと、ポンッとその光球は弾けた。

「門の向こうでは、『火薬』と呼ばれる物がある。それがこの光球に相応する」

「うむ、理に適っている。魔法の応用範囲はこれまで以上に広がるであろう。異界の研究から示唆を受けたとはいえ、それを魔導に組み入れ、実際に行使するまでにまとめ上げた功績は博士号にも値しよう」

これまで手の届かなかった爆轟という現象を操れるようになったとなれば、魔法の価値はさらに上がることになる。ちょっと考えただけでも、軍事、工業や土木において有用ではないか。カトーはそう論じて場を締めようとした。

「しかし、これは威力がない」

爆轟は、それだけではたいした破壊力がない。大きな音と衝撃、光、そして熱を放って終わりである。より強い効果を得たければ、然素をかき集めればいいのだが、効率的とはいえない……とレレイは説明を続けようとした。ところが、カトーが手を挙げて話を中途で制止した。

「お客のようだ」と告げて振り返る。

レレイもカトーの視線の方向へと目を向けた。するとそこに、自衛隊の警務官の一人が立っていた。

「すみません。ちょっと複雑な話になってきまして、通訳をお願いしたいんですが」
レレイは小さくため息をつくと、カトーに一礼して、呼び出しに来た警務官の下へと進むのだった。

04

警務隊の取調室は、誰の趣味なのか、刑事物テレビドラマに出てくるような、いかにも取調室と言いたくなる内装がなされていた。
広さは二坪程度……畳で言うと四畳くらいだ。中央に飾り気に欠けたテーブルがひとつ置かれ、その前後にはパイプ椅子が配置されている。
鉄格子の嵌った窓側は『調べられる側』、出口側は『調べる側』が座る席だ。
出入り口近くの壁際には別の机が置かれて、そこは口述筆記をとる係官が座る。インターフォンや、電話もここに置かれている。
ヤオはこの部屋の『調べられる側』の席に座って、肩を落としていた。流石に涙目とまではなっていないが、身に覚えのない嫌疑に、相当憔悴(しょうすい)している様子が見て取れた。
向かいに座る警務官も、単語帳やら、赤本やら、ボロボロになりつつある辞書を並べ、意志疎通

を懸命に図ろうとした様子が見受けられた。くしゃくしゃに丸められた調書用紙が屑籠に山になっていて、相当に苦労しているようである。

警務官も最初は犯罪被疑者を取り調べるように、いかめしい口調と恫喝（どうかつ）的な迫力で、取り調べを始めたのである。実際、被害者が奪われたと訴えていた財布を、ヤオが所持していたことも、彼の心象を悪くする一要素となっていたからだ。つまり、普通ならば冤罪事件になるような材料が、見事にそろっていたのである。

ところが、そうはならなかった。

それもこれも、担当した警務官が知ったかぶりをしなかったからである。要するに身の程を知っていたというか、自分に語学のセンスがないことをわきまえていたのだ。

言葉が通じないから、互いの意志疎通に嫌でも慎重になる。一語一語を聞き取り、翻訳して文章に構成する。そして読み上げて本人に間違いないか確認をとる。これらの作業を丁寧にしていくから、「ああ、分かった、分かった。こういうことだな」という感じの、安易な決め付けが起きなかったのである。

こうして悪戦苦闘している内に、事情は何やら込み入っていて、財布を奪ったとか奪われたとか、そういう簡単な話ではないことが分かってきた。

警務官も「ん？」と懐疑的になった。そして、「どうもおかしい。被害者の訴えと全然違う」と考えるようになったのだ。

目の前にいるのは、褐色の肌を持つ美しいエルフ女性。しかも、『襲われる』とか『乱暴される』ことを意味する単語を辞書から探し出すのを見ては、放って置くことが出来るだろうか？　もし、暴行を受けたのであれば心理的なケアも必要になるだろうし。

最初厳めしい態度だった警務官も最後には優しく「うんうん」と頷きながら聞こうとする態度になってしまった。そして、自分では細かな意志疎通は不能と判断し「恥ずかしながら、自分では詳しいことが分からん。技官のレレイさんを呼んでくれ」と部下に伝えたのである。

取調室の電話が鳴ると、警務官は「待っていた」と言わんばかりの態度で受話器を取った。

「はいっ、菊地です。ええ、待ってました。こちらに案内して下さい」

こうしてレレイが案内されて来ることとなったのである。

レレイが入れば、それまで停滞していた事情聴取は瞬く間に片付いていく。ヤオの供述から恐喝事件はやはり嘘であったことが判明する。偽りを訴え出た男は、警務官が「ちょっと話がある」と尋ねるとあっさり白状して、逆に婦女暴行未遂犯として捕らわれることとなった。

ちなみに特地での犯罪は、加害者あるいは被害者が日本人の場合と、事件現場が駐屯地施設内、及びアルヌスの街の場合、犯人を東京に送還して裁判に付されることになっている。事件現場が施設外、あるいは被害者・加害者の双方が現地人同士の場合は、ピニャの指定した司法機関、この場合はイタリカのフォルマル伯爵家へと身柄を送検して、現地の法によって裁かれることが協定実務者会議での取り決めだ。今回は、事件が現地人同士の事例であったためイタリカに身柄を送られる

こととなる。

こうして、ヤオの巻き込まれた事件はあっさりと片が付いたのであるが、ヤオは仕事を終えて立ち去ろうとするレレイを、しがみつくようにして捕まえるとこの機を逃してなるものかとばかりに、『緑の人』に会いたい、会って話をしたい旨をまくし立てた。そして、炎龍に一族が襲われていると告げたのである。

レレイとしても、炎龍がダークエルフの集落を襲っていると聞いて、無視することは出来なかった。いま、こうして彼女がここにいるのも炎龍にコダ村が襲われたからなのだ。それに、彼女の友人や知り合いの多くが、炎龍によって命を失っている。

「つまりは、ニホン人に助けて欲しいという希望を伝えればよい？」

「そうだ。見たところ、御身は顔があちこちに利くようだ。ならば口添えも頼みたい」

無論レレイに、ヤオの願いを断る理由はなかった。

こうして、ヤオの希望は漸くかなったのである。そして、その直後に彼女は絶望の淵へと叩き込まれることとなった。

アルヌスの街の食堂――『貴賓席』。

そこは、清掃の行き届いたちょっとした喫茶店のような雰囲気で、落ち着いたデザインのテーブルと椅子が整然と並べられていた。そして観葉植物に、絵画。これらの調度品類が上品さを醸し出

している。一般席の雑多な雰囲気とは大違いだった。

夕の食事時にはまだ早いが、一日の研修課業を終えたボーゼスとか、パナシュといった貴族のお嬢様方は、奥まった一番良い位置にあるテーブル席を占領している。

見れば、何冊かの本をテーブルに積み上げ、それを取り囲むようにして、何やらヒソヒソと話をしていた。耳を澄ませば「リサ様から……」とか、「新刊」とか「翻訳作業の分担」といった単語が漏れ聞こえただろう。

「お嬢様。本日の新しい茶葉が入りました。おためし下さい」

彼女らに給仕をするのは、『執事番』と言われるウェイターだ。典雅な振る舞いで、高貴な育ちのお嬢様達にも、怖じけず負けず、堂々と応対していた。

何でも池袋にある、とある特殊な喫茶店で働いていた、というふれこみで柳田が連れてきたのである。

日本側から持ち込まれる、お茶やコーヒー等の取り扱いやサービスについてを現地人料理長やウェイトレスに指導するというのが建前だが、まだ特地への立ち入りが一般人には禁じられている現状で、それを信じているのは特地側の人々だけであった。自衛官連中は「どう見ても二科（情報担当）だよな？」という意見で一致していた。

「きっと池袋で、研修させられたんだろうなぁ。ご苦労というか、何というか……」と、その労苦をしみじみと思いつつ、幹部自衛官達は口を噤む。

とはいえ、堂々たる執事ぶりであった。
「まぁ、美味しいっ！　このお菓子はなぁに？」
「はい、お嬢様。こちらは、ミルフィユ・グラッセでございます。小麦を溶いて薄く焼いた生地に、甘みを抑え、ブランデーの風味をほんのりと効かせたカスタードクリームを塗り重ね、チョコレートで飾りたてたものでございます。日本国は青山にございます、高名な菓子職人の手からなる逸品でございます」
「素晴らしいわ。日本という国は、どうして些細な食べ物すら、芸術の域に高めてしまうのかしら」
憶えたての日本語で、令嬢達は賞賛した。日本語を学ぶために来ていることもあって、彼女達はこの場では日本語を使用する。
「そのことを理解できる方に食されて、菓子職人も満足しておりましょう」
ケーキは日本発祥の物ではないんだがと思いつつも、あえてそれには触れず、ウェイターはレベルが高いものを理解できるのは、レベルが高い者だけ……という論理のおべっかで、お嬢様達を持ち上げてみせた。
ちなみに、彼の目はしっかりと情報収集のために働いていた。が、机の上に並べられていた書籍の正体を知って、げんなりとした気分を味わっている。
「腐ってやがる……」という呟きが彼の心境を表している。もしかすると、この種の文化は彼女

達には早すぎたのかも知れない。彼が着眼点とするＥＥＩ（情報主要素／Essential Element of Infomation）は、「彼女たちが何に関心を持ち、どう行動しようとしているか」だが、最近は、報告書をどう書いたものかと悩まされている。

一方、別のテーブルではヤオが呆然としていた。

その視線は中空に留まり、何物も目に映っていないようである。まるで、スイッチを切ったロボットのような感じで、ただ静止していた。

その向かい席にはレレイの姿があった。何を考えているのか、じっとヤオを観察している。

「おまちどおさま」

食堂の看板娘、デリラが、銀トレーにのせた香茶ポットを運んで来た。

レレイは、日本から運ばれてくるハーブティがお気に入りで愛飲している。今回は、鬱気分に効果のあるセントジョーンズワートを注文していた。別にレレイが鬱気分な訳ではない。ヤオへの配慮である。

だが、お茶が届いたにもかかわらずヤオは何の反応も示さなかった。仕方なく、レレイは手を伸ばすとポットからカップへと注ぎ、ヤオへと勧める。

「飲んで」

「……」

ヤオは表情を動かさずに、手を伸ばすと機械的にカップを口へと運んだ。

待つこと暫し。
やがてカップは空になる。
再度、お茶を注いで、ヤオへと勧める。
「飲んで」
「……」
ヤオは呆然とした面持ちのまま、手を伸ばすと機械的にカップを口へと運ぶという作業を繰り返した。
やがて空となったカップを置いたヤオは、はたと気付いたように言った。
「なんだか悪夢を見てたような気がしている。妙に現実感がない……そうか、夢だったんだ」
レレイは黙したまま、ヤオへ向けていた視線を下ろした。そうして、淡々と自分のカップを口に運ぶという作業を繰り返した。
ヤオは、そんなレレイを見ているうちに、ポツポツと涙を落とす。
「……何か言ってくれないか？」
「夢ではなかった。貴女が聞いた言葉、見た光景、全てが現実」
「ほ、翻訳の間違いとか……」
「それはない」
「……お願いだ。間違いだと言ってくれ」

「言ったとして、何も変わらない」
「……なぜだ。何故、駄目なんだ」
「ハザマ将軍は、既にその説明をされた」
「でも、それって……余りにも、あまりにも……」
炎龍を倒すべく、助けが欲しい。レレイの紹介を受けて狭間陸将と面会が適ったヤオは、真っ直ぐにそう頼み込んだのである。事情も説明し、代償としては部族から預かってきた金剛石の原石も提示した。
だが、狭間の態度は話の当初から重苦しい物だった。地図を広げ、ヤオの故郷であるシュワルツの森がどの地域にあるのか確認するに及んで狭間は苦虫を噛みつぶしたような表情で、首を振った。
「遠路はるばるおいで下さったのに、力になれず申し訳ない」
その理由として、狭間はこう言った。「あなたの故郷であるシュワルツの森は、帝国との国境を越えてエルベ藩王国だ。軍が国境を越える意味は、語らずともお分かりになりますな？」
古今東西、ことわりもなく兵に国境を越えさせる行為は、宣戦布告と同義であった。それはこの異世界においても同じである。また国境を越さなくても、国境近くに大軍を移動させると政治的な緊張を高めることになるのだ。
「た、大軍でなくても良いのです。み、緑の人……たしか十人ほどと聞き及んでいます。その人数なら、軍勢とはいえないはず」

「滅相もない。そのような少数で危険なドラゴンと相対させるなど、部下を死地に追いやるも同然。自分にはそのような命令を下すことは出来ません」

叫ぶように泣くことが出来たら、ヤオもそうしただろう。だが、彼女はそのように泣いたことはなかった。伴侶となるはずだった男性を失った時も、恋人が亡くなったことを知った時も、今と同様に両手で顔を覆い、ただ声を殺して涙を流したのである。流された涙は、彼女の両の手掌から手首へと伝わり、そのまま肘へと流れ落ちていく。

「くふぅ……」

絞るように漏れた嗚咽。

いつの間にか、まわりのテーブル席を埋めていた自衛隊幹部達も、重々しい空気と痛ましさで黙り込む。

そんな中で語学研修のご令嬢方の楽しげな笑い声が、かすかに聞こえることが、かえって哀れを誘うのであった。

「まるでお通夜みたいだねぇ」と厨房に戻ってきたデリラは、料理長に貴賓室の様子を告げた。

「しょうがねぇさ、あのダークエルフの姐さん、例の炎龍退治をハザマ将軍に頼み込んで断られたってんだから」

料理の下ごしらえに手を動かしていた料理長はそう返す。

「それって、やっぱりロゥリィの姐御を怒らせたからかなぁ」
「違うだろ？　今回はイタミの旦那、絡んでねぇもん」
「そう言えばそうだね。そうすると上のお人達の事情って奴か。どんな事情なんだろうねぇ。折角、隊長さん達が集まってきてるってぇのに。あたいもニホン語の聞き取りをもうちょっと磨かないと駄目だな、こりゃ」
「デリラ。お前さんの陰仕事についちゃあ、俺は煩く言うつもりはない。だが、適当にしておけよ。俺は、今の仕事を失いたくない。何かあったら、真っ先にお前の名前を言うからな」
「分かってる、分かってるって。ヘマはしないよ」
デリラは料理長に向けて両手を合わせると、ドリップの済んだコーヒーをカップに注ぐのであった。

ヤオとレレイ達から少し離れたテーブルには、健軍一等陸佐と加茂一等陸佐、そして用賀二等陸佐と柘植二等陸佐の四人が、注文したコーヒーが運ばれてくるのを待っていた。四人の視線はさめざめと泣くヤオへと向けられている。
「用賀……なんとかしてやれんか？」
「無理ですねぇ。何しろ、市ヶ谷（防衛省）のほうから、野党から突っ込まれるようなことはするなというお達しが出ていますから」

横で聞いていた、柘植二等陸佐が「ドラゴンの退治が、野党の攻撃材料になるって言うのか？」と言って話に割り込んだ。

用賀は語る。

「実際になりました。防ぎようもなかった損害を理由に、現場の担当指揮官を国会に招致して吊し上げようとしたくらいですから……まして、今度は帝国の外ですからね。ドラゴン退治で越境攻撃しましたっていうのは、ちょっと不味すぎます」

「参考人招致どころか、証人喚問は免れなくなっちまうってか？」

加茂一等陸佐はそう言って肩を竦めた。

「それこそ、内閣不信任決議案の良い口実です。参院がいくら騒ごうが無視を決め込める議席数を衆院で確保してるのに、今の内閣は基本的に弱腰で事なかれですからね」

そこへデリラがコーヒーを運んできた。デリラが、テーブルにコーヒーカップを並べている間、会話は一時中断するが、彼女が立ち去ると今度は加茂一等陸佐が嗤った。

「でも、あの野郎ならなんとか躱せるんじゃねぇか？　俺はよぉ、テレビ見てて思わず爆笑したぜ。ま、茶化すような答弁が咎められて、後でしこたま叱られたそうだけど、それだって形だけのことだったしな。国会で言いたい放題言って、注意で済むってのも人徳って言うんかね」

「あれは、あの後の三人娘の方がもっとインパクトがあったからですよ。その援護射撃だって、結局は『伊丹だから』でしょうしね……」

実際、自分達だったらコダ村からの避難民をそのまま連れて来たか怪しいのである。流石に見捨てたりはしなかっただろうが、もっと官僚的に、子ども達を不安がらせるような対応になってしまっただろう。伊丹のように「大丈夫、ま～かせて」という感じでは扱えなかったことだけは間違いない。当然、三人娘達が今みたいな好意的な感情を、自分達に向けてくれるとも思えないのだ。

柘植は、コーヒーを飲み干してから言い放った。

「ドラゴン退治だけじゃない。帝国を叩き潰して、責任者の処罰と被災者への賠償を取り立てるという当初の目的だって、いつの間にか『門』を確保して、再侵攻を防げればよしという話にスケールダウンしている。いったい政府は何を考えてるんだ……」

「まぁ、この世界の政治情勢がだいぶ分かってきましたからね。この世界の覇権国家たる帝国を迂闊に叩き潰して、この大陸を戦国時代にするわけにはいかないっていう理由は、分かる話です。古代ローマ帝国が、ダキア（現在のルーマニア）を攻め滅ぼしたために、東方からの蛮族侵入を直接防がなければならなくなったという歴史を思い返すべきです」

今、アメリカが滅んだら、頸木を失った中国やロシアはあっという間に各地で戦争をおっぱじめるだろう。チベットやウイグル、グルジアを見ても、そう思わないとすれば相当におめでたい頭をしていると言わざるを得ない。

それと同じ事で、帝国がなくなればこの世界でも覇権を巡って列強間の戦争が始まるのだ。日本、そして自衛隊はこの世界において無敵に近いが、それにも限りがある。従って、この世界の平和を

維持する役割を、誰かに負わせなければならない。
健軍は重々しくため息をついた。
「資源の採掘にしろ、商売をするにしろ、平和が一番だからな。そのあたりの欲目が出て来たってことだ」
加茂はテーブルを掌で叩いた。
「じゃあ、俺たちは何のために特地まで来たってんだ？　『門』を守ってるだけなら、こんな戦力はいらんだろ」
「現在は、帝都で各種の工作が進行中です。『門』を中心とした周辺領土の割譲、賠償金の支払い、そして通商修好条約の締結……これらの条件を提示し、交渉して、帝国がこれを受け容れないという態度を示す場合は、いよいよ帝都に向けて進撃ということになるでしょう。すでに、計画の立案は済んでます。命令が出れば帝都占領は八十時間で完了しますよ」
「そりゃ、いったい何時なんだ」
「明日でないことは確かです。ですが来月か、再来月か……いずれにせよ、交渉は始まりますよ」
加茂は「どっちにしても、気の長い話だぜ」と天井を仰ぎ見た。
「現代戦争は、始める前に目標をしっかり見極めて、終わらせ方を決めておく。始めたら一気呵成に事を進めて、あっという間に終わらせる。それが要諦でしょ」
柘植は、珈琲を飲み干すとデリラにお代わりを求めつつ「待つのが商売とはいえ、因果なこと

だ」と愚痴った。
「そして、助ける力があるにもかかわらず、それを行使出来ない俺たちの目の前で、女が泣いている。たまらないぜ……なあ、用賀。やっぱり何とかしてやれんか？」
「無理だと先ほど申し上げましたが」
「だからさ、出来る限り少ない戦力で、国境を騒がさない程度に……なんとかならんか？」
「最小限ですか？　相手は空飛ぶ戦車とすら言えるドラゴンですよ」
「とはいえ、所詮は一頭だ……」
「そうだぜ。折角空自が居るんだ。ファントムで殺れないか？」
加茂が身を乗り出した。
「墜ちますかねぇ？」
「墜ちるだろ？」
「相手は第三世代装甲ＭＢＴ（主力戦車）並の防御力ですよ。20㎜程度じゃ無理ですって。それに、対空ミサイルでＭＢＴを撃破できますか？」
「ううむ……」
「要するに帯に短し、襷（たすき）に長しなんですよ。ん、例えが変かな？　まっいっか。ＡＴＭ（対戦車ミサイル）の類は、高速で飛行する目標に当てられない。飛行する目標に当たるＡＡＭ（空対空ミサイル）の弾頭では、第三世代級の装甲は貫けない。３ｒｅｃ（第三偵察隊）の奴ら、よくもＬＡＭ

（110㎜個人携帯対戦車弾）を当てられたもんです」
「じゃあ、どうしろって言うんだ？」
「ですから、ドラゴンを墜とすなら、こうです」
用賀二佐は、テーブルの上に自衛隊手帳を広げると、ボールペンで作戦概略図を展開した。
まず、空にいる場合は、ファントムで攻撃。
「さっき、墜とせないっていってたろう」
「撃破は無理ですが、要するに頭を抑えるんです。そうですね、こちらの設定したキルゾーンに、高度二十～五十メートルくらいまで、追い落としてもらいます。
ドラゴンの高度がそこまで下がったら、今度は特科の出番です。203㎜か155㎜の榴散弾をドラゴンの頭上に、土砂降りのごとくたたき込んでやります。それこそ息を継ぐ間もないほど爆風を叩きつけてやりましょう。空に、爆煙で富士山を描くほどの技をもってすれば、やれないことはないでしょう。
そして、地面に釘付けしたところで、コブラからＴＯＷミサイルのつるべ打ちですね。可能なら七四式戦車を持ってきてＡＰＦＳＤＳ（装弾筒付翼安定徹甲弾／要するに、太くて重い鉄の矢）をたたき込みたいところです。ま、最後は普通科の隊員に死亡確認をさせる必要があるでしょう。マンガみたいに自己修復機能があって、しかもパワーアップされたら堪りませんからね」
「ちょっ、まてよ」

言いながら、健軍は必要とする戦力を目算していた。
「火砲は、九九式（155㎜自走砲）の発射速度が一分間に六発。だとしたら最低でも十門いや、目標は移動するから、二十門は欲しいな。随伴する戦力として最低でも一個中隊。七四式戦車四両。空自からファントム二機。コブラ二機。観測ヘリ。整備、給弾車その他エトセトラ。……う～む、少数とはとても言えん」
「だから無理なんです」
用賀二佐の言葉に肩を落とす三人であった。

＊　＊

ヤオは確かに涙もろいところがある。だが、泣いていても誰も助けてくれないということもまた、よく理解していた。泣いてる時に「どうしたの？」などと言い寄って来る輩に、ロクな奴が居ないということも体験済みだった。
だから、立ち直る。結局の所、自分で起き上がるしかないのだから。
泣いた。充分に悲しんだ。
そうしたら、今度は手巾で涙をコシコシと拭き取り、すっかり冷め切った香茶で喉を潤し、清々したように両手を広げて大きく伸びをする。これで切り替えは完了である。

ふと、気が付くと通訳をしてくれたレレイはもう居なくなっていた。ウェイトレスのヴォーリアバニー（首狩ウサギ）に尋ねると、「用があるので行く。もし、泊まる場所に困るなら、組合事務所に来るように」という伝言を残していったそうである。決して野宿はしないようにと言っていたという。

また襲われることを心配してくれたのだろう。

随分と世話になったのに、礼を言い損なったことにも気付いて、後で言いに行かないと、とヤオは心のメモに書き込んだ。組合事務所の場所も、尋ねて確認しておく。

「さて、問題はどうするべきか」

故郷の同胞をどうやって救うかである。

まず、緑の人と言われる連中が、このアルヌスに駐屯する日本という国の軍隊の一部であったことは確認できた。

エルベ藩王国の国境を侵すわけには行かないという理屈も理解した。

炎龍を倒すことも不可能ではないということも理解した。ただ少人数では危険なだけだ。

もし指揮官の狭間が、意地悪や単なる横着で助けてくれないと言っていたのなら、話は簡単だった。

狭間をその気にさせるようにすれば良いのだ。金銭に意地汚いようなら、持ってきた金剛石が役に立つだろうし、名誉を求める男なら、炎龍を倒すということがいかな英雄をしても不可能だった

難事であり、それを為した者が得る名誉がどれほどのものであるかを語って聞かせればいい。もし、好色な男なら色仕掛けで迫る。ヒト種の女などでは決して味わえない、三百年ものの技巧で骨抜きにしてやったろう。

だが、狭間はその意味ではもう攻略の対象とは見られなかった。彼がヤオの頼みを断ったのは個人的な事情ではなかったからだ。国としての方針、軍としての事情。こうしたことを優先する理性的な男と関わっては、時間がかかるだけである。

と、なれば……彼の配下の部将を説得するのが良いだろう。このくらいの規模の軍隊になれば金か色、あるいはその両方で離反しても良いという部将の一人や二人居るだろうから。ヤオはそう思いながら、周囲を見渡すのだった。

05

覇権国家たる『帝国』に名はない。

名前とは、自己と他者とを区別するためにのみ必要とされる。帝号とは、諸民族・部族を束ね、列国王中の王として君臨する者のみが許される。国力において無双。軍事力において無敵。並び立つ他者の存在し得ない唯一無二の存在なのだから、名など必要なしという傲慢な思想がそこにあっ

た。

氷雪山から碧海へと注ぐロー川の畔。海から内陸に徒歩で二日ほどのところに、帝都はある。海運のための船は、流れの穏やかなロー川をつたって碧海とを往来する。

また陸運の隊商は、帝都から四方へと広がって大陸中に網の目を巡らす街道網を通って帝国内外、周辺各国との自由な交易を営んでいた。帝都は政商両分野にまたがる国家の中枢なのである。

皇宮は、帝都五つの丘のうち最も東寄りの丘、サデラ中腹一面に広がっていた。その東、西、南、北と全ての麓は、美しい白亜の宮殿と館が並び、それよりも広い森と林によって間隙が埋められている。白と屋根を飾る鮮やかな紺碧。そして美しい濃緑。それが皇宮を支配する色調であった。

その南宮にはゾルザル・エル・カエサルの居館がある。彼は皇帝の第一子であり、皇女ピニャ・コ・ラーダから見ると腹違いの兄にあたる。

男は、紗の天蓋に覆われた寝台に、たおやかな肢体を持つ白い女性を組み伏せ、背後から小枝のような首を締め上げると、その苦痛と快楽に歪む表情、その喉からこぼれる嗚咽と嬌声の渾然となった様を楽しむという、倒錯した悦楽に浸っていた。

「で、殿下。お許し……を……」

「ふんっ。ヴォーリアバニーの族長がその程度か？　ん、もっと、良い声で啼け。啼けっ！」

だが、程なくして小刻みに痙攣しながら気を失ってしまった兎女に対して、ゾルザルは「ふんっ」とその臀部を叩くと、用が済んだとばかりに寝台から放り出した。

白い肌の女性は、ゴロンと壊れた人形のように転げ落ちると、その衝撃で意識を取り戻したのか、身を震わせた。

その女性の髪は処女雪にも似た白。また、頭部には二つの白い毛に覆われた兎耳が伸びていた。だが、その白い肌は無数のアザと、打撲傷、噛み傷といった度重なる暴力の痕跡で覆われていた。

「この程度で気を失っていては、俺を満足させることは出来んぞ」

「お許しを……」

女は、小さく震えるような声を上げた。紅い瞳をまっすぐに向けて、健気にも冷たい石の床から身を剥がすようにして起き上がり、寝台に戻ろうとしている。

「精々勤めることだ。同胞の運命は、おまえがどれだけ頑張るかにかかっているのだからな」

「なにとぞ殿下のお慈悲をもって、我が同胞にお情けを……」

「もういい。今日は去ねっ！」

ゾルザルはそれに応えてやらず、その逞しい背を向けた。隆起した筋肉に覆われたその身体に、召使い達が群がっては衣を着せていく。

ヴォーリアバニーの女は、悲鳴を上げる身体にむち打つように裸身を起こすと、手近なシーツで身を隠し、よろよろと壁に手を突きながら、男の部屋を後にするのだった。

ゾルザルは舌打ちすると「いい加減、あの玩具にも飽きてきたな」と呟いた。そろそろ捨て時かも知れない、と。

するとその独り言に応える声があった。
「殿下。いかにお遊びとはいえ、汚らわしい獣人の牝をお使いになるのは、あまり良いご趣味とはいえませんぞ」
内務相のマルクス伯爵であった。
「なぁに、俺は開明的な男だから種族の違いで差別したりはせんのだ。あの兎女、見てくれと身体の味だけなら最高だぞ」
「とは申しましても、孕んだり致しますと何かと面倒なことに」
「そりゃあいい。あれでもヴォーリアバニーの族長だぞ。俺の子があの者らの王となるわけだ」
「彼の者が治める国など、とうの昔に滅ぼしたではありませぬか？」
「しぃっ、静かに……。テューレの耳は大きいからな。まだ聞こえるかも知れん」
マルクス伯爵は、頭を振った。
国と一族を守るために自らを差し出して三年もの日々を耐えて来たのに、故郷はとっくの昔に滅ぼされ、親兄弟も同胞も死に絶え、わずかに生き残った者も、各地に散って塗炭の生活に喘いでいると知ったらどんな思いをするだろうか。
しかも、わずかな生き残り達は、彼女が自分達を売ったという偽りを信じ込み、泥をすすりながらも復讐を果たすと誓っているという。いくら獣人とはいえ、酷い話である。そこまで残酷になれるゾルザルという男が次代の皇帝になったらどのような政をするかと思うと背筋が寒くなる。

「ところでマルクス伯。今日は何をしに来た。覗きか？　それとも、年甲斐もなくテューレが欲しくなったか？　よかったら譲るぞ。少々汚しはしたが、洗えば綺麗になる」

ゾルザルの身支度が終わって、召使い達はいそいそと下がっていく。後には、ゾルザルとマルクス伯の二人が残された。

「実は報告いたしたきことがございます」

「なんだ。言ってみろ」

「元老院議員達に不穏な動きが見られます」

「不穏だと？」

「はい、殿下。夜会などの催しに隠れ、秘密の会合を持っている様子です。当初はごく少数の集まりでしたが、このところ人数が目立って増えております」

「ふん。どうせ、弟の策謀であろう？　懐古主義の元老院議員達と語らって、帝位の継承順位を歪めようとするとは、ディアボの奴、いよいよ手段を選ばなくなってきたようだな」

「いいえ。どうもそれとは異なる様子なのです。議員達が密会しているのは、不法にもアルヌスを占拠している者のようです」

「なんだ、そんなことか？」

ゾルザルはどうでもよいとばかりに手を振った。

「敵国の使節であろう？　戦時下と言っても、使節の往来は当然のことだ。敵国の者が和平や降伏

の条件を詰めるために帝国の者と会ったり交渉したりすることを咎めては、外交も戦争も出来ないではないか？」
「しかし、どうやら議員達の多くは買収されつつある様子です」
「なんだと？」
「これまで、出征した者全員が戦死したと思われておりましたが、どうやら捕虜となって生き永らえている者も少なくない様子。今回集まっている議員達は、それらの身柄と引き替えに何某（なにがし）かの譲歩を迫られているに違いありません」
「なんてことだ」
ゾルザルは忌々しげに掌を拳で打った。
「帝国の議員達が、そのような脅しに屈するほど、愚かだとは思いたくないが」
「肉親の情に付け入るとは、敵も卑怯な真似を致します」
「仕方あるまい。肉親を人質とされては冷静な判断もできんのだろう。よし、分かった。今から行って、敵国の使節にそのような卑怯な真似は止めろと忠告してやろう。元老院議員達も、それで目を醒ましてくれるはずだ」
「殿下が参られますれば、きっとそのようになりましょう」
「だが、マルクス伯。このような大事な話を何故父ではなく、俺に言うのだ？」
「おそれ多いことですが、皇帝陛下の耳に入りますと、事を荒立てることとなりましょう。それは

帝国にとっては決してよいこととはなりません。また、次代の皇帝陛下にとっても」

「そうだな。元老院と帝室の対立がこれ以上深まるのも避けたい。下手をするとディアボの奴を利することにもなりかねん。そういうことなら、内々で事を済ませねばならん。で、その集まりの開かれる場所だが、どこだ？」

マルクスは会合の開かれている場所を伝えた。

「なに、そんなところでか？」

ゾルザルは眉を寄せつつも、部屋の外にいた取り巻きの若い青年貴族達に「いくぞっ！」と声をかける。

その背中を見送ったマルクス伯は、忌々しげに「馬鹿が。精々、派手にかき回してくるが良い」と鼻を鳴らしたのだった。

＊　＊

それは、ガーデンパーティーとか、園遊会とか、そんな言葉が似合いそうな催しだった。キャンプとかバーベキューの規模を大きくしたものをイメージすると良い。帝都郊外に、何組もの家族が招かれて和気藹々（わきあいあい）とした一時を楽しんでいた。

その森と見間違うほどの広さを持つ庭園には、丘あり、林ありで、さらには池があって小川が流

れている。一面に芝生を敷き詰めたら三十六ホール分のゴルフ場になりそうである。

庭園の一隅には白布の天幕が張られ、その下では、露火で肉や魚を料理人達が焼いていた。帝国ではまだ珍しい香辛料がふんだんに使われていて、香りを嗅いだだけでも唾が溢れ出そうである。

我慢しきれなくなったメイド服の少女が、ちょっと味見とばかりに口に運んで、取締の老メイドに叱られたりしていた。

少し離れたところには管弦の楽器を操る楽士達が集められ、耳に煩くない程度に、けれど会場の雰囲気を明るく盛り上げる陽気な演奏をしていた。

スープやシチューが煮込まれている鍋からは、美味そうな香草の香りが漂っている。さらにその傍らには各地の果物が籠に山積みとなっていた。

これらで空腹を満たしたなら、次は甘いデザートが待っている。

それは、この地ではまだ誰も食べたことのない変わった氷菓であった。ここでも氷を砕いたり、雪に果汁や蜂蜜をかけたものを楽しむことはある。だが、今回振る舞われたのは『アイスクリーム』と呼ばれる乳製品であった。

これがバケツ数杯分も持ち込まれ、最初はその珍しさから、そして二つ目からはその美味しさで、みんな群がった。

「冷たいものを食べ過ぎると、お腹を壊しますよ」

籐椅子で日光浴としゃれ込みながら、軽い午睡を楽しもうという貴族のご婦人が、子ども達に警

告する。とはいっても、自分自身が片手にアイスクリームを持っていては説得力に欠けるというものだ。だから、子ども達は「は～い」と生返事しながらも、アイスクリーム係のメイドに際限なくお代わりをねだっていた。

三度も四度もお代わりしてくる子どもに、メイドもアイスクリームの盛りを手加減するのだが、その子どもは「ケチケチするなよな」と、悪態を放った。

だが、メイドが「お母様に言いつけますよ」と冷静に返すと、途端に態度を変えて「頼むよ。な」と、手を合わせたりする。悪ガキというのは、どこにいっても変わらないものなのかも知れない。

用意されたアトラクションは食べ物ばかりではなかった。

傍らには、弓の的当てを楽しめる場所が用意されている。

娘の背中に、突き出た腹を押しつけるようにして中年貴族が狙いの付け方を手ほどきしていた。そのくせ、矢は的を大きく外れ、父親の権威失墜といった感じで、みんなから笑われている。

風船や円盤投げ、ボール投げなどを楽しめる遊具も多く、子ども達はそれらを用いた遊びを考え出し、はしゃぎ回っていた。そしてその様子を楽しそうに眺めている母親達。

小さな池は、生け簀代わりなのか鯉や鮒がつかみ取り出来そうなほどに泳がされていて、釣好きな者は早速釣り糸を垂らした。釣れた魚をその場で焼いて料理するという趣向のようで、これもまた趣味人にとっては楽しい催しと言えた。

そんな様子を見渡しながら、ピニャは籠に積まれた果物をひとつ摘むと、サクッと囓った。
「スガワラ殿。一家一族丸ごと招待するとは、なかなか味のある催しを考えられたな。妾もこういった趣向は大変に好ましく思う。騎士団の宴も、今後はこのような形で行おうかな……」
「そうですか？　ありがとうございます。でも、メイド長に来てもらえたのはホント助かりました。楽士を雇うにしても、こちらのことがよくわからなくて」
「いや、此度はフォルマル伯爵家から言い出してくれてな。全面的な協力を約束してくれているので、今後もこのような催しをする際はアテにしていいだろう。イタリカは今非常に景気がよく、伯爵家の財政状況も好転しているという報告が来ている。それもそなた等との交易のお陰だということを伯爵家は理解しているのだ」
「しかし、あの家から来たにしてはヒト種のメイドさんばかり居ますね」
菅原もイタリカのフォルマル伯爵家には、挨拶や会議などで何度か足を運んでいる。そこで猫耳、ウサ耳といった様々な種族の女性と出会ったことで、この特地が異世界であることを実感したのだが、今回老メイド長が帝都に連れてきたのはヒト種のメイドだけ。そのことに漠とした違和感があったのだ。
「帝都ではな」
ピニャは言葉少なに話を濁したが、菅原にはそれだけで充分伝わった。
あちこち有力貴族のパーティーに参加して、いくつもの邸宅を訪問し、そこにヒト種のメイドし

かいないことに気付けば、フォルマル伯爵家が特別なのかも知れないと嫌でも思うようになってくる。先代の当主というのはよっぽど開明的な人物だったのだろう。

ピニャと菅原は、二人列んで会場となった庭園を歩きまわり、招待客達が退屈していないか、何か問題は起きてないかと見回っていた。

時折、客達に声をかけて挨拶をし、また挨拶を受ける。

めざとく目を配って、個性的で光るところのあるキャラクターを見つけたら、「あれは誰だ？」と名前やどこの家の者かを確かめて、記憶しておくことも必要な作業だ。ピニャが目を向けたのは、料理人達に香辛料の使い方を指導している日本人らしき男だった。

「スガワラ殿。あの男は？」

「ああ。彼は伊丹の部下で古田（ふるた）と言います。元一流料亭の料理人という変わった経歴を持つそうですよ」

「なるほど、それでこの味か」

ただ香辛料をまぶしただけでは、出すことの難しい繊細な味付けである。『フルタ』という名前を、ピニャは脳内のメモにしっかりと書き留めて置くことにした。

「殿下、お久しぶりです」

「おおっ、ドゥエン殿。ご壮健か？」

「はい。家族もみな元気です」

頼まれれば人を紹介し、引き合わせるということもする。
「スガワラ殿。こちらはマーレ家の三男でらっしゃる。兄上の名が、先日お渡ししたリストに載っているはずだ」
このようにしてピニャは、菅原を何人もの貴族に紹介した。ここに来ている主立った客達は、すでに菅原を見知っている者ばかりだが、中には親戚という類縁の立場で招かれた客も居た。例えば、夫人や子女である。そんな彼女らの菅原への認識は、恐ろしい敵国の使者ではなく、珍しくて素晴らしい物産をふんだんに持ち込んで来てくれた国の使者でしかないのだ。
中には紹介された途端、菅原の腕を抱きかかえて、発展途上の胸を押しつけながら、おねだりを敢行する娘っ子も出てきたりする。
「スガワラ様。従姉妹が私に真珠の首飾りを見せびらかすので、とても悔しい思いをしているのです。なんとかしていただけませんか？」
余りの不躾さに、さすがに親も見逃せずに叱っていた。
菅原も、相手が十一～十二歳の娘では役得と喜ぶわけにもいかないし、邪険に振り払うわけにもいかずと困っている様子だった。が、こんなことを見咎めているようでは外交など出来ないのである。子どもの振る舞いが、妙なところで突破口になったりするからだ。
ピニャは、娘を叱る親を見て「テュエリ家の者だが、同時にカーゼル侯爵の類縁でもある」と素早く囁いた。

帝国政界にあって元老院派の領袖とも言えるカーゼル侯爵とのパイプは、日本政府としても是が非でもとり付けておきたいはず、と気を利かせたのである。勿論、菅原も素早く反応した。

娘を叱る両親に「そのように叱らないであげて下さい」と声をかけ、無礼を詫びる両親に対して、寛容な様を見せた。そして、娘のシェリーという名をきちんと憶えておき、後で真珠の首飾りを贈ることにする。そうすればこれが縁になって、紹介を求めることが出来るだろう。

外務省の担当者達が柳田にからかわれつつも、「贈り物は自分達の武器弾薬」と言い放ったのもこうした理由からだ。個人的な役得と、国益との境目がはっきりしないので、煩く言われたり、時にマスコミから叩かれることもあるが、外交も戦いだと考えるならば、この手の武器弾薬をケチっては、かえって国益を損ねるということを知っておかなければならない。実際、後になって菅原からビロード小箱入りのネックレスを贈られたシェリーは、子どもっぽい無邪気さで親や従姉妹達に自慢し見せびらかして回った。

勿論、これほどの物を貰っておいて何も返さないのは帝国でも礼儀知らずと言われる。早速、『お礼』と称したやりとりから行き来が始まり、カーゼル侯爵への繋がりとなっていくのである。

余談だが、これをきっかけに三十路近い菅原が十一歳のシェリーに好意を抱かれてしまう。しかも計算高い親がそれを熱心に応援する、というちょっと困った事態になったりするのである。

ピニャは、菅原がシェリーにまとわりつかれて慌てている姿を苦笑して見守りながらも、視線だ

けは周囲へと巡らせていた。

こうしている間も、客達の動向をしっかりと見ておかなければならない。

接待役は楽しめる立場ではないのだ。強いて言うなら、客達が楽しむことが、自分の楽しみと感じられなければやっていられない仕事と言える。それでも、今回はマシなほうだった。というのは、男女間の面倒くさい橋渡しをしないで済むからだ。

こうした宴席は年若い男女にとって出会いのチャンスと見なされている。年若い青年貴族達は年若い女性をめざとく見つけては声をかけたりするのが普通であるが、いきなり声を掛けるのは不躾であり、無礼とされる。必ず紹介なり、介添えが必要となるのだ。そして、多くの場合その役務はホスト役にまわって来るのだ。

ピニャは年若い男女が屯（たむろ）する騎士団の主宰者だ。その手の集まりで接待役などしたら、忙しくて食べ物一つ、飲み物一杯も口に運べないことに成りかねないのである。

ところが今回は皆、家族や親戚連れ、社交界にデビューする前の子ども連れ。

自分の父親や母親の居る前では、それほど奔放なことも出来ない。どうしてもと真剣に思うなら家族ぐるみの紹介を受けることとなり、遊びでは済まなくなってしまう。

そんなこともあって、客達は皆家族単位で楽しむか、男女のグループに別れてそれぞれに楽しむかのどちらかだったのである。

ご婦人達は、菅原と縁のあった者だけが手に入れることが出来る、煌びやかな織物や染め物で仕

立てられたドレスと、真珠などの宝石で我が身を飾りたてて華を競った。

材料たる生地が同じグレードの場合でも、デザイン、縫製といった点で競う余地があって、このあたりが彼女たちの優越感と嫉妬心をかき立てた。また、貰った小物、装身具の微妙な優劣も、彼女たちの心をチクチクと刺激して、菅原やその他未登場の日本人外交官達と仲良くしたいと思わせる理由となった。

こうしたご婦人方に取り囲まれているのは、栗林(くりばやし)二等陸曹と黒川だ。

栗林達は、婦人自衛官の制服で身を固めていて非常によく目立つ。ただ、ピニャ配下の騎士団の制服に似たところもあって、招待客達からは二人は女性軍人として受け容れられているようだった。

どういう話の流れから、そんなことになったのか、栗林は相棒に富田(とみた)二等陸曹を選んでご婦人相手に護身術の講義をしていた。

「腕を掴まれましたら、手首を曲げて、このようにします」

とか言いながら長身の富田が、小柄な栗林に『呼吸投げ』を喰らって吹っ飛んでいく姿は、女性達にとってとても爽快なものである。拍手で絶賛されていた。ちなみに見た目が精悍で、野性的でありながら清潔な雰囲気の富田は、ちょっと年齢のいったご婦人たちに人気である。

一方、黒川は化粧用品の使い方についての日本の技を披露してご婦人達から憧れの眼差しを浴びていた。黒川は看護師としてメイクアップ・セラピーを学んだことがあり、このあたりはお手の物である。

メイクアップ・セラピーとは、長い療養生活で、気持ちの沈みがちな患者や高齢のご婦人に化粧を施すことで心に張りをもたせ、情緒を明るくする。気持ちが明るくなると病気の治りも良い、という効果を求めた専門的な技術である。

「目元がくっきりとしている方の場合は、アイシャドウを濃くしますとクドくなってしまい、全体の塗りもきつくしなければならなくなります。それよりは、薄目にして明るくすっきりと仕上げるのがよいでしょう。眉のラインは慎重に。わずかな変化で印象ががらっと変わりますわ」

選び出された妙齢のご婦人の顔が、黒川の手によって見事に仕上がって大変身。十歳若返るとかそういう効果は無いけれど、その年齢相応の可愛さ、あるいは美しさを引き立てるという効果に、女性達は感嘆の声を上げた。

「イタミ殿の部下は、素晴らしい人材がそろっているな」

ピニャが誉める。菅原も運が良かったと漏らした。第三偵察隊はつい先日到着したばかりなのだ。言葉が使える者の多い偵察各隊は最近、便利使いされている。入れ替わりでアルヌスに帰っていった第一偵察隊の面々などは、ちょっとウンザリした様子を見せていた。

「前の者らは無骨なばかりで、いささか面白みに欠けていたな」

「やはり隊長の性格ですよ。いや、伊丹さんを普通だと思われても困るんですけどね。彼の方が極めて特殊です」

「分かっている」

流石にピニャも菅原をはじめとして何人もの日本人と関わって、その生真面目な気質が理解できるようになっていた。それに対して、伊丹はある意味でルーズというか、余裕があるというか、抜けているというか……とにかく特殊なのである。そして、その特殊さに救われたとも感じていた。

何しろ、普通の男だったら、袋だたきにされれば恨みをはらすことを考えると思うからだ。なのに伊丹は、ピニャに苦手意識こそ抱いているようだけど、彼女にとって不利益になるようなことを一切して来ない。これは希有なことである。

伊丹の立場なら、非常に簡単……例えば梨紗との連絡役を引き受けないというだけで、復讐は充分に果たすことができるのだ。

芸術を渇望するピニャにとって、その糧道を断たれることは、精神的な破滅と最早同義である。それを避けるためには、自国内に芸術家を育てることが必要となるが、まだその第一歩たる語学研修が始まったばかり。今は何としても、伊丹の好意を確実に繋ぎ止めておかなくてはならないのである。

ピニャはもう、その為にはなんでもしちゃう覚悟が完了していた。

対伊丹用突撃隊員を騎士団の中から選抜し、研修生の一人としてアルヌスに送り込んでいるくらいなのだ。まだ活動させていないが、ピニャが命じれば彼女は動き出す。選び出された少女からすれば何とも悲劇的な話だが、ピニャはもう芸術の為なら、横紙破りだろうと、ごり押しだろうと、あくどいことでも平気で手を染めるつもりなのだ。

その覚悟を再確認したピニャはウンと頷くと、「そのイタミ殿は、どちらにおられるのだろう？」と菅原に尋ねた。伊丹のご機嫌伺いをせねばならない。

「あちらですよ」

菅原は、メインとなる広場からちょっと歩いたところにある、土嚢を積み上げて壁とした子ども立ち入り禁止のエリアを指さした。

そこには、招待されたメインの客……つまり元老院議員や次代の議員たる若い男性達が『銃』の威力を体験する射的場が置かれていた。日本が有する武器の恐ろしさを身に染みて理解して貰う。それが今回の園遊会を開いた、最大の目的である。

銃を暴発させても弾が変なところへと飛んでいかないように、土嚢を積み上げた壁の間に『的』を置く。『的』はその辺で安売りしている素焼きの壺とかを一山幾らで買ってきたり、的当て用の標的を置いたりした。

その後ろは、土を盛った土提が壁となっている。これらは、伊丹達が来る前に準備していた第一偵察隊員の作業の成果であった。

射座についた元老院議員達は、第三偵察隊の自衛官達の指導の下、五十メートルほど離れたこれらの標的に向けて、心ゆくまで銃弾をばらまいていた。

二十名ほどの議員達は、それぞれに交代しながら銃を試した。

二つ列ぶ射座のひとつに立ったキケロも、指導されたとおりに銃を構え、狙いをつけ、引き金を引いた途端の発射音と肩を突き飛ばすような反動に目を白黒させた。

「銃の威力はどうだ？　キケロ卿」とピニャは声をかけたかったが、それを自分から尋ねては、それだけで日本国側に立って威圧しているように思われてしまう。だから黙って見ていることにした。彼らが何を体験して、どう思うかは充分に分かっているのだから。

一発だけの発射なら、驚いただけで済む。

二発目から、その脅威を味わうことになる。

三発目で、凄さが身に染みて、四発目を過ぎた頃には、手の中の銃を自分の物にしたくて堪らなくなる。

そして、十発を越えると、これを無数に装備する敵と戦争をするということの意味を悟るのだ。

まして、ミニミ（機関銃）の展示射撃で、並べられた壺の数々が瞬く間に粉砕されるのを見れば、『門』を越えて攻め入った帝国軍がどうして敗亡したのか。アルヌスの丘に攻め入った連合諸王国軍がどうして全滅したのかが、はっきりと理解できてしまう。

一度は、尋ねることになる。

「これらは、どうやって作るのか？」

当然、教えてもらえない。教えられたとしても理解することは出来ないだろう。

理解できるのは、『銃』というこの武器が、精巧に作られた無数の部品の集合体であることだけ

だ。この武器は、彼らが菅原から贈られたような、精緻な工芸品を作り上げる技術力の結集なのである。

次にする質問は、「どうやったら売ってくれるか？」である。

だがこれもよい返事はない。あるはずがない。戦争をしている相手に、自分の武器を売る馬鹿は居ないからである。それは元老院議員達も分かっていた。もし、売ってくれると言われたら、詐欺か何らかの謀略を疑うだろう。ではどうして尋ねるのか？　それはそうしなければいられない程に銃という武器が力を持っているからなのだ

盗んで持ち去ろうにも二丁とも鎖で机に繋がれている。しかも一丁に一人の見張りが付いている。弾の込め方から狙いの付け方、そして引き金の引き方まで、懇切丁寧に教えてくれた彼らだが、そう思ってみれば全員が油断のならない見張りであった。

では「この連中を買収して」と思っても……その言動、立ち居振る舞いから見れば、おそらく無理だろう。「悪い冗談を」と言われてお終いだ。

キケロは、目前の自衛官に銃を返すと、親切に扱い方を指導してくれたことへの礼を述べて射座を後にした。

ここで、さらに議員連中の心胆を寒からしめるイベントが披露された。

「ええ～これから、81㎜迫撃砲の展示射撃を致しますので、みなさんこちらに集まってください」

伊丹に導かれて、議員達は射撃場を出た。

すると少し離れたところに、斜めに立てた丸太を二本の脚で支えているような物体が置かれていた。丸太と思えたものはどうやら金属製の筒のようであった。その筒先が向けられているのは、切り開かれた前方の平地である。

前に出てよく見てみようとする者もいたが、「危ないですから、近付かないでください」という伊丹の声で、議員達は肩を竦めて立ち止まった。

眺めていると迫撃砲に一人の指揮官の下、三人の隊員が取り付いてきびきびとそれぞれの役割を果たしている。

一人が照準器を装着して、ヘアーラインと紅白の標管が一致しているかを覗き見る。

もう一人が砲弾に信管を取り付け、発射のための装薬を取り付ける。

そして砲口の傍らに立った者が、砲弾をしっかりと両手で受けとると、砲口に半分ほど差し込んだ。

「半装填よしっ！」

指揮官が「五、四、三、二！」と指折り数える。

「発射！」「一！」の二つの声が重なった。

砲口に差し込んだ砲弾から手を離す。同時に頭を地面近くまで下げて爆風やその他の事故を避ける。

すると砲弾は重力に引かれて迫撃砲の筒を落下していく。

砲弾の尾部には発射のため火薬がとりつけられている。この装薬の量を調整することで砲弾を届かせる距離を変えることが出来るのであるが、これが砲の中で突き出ている撃針にぶつかると小爆発を起こす。その衝撃と爆風により、砲弾が発射される。

まず、砲口から爆炎が吹き出し、それを追いかけるようにして弾が飛び出していく。妙に思われるかもしれないが、迫撃砲は砲弾の直径と砲の内径にわずかな隙間があって、そこから漏れだした爆風が先に飛び出るので、そう見えるのだ。

見ていた観客は、銃などをはるかに超える発射音に驚いた。そして……。

「弾ちゃ～く……今っ！」

すると目標とされていた場所に噴煙が上がり、それに遅れて腹の底に響くような爆音が届いた。視覚効果を重視して遅延信管をつけたため砲弾は地面にめり込んでから爆発する。そのために、土砂の吹き上がった爆発は映画の特撮シーンのような迫力だ。

迫撃砲の射撃は続いている。

重榴弾が大地を掘り返し、爆音は雷鳴のごとく轟く。その数、十数発。

これを見た議員達は、帝国の騎馬隊や重装歩兵が粉砕される幻影を見た。城塞都市や宿営地が、この爆炎で圧し包まれる幻影を見た。

「す、済まぬが教えて貰いたい……これはどのくらい先まで届くのだ？」

問いかけてくる議員に、伊丹は「う～ん、こちらの単位で三リーグちょっと（一リーグ≒一・六

㎞）といったところですかねぇ」とざっくばらんに暗算した上で、少し控えめに答えた。武器の性能の全てを正直に答える必要はないからである。

「さ、三リーグだと？」

この特地の概念では、戦場とはそんなに広いものではない。

「もう一つ尋ねたい。銃という武器はどの程度保有しているのか？」

「詳しくは申せませんが、一人につき一丁持っていると考えてください」

「ぜ、全員がか？」

議員達はようやく一つの結論に達した。いや、もう既に気が付いていた。ただ認めることが出来なかっただけだ。

「戦えば、負ける」

身に染みて理解したのである。帝国の兵、帝国の武器、帝国の戦術では、どれほどの数を用意しようとも日本に勝てるわけがないのだ、と。

いったいどこの馬鹿だ。こんな相手に戦争を仕掛けようなどと言ったのは、と恨みがましく思いつつ重苦しさを感じさせる表情で議員達は互いの表情を窺った。皆、苦々しい顔をしていた。誰もが、同じ結論に達したのだろう。

見れば、ピニャと菅原の二人が、並び立って自分達を見ている。

議員達は理解をする。

何故ピニャが、ここまで熱心に講和交渉の仲介を行うのか。確かに捕虜のこともあったのだろうが……彼女は、このまま戦えば帝国が負ける、負けるばかりでなく滅びてしまう、ということを自分達よりも早く知っていたのだ。

自分達の周りにいるのは、敵の脅威を知らず無邪気に遊んでいる女や子ども。自分達を除く、その他大勢の貴族達。その危機感に欠けた姿には、腹立ちすら覚えるほどであった。おそらく今日までの自分達も、ピニャの目にはあれらと同じように見えていたに違いない。

互いに視線を混じり合わせたデュシー侯爵とキケロは、並び立って前へと出た。

キケロは、ため息まじりに尋ねる。

「スガワラ殿。ニホンが、講和を求める理由は何であろうか？　戦えば勝てると決まっているのに」

「我が国が求めているのは平和だからです」

デュシー侯爵は地位に相応しく重厚感のある口調で、語る。

「平和か……なるほど、耳心地のよい言葉だが、その単語は実に多くの意味を含んでいるな。勝って与える平和は美味で、負けてほどこされる平和は実に苦い。同じ平和なのに真逆の意味があることを儂は今はっきりと理解した。儂は、今まで勝って与える平和しか知らなんだ」

「ですが侯爵閣下。帝都の門前までニホン軍が押し寄せて来るまで、待っているわけには参りますまい」

キケロの言葉に侯爵は頷いた。
「そうだな、講和交渉が必要だろう。だが、ニホンが和平にどのような条件をつけられるおつもりかを確かめておきたい」
菅原は首肯すると、冷厳に基本となる条件を突きつけた。

一．帝国は戦争責任を認め謝罪し、責任者を処罰すること。
二．帝国はこの戦争によって日本側が被った被害について、賠償をすること。その額、スワニ貨幣で五億枚とする。
三．『門』のあるアルヌスを中心に、半径百リーグの円を描く範囲を日本国に割譲する。さらに新規に引かれた国境から十リーグは、双方ともに兵を配置しないこと。
四．通商条約の締結。

「ご、ご、五億スワニ？」
「そもそも、全世界のスワニ金貨を集めてもそんな枚数にはならんぞっ！」
「責任者の処罰、領土の割譲に加えて、なんと無茶な要求か」
「そうだ。我が帝国を亡ぼすつもりかっ！」
議員達の驚いた様に、慌てて菅原は説明を付け加えた。

「別に、一時に全額を支払う必要はありません。それに、土地や鉱物等の採掘権などで替えてもよいという訓令を受けています」
「そ、それにしてもだ。無茶が過ぎないか？」
「ふ、不可能だ。この条件では他の議員達を説き伏せるのは絶対に不可能だ」
「そ、それで平和を望むなど、どの口から言えるのか」
ピニャも、日本国政府が突きつけた和平の条件に、身をガクガクと震わせていた。
まさか自分が仲介した和平交渉で、帝国に死刑宣告にも等しい要求が突きつけられるとは思ってもみなかったからである。菅原が、支払いは分割でも良いし、地下資源等の採掘権に代えてもいいよと言ったことなど、右耳から左耳へと通り過ぎてしまった。
これまで比較的良好な関係を築けていると思えた日本国外交官の菅原が、ピニャの目には自分達をなぶり者にしようとする巨大な化け物に変貌したように見えた。力が抜けてしまい、立っていることも出来ずへなへなと座り込む。絶望感に打ちひしがれつつも、ピニャは声を絞るようにして死んだ方がマシだと叫んだ。
「ス、スガワラ殿。そ、それでは……む、無条件降伏と変わらないのではないか？　というより、さっさと殺せ？」
「やっぱり、五億スワニはインパクトが有りすぎましたか」
菅原はどうしたものかと思いつつも、告げる。

「単純に金貨一枚に含有している金の価値を、我が国の相場と当てはめて換算しただけなんですがね。それでも我が日本国の年間一般会計予算をちょっと超える程度でしかないんですよ」

議員達はへなへなと座り込んだ。

大陸全ての金製品……諸王の王冠から、財宝、流通している金貨……全てかき集め、鋳つぶしてことごとくをスワニ金貨として鋳造しても、五億枚になるとは思えないからだ。そして、それ程の額をしても敵国の年間予算程度でしかないと聞かされれば、日本というのはどれほどの大国かと思い知るのである。

実はこの賠償金額の問題は、特地の経済状況が確認されてから、当然起こり得ることとして日本国政府でも協議されていた。

例えば、人類が地球に誕生して以来、これまでに採掘した金の総量が、推定十万六千トンと言われているが、それもここ二百〜三百年で採掘技術が飛躍的に進んでから採掘された量の方が多いのである。

特地の文明発達程度から見れば、採掘方法はツルハシとスコップによる手作業だろう。例えオークやゴブリンといった怪異を使役しているとしても、鉱山技術や製錬技術が未熟な現状では、全採掘量は一万トンに届くか届かないかだろうと推定されていた。

しかも、いかな帝国とはいえ、この特地の全てを支配しているわけではないのだ。

対するに、スワニ金貨はこの特地世界で最強の貨幣である。

金の含有量は一枚六十グラムに及び、直径は五百円玉くらい。厚みと重みがずっしりとしている。流通というよりは、貯蓄のために用いられる傾向があり、江戸時代日本の金貨幣、大判に近い扱いを受けているのである。したがって、鋳造量も稀少で、市場で見かけることなどほとんどあり得ないものなのだ。

これが千枚で金は六十キログラム。一千万枚で六百トンである。五億枚集めようとしたら、なんと三万トンの金が必要だ。……つまり、どうやったって無理なのだ。

ちなみに特地で流通量が最も多い金貨はシンクである。こちらは貨幣のサイズもスワニに比べて小さくなり、金含有量も十グラムよりやや少ない。これが、この特地の基軸通貨なのだが、厄介なことは貨幣の価値は相場の影響を受けるため、金の含有量だけで単純に一スワニ＝六シンクと決することが出来ないのである。

シンク金貨は商取引における決済のため頻繁に必要とされているので価値が高いのだ。従ってスワニ金貨一枚と両替しようとすると、五シンクあたりとなる。

もし賠償金を支払うために帝国政府が金貨を買いあされば、たちまち相場は高騰して集めることはより困難になるのだ。さらにその影響は他の貨幣にも広がる。

一般庶民がよく手にするデナリ銀貨、兵士の給料支払い用のソルダ銀貨（一兵卒一日の給与は一ソルダ）と、質の劣る各種の銀貨、銅貨等の重要度も相対的に上昇して、やはり各貨幣の相場は急騰する。こうして大規模なデフレが起こることになるのである。

このように金にしろ銀にしろ要求しただけそのままに差し出させたら、帝国どころか、この特地経済を徹底的に破綻させてしまうことになる。また、もし『金』の都合がついたとしても、一時に『門』を越えて持ち帰ったら、米・露・中・フランス・イギリス等の核保有国から核攻撃を喰らうこと必至である。金相場が大暴落して、全世界経済が大混乱の上に破綻するに決まっているからだ。

したがって、五億スワニの支払いなど無理だし、支払われても困るのである。まして金の含有量を極端に落とした悪貨で支払われればさらに厄介なことになる。これらの悪貨は、当然のことながら帝国内で使用されることになるから、今度は強烈なインフレーションが発生することになってしまうのだ。

とは言え、賠償金を請求するのに額が『決まってない』と言うわけにもいかない。そこでとりあえず日本は、かつて戦後処理で隣国に支払った額が、当時のその国の国家予算の一・四五倍であったことを前例に、単年度分の国家予算相当額を賠償金として請求することにしたのである。

これには、被災者への補償、各種の損害賠償、銀座には企業も多いので利益損失等々、さらには自衛隊が消費した弾薬等の費用、人件費、燃料代なども当然のことながら含まれている。そんなことを、菅原が額に汗をしながら一生懸命説明（言わなくても良い、余計なことは当然伏せて）すると、彼のつたない語学力でも、どうにか議員達に伝わったようであった。

要はスワニ金貨で五億枚分相当の賠償が請求されたわけだが、金銭の価値が違うから『応交渉』という一点で、どうにか理解へと行き着くことが出来たのである。

責任者の処罰にしても、誰をどうしろという話はこれからだ。通商条約の締結も、内容はこれから決めることとなる。

つまり日本からの要求は……。

帝国は「悪いことしました、ごめんなさい」と謝る。

そして誰かが罰を受ける。

帝国は賠償金を支払う。出来るだけ多く。

一度で払いきれないに決まっているから分割でも、価値がある物でも代替可。できれば地下資源の採掘権がいいなぁ。

門の周りはニホンのもの。帝国軍は二度と近付かないように。

貿易しましょう。というか、貿易で儲けさせろ。

……というものなのだ。

これなら、程度はともかくとして、内容は負けた側に突きつけられるものとしては穏当なものと言える。しかも、属国として、永遠に貢ぎ物を支払い続けろとか、その手のものがない。

最悪、負けた上で全土を占領されれば、その国の君主や貴族の全ては流罪、あるいは死刑にされるのは当たり前だし、全土を併合された上で、領民のことごとくが奴隷化、さらに街や都市は略奪に遭うという可能性もあるのだ（実際、帝国はこれらを当たり前にやって来た）。だから今回の要求は、賠償金の額さえ値切ることができるなら、ある意味とても軽いのである。

これらを理解した議員達は、脅かさないでくれと喘いだ。肩で息をして、ゼイゼイとまるで全力疾走を強いられたような有様だった。

「は、話し合おう」

「そ、そうじゃな。きちんと交渉を始めなければならん。特に賠償額については、双方の実情を照らし合わせて、双方が納得いくように」

最初から菅原がそれを目論んでいたかどうかは別として、双方の使節による講和の準備交渉会談が非常にスムーズにセッティングされていった。日時は、参加者は……などなど瞬く間に決っていった。

その間、ピニャは大地に倒れていた。

よっぽどショックが大きかったようで、ピクピクと小刻みに震えているほどだ。伊丹が落ちていた小枝の先っぽでツンツンと突いてみたら、ビクッと大きく痙攣した。

「あ～、ピニャ殿下。大丈夫ですか？」

今度は、ピニャの頬をひたひたと叩いてみる。すると、カッと目を見開いたピニャはすがるように伊丹の手を握り込んだ。

「い、イタミ殿……妾は、もう駄目かも知れぬ。故にここで言っておきたい。あの時は本当に済まなかった。許してたもれ、ゆるしてたもれ」

あの時？　……ああ、あの時のことね。ボーゼスさん達にイビられた時のことか……と思いつつ

伊丹はピニャの上体を、よっこらせと抱え起こした。
「別にいいですって。それに人間こんなことじゃ死にませんよ」
「いや、もう駄目だ。気が遠くなってきた……お願いだ。ゆるしてたもれ、ゆるして」
「分かりました。許します。許しますから、気をしっかり持って下さいって……わぁぁっ！」
ピニャは、伊丹にしがみついていた。
そして、「ホントか？　許してくれるのか……ありがたい、本当にありがたい」と号泣するのであった。

06

こうして、日本の外務担当者と帝国元老院議員との間で、講和の準備交渉の開催が同意された。これによってピニャの請け負った任もその山を越えて一息つけることとなる。あくまでも彼女は仲介者なのだから、ここから先は日本当局者と帝国側元老院議員の仕事なのだ。
ピニャの役割は、今後日本当局者の往来を保証したり、便宜を図ったりといったことへと移行して、少しずつ重要性……つまり責任が低下していくことになる。これからは代官に任せっぱなしのフォルマル伯爵家の後見事務や騎士団の管理運営、そして趣味の芸術に多くの時間を割くことが出

来るようになるだろう。

もちろん、帝室の一員として今後の交渉がどのように進展するかは心配している。だが、応対するのは海千山千の議員達。彼らも現実を認識した以上、自分などよりも遙かに上手くやってくれるだろう。それぐらいは期待しても許されるのではないかと思う。

さらに、前にボーゼスのやらかした失敗についても、伊丹から宥恕(ゆうじょ)の言葉をもらって、心のわだかまりというか罪業感というか、後からあのことを言われたらどうしようという不安と恐怖の混ざった後ろめたい感じがすっかりとり払われた。おかげですっきりさっぱり、青天白日の気分になることが出来た。

だもんだから、涙をはらったピニャの顔は、それはもうとても明るく朗らかにして美しいものとなった。直前に、どん底まで突き落とされて地の底にめり込んだ分、舞い上る急上昇は、ＰＡＣ３のミサイル並み。女であることを前面に押し出してくる相手が苦手な伊丹も、このような無防備で邪念のない笑顔には、思わず胸が高鳴ってしまう。

まして、ギュと抱擁されて彼女の双丘の感触とか、ぬくもりとか、花の香りとか、いろいろと五感に訴えてくる刺激が伴っていれば、好感度1だったとしても、８（10点満点中）ぐらいに急上昇しても不思議はないわけで、年甲斐もなく伊丹は顔を紅くしてしまったのである。

「あの、その、殿下。ちょっとくっつき過ぎです。人目とかありますし」

「この手が嬉しい」「この身が嬉しい」という状態では、こんな抗議の言葉も言い訳程度になり下

がる。要するに、後で誰かから揶揄されたり詰問された時のためのアリバイ工作でしかないのだ。

もちろん今のピニャには「それが、どうかしたか？」である。うれしさの余り舞い上がっている彼女は、自分が今、何をしているのか分かっていない。分かっていても気にならない。だって、心底嬉しいのだから。

ま、役得かなぁ……などと伊丹は思う。けれど後でしっぺ返しの有りそうな気配に諸手を上げて喜べない。それが正直な心境であった。そんな時に、伊丹の耳に装着されていたイヤホンは、空電音と共にこんな音声を放った。

『アベンジャー、こちらアーチャー。送れ』

舞い上がっていた心拍数が急激に低下して、ほのかに温まっていた血液と脳みそも氷水を流されたがごとく、たちまち冷えた。プレストークスイッチを押し込んで、囁くように応えた。

「こちらアベンジャー。どうした？」

『楽しんでいるところすまん。招待客とは思えない、騎馬の小集団がＳＳＬ（監視警戒線）を越える。真っ直ぐそっちに向かう模様』

「暫し待て」

伊丹はそう告げておいて、懐中のピニャへと視線を降ろした。

「殿下。ここに騎馬の一隊が近付いてきているという報告が入りました。何かお心当たりは？」

「はて、聞いておらぬが……それが、どうしたのか？」

東洋の古い医学書には、感情が一定の線を越えると心身に悪い影響を及ぼすと書いてあるそうである。怒れば、気が頭に向かって突き上がって（怒りの余り顔が真っ赤になるのは分かりやすい反応である）、血管がプチッと行くおそれがあるし、恐怖が過ぎると気は下方向に突き下がって、大小便を漏らさないように頑張っている括約筋をこじ開けてしまう。しかも腰が抜けて立てなくなったりする。同様に、喜びの感情も過度になると、いろいろと「緩む」のだそうである。まぁ、今のピニャは緩むというよりはタレているという感じであるが、そういう意味では精神的に緩みきってて、反応が悪くなって、さっぱりと役立たずに成り果てていた。

人には、ストレスがかかっていた方が思考が冴えるタイプがいる。ピニャもそれに属するのかも知れない。仕方なく伊丹は近接中の騎馬の小集団が、盗賊とか無頼漢の類、あるいは帝国の軍関係といった不測の事態を想定した対応を考えることにした。

影で警護をしてくれている『S（特殊作戦群）』に処理を依頼するのが手っ取り早いが、相手が誰だか分からない段階では避けたい対応だ。彼らが動くということは闇に葬ることを意味するのだから。後々になって、ピニャに迷惑が及ぶ場合も考えられる。

盗賊や無頼漢の類だったら、それとはっきり分かってから排除すればいいのだ。問題は、帝国の政府あるいは軍関係であった場合だ。その際は、よっぽどの危険がなければ、排除のような強硬手段は使いたくない。それくらいなら、見られたら不味いもの、まだ、知られない方が良いとされるものを隠す方がよい。

伊丹の基本的態度は『逃げ』だから、判断は早く悩まない。

「富田！　倉田！　勝本！　高機動車で議員の方々を、ここから連れだしてくれ。菅原さん、なんだか知らないが、騎馬の小集団が近接中。会談は中止して下さい。ＶＩＰをここから離脱させます。でも、園遊会は止める必要はないです。ご家族は、ここにいても問題ないでしょう」

銃や迫撃砲の後始末をしていた自衛官達も、矢継ぎ早な伊丹の指示に弾かれたように走り出した。菅原も議員達に駆け寄って、身振り手振りで懸命に事態の急を告げた。

たちまち、迫撃砲も銃も弾薬も片付けられる。

ピニャも、伊丹に両の頬を「しっかりしてください。心を引き締めて」とピタピタと叩かれて、ようやく精神の立て直しを始めた。

菅原から状況説明を受けた議員達は、日本との講和交渉がまだおおっぴらに出来ないことはよく認識していた。主戦論が主流の現状で自分達が講和の下準備に手をつけているなどと知られたら、過激派に刺されかねない。それに、内務相が何やらキナ臭い動きをしているという噂も耳に入っている。

「議員達が集まっている＝講和交渉の準備」と、すぐさま結論付ける発想があるとは思えないが、噂や様々な思惑の断片が、変な形で結びついて、真実を浮き彫りにしてしまうことが無いとも言えないのが、現実なのである。

従って、急遽この場を離れることには賛成であった。万が一、近付いて来るのが盗賊や暴漢の類

であっても家族を残していくことについては心配していない。日本人の武器の恐ろしさは、今さっき認識したばかりなのだから。そして家族達だけが園遊会で楽しんでいるだけなら、後ろ指さされる理由は一切ない。

交渉を行う、話し合いをする、という意味ではすでに合意は得られたのだから細かいことは後で書簡などでやりとりしてもよいのである。そういうことで、議員達は身ひとつで走り出そうとした。

ちょうどそこに、三両の高機動車が砂塵を巻き上げながら急停車する。これらの車両は第一偵察隊が置いていったものだ。計六名の自衛官達が、彼らの前に降り立った。

銃や迫撃砲に驚いた議員達は、今度は馬無しで、しかもとんでもない高速で走る荷車の登場に再度、驚愕することとなる。これによって、遠いと思っていたアルヌスの丘と帝都との距離が、日本にとっては指呼の間でしかないことを知り、皇帝が頼りとしている距離の防壁すら役立たずであるという事実を突きつけられることになるのである。

「これに乗せてくれるのか？」

「皆様を帝都の城門近くまでお送りいたします。人気の少ない、南東門で申し訳有りませんが、スリルあるドライブをお楽しみいただけると思いますよ」

南東門は森に面した小さな戸口程度の出入り口で、道も薄暗くて、人通りも滅多にないところとして知られていた。東と南にそびえる城壁によって陽当たりも悪く、水はけなどの生活環境も劣悪だった。必然的に住む人間も下層階級に属する者ばかりで貧民街が形成されている。それだけに、

治安も悪く『悪所』とされている。少なくとも、まっとうな人間がうろつくところではない。

しかし、だからこそ、目立つことなく帝都へと出入りすることも可能だった。

実は、自衛官達も帝都への出入りには南東門を使っている。既に、そのあたりの地理も把握済みだし、門番等も、金銭ならびに日本の品物等でちゃんと買収済みである。悪所に蔓延る無法者集団にも、挨拶を済ませて手懐けてあったりするのだ。

倉田の案内で、二十余の議員達は次々と高機動車に分乗した。

そして、高機動車がエンジンの咆哮とともに駆け出すと、皆、ジェットコースターに初めて乗ったお年寄りのような声を上げたのだった。

ゾルザルが、取り巻き連中と共に、帝都郊外の森林公園にたどり着くのと、高機動車が走り去るのは、ほぼ同じタイミングだった。間一髪と言っても良かった。ちょっと耳を澄ませば、森へと消えていくエンジン音が聞こえたはずである。（何の音か、判別することはできないとしても、何かが遠ざかっていくのは分かったはずである）

ところが、ゾルザルが見た風景は、料理や果汁飲料がふんだんに振る舞われ、様々な遊具で楽しむ子ども達とその親、あるいは着飾ったドレス等の華を競うご婦人達。耳に入るのは軽快な音楽であって、マルクス伯から陰謀めいた会合が開かれていると聞かされていた分、その陽気な様には毒気を抜かれ、遠ざかっていく聞き慣れない音などに気を止めていられなかったのである。

「なんだ、これは？」

招待を受けた身ではないが、制止する者もいないのでゾルザルは進んだ。皆も馬で乗り付けてきたゾルザル達に、怪訝そうな表情と視線を向ける。

ここにいる女性は、よくよく見れば貴族のご婦人あるいは令嬢だった。中には宮廷などで見知った顔もあった。そんな女性達は突然の闖入者に驚きこそしたが、それが皇帝の第一皇子であると知れば、「皇子様もご招待されていたのね」と勘違いして、みんな恭しくお辞儀で迎えた。何しろホストの一人が皇女なのだから、その兄の皇子が招かれたとしても変とはいえない。それだけ格式の高い催しだと認識するだけである。

ゾルザルも、その取り巻き連中も粗野ではあるが乱暴に振る舞ってはいけない相手と場はわきまえている。陰謀と関わりのない貴族やその家族というのは、当然のことながら礼節をもって相対すべき存在であり、まして、足下を小さな子ども達が走り回っているとなれば、「どうしてくれようか」と猛っていた気持ちをまずは落ち着けて、馬から降り、手近な者に声をかけて事情の把握に努めるしかないのだ。

「ここでは、今何をしているのだ？」

「ピニャ殿下と、スガワラ閣下共催の園遊会でございます。気取った集まりではなく、みなご一族や子ども達も招いて、垣根を取り払った楽しい一時を送りましょうという趣向でございます。殿下

もお呼ばれで参られたのでは？」

答えたのは老メイド長だった。歳は取っているが、凛と背筋が伸びて受け答えも堂に入ったもの。また、異母妹ピニャの名が出てきたことに気を取られて、「スガワラ」という聞き覚えのない名前もそのままに聞き流してしまった。

メイド達が、ゾルザルや取り巻き達にも酒や各種の料理を振る舞った。トレイに盛りつけられた各種の料理……例えばゼラチン質を含んだ肉汁を冷やして出来た塊（各種の食材が混ざり込んでいる）を切り分けた「煮凝り」という料理や、マ・ヌガ肉、果物、小麦を延ばして焼いた薄いパンで、各種の野菜や肉を包んだもの等が、それこそ山のように彼らの前に差し出される。

あっけに取られたゾルザル達はそれをそのまま受け取って、口にしてみて、皆顔色を変えた。

「美味い……」

煮凝りの弾力が有りつつも、口中でとろけていく食感、そしてじわっと広がる旨みは快感とも言えた。偉大なる作曲家は飲み物の味を一千のキスに例えたというが、この舌触りは、恋人と舌をからめる感覚にも似ていた。サイズ、弾力、味付けともに料理人古田が工夫を凝らした、渾身の一品である。

瞬く間に貰った料理を平らげて、取り巻き連中はそれぞれに気に入った料理のお代わりを貰いに散ってしまった。

「う～む」

一方、ゾルザルは不可解な有様に首を傾げていた。マルクス伯が嘘を言ったとも思えない。そんな人を騙すようなことをしても内務相には何の利益にも成らないはずだからだ。自分をこの催しに参加させるために、あえて嘘を言ったということもあり得るが、それならばもっと別の言い様も有ろうというものだ。

少なくとも、このお祭りめいた場では、マルクスの言ったような陰謀が行われているとも思えない。何かの手違い、あるいは場所を間違ったかと思いながら、怪しいものを探すために園遊会を見て歩いた。

もちろん、時折見かける珍しい料理や飲み物が目に入れば手を出してみたりする。

「……う」

どれもこれも帝室の料理人が作る美食に馴れたゾルザルをして、唸らせる味であった。スープもただのごった煮のようだが、非常に味が深い。黄金のごとく透き通った琥珀色をして、芳醇な香りが沸き立つようだ。

マ・ヌガ肉も、かぶりついた時の食感が違った。プリプリした歯ごたえが堪らない。それも、ただ焼いただけに見えながら火の通し方が絶妙なのだ。さらに塩や独特の風味（香辛料）の使い方も見事としか言いようがなく、これまで食べてきたマ・ヌガ肉と比較しようとすること自体おこがましくも思えてくる。

ゾルザルは肉にガツガツとかぶりつく。その、じわっと口中に流れ込む脂と肉汁の旨みを堪能し

て、お代わりへと手を伸ばす。瞬く間に、二つ三つと平らげてしまった。

「兄様！」

自分を兄様と呼ばう女声は、この場においてはピニャしかない。ゾルザルは食い終えた肉の骨をポイと道ばたに捨てると、声の主に顔を向けた。

見れば足早にピニャがやってくる。ゾルザルには彼女が騎士団ごっこの従者達を連れていないことに「おや？」と思いつつも、この催しがピニャ主宰のものであるなら、マルクス伯の注進もやはり誤りだったと結論付けた。

ゾルザルの知るピニャは、騎士団ごっこに興じるだけあって軍事主義者でありバリバリの主戦論者でもあったからだ。その彼女が講和交渉の仲介役になっているなど、思いもよらないことである。

「兄様、今日は何のご用でありましょう？」

ゾルザルは「なんだ、来てはいけなかったような口振りだな」と、ピニャに応えながらも、手は四つ目のマ・ヌガ肉へと伸ばしている。

ピニャとして見れば、もちろん来ないで欲しかったのだが、社交辞令としても色々な立場的にも、そうはっきりと口にするわけにもいかないから、「何をおっしゃいますか。兄様を拒む門などどこにもございません。ですが、兄様は以前からこのような催しには無関心でいらっしゃられたので……あ、これを使うと美味いですよ」と、これまた古田手製のマスタードをゾルザルの手にしたマ・ヌガ肉にぬりつつ、言い訳した。

ゾルザルは、そのマスタードというソースの色合いと、鼻を突くような香りに少しばかり「うっ」と躊躇いつつも、かぶりついた時の辛みを伴った味わいにさらに目を白黒させた。
「ピニャ、ここで出している料理を作ったのは、誰だ？　どこで見つけてきた」
五つ目のマ・ヌガ肉に手を伸ばしたゾルザルは、今度は自ら肉が真っ黄色になるほどのマスタードをかけた。どうやら気に入ったらしい。
ピニャも、目の前で真っ黄色になっていく肉の塊に、若干退き気味になりつつも「ひょんなことで縁がありまして……」とぼやかして応えた。直接料理をしたのはこちら側の料理人だが、香辛料やら調味料の手配や調理の指揮采配をしたのは自衛隊の古田だ。ゾルザルなどに縁が出来て良い立場ではないのである。
「今度、宮廷に招いて晩餐を作らせたいな。皇帝陛下も喜ばれるだろう」
「兄様。いくら兄様の希望とはいえ、そういうわけにも参りますまい」
宮廷では、料理人と言えどもガチガチな序列の中に置かれている。どこの誰か分からない料理人を連れてきて食事を作らせるというのは無理な話なのである。だが我が儘勝手や傍若無人な振る舞いに馴れているゾルザルは、ちょっと肩を竦めただけで裏技を編み出した。
「なぁに、それならば宮中で料理をさせなければよいのだろう？　どこぞの貴族の家を借りればよい。そこへ行幸という形を取れば、晩餐の問題は解決だな」
ピニャは一瞬、これを機会に兄に日本の真実を伝えることは出来ないかと考えた。だが、すぐに

無理だと結論付ける。彼女の長兄は、感情の人であり、理性を超越したところで行動を決めているので冷静な判断というものが期待出来ないからである。

そう。彼女の長兄は、ある意味で『自己を満たすファンタジーな認識世界』で生きているのだ。ありとあらゆる存在が自己を祝福し、エゴを満たすもので世界は充ち満ちていると感じている。それを否定するものは、例え真実でも敵……いや真実だからこそ敵だった。と同時に、自己を満たすものなら嘘でも信じて主張しちゃう人なのだ。そして彼の信じる最大のファンタジーが帝国は最強にして至高の存在というものであった。

そんな人に、門の向こうは帝国を遙かに超えた文明国であり、我が国は大敗を喫していて、絶対に勝てないと説明しても理解しないだろう。というより、真実を知らせようとすると敵だと見なされかねない。

だからピニャは、ゾルザルに真実を伝えることは早々に諦めることにした。

問題は、どうして兄がここに来たのかである。ただの偶然ならいいのだが。そんな思いを込めて、尋ねてみると「マルクス伯から、ここに行ってみろと言われた」ということであった。

「マルクス伯が、そのように言っていたのですか？」

「いや、そのような意味合いのことを言っていたのだ」

「では、なんと言ったのです？」

しつっこく詰め寄るピニャに対して、ゾルザルは舌打ちして「ここで陰謀の集まりが開かれてい

るとか、そんなことだ。間違いだ、間違い。気にするな！」と振り払うように言った。
そして、取り巻きとともに、さらなる料理の攻略へと突進していく。アイスクリームにいたっては子ども達を押し退けていたほどである。
それを見送ったピニャは、「マルクス伯か……」と、その名を反芻するのだった。

さんざん喰いあさった上に、さらに両手で抱えるように料理をかっさらっていったゾルザル達。この手の園遊会の料理は、普通余るように用意するものだが、予期せぬ闖入者のおかげで、料理は少しばかり足りないという事態に陥った。アイスクリームに至っては、バケツごと（危うくメイドさんまで連れ去られるところであった）持ち去られ、皇帝の第一皇子は少年少女達から大いなる不評を買っていた。
お陰で食べ損なったのは、ピニャや菅原、伊丹達自衛官と、メイドさん達である。ちゃっかりと隙を見てつまみ食いしていた一部のメイドさんや、味見と称して料理を口にしていた料理人達は良いとしても、楽士達や伊丹達は空腹なのもあっていささかご機嫌斜めである。
それでも彼らは笑顔を作って、貴族とそのご一族が手土産を貰ってほくほくの笑顔で帰って行くのを見送った。実にけなげである。さらにそのまま後片付けの作業にとりかかった。
ピニャと菅原は、一転して寂しくなった森林公園の一隅で、働いている伊丹達を後目に、老メイド長の入れてくれた香茶を傾けつつ、古田がわずかに残った魚の骨を揚げて拵（こしら）えた菓子（塩胡椒を

効かせると結構食えることにピニャは大いに驚いていた）を摘みながらゾルザルがここに突然やって来た意味について話し合っていた。

「これは、マルクス伯からの警告と考えるのが妥当であろう」

「威力偵察とは考えられませんか？　何か行われてるみたいだから、踏み込ませて確かめるという感じで」

「それもあり得るが、威力偵察に兄様を使うというのは解せない。兄様は、すぐに血が頭に上る性分でな……取り巻きも似たような者だから、偵察などという高尚なことは無理だ」

「冷えた頭の持ち主はあの中にいませんでしたか。ならば威力偵察には向きませんね。とにかく引っかき回されましたから、警告と考えるのが妥当でしょう。でも、お兄様の人柄から考えるなら、殿下ご自身が言われたように、攻撃のつもりだったと考えてもよいかも知れませんね」

「確かに、今日の集まりが元老院議員達が陰鬱な表情でひそひそと話し合うというものだったら、兄様は嬉々として蹴散らして、ひっとらえた上で帝都中に触れて回ったろう……本来、議員達が会合して話し合うことは罪ではない。だから普通ならそれを告発することは出来ないのだ。だが兄様ならば、そんなこと考えもしないでやらかしてしまったと思う。それを狙ってあえて兄様を使ったか」

法的には告発できないが、それとは関係なくゾルザルは議員達を公開の場へと引きずり出し、売国奴と罵り、その行為を陰謀と称して声高らかに弾劾しただろう。

もちろん、議員達も反論するだろう。ゾルザルの行為も反論の余地が多すぎる振る舞いだ。手続に寄らない議員の拘束と告発。何よりも議員達が国の行く末を案じて議論することを売国と呼んで否定してしまっては元老院の機能を果たせなくなってしまう。水面下で敵国の使節と接触して交渉を持つことだって、外交上は至極当たり前に行われることであり、それを否定したら戦争はどちらかが滅びるまで永遠に終わらないことになるのだ。

が、こうなると手続の正当性よりも、どちらの言葉が聴衆の感情を刺激するかということになる。物事は常に『言いよう』なのだ。売国行為、敗北主義……ゾルザルによる煽動を受けて、主戦論者達の感情が沸騰することもあり得る。

その勢いに負けて、講和論者を含めた元老院派の意見は封殺されれば、皇帝派・主戦論者はより勢いを増すことになったはず。

「なるほど、マルクス伯はそれを狙ったということか」

だが、それだけでは弱すぎた。

この手の煽動による熱狂は、強い酒を飲み過ぎた時にも似て、翌朝、二日酔いと共に目を醒ましてみれば、酔っていた時の醜態に気恥ずかしくなるだけだからだ。流石に酒のように翌朝とはいかないが、せいぜい数日続けばいいところだ。

興奮が醒めれば講和派の元老院議員達は、法に反することは何もしていないのだから処罰を求める声も小さくなる。反動としてゾルザルを非難する声が大きくなる。ただでさえ日頃の振る舞いに、

眉を顰めている者が多いのだ。そうなれば、ゾルザルを排斥して、次兄のディアボを次期皇帝にと推す声が強くなることもあり得る。しかしゾルザル排斥はかまわないとしても、ディアボは元老院派に属しているから、マルクス伯にとって面白い事態ではないはず。

ピニャは香草の鎮静作用に頼りながら、冷静に思考の糸を紡ごうとしていた。一本の精緻な糸を、切れないように丁寧に紡いで、それをさらに考察という名の錦にと織り上げていく作業は、非常に疲れるものであった。

「いずれにせよ、我らの動きはマルクス伯に察知されているとみなさなければならぬな。今回は彼の者の目論見を躱すことが出来たが、どんな形で巻き返して来るか、だ」

「和平への動きを頓挫させるとすればいろいろと考えられますが、この場合に最よく用いられる手段は、一般だと要人暗殺ですね。体制側のとる手法としては、反対意見をもつ要人、知識人、マスコミ関係者を一斉に捕らえるなどでしょうか？　あと、世論に対しては、軍事活動を活発化させて戦果発表で戦意を煽るという方法もあります」

菅原が提示した手法の中で、ピニャの思考の琴線に触れるものがあった。

「要人を一斉に捕らえる？」（ちなみにマスコミという単語は理解できないから聞き流した）

国家反逆罪という罪名が頭に浮かぶ。「まさか……」という思いと同時に、不安が立ち上る。帝国の歴史書を開くとよく出てくる話だったからだ。

「それぞれの議員に、身辺に心を配るように伝えなくてはならぬな」

もし、マルクス伯が本気で『国家反逆罪』の適用を狙っているなら身辺に気を付ける程度では役に立たないかも知れない。だが逮捕の後、告発して、処罰するという過程においては、どんな形にしても証拠なり証人が必要となって来るから、言動を慎んで付け入る隙を見せないという配慮はそれなりに意味を持つのである。

そこまで考えて、はたと、ゾルザルの件と、国家反逆罪の二つが繋がっている可能性に気付いた。

「今回の兄様による襲撃は、マルクス伯による粛清の序章と位置付けられていたのかも知れぬ」

主戦論者の感情が沸騰しているうちに、矢継ぎ早に国家反逆罪で元老院派の主立った者や講和論者を捕らえて、一気に処断してしまう。熱狂が醒めた時には、既に後の祭り。

「殿下は、マルクス伯が国家反逆罪という宝刀を抜いて一気に粛清を強行してくると思いますか？」

菅原の問いに、ピニャは肩を竦めた。

「無理だ。陪審員は元老院議員が担当する。いかな皇帝派とはいえ、頭が冷えている状態では、国家反逆罪での有罪を認める者はいないだろう。偽の証拠など仕立て上げても、長期にわたってそれを検分し、論証していく作業に耐えることは難しいだろう。マルクス伯の陰謀がうまくいくには議員達が冷静さを欠いている時期を選んで、一気にことを決してしまうことが必要なのだ」

ピニャは忌々しそうに髪を掻きむしりながら吐き捨てた。

「妾は仲介役に過ぎぬというのに……なんでこんなことまで」

様々な負い目から解放されたことで、これまで心の底に押し留めていた不満が急に湧き出てきた。事態の面倒くささ、また皇帝派の頑迷さ、マルクス伯の陰湿な手口、そしてそれに容易に乗せられるゾルザルの馬鹿さ加減等々と、嫌になる要素てんこ盛りである。

だが、事は国の行く末にかかわることだ。

ピニャはこの帝国の、しかも帝室の一員である。だから自らには、それに相応しい責任があると思っていた。事態を把握できる立場にいて、何もしないのは罪であると考えていた。

折角、ストレスから解放されたと思ったら、またストレスを抱える羽目になるピニャである。だが、その分、彼女の頭脳は冴え始めた。

「とにかく、今日の所は大丈夫だろう。だが、マルクス伯の狙いが国家反逆罪を適用しての粛清ならば、時期をさほどおかずに二の矢、三の矢を放ってくるはずだ。妾達は、それをかわしつつ、講和交渉の準備を進めなくてはならぬ」

ピニャは、菅原に告げた。

「至急、カーゼル侯爵と会談を持つ必要があるだろう。早急に、元老院より講和交渉開始の承認決議を得て伯爵の目論見を封じなければならぬ。だが、これは仲介役たる妾や、敵国の使節たるスガワラ殿の役割ではないな……」

「では、誰に？」

「うむ。キケロ卿がいいだろう」

ピニャはそう言うと曲線の艶めかしい腰を上げた。

「ゾルザルは、わざわざ出かけて餌をあさってきただけか。あやつらしい」

薄暗い謁見の間にて、玉座の皇帝は平伏するように頭を下げているマルクス伯に視線を向けると、ため息を一つついた。

「まぁ良い。機会はまだある。焦る必要はない」

「ですが、元老院で講和交渉の開始が承認されますと、いささかやりにくい事態となりますが……」

「誤解するなよマルクス伯。余も、講和交渉そのものを否定するつもりはない。話し合うならいくらでも話し合えばよい。だが、一ビタの金も、一ロムロの土地も譲ってはならぬ」

「しかし、現状ではいささか難しいことで」

「なぁに、結論を望むから譲らねばならなくなるのだ。敵が交渉を望むなら、永遠に交渉していれば良い。交渉の準備のため交渉、交渉をいつ開くかを決めるための会議、条件を決めるための会議。物事というのは、きちんと詰めていこうとすればするほど、話が進まなくなるものだ。いずれ敵の方から交渉を打ち切って来よう」

「陛下の遠謀には、感服つかまつります」

「伯にも、それなりの考えが有ろう。好きにやってみるがよい。ただ、いずれにせよ軍事的な勝利が必要となろう。負けは許されまいぞ」

「はい。一命を懸けましても」
マルクスは再度頭を下げた。

＊　＊

永田町　首相官邸

「首相。特地へ派遣している菅原からの報告書です」
外務省から派遣されている、事務秘書官が首相の下に書類を届けた。
本位の後を継ぐ形で内閣総理大臣となった森田は、メガネのずれを直すと書類を受け取って、素早く斜め読みする。
「なるほど。講和会談の根回しが終わりましたか。大変に結構なことです。早速、白百合玲子補佐官に特地入りして貰いましょう。事務方も、外務省では選抜が済んでいるのでしょう？」
「はい。ただ、講和に反対する勢力に動きを察知されたという内容も、その報告には含まれています。安全面で心配がありますが」
「ほう？」
森田は書類を数ページ捲った。パラパラと数枚捲って……まるで他人事のように言う。

「大丈夫でしょう。なんとかなりますよ」
「いや。そこには、帝国側の軍事活動が活発化するおそれについての提言も含まれていますが」
「その為の自衛隊でしょ」
「確かにそうなんですが」
外務省派遣の事務秘書官は、歯切れの悪い、なんだか大丈夫かなという思いで、首相の執務室を後にした。この首相の下で仕事を始めてまだ数ヶ月だが、時折感じる成り行き任せの思考というか、他人事のような言動に、常に戸惑うのである。その裏側に深慮遠謀があることを期待するのだが、外見的な言動はその片鱗を少しも感じさせてくれないのだ。例えばこうだ。
「問題は中国、ロシア、アメリカですね……」
「ＥＵもお忘れ無く」
「特地問題は、サミットの議題に取り上げられることは間違いないね」
「先日開かれた国際会議でも、特地についての情報開示を迫られました」
「いっそのこと、開示しちゃいますかね？」
「はい？　本気ですか？」
どこに何があって、どんな地下資源があって……それを知ったら、ロシアやアメリカ、中国、ＥＵ各国の活動は、今よりもなお活発化するだろう。
地球一個分に等しい資源がほぼ手付かず。それはもう、無尽蔵と呼んでも良いほどだ。ぶんどり

合戦が始まらないのも、特地への唯一の出入り口たる『門』を日本が抑えているからに他ならない。そして、諸外国からの外交圧力を躱していられるのも、『門』を日本が抑えて、中身を公開しないからである。日本が本格的に盗りに行っていないという事実もそんな状況を支えていた。どちらかというと抑制的とも言える日本の態度が、周辺各国のアプローチを落ち着かせているのだ。

そこへ、『門』の向こうにやっぱり良い物がいっぱいあると教えたら、門戸を開けろの大合唱が始まるに決まっている。

そして、その先に待っているのは圧力であり、暴力なのだ。忘れてはいけないのは常に現実が先にあり、理屈は後からついて来るということだ。現実を唯一最終的に動かすことが出来るのは暴力である。そして強大な暴力を前に、口先だけの平和はまったく無力となる。

もし迂闊なことをすれば、敵はより強大な暴力を結集して『門』を横取りに来る。そうなってしまえば、正論とか国際法規などは、役に立ってくれない。事実、イスラエルは国連決議の認めた領土を越えた範囲を占領してパレスチナ人弾圧を続けているし、韓国はサンフランシスコ講和条約が認めた日本の領土たる竹島を未だに不法に占拠している。これを解決しようとするなら、暴力装置の裏付けのある強制力が必要なのだ。話し合いなどといって互いの都合を主張し合うだけでは物事の解決には結びつかないのである。

現在、日本と諸外国の外交を戯曲化すると、こんな感じになっている。

外国（どこでも良い）「やい、門を開けろ。中を見せろ。中身を寄こせ」

日本「やだよ。この門は俺の所にあるんだから、俺のだ。門の中身に酷い目にあったのも俺たちなんだぞ」
外国「うるさい、良い物を独り占めする奴は許さない」
日本「かってにほざいてろ。それに独り占めするつもりはないって言ってるでしょ」
外国「よし、そっちがそのつもりなら、力ずくで盗ってやる」
日本「そっちがそのつもりなら、こっちは、味方してくれる奴と門の中身を分け合うことにする……敵には当然分けてやらない。味方してくれる人いる～？」
アメリカ「同盟条約有るし」と、手を挙げる。（分け前は、当然期待できるよな）
EUも、それを見て、なんとなく手を半分挙げる。
それを見て、誰も彼もが「俺も味方するから、中身を見せてよ、分けてよ～」と言い出して、結局敵が居なくなる。
日本「だから、黙って見ててよ。まだ中身のことよく分かってないんだから……」
その繰り返し……。最初に戻る。
外務省の役割は、「あいつ、やっぱり独り占めするつもりだから、みんなでやっつけて、『門』はみんなで管理しよう」と、国際社会の誰かが言い出さないように、そしてそれに同意しないよう工作することなのである。
そのためには、『門』の中身についての情報を抑えておくことは、絶対的に必要なことであった。

管理しながら、現在はこうなってますよ、このくらい分かっています……と、味方してくれることを約束する国に小出しに伝えて、分け前を期待させ、おとなしくして貰うのである。

アメリカには特地にある帝国という国と、その周辺各国の状態を伝えて、軍事的な方法で完全支配を試みるより、帝国による平和を維持させつつ、通商条約によって、その資源や利益を得られるようにするという方針を提案して、既に同意を得ていた。

アメリカは、日本と帝国の間に通商条約が成立すれば、日本に支店を置いている企業は国籍を問わずごく普通に特地での経済活動に参入することが出来るから、無理に軍事介入する必要はないと考えたようである。イラクやアフガニスタンで手がいっぱいのディレル米大統領は、特地の問題でも慎重になりつつあったのだ。

実は彼の手元には、狭い『門』と、普段でも交通渋滞気味の銀座、東京とその周辺の交通状態から見て、大規模な軍事力を『門』の向こうにおいて展開することは不可能であるという予測が国防省から上がってきていた。

『門』は中途半端に小さい。戦闘機が一機通れる程度である。大型トラックなら三〜四台ならんで何とか通れるかどうかだろう。

米軍が消費する武器、弾薬、食糧、そして燃料は全てにおいて大量だ。大規模に軍事活動を起こすなら、東京の道路を完全に封鎖して専用道路化する必要がある。それでも『門』しか通り道がないのだから、家庭用の蛇口で五十メートルプールに水を満たそうとするようなものなのだ。手間暇

や時間がかかりすぎる。そしてコストも。

しかも、大量輸送力の要である輸送機は入らない（完全に分解して現地で組み立てるなら可能かも知れないが……）。精々戦闘車両とヘリがやっとだ。

その意味では、自衛隊が『門』の周辺に留まってあまり広範囲に活動しないというのも、正解なのだということが知らされたのである。じっくりと物資を蓄えて、要となる場所に一撃を加えて抑える。それが最良の選択なのだ。

この問題は、特地からこちら側に資源や物を持って来る際にも当てはまるので、日本国政府としても頭を悩ましているところである。なにしろ銀座の一等地に、道路を広げる余裕など皆無なのだから。

地下や高架の道路を作ったらどうかという話も出ているが、そうすると敷いた道路をどこまで延ばすかで資源関連企業の綱引き等各種の問題が噴出するので方針が立たないでいる。

そういうわけで、「いっそのこと開示しちゃおうか」という森田の言葉は、事務秘書官としては正気の沙汰ではない。思わず精神的な失調を疑うような視線で首相の顔を見てしまった。

流石に不味いと思ったのか、森田は言葉を翻した。

「本気ではありません。そういう考えがあるというだけです。わたしは自分を客観的に見れていますから心配要りません」

なんだか後先考えず、めんどくさいから開示しちゃえと言っているような気がする、事務秘書官

であった。

07

帝都で活動を開始した、菅原をはじめとする文民を支援するため、陸上自衛隊特地派遣部隊は帝都内に数ケ所の活動拠点を確保した。例えばアルヌス協同生活組合の帝都支店の倉庫、あるいは、街の居酒屋の二階など、人の出入りがあっても怪しまれない場所である。その中でも異彩を放っているのが、帝都『南東門』界隈にある貧民街の一軒家であった。

その地区は帝都でも様々な種族、民族、獣人が混在して住んでいる街で善良な者は決して近付こうとしない。

数歩進めばスリが懐に手を突っ込んで来て、暗い路地に入ったらまず強盗から声がかかる。金目の物を持っていると見られれば、後からゾロゾロとおっかない連中が付いてくる。例えるなら、今はなき香港の九龍城みたいなところであった。

軒を連ねる店にしても、いかがわしく無いものの方が少ない。

何に使うか分からないような淫猥な道具から、各種の禁制薬物、そのあたりから攫ってきたんじゃないかと思いたくなる奴隷等なんでも扱っているのだ。

もちろん人間が生活しているのだから食料品や衣類を扱う店だってあることはあるのだが、こういうところの場合は、品物の出所が怪しい。服屋などは商品に血が付いていたり、斬られた痕跡がそのまま残っていたりすることもあるのだ。八百屋は路傍の雑草を売っているように見えるし、肉屋に至っては、まず何の肉か疑ってかかる必要がある。安さに惹かれて買ったら実は人肉だったということもありそうで怖い。

そんな『悪所』であるが故に、屯（たむろ）するのも剣呑な風体の男達、殺気と狂気を混じらせた抜き身の刀剣のようなワーウルフなどの獣人や六肢族である。オークや、ゴブリンなんかの姿も見られる。連合諸王国軍の敗残兵なども流れ込んで来て窃盗、恐喝といった犯罪や、暴力に関わる仕事をしている。つまりならず者であった。

女だと、婀娜（あだ）っぽい視線を向けてくる娘、あるいは荒んだ雰囲気と芥子（けし）の香りを漂わせて中空にあるはずのないものをボーッと眺めている娘などがいたりする。堅気の仕事に就いている者もいなくはないが、その殆どは交渉次第で娼婦としての仕事もするという蓮っ葉さである。

種族としては、ヒト種あり、ヴォーリアバニー、キャットピープル、犬耳、蛇、角が生えていたり、翼を持つハーピィや翼人なんかもいたりする。そんな女達が男達の淫らで舐めるような視線に妖しい笑顔を返し、「遊んでいかない？」と誘いをかけるのだ。

弱ければ食い物にされる。ここではそれが当然だった。だからこの街の住民は路上に死体が転がっていたとしても気にとめない。それって昨日？　それとも今日のこと？　明日でも、誰も気にし

ないよどうせ毎日のことだから、という態度だ。ここはアルヌスとは違い、帝都の澱みを吸収して負の方向へと闇色に発展し続ける場所なのである。

陸上自衛隊が、そんな場所をあえて選んだ理由は簡単で、人種の坩堝と言えるこういう場所ならば怪しい風体の者が出入りしても目立たないと考えたからである。他の場所も人の出入りが多いが、一般市民が住む場所なだけに人相や風体の悪い者は人目を惹いてしまう。汚れ仕事専門業者を使うこともあるので、そういった者でもおおっぴらに出入りできる場所が必要なのだ。

実際、この悪所と呼ばれる街で起きたことの殆どは、外に伝わらない。その意味ではこの街の闇は大変隠蔽効果が高いのだ。だが、程なくして彼らは逆の意味で悪目立ちしてしまい、この悪所街で非常に有名な存在となってしまう。

きっかけは彼らが街の人間に比べて、気前と金の払いが良かったからである。

ちょっとした仕事でも引き受けた時の支払いは、その辺の顔役がくれる額の倍は出したのだ。そしてそれが古くから街を仕切っている顔役……ゴンゾーリ、メデュサ、パラマウンテ、ベッサーラといった連中の気に障ることとなった。

他所者の奴ら、建物を一軒買い切って何やらコソコソとやっているぜ。新参者の癖に挨拶にも来ようとしないたぁ太てぇ野郎だ。街の秩序とか顔役の権威など、気にも留めないとは良い度胸してやがる。しかも、遣い走りにすら高い駄賃を払ったりするから、自分達を恐れ靡いてた連中が最近反抗的になりつつある。はた迷惑な奴らだ。

こんな些細なことの積み重ねが、この街を仕切る顔役達の怒りとなったのだ。

そしてその内の一人ベッサーラが「金払いが良いなら大層な金持ちなんだろうさ。ちょいと行って、いただいて来ようじゃないか」などと考えて、子分や街の無頼漢達を集めると自衛隊悪所街事務所を襲撃したのである。

が、そんな彼らを迎えたのは、鉛玉の洗礼だった。

H&K MP7、FN P90、伊丹らが鹵獲(ろかく)して持ち込んだ銃砲火器がこんなところで役に立った。勿論、官品の装備もてんこ盛りだ。不正規戦である以上、交戦規則も非常にシンプル。敵と見たら討て。ややこしい法的なうんたらかんたらは一切気にしないでよかった。

こうして、事務所開設に携わった第五偵察隊の猛者達が、使い勝手の良い火器を与えられ圧倒的な戦闘力で反撃したものだから、ベッサーラ配下の無法者共は瞬く間に殺戮され、その死骸の山を路上に築くこととなったのである。

しかも、反撃はそれでは終わらなかった。

ベッサーラは、子分の殆どを失った上に、その住処は爆破されてしまったのだ。屋敷と子分、その悉(ことごと)くを失ったベッサーラは、身を守る武力と権威の双方を失った。そしてその瞬間、それまで行ってきた無法のツケを支払わされることとなった。

他の住民達からどれほどの恨みを買っていたのか……妻と複数の愛人と子どもを巻き込んで全身を大小様々な刀剣でハリネズミのように刺され、悪所の片隅に捨てられることとなったのである。

その無惨な姿を見て、街の者はひそひそと語り合った。「あの連中に手を出すな」と。

何もしなかったが故に生き残ったゴンゾーリ、メデュサ、パラマウンテの三家も、自衛隊がベッサーラが手にしていた利権とか縄張りとか、店や娼婦からの所場代、みかじめ料といった収入源に手を延ばさないことに安堵のため息をつきながら、連中にはとにかく手を出さずそっとしておくということを決めた。

虫の好かない連中だが、商売の相手と考えればこれほど良い客もないからあえて喧嘩を売る必要はないと、負け惜しみにも等しい発想の転換をして、逆に積極的に接近を図って仕事の売り込みを始めた。

自衛官達が求めるものは、もっぱら情報であり、また情報を拾い集める目端の利く手駒であった。自衛隊の依頼を受けた顔役達は、スリや泥棒といった連中を集めて、貴族の家を見張らせたり人の動きを観察させたり、時には屋敷に侵入させて書簡等を盗ませるといったことを繰り広げ、役に立つところを見せることによって自己の保全を図ったのだ。

ぶっちゃけて言えば強者に媚びへつらったと言える。しかし、強者に靡(なび)くのはこの悪所では至極当然のこと。ことさら逆らって見せるような者は、表向きは気骨があると評価されるかも知れないが、陰では馬鹿だと陰口をたたかれることになるのだ。長生きできないからである。

それに害意さえ向けなければ自衛官達は大層礼儀正しく、無礼も働かない。

無法な行為を目撃して苦い顔をしても、他所者としての立場をわきまえて煩い態度もとらないよ

うにしていることが見受けられる。
そんなことからも『悪所』の男達は種族を問わず、自衛官達の存在を畏怖と畏敬の念をもって受け容れるようになったのである。
それに対して、女達の心境はいささか複雑であった。
はっきり言えば、好意的な感情を抱くことが出来なかった。
いくら声をかけてもちっとも靡かないからである。金回りが良いのなら、自分達にだってお金を落としてくれて良いだろうに、どれほど色目を使っても、猫なで声でくすぐっても、客になってくれないのだ。
確かに街の男達の懐が暖まると、間接的に自分たちの懐も暖かくなってくる。だけど、できることなら直接暖めて欲しい。それが女心というものだ。
だが「ホントに男かい！　インポ野郎っ！」と挑発しても、肩を竦めるだけで相手にもしてくれない。
だから表面上愛想をよくしても、内心では嫌うということになるのである。
ところがその代わりとばかりに、数日毎に交代する看護師と称する女達が建物の一角に開いた部屋で、健康とか、妊娠検査など避妊についての相談を受け付けるようになってから風向きが変わり始めた。
そこで売られる避妊についての画期的な道具が、彼女達の仕事に無くてはならないものと成った

からである。

「なんだ、今夜はクロカワが当番なのかい？」

大麻の混じっていそうな煙草を、キセルでくゆらせている女が相談室に入って来た。街に立っている時のように構えた様子もなく、精神的な武装を解いているようである。

なにしろこの街にあって、この建物の中は絶対的な安全地帯と見なされている。自分の塒（ねぐら）以外では、いや自分の塒ですら完全に安心とはいえないこの街では、唯一気を抜ける場所かもしれない。

迂闊に手を出せばどれほどの権勢を誇った悪党でも一族郎党皆殺しにされる。

自衛官達が直接手を下したわけではないが、結果としてそうなったので、街の人間達はそう思っているのだ。

動きやすいようにジーンズとチューブトップという出で立ちの黒川は、背中に白い翼を持つミザリィという翼人女性に、小さな銅貨二枚と引き替えに、避妊用ゴム製品の小箱を手渡した。代金を取るのは、「施しをするわけではない」という意味がある。こんな悪所であるが故に、生き抜いてきた者は皆それなりの誇りを持っている。それを尊重してのことなのだ。

『自称良識的な人間』から見れば、悪事の助長に見えて眉を顰めるかも知れない。だが、この手の活動は社会福祉という観点においても非常に重要な意味合いを持つ。

貧困の世界においては、お為ごかしや綺麗事より、まずは今日のメシなのだ。身体を売って何が悪い。誰に迷惑をかけているわけでもないし……という理屈は確かに存在する。それを倫理の剣を

持って真正面から斬りかかるのもいいが、彼女たちがまず困らないようにすることも大切なのである。彼女たちを困らせ、心身両面で追い詰める最大の問題は不意の妊娠なのだから。この特地の医療水準では、人工妊娠中絶は死と隣り合わせの上に、健康を害すること間違いなしの行為なのである。

ちなみにこの世界の性感染症については、まだ存在は確認されていない。

実は黒川たちの、娼婦に対する支援活動もその観点から厚生労働省が予算を出した。「早急にその有無を確認せよ」ということである。

新大陸を発見した上に、梅毒を持って帰ってヨーロッパに蔓延させたコロンブスの真似はしたくないということである。男性の自衛官達にもその意味では非常に厳しい通達が出されていた。

「クロカワは、煙草を止めろとか言わないんだねえ」

他のWAC（女性自衛官）には止めろと口やかましく言われているらしい。特に煙草に混ぜている魔薬について、肌に悪いとか、内臓に悪い等々と糞味噌に言われていると愚痴をこぼした。

だが、黒川は「でも、必要なのでしょう？」と肩を竦（すく）めて見せた。

「分かってるじゃないか？　もしかして経験があるのかい？」

娼婦という仕事についてである。

「いいえ。想像力を逞しくしたまでですわ。素面（しらふ）ではやってられないでしょうから……」

翼を持つ女は、美麗な唇をいびつな形にしてそっぽを向いた。

「ちっ、あんたみたいな、お高く止まっている女は嫌いだね」
「それは結構なことですわ。別に好かれたいとも思っておりませんから」
ミザリィは、憎々しげに黒川にあかんべしてみせた。黒川も負けじと、イーッと口角を横にひっぱった。とたんに、空気が緩む。ミザリィが笑ったのだ。
「ガキかい、あたしらは」
「似たようなものですわ。昨日のわたくしと今日のわたくしに大差がないように、二十年前のわたくしと今のわたくしにも、そう大差はないと思いますから」
そんな理屈をミザリィは鼻で笑うと「さてと、稼ぎに行かないとね」と腰を上げた。そして黒川に向けて煙草の紫煙をふうっと吹きかける。
黒川は、両手をぶんぶん振り回して煙を振り払う。どちらも、やることが非常にわざとらしかった。お互いに住む世界が違いすぎると、こんな形でしか互いの距離をはかれなくなるのかも知れない。
黒川は突然態度を改めると尋ねた。
「もし、そんなものを吸わなくても良い仕事があったらどうします？」
しかしミザリィは馬鹿にしたような態度を崩さなかった。
「あたしらみたいなのに、そんな仕事あるわけないだろさ。男に股ぐらひらいて、よがってみせてナンボ。そんなもんさね」

「アルヌスの噂は聞きませんか？」

「ああ、あそこね。天国みたいなところなんだってね。でも、紹介が必要なんだろ？　それに特に能があるわけでなし、行った先でも出来ることは同じだろうしね？」

「非常に強力なコネがあると言ったら、どうします？」……こんな一言が、黒川の喉元まで出かかった。だが、別の女性相手にこのセリフを言った時、伊丹から「お前何様のつもり？」と散々に叱られたことを思い出してしまった。その時は、伊丹に対する反感だけが残ったのだが、ミザリィが口にした「特に能があるわけでなし」というセリフには、言葉の意味だけに収まらない様々な何かが含まれているような気がした。

もし、まともな職を世話してアルヌスに送ったとしても、ミザリィは夜になるとあの街の暗がりに立ってしまうのではないだろうか、そんな気がしたのだ。

言葉に詰まった黒川に、ミザリィは勝ち誇ったような笑みを浮かべて背を向けた。そしてキセルをくゆらせながら、仕事モードの腰を振る気取った歩き方で去っていくのだった。

そのミザリィが、再び黒川の下を訪ねてきたのは、夜半を過ぎた頃であった。

羽振りの良い街娼なら夕刻に一人、晩に一人と客をとり、調子が良ければ三人目と思う頃合いだが、夜もここまで更けてくるとさすがに女目当てに街をうろつく男も少なくなる。

まだ全く稼げていない女は必死になって男を追い、とりあえずノルマを果たした女達はそろそろ

寝るかと自分の塒に戻ろうとする時間帯でもあるのだ。このあたりが娼婦でも、要領の良い女と、悪い女の差が現れるところと言えるだろう。

そんな時刻に、ミザリィが街娼達をぞろぞろと引き連れて事務所の戸を叩いたものだから黒川は何か騒動が起きたのかと思った。ベッサーラによる事務所襲撃も、まだ最近のことである。

机の引き出しから拳銃を取りだすと、ズボンのベルトに挟み込んだ。自衛官である以上、彼女もまたその使用法については熟知している。

「クロカワ。ちょっと話がある」

戸を薄く開いて見ると、ミザリィは落ち着かない様子であった。

きょろきょろと周囲を見渡す姿は何かに怯えているようにも見える。

一緒にいる街娼達も皆、息せき切って明らかに冷静さを欠いており、ただならぬ事態が進行中であることを黒川に感じさせた。

黒川は戸を大きく開くと彼女たちを迎え入れた。

「入りなさい。速く」

こうして街娼達は夜の暗闇から地下に設置した発電機から送られて来る電気によって明るく照らされた室内へと入ったのである。

照明と言えば蝋燭や油の灯火しか知らない者達ばかりだから、皆、蛍光灯の明るさに驚きを隠さなかった。光源に直接目を向けて眩しそうに目を細める者もいた。だが、明るさには不安を和らげ

る力がある。ミザリィは「鳥目にはありがたいねぇ」などと軽口を叩き、皆もそれぞれ思い思いの感想を口にしながら少し力を抜いた様子となって診察用のベッドや椅子に座り、そうした腰掛けのない者は室内の適当なところへと散らばって、壁によりかかったり床に直に座ったりしていったのである。

皆が落ち着き場所を得たのを見計らうと黒川は尋ねた。

「で、どうしたのでしょう？　何かあったのですか？」

ミザリィは皆を代表して口を開いた。

「あたしらは、あんたらがこの街で、いや、この帝都で何をしようとしているか、うすうす感づいてる。だけど何も言わず、聞かず、見なかったで通してきている。それがこの街で長生きする秘訣だからね」

娼婦達はみな一斉に頷いた。

「だけと、そうも言ってられなくなったんだよ。この娘の名前は、テュワル。この子の話を聞いて、あたしらを助けて欲しいんだ」

ミザリィはそういうと、自分と似たような白い翼を持ちながらも、種族の異なるテュワルを紹介した。この女性はハーピィである。翼人は背に翼を持つが、ハーピィは上肢が翼を兼ねる。

「お願いです。助けてください」

黒川は困惑したまま答えることが出来ない。どうにも要領がつかめなかった。

いったい何が起きているのか、黒川はその説明を求めていた。何から助けて欲しいのかが分からなければ何をすれば良いのかも分からないのだ。

だがミザリィは、そんな説明よりも早く助けて欲しいと繰り返した。助けて欲しいと言うばかりで、説明を端折ってしまう。

「ああっ、まどろっこしぃねぇ！　あたしらを助けてくれれば、これからはあんたらに協力してやるって言ってるのさっ！」

黒川はついに降参した。そして、これは自分一人では対処できないと判断して、二階で待機しているはずの桑原曹長達を呼び出すことにしたのである。

＊　＊

その夜、帝都は地震に襲われた。

遠くから地響きのような音が大地を走ったかと思うと、突如として前後左右に大きく揺れた。

その揺れは激烈なものではなかったから、耐震性など全く考えられていない、ただ石を積み上げただけの建物であっても、強度の劣るところがわずかに崩れるだけで済んだ。

その意味では、帝都の街並みやインフラを徹底破壊するに至らなかったのである。だが、人心に与えたダメージは深刻なものとなった。

震度計が無いため正確には分からないが、被害の程度から測ると震度は四あるいは五弱。発生時刻は深夜で、帝都の人々はまったくの不意を突かれることとなった。

熟睡中の地震に寝台から蹴り出され、安らかな眠りを破られて驚く間もないままに漆喰が剥がれて降り注ぎ、棚や天井からぶら下げていた物が次々と落下した。

タンスが倒れ、床に落ちた素焼きの食器や花瓶などはことごとくが割れ、足の踏み場もないほどに破片が散らばった。

帝都の民にとって大地とは決して動かないものである。盤石不動の象徴であった。

水は流れ、風は走り、火は燃え上がり、木々は生い茂る。そして大地は動かない。それが世界の法則である。それが破られた瞬間、人々は世界が終わると感じた。その恐怖と絶望によって人々の魂には、精神的外傷がざっくりと刻み込まれたのである。

このような天災の到来をあらかじめ知ることは、科学の進んだ日本でも難事である。不可能と言って良い。それを可能とするものがあるとすれば、神か、はたまたヒトより優れた感覚を持つ動物だけであろう。

だが、この特地においてこの両者は人と似た姿を持って言葉を語る。故に災害の到来を予想し得た者があった。

ハーピィのテュワルは、客となった二人目の男を見送ったあと、突然の寒気と震えに襲われた。最初は風邪をひいたかなと思った。汗をやたらと掻いたのだ。

二人目の客はしつこくて、払った金の元を取ろうと汗をぬぐう暇もないままにテュワルを数度にわたって責め立てたので疲労困憊してしばらく動く気力もなく、肌が冷えるに任せてしまったのだ。だが、身体の奥から沸き上がる震えは、風邪のものとはいささか趣が違っていた。

後ろ髪がチリチリして首を竦めたくなる。そして、足腰から力が抜けるような感触。それらは、恐怖感にも似たものだった。

ふと、思い当たることがある。テュワルには以前似たような経験があったのだ。

南方の火山地帯に住んでいた彼女は、噴火の寸前に大地が揺れるという希有な体験をしていた。そう、この感触は『地揺れ』の前触れであったことを思い出したのだ。

とはいっても、この帝都の近くには火山などない。

ここに来て日は浅いが、過去に地揺れがあったという話は聞いたこともない。だから、ただの勘違いではないかと思った。しかし、心の底にくすぶる焦燥感と恐怖感をどうやってもぬぐい去ることが出来ない。そこでテュワルは、娼婦としても先輩格で何かというと頼りにしているミザリィに相談することにしたのである。

実は、ミザリィや他の街娼達も漠然とした恐怖感を味わっていた。ここに居たくない、逃げ出したいという衝動が湧き上がって来るのだ。

ただ彼女たちは地揺れなど聞いたことも体験したことも無いから、不安と恐怖の正体が分からなかったのである。しかしそれが、テュワルによって明らかにされた。そこで彼女たちはそれぞれが

用心棒としている男達へと相談した。日頃、「守ってやる」と称して稼ぎの上前をはねているのだから、こんな時ぐらい役に立てという訳である。

ところが男達は面倒くさがるばかりで、まともに請け合おうとしない。「地揺れ？　なんだそりゃ？　地面が揺れるなんてことあるわきゃないだろう……そんなことより、さっさと客を取って稼げ」という反応ばかりである。もちろん彼らとて言いようのない焦燥感はあるようだが、それを素直に受け取らず強がっているのである。

しかしこうしている合間にも不安はどんどん強くなっていく。そこで彼女たちは、頼りにならない男達を見捨てると黒川の下へと駆け込むことにしたのである。

陸上自衛隊・悪所街事務所（通称）の所長、新田原三佐は、黒川と桑原曹長の報告に当然ながらどうしようかと悩むことになった。地震の予知連絡を受けた際の対応など、誰にも経験がなかったからだ。その信憑性だって疑ってしかるべきだ。

だが、テュワルという女性は、いわゆる鳥を祖とする種族である。姫路駐屯地と新潟の新発田駐屯地で勤務経験のある新田原は、二つの震災を肌で体験していた。そして大きな地震の前に駐屯地近郊から野鳥が一羽もいなくなってしまった記憶が鮮烈に残っていたのだ。もし、鳥と言葉を交わせたら、警告を聞くことができたかもしれないと思っていた。

彼女達は、人より勘が鋭いのかも知れない。もし、話が間違いであったらそれはそれでいい。あとで笑えば済む。だから、本当だったらという前提で対策を取っても良いんじゃないか。そう思っ

たのだ。そして決断を下す。

「来る」と構えて待つのであれば、地震国に産まれ育った自衛官達にとって、それは大したことではない。小さい頃からすり込みに近い形で、対応策も身につけている。帝都内の各所にいる隊員達に無線で事態を連絡をして火の始末をさせる。そしてとりあえず装備、武器、食糧、医薬品をまとめ、頭上や周辺から物が降り注いで来ることのない、広い場所へと避難するのだ。大きな建物の側や崖や水の近くも避けたい。

それは非常に単純なことであった。だが、地震について経験も知識もない者にとっては、こんなことだって思いつくことは難しかったのである。

熟睡中を菅原に叩き起こされたピニャは、城館を出て外の森へと引っ張り出され不機嫌を隠さずにブツブツ言っていた。ハミルトンなどは、半分眠りながら歩いている有様だ。書類仕事で疲れが溜まっているのだろう。

菅原の護衛として、ピニャの館に滞在していた伊丹、栗林、富田の三名は、新田原からの無線連絡を受けると、半信半疑ながらもとりあえずピニャ達を安全と思われる場所へと誘導していた。ちなみに伊丹は制服姿。富田と栗林は戦闘服に小銃を手にした完全武装である。

メイド達や松明を掲げ持つピニャの警護兵達も、戸惑いを隠せない様子だった。ピニャが従っているからという理由で、とりあえず応じているだけである。

いくら大地が揺れると言われても、それが具体的にどんな事態なのか、彼らにはイメージすらできないのだ。我々が、空が落ちてくると言われても具体的にどんなことを意味するのか、分からないのと同じかも知れない。

だから、地震が発生した瞬間、彼らの受けたショックは凄まじいものとなった。

まず、初期微動と言われる小さな揺れが起きる。

「おっ、来た来た」

その持続時間の異様なまでの長さに伊丹は「これはでかいぞ」と漏らした。

初期微動の長さは震源地の遠さを意味している。そして、震源地が遠いと判断されるにもかかわらず初期微動が強いということは、地震の規模が大きいことを意味している。

やがて到来する本格的な揺れ。

ガツンと叩かれるような衝撃に始まり、グシャと大地が揺れた。

それは終わってみればわずか三十秒～四十秒程度のことでしかなかった。だが産まれて初めて地揺れを経験する帝都の人々にとって、永遠に等しい時間となった。

ピニャは悲鳴を上げた。世界が壊れたとすら感じた。なのに、菅原や伊丹は「おおっ、ホントに来ましたね……」などとのんきなやりとりをしている。

伊丹、栗林、富田といった自衛官達の平然とした様は、ピニャの目に彼らがまるで何ものも恐れない不屈の勇気を有しているかのように映った。この者等は寄って立つ大地を失ってなお平然とし

てるのではないかとすら思った。
面倒くさがりで、何かと口実を設けてはサボろうとする。嫌なことからはすぐに逃げたがるという意味で、戦士としての『人柄』（力量ではなく……）に不安を感じさせる伊丹だが、そんな彼ですら、このような時には凛然として動じないのである。
メイドも兵士達も、恐怖に打ちひしがれて大地に伏していた。
大地に根を下ろす木々が揺れ、梢の擦れ合う音が、巨大な化け物が駆け抜けていく様にも思えた。メイドの泣き声や悲鳴が、そして兵士達のわめく声があたりに響いた。だが、そんな彼ら、彼女らが目にしたのは、周囲を見渡して被害の有無を見ている伊丹であり、富田であり、栗林である。
その頼もしさは、さながら神を見るかのごとくとなった。
メイド達はあたふたと跪きながら富田や栗林の脚に縋り、兵士達は戦場で不敗の英雄を見るような憧憬を彼らに向けたのである。
「この程度なら問題有りませんね。城壁とか弱いところは崩れてるかも知れませんが、大したことはないでしょう。震源地は凄いことになってるでしょうけど」
揺れが収まった後。
呆然とした虚脱感に浸る中で伊丹の冷静な状況判断に、思考停止状態のピニャはただ「うんうん」と頷くだけである。
警備兵達は、富田や栗林の「大丈夫か？　怪我をした者はないか？」という言葉を受けて、それ

を大英雄の言葉を受けたがごとく背筋を伸ばして立ち上がった。完全に心服状態である。繰り返して言うが、全く経験したことのない者が地震によって受ける精神的な衝撃というものは、それほどに大きかったのである。

悪所街においても、状況は似たようなものであった。

女達を引き連れていよいよ南東門から外へ避難しようというタイミングで、それは起きた。街のそこかしこから、悲鳴と恐怖からの叫びが広まった。

道幅が狭い悪所だけに、家の屋根などからいろいろなものが落ちてくる。

新田原は大声を上げて、皆に道の真ん中に寄るようにと指示を飛ばし、それを桑原や黒川達が通訳して繰り返した。

女達は言われるがままに悲鳴を上げて道の真ん中に集まって頭を抱えた。そして悲鳴を上げながら大地にしゃがみ込む。

桑原達が「おお、来ましたね」「ホントだよ。すげぇ」「テュワルさんには是非日本に来て、気象庁に勤めて貰いたいぐらいだ」などと冗談を言い合う声に、やはり頼もしさを感じてか誰も彼もが、彼らの脚に縋りつく。

男達は、役得役得と嬉しがった。

倉田にいたっては獣系のお姉さま達に取りすがられて、「この身が嬉しい」「この脚が嬉しい」

と感動に打ち震えている。
女性趣味のない黒川はあんまり嬉しそうではなかったが、頼られることは嫌ではないので黒川に取り縋って泣いてるミザリィの背中を掌で軽くポンポンと叩いてやるのだった。

伊丹等の保護と避難のおかげで、精神的な再建を素早く果たすことが出来たピニャは、大きな地震の後には大抵、もう一度の揺り戻し、すなわち余震が起きるということを知らされて、「ただちに皇帝陛下の下へと参らなくてはならない」と言い出した。父の身を心配してのことだ。宮廷内がどうなっているかも気になる。
ピニャがそう言うのであれば、伊丹等としては反対する理由はないので「そうですか。では気を付けて行ってらっしゃい」と告げる。ところが、その言葉を聞いたピニャはこの世の終わりか、あるいは恋人に別れを告げられた少女のごとく、顔面を蒼白にして伊丹に取りすがった。
「い、一緒に来てくれぬのか？」
「いや、だって、皇帝の……もとい、皇帝陛下のところへ行くのでしょう？　不味くないですか」
ピニャから見れば、伊丹達は敵国の兵士のはずである。皇帝の傍にそんな者を連れて行くなんて、将棋であれば王手飛車取り。戦略・戦術シミュレーションゲームなら、首都（総司令部）に敵歩兵ユニットが入った状態と言えるだろう。
まあ実際には伊丹達は、使節として帝都に赴いている菅原の護衛という立場であるから、皇帝に

銃を突きつけるということは許されないし、しないのだが、それはこちらの都合だ。ピニャの立場としては警戒してしかるべき事のはず。

なのに一緒に来てくれというのだから、伊丹としては菅原と顔を見合わせて、どうしようかと困った。

「イタミ殿、お願いだ。傍にいて欲しい」

要するに、彼女の本音は「恐いから一緒に来て」なのだ。

ハミルトンなども顔面蒼白のままうんうんと頷いている。今まさに恐い思いをしたばかりで、しかももう一度地震があることを予告されている。ここで伊丹達に去って行かれたら恐くてしょうがない。メイド達も、その背後でうんうんと頷いて、警備の兵に至っては胸を反らして伊丹の背後に人垣を作って行かさないという態度である。

こうして、ピニャとその護衛兵とメイド、そして伊丹達は皇宮へと向かうことになってしまったのである。

ピニャの案内で、皇宮に入ってみると、そこは大混乱にすらなっていなかった。

しんと静まりかえっている中、見渡せば調度品や家具が倒れ床に散乱していた。

廷吏達はそれらを元に戻そうともせず、おろおろとうろついて、近衛の兵は我を失ってただ呆然としていた。地面に這いつくばって、頭を抱えて祈っている者までいる。

当然、ピニャや菅原は誰何を受けることすらない。堂々と歩む彼女達を止めようとする者は一人として居なかったのである。

そのあまりの惨状に頭を抱えたピニャは、自分に付き従っている警備兵に命じて、宮廷内の主だった者、例えば当直の指揮官や官吏等を、謁見の間に呼び集めるように命じた。

とにかく、混乱し崩壊した秩序を取り戻さなければならない。そのためには主だった者を集めるのが手っ取り早いのである。

警備兵達は、ただちに駆けだしていった。

「う～む、兵の練度が落ちているな」

そのへんで、何もせずにぼやっとしている兵士を見ると、ピニャは嘆息を禁じ得ない。

自分自身ですらこの始末なのだから、古今未曾有の天災にあっては仕方ないとは思うが、それでも近衛兵の秩序が崩壊したままというのは失望してしまうのである。

国軍再建のために近衛から多くの士官、下士官が引き抜かれ、替わりに配された兵士は、練度の低い者や実戦経験の少ない者ばかり。そんなことの悪影響が出ているのだ。

こうしてピニャ達は、ついに皇帝の寝室前まで来てしまった。来れてしまったのである。

見渡してみても、皇帝の寝室に配されているべき警護の近衛がいないという驚くべき事態である。

逃げてしまったのか、それとも何かあったのか。ピニャは脱力感を感じつつも、深いため息の後に改めて気構えた。

「スガワラ殿。まず、妾が陛下にそなたを紹介する。それまでは、口を開かないでいただけるか？」

宮廷儀礼上必要なことと言われれば、当然のこととして菅原はこれに従う。その確認をとった上で、ピニャは寝室の戸をメイド達に開かせたのである。

「ほう？　最初に来るのは、ディアボかゾルザルあたりかと思っておったが、まさかお前とはな。ピニャ」

寝台の皇帝は顔を冷や汗でいっぱいにしながら、ピニャを迎えた。

どうやら皇帝はこのような緊急時に、自らの子の内、誰が真っ先に駆けつけて来るかを計っていたようだ。

期待を裏切ってやったという意味では小気味よい気分になれたが、そんな悠長に構えている場合じゃないだろうと言いたくなった。

「陛下。身支度をなさってください」

ピニャはメイド達に命じると皇帝の身支度を急がせた。そして、警備の兵に周囲を固めさせると、父を伴って謁見の間へと向かった。

皇帝は腰が抜けたのか、歩くのにもピニャの肩を借りる必要があった。

謁見の間に入ると、慌てふためいた様子の文武の官僚達が、ピニャと皇帝に救いを求めるように駆け寄って来た。

ピニャは皇帝を玉座に収めると振り返る。
「まずは慌てるな。文官はただちに大臣を始めとする主だった者を招集するがよい」
「武官は直ちに兵を掌握し、臨戦態勢を発令せよ。皇宮の守りを固めるのだ。また、伝令を走らせ帝都在住の将軍達には参内を命じよ。急げ」
ピニャの叱咤の声に、文武の官僚達もその役割を思い出してか一斉に動き始める。混乱に渦巻いていたものが、秩序だった一つの流れとして動き始めたようである。
宮廷の機能を取り戻せる見通しがついてピニャはホッと息をついた。
だが改めて見渡してみると、謁見の間の調度品や燭台は倒れ、額縁は落下してその砕けた破片が床に散らばっている有様である。
その惨状に漏れ出る呻きを抑えつつ、メイド達にとりあえず綺麗にするように命じた。
謁見の間を整えるような仕事は、本来は皇帝付きの内侍の仕事である。ピニャに付けられているようなメイドでは、この部屋に近付くことすら許されないのである。だからこのようなことは宮廷の序列を無視する行為であった。だが、このような危急の時に、正常に働けるのが彼女達だけだったから仕方がないのである。
こういう時に……いやこういう時だからこそ威儀を正すということは意味を持つのだ。慌てて駆け付けてきた者も、謁見の間が厳粛に整っているのを見れば、安心するだろう。もし逆に、何もかも乱れ果てていたら、その精神的な動揺も著しくなるはず。

豪華さとか荘厳さを目の当たりにした時、それを虚飾や贅沢といって唾棄するばかりでなく、このような演出装置としての機能にも目を向けるべきなのだ。そうすれば、そのような機能に欠ける飾りこそが、虚飾であり贅沢であると見抜けるようになる。

これまでのピニャは騎士団を率いるだけあって質実剛健を好み、宮殿の装飾を軽蔑する傾向があった。だが日本と関わって外交の仲介を担っている内に、こうしたところにも気を配ることが出来るようになっていた。

「ピニャよ、そなた一皮むけたな」

だか、皇帝の言葉に含まれる意味の分からないピニャは、「皮など剥けていません。怪我はありません」と勘違いな返答をしてしまう。

皇帝は、その生真面目そうな表情に相好を崩した。

「時にピニャ、見慣れぬ者を側に置いておるな。将軍らが集まるまで、まだしばし時がかかろう。その間に紹介してくれぬか？」

ピニャは首を竦めつつ、少しばかり声を低くすると、斬るような所作で菅原に掌尖を向けた。

「紹介いたします。ニホン国使節のスガワラ殿です」

菅原は帝国の皇帝に対して、胸を張って一歩前に出ると、頭を垂れる礼をもって敬意を表した。その背後では、伊丹らも菅原に合わせるようにして挙手の敬礼を行う。そのそろった様は、宮廷の典礼の優美さとは違う独特の色香があった。

「ニホン国？　なるほど、そなたは、たしか彼の国と我が帝国との仲介の任を引き受けていたのだったな。だが、何故このような時にお連れしたのか？　折角お越しいただいたのに、もてなすことすら適わぬではないか」
「申し訳ありません、父上。ですが、この者らは此度のような地揺れに大層詳しく、聞けば、これより揺れ戻しがあると申しております。傍で助言を頂ければと思っておりました」
　これにはピニャの父親も顔色を変えた。
「ま、また揺れると申すか？」
「はい。そのため、是非にとお願いして同道していただいた次第です」
　皇帝は鼻かしらに浮かんだ冷や汗の粒を寝衣の袖で拭うと頷いた。
「よかろう。使節殿、歓迎申し上げる」
　ようやくの紹介を得た菅原は、あらかじめ脳内で用意しておいた挨拶の口上を述べる。
「陛下におかれましては、ご機嫌麗しく」
「天変地異の直後に、麗しいはずなかろう。が、お陰で我が娘の意外なる成長を見届けることが出来た。礼を言うぞ」
「いいえ。殿下が日頃から研鑽されて参られた結果とお見受けいたします」
「戦ごっこと思っておったのだがな」
「既にごっこ遊びは卒業されました。殿下は実戦をくぐり抜けた優秀な指揮官でいらっしゃいま

す！」

会話に割って入った女声はハミルトンのものだった。

彼女は皇帝と外交使節との会話に、声を荒げて割って入るという無礼をしてしまったことに気付いて、顔を真っ赤にして小さくなっている。皇帝も菅原もそんなハミルトンを無視した。そうしないと、彼女の無礼を咎めなければならないからだ。無かったことにするのが一番である。

「使節殿。生憎と、今は忙しくてもてなすことは適わぬが、時と所を変えてならば、盛大な宴などひらいて歓待したいと思う。今宵の所は勘弁してもらいたい」

「はい、陛下。我が国と帝国との将来について、お話しする機会をいただきたく存じます」

菅原は一礼してピニャの後ろに下がった。本来ならここで謁見は終わりである。だが、皇帝は引き下がった菅原に対して、さらに言葉をかけた。

「そういえばニホンという国にも、王がいるのであったな？」

菅原は、良く知っているな？　と思いつつ質問に応じた。日本側が帝国について情報を集めているように、帝国側も日本について何某かの知識を得ていたようである。

だがどうやって？　ふと、疑問が湧いた。

「いいえ、我が国の象徴たるお方は王などではなく、天皇という位に就いておいでです」

「確か象徴であったな？　君主たる者が、臣下に国権のことごとくを奪われてそれでよしとする国など恐れるには足りぬと思うていたが、……考えてみれば『門』の向こうは異世界。その世界には、

またその世界における君臨の有様があってもしかるべきか。対等の相手など、これまで無かっただけに、どのように遇するべきか分からぬ。無礼などがあってもご容赦いただきたい」

そんな形で会話が途切れる頃、廊下から大音声が響いてきた。

「父上、父上っ、ご無事か!?」

ゾルザルが、まるで暴れ馬のごとく謁見の間に駆け込んできたのである。

彼の取り巻き達も、それこそ胸甲を前後ろ逆に付けたり、サンダルを左右逆に履いていたり、剣の鞘を提げていても肝心の剣がないという者ばかりで、慌てて出てきたことが分かる有様だった。

ゾルザルは手にチェーンを引きずっていて、その端には首輪を付けたテューレや他の女達が一荷(いっか)釣りの魚のように引きずられていた。白ウサギの如きテューレは裸身のまま床を引きずり回されてしまったようで息も絶え絶えとなって転がっていた。その隣にいる黒髪の娘や金髪、赤毛の娘達も、全裸で引きずり回されたためか擦り傷だらけになっていて、生きているかどうか心配なほどである。

その光景に思わず絶句する伊丹、富田、栗林。

流石に外交官たる菅原は顔色を変えないが、小さな舌打ちが彼の苛立ちを感じさせた。

「父上、ご無事でしたか？　さぁ、逃げましょう」

「どこへ行くというのか？」

「とにかく、ここから離れるのです」

皇帝に迫る第一皇子に対してピニャは「兄様。ただいま、大臣及び将軍に招集をかけたところで

す。動座するにしても、主立った者が集まってからでなければ、宮廷は混乱いたします」ととりなそうとした。

だがゾルザルは言う。

「何を悠長なことを言っているか。ノリコの言によれば、もう一度か二度、地揺れがあってもおかしくないというではないか。すぐにでも逃げるのだ」

このままでは玉座ごと皇帝を抱えて走り出しかねない勢いだ。

とにもかくにも、兄を落ち着かせなければと思ったピニャは、なんとか兄が応じてくれそうな話題を探して、迎合口調で話しかけた。

「兄上、それにしてもよくぞ再度、地揺れがあるとご存じですな。妾もついさっき知人より聞いて知ったばかりだというのに」

「今言ったろう。ノリコがそう言っておったのだ」

「ノリコとは？」

ピニャの問いに、ゾルザルは手にした鎖の一本をぐいっと引っ張った。

「きゃっ」と、小さな悲鳴を上げて、テューレやその他の女達が呻く。

「黒髪の女だ。『門』の向こうから攫ってきた内の生き残りよ」

ゾルザルがそういって、顎で示す。その途端、

「馬鹿野郎っ！　ぶっ殺してやるっ！」

雷光のごとき勢いで放たれた伊丹の拳が、ゾルザルの顎を抉っていた。

＊　＊

「馬鹿野郎っ！　ぶっ殺してやるっ！」

雷光のごとき勢いで放たれた伊丹の拳が、ゾルザルの顎を抉った。

吹き飛ばされた大男は、床を転がると拳を受けた頬を抑えながら怒鳴った。「殴ったな、貴様。皇子たるこの俺を殴ったな！」と伊丹を睨みつける。

伊丹は伊丹で、殴った右拳を抱えて「おお痛てぇ。なんちゅう堅さ。馴れないことするもんじゃないぜ」と涙目になって呻いていた。

「この無礼者め。皇子殿下に手を挙げるとは、一族郎党皆殺しの大罪だぞ」

ゾルザルの取り巻き達はそれぞれに手にした剣を抜いて身構えた。

皇帝の面前で剣を抜くなど本来は重罪に値する行為である。さらに言えば皇族に対して暴行を加えることも許されることではない。だが宮廷は現在地震の影響で完全に機能を停止している。皇帝と皇族を守る近衛の兵も、秩序を失っていてどこにも居ない。事態を収拾する者がいないために、厳粛なはずの皇帝の御前は一触即発の状態となってしまった。

目を座らせた富田は六四式小銃の安全装置をレ（連発）の位置に合わせ、栗林は倒れているテュ

ーレ達や黒髪の娘の様子を確かめる。
「大丈夫？」
日本語での声かけに、黒髪の女性はがばっと顔を上げた。
「私たちは陸上自衛隊よ。あなた日本人ね？」
それをきっかけに黒髪の女性は、滝のように涙をこぼした。そして栗林の手に取りすがった。これまでどれだけの苦しみを味わってきたのか。それを思うと栗林の身体に力がみなぎる。栗林はナイフを抜くと女性の首につけられていた革製首輪を斬りとって捨てた。
「助けに来てくれたの？」
「ええ。必ず連れて帰ってあげる」
このような娘が捕らわれていることなど今の今まで知らなかったのだから、嘘である。だが、日本人がここにいて酷い目に遭っていると知れば決して放置して帰ることはない。絶対に連れて帰る。その決意で、伊丹達は完全に一致していた。戦闘態勢に入り、もし立ちはだかる者がいれば誰であろうと蹴散らして脱出する。そういう覚悟を噛みしめていた。
一方、菅原もこれまで自分がしてきた努力が、水の泡になるかも知れないという状況に嘆息しつつも、日本人女性が不当に拉致されたあげく、このような形で拘束されていたことには怒りを抑えることが出来なかった。辛辣な笑みを浮かべ皇帝に対して慇懃さを無礼なまでに高めると尋ねた。
「ただいま皇子殿下が、『門』の向こうから攫って来たとおっしゃられましたが、これはいったい

どういうことでしょうか陛下。そしてピニャ殿下。この件、ご存じでらっしゃいましたか？」

「ス、スガワラ殿？」

ピニャには分からなかった。伊丹や菅原が何故ここまで敵対的な態度をとるのか、その理由が理解できなかった。そうは言っても、思い当たることがないわけではない。捕虜の取り扱いにしても何にしても、日本人は力の及ぶ範囲で人命をとても大切にしたがるということを感じてはいたからだ。

だが、それでもである。ここまで苦労して準備してきた講和交渉をぶち壊しにするほどのこととはどうしても思えなかった。国と国の講和は、個人の感情とは別に扱われるべきだからだ。しかし今、伊丹は個人的な激憤に囚われてその武器をゾルザルに、皇族の一人へと向けている。これはとても庇いきれない行為である。いや、庇うどころか、これはピニャの立場すら危うくしかねない行為なのだ。

銃の威力を知るピニャは、万が一を思ってせめて皇帝だけは守ろうと玉座の前に身体を運んだ。そして状況を収拾するために説得にかかった。

「イタミ殿、止めてくだされっ！　皆も武器を収めよ。何かの手違いじゃ。ここは妾に免じて武器を収めよっ！」

だが、ゾルザルの取り巻き達はそれぞれに剣を握ると、少しずつ包囲の輪を広げていった。その数、全部で十五名。彼らからすれば「無勢に多勢」の状況で何を遠慮する必要があるのかと思うの

だ。戦えば勝つのだから、叩き斬って場を収めれば良いのだ。

ゾルザルも倒れた姿のまま、自分を殴った男が八つ裂きにされる様を思ってほくそ笑んだ。

「いずこの国の者かは知らぬが、これでお前らの国の運命は決したな。国王から民に至ることごとくを殺し尽くし、全てを焼き払ってくれる。すべてがお前の責任だ。我が身の罪深さを思い苦しんで死ぬがいい」

これに対する伊丹の答えは「栗林、富田、構わないぞ。自分の判断で撃って良しだ」というものだった。

栗林は腰から銃剣を抜いて着剣すると、小銃の安全装置を連発にあわせつつ前に出る。

「また銃を廃棄にするなよ」

富田の声に、栗林は「ふふっ」と微笑む。

踊り手、栗林。介添え、富田、伊丹による死の舞がはじまろうとしていた。

銃剣格闘（銃剣道ではない）は、現代においてもなお現役であり続ける戦闘技術である。

航空戦においてミサイルが発達した今日でも、戦闘機に機銃が装備されるように、地上において普通科、すなわち歩兵が相対して戦闘を行う限り、白兵戦は決して廃れることはない。

実際にフォークランド、そして昨今のイラク・アフガニスタン戦においても、銃剣突撃は決戦手段として用いられた事実がある。

従って、剣道等のスポーツ格技と違って、その訓練はあくまでも実戦を想定しており、実戦でのみ使うことを前提としている。よく、武道の世界では物持ち三倍段というが、銃剣突撃を前にした時、空手や柔道にどれほどの段位を有していても子ども同然となる。何故なら、手強いと思えば距離をおいて銃撃するからだ。ずるいと思うなかれ、それが『戦闘』なのだ。審判が横にいてくれる試合ではない。

栗林は、空重量で四・三キログラムの六四式小銃を鈍器として振り回すと共に、その鋭い銃剣の切っ先を槍の如く、そして研ぎあげられた刀身を長刀のごとく扱った。

彼女の軽快で敏捷な身のこなしに、ついてこれる者は少ない。まして、隊列を組んで前面に楯を構え、そして前進するという戦闘技術で凝り固まったこの地の兵では、左右に軽快に跳ねる栗林を捕らえることは出来なかった。彼らの戦技は、あくまでも正面からぶつかってくる敵と戦うものだったからだ。楯でぶつかり、断ち切ろう刺し抜こうと剣を振る。

だが、栗林はぶつからない。

楯で身構えていれば銃撃し、剣を振ろうとすれば素早く横に躱して、脇の下に銃剣を刺突する。近付けば銃床で打撃し、これに堪えきれず少しでも下がれば斬撃で頸動脈を断ち切る。

どれほどの腕力を誇ろうとも、どれほど研ぎあげた剣を振るおうとも、触れることすら適わなければ、全くの無意味なのだ。それほどの努力ではなかろうが、取り巻き達が暴力を誇示するために積み重ねた鍛錬を、栗林は嘲笑するかのように無駄扱いしたのである。これに対抗するには、もう

人数に物を言わせて取り囲むしかない。
だが栗林の背中は、富田が守っている。
回り込もうとした途端、富田は冷淡に引き金を引いた。7・62㎜弾は、厚さ十ミリの鋼板をも貫通する力を持つ。男の胸部にあたり、うすっぺらいながらも金属の胸甲を貫いたがために、体内に侵入した時にはマッシュルーム状に変形している。そして、おもちゃのスクリューのようになった銃弾は、体内の組織を巻き込み、引きちぎり、その背後へと抜けていくのだ。
たった一発で倒れ伏した仲間を見て、ゾルザルの仲間達は、栗林の後背に回り込むことを諦めざるを得なかった。
そして目前にいるのは、まさに手のつけられない猛獣。
謁見の間に八体ほどの死体を製造した栗林は「次は誰？」と舌なめずりしつつ、取り巻き達を見渡す。だが、前に出ようとするほどの気概を持つ者は、もう居なくなっていた。
「やる気がないなら、武器を捨てなさい」
取り巻き達は、ばっちいものでも放り捨てるように剣を投げ捨てた。
その様子がいたく気に入ったらしい栗林は、笑みを浮かべながら「よろしい」と頷くと、続いて謁見の間から出ていくように命じる。
取り巻き達は一瞬どうしようかと、主であるゾルザルに視線を送った。だが、栗林が銃の槓桿をあからさまに引いて見せると、その金属音に怯えて蜘蛛の子を散らすように逃げていったのである。

ゾルザルは、目の前で繰り広げられた殺戮劇と、取り巻き達の遁走を信じられない物のように眺めていた。

がくがくと震えながら、伊丹が自分に向ける、得体の知れない武器を見つめる。これも、仲間を撃ち殺したような火を吐くのだろう。そして、自分に向かって放たれるのだろうか。そうしたらこの場に転がる死体のように、自分も死んでしまうのだろうか？　何故、どうしてそんな理不尽が我が身に起こるのかと繰り返し思った。

皇帝の第一皇子たる自分に、このような無礼が許されるはずがないのだ。

帝国の次期皇帝たる自分に、そのようなことをして済む者など、ありえないのだ。

だが、そんなゾルザルに対して、伊丹は高みから見下ろすようにして問いかける。

「さて、皇子殿下。あなたは今さっき、この女性を、『門』の向こうから攫って来た生き残りとおっしゃいましたが、それはつまり、他にも攫って来た者がいるということですね？」

「ふ、ふんっ。無礼者に答える口などないわ」

せめてもの虚勢なのか、ゾルザルはそう言い張る。自分に口を開かせたくば、地に額をこすりつけて非礼を詫び、その上で礼儀正しく頼むべきなのだと胸を張った。そうすれば考えてやらないこともない。それが嫌ならば殺すがいい。だが知りたいことは分からないままだぞと、事実を知る我が身を人質として居直ったのである。

すると伊丹は仕方ないと苦笑し部下を呼び寄せた。

「栗林君。喋りたくなるようにしてあげなさい」
「はい、隊長♪」
栗林が、伊丹の命令をこれほどまでに嬉しそうに聞いたことなど、これまで一度もない。
この後の情景はあまりにもグロく、写実的に表現すると年齢制限が必要になるので、擬音表現で勘弁していただきたい。
バキッ、グチャ、ドスッ、ガン、バン、ゴツッ、ドスッ、グチャ……、ポキッ。
当然その間に、ゾルザル自身の悲鳴というか、わめき声が轟く。
「やめよっ、まて、止めてくれ！　まてっ、痛い！　ぐひっ、あべっっ、ぐふっ……ゆ、指を折るな。勘弁してくれっ、ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ」
その余りのおぞましさに、ピニャと皇帝は目を背けてしまう。
割って入るとか、止めるという発想はどこからも出てこなかった。迂闊に手を出せば、伊丹達の怒りの矛先が自分に向くような気がしたからだ。
ピニャはイタリカの体験でわずかながら耐性を持っていたが、皇帝はこの時、怒らせると危険な存在があることを初めて知った。ハミルトンやメイド達などに至っては、壁際に固まってしゃがみ込むと互いに抱き合い、地震にあった時のようにガタガタと震えていることしか出来なかったのである。
しかしその惨劇も、謁見の間の戸が開くことで終わりを告げた。

マルクス伯を始めとした大臣や将軍達、そして秩序を取り戻した近衛の兵士達がようやく到着したのである。だが彼らは、入ってきた瞬間、玉座の前の惨状を見て凍り付くこととなった。

見れば、死体が床に転がり、その間をゾルザルが血を塗装するかのようにのたうち回っている。第一皇子の前歯は砕かれて、床に散らばっていた。見れば奥歯らしき歯すらある。その顔は鼻と口から出た血で真っ赤というあり得ない姿なのだから、驚かないはずがない。

伊丹は、今更ながらやってきた近衛達にチラと視線を送ると、子どもが昆虫を棒きれでつついて弄ぶ時のような感じでしゃがみ込み、ゾルザルにその銃口を突きつけて尋問を再開した。

「皇子殿下。そろそろ答えてもらえませんかねぇ」

するとゾルザルは何かを答えようとした。だが口や鼻から溢れる血液で人語としてはとても聞き取れない。伊丹はゾルザルの襟首をつかんでぐいっと引き寄せるともう一度繰り返して尋ねた。

だがその時、テューレが横合いから伊丹との間に割り込むとゾルザルを庇うように両手を広げた。その傷だらけ、痣だらけの体は、艶めかしさを感じさせる前に、痛ましさを感じさせる。引きずり回された時に負った傷だろう。

「殿下を、殺さないで」

こんなに酷い扱いを受けたのに、その加害者を庇おうとするとは実に健気である。

自分を虐待する両親を庇う子供の心理に近いかも知れない。人質が犯人に心情的に同調してしまうストックホルム症候群というものもある。

伊丹は、その健気さに免じて銃口は下げたが、その分さらに増した不快な気分を露わにして質問を続けた。

「殿下。あなたは今さっき、こちらの女性を『門』の向こうから攫ってきた『生き残り』と言われましたが、それはつまり、他にも誰かを攫ってきたということですね？」

体中の激痛に呻吟するゾルザルは言葉こそ返さなかったが、盛んに首を縦に振って肯定の意志を示した。そうしながらテューレの背中に隠れるように逃げていく。実に情けない姿であった。

「裕樹よ、裕樹はどうなったの？」

ノリコと呼ばれた娘が、栗林の背後から口を挟んできた。一緒にいたところを拉致されたという。すなわち、少なくとも他に一人はいるということである。

「男は奴隷市場に流した……後のことは知らん」

血の泡を噴きながらなんとか答えるとゾルザルはがっくりと力が抜けたように気絶したのだった。

菅原はピニャの背後にいる皇帝へと顔を向けた。

「皇帝陛下。歓迎の宴を開いて下さるとのお話でしたが、それは我が国より拉致された者をお返しいただいてからといたしましょう。陛下がどのような神を信仰されているかは存じませんが、彼らが生きていることをどうぞお祈り下さい。ピニャ殿下、あとでその者達の消息と、どのように返していただけるかを聞かせていただけるものと期待しております」

これだけ告げると、菅原は伊丹と視線を交わして、この場から立ち去ることにした。

だが、

「待て、貴様等！」

このような暴挙を許したままでは帝国の威信は地に落ちてしまう。将軍らの命令に近衛の兵達は一斉に抜剣し再び戦いが始まるかと思われた。

「止めよっ！」

だが皇帝の声が、それを止めた。皇帝は理解したのである。また死体の山を築くだけで終わってしまうということを。

「スガワラ殿。認めよう、ニホンの兵は確かに強い。だがな、戦いに強いばかりでは戦争には勝てぬもの。貴国には大いなる弱点があるぞ」

「我が国の弱点とは？」

「民を愛し過ぎることよ、おおいに煩わされることとなろう。義に過ぎることよ、その動きが手に取るように予測できるぞ。信に過ぎることよ、大いに損をするであろう。強い敵とは戦わねば良いのだ。剣の切っ先は鋭くとも、柄は弱点となる。その刃は鋭利でも、その峰を討てばよい。無敵を誇った軍が奔命に疲れ、いたずらに兵を損ない、国力を蕩尽し、高度な文明を誇った国が、ついには蛮族によって亡ぼされたのもそう古い話ではない」

菅原は応じた。

「我が国は、その弱点をして国是としています。そして我が国の自衛隊は、その国是を守るべく鍛

えられています。いっそのこと、お試しになられますか？」
「なんの、そなた等に抗せるはずもなし。和平の交渉を始めるのが良いだろう」
「皇帝陛下。私たちも充分に弁えているつもりです。平和とは戦の準備期間であるということを。まして、和平の交渉は今行われている戦争を止める理由には成りません。我が国は、そして我が世界は、帝国をはるかに超える年月を血塗られた歴史の上に積み上げているのです。和平の交渉中に、この帝都を失うことを是非、恐れていただきたい」
それはどこぞの国みたいに、だらだらと交渉を引き延ばすような真似はするなよ、という念押しであった。現在はあたかも休戦中であるかのように戦闘が行われていないが、日本側の都合でいつでも再開できる。その時の戦場はこの帝都だという脅迫なのだ。
皇帝はこれに小さな舌打ちで応じた。
「だがそれでも、其処許らは和平の呼びかけを拒絶することはできぬ。違うか？」
「確かに。しかし、それが故に、虚言に下す鉄槌は、凄まじいものとなることをご覚悟いただきたい」
「おおっ、信じておるな。信じるのが国是なら当然だろう。だが、後で損をしなければ良いな？」
皇帝がこの言葉を口にした途端、余震が襲ってきた。
再度の揺れ。天井の漆喰が粉となって降りそそぐ。
その恐怖に、皇帝は顔面を蒼白にし、将軍や大臣、そして近衛の兵達も、皆しゃがみ込んで床を

這い壁に縋った。
「よし、行くぞ」
そんな無様な様子を後目に伊丹は、部下と菅原、そしてノリコという娘を連れ、近衛兵達の間を堂々と抜けて謁見の間を後にしたのだった。

菅原と伊丹、そしてその後ろを栗林、ノリコという拉致被害者、そして最後尾を富田という列で歩いている。裸のノリコには伊丹の制服上衣が着せられていた。
しばらく皆、口を噤んでいる。
十分から二十分ほど歩いて皇宮を出たところで、伊丹はため息と同時に、おろおろと言った。
「不味ったぁ。やっちまったよぉ!!」
菅原も、頭を抱えている。
「やっちゃった。どう報告しよう?」
つい頭に血が上ってやりすぎてしまった。伊丹と菅原は、どう言い訳したものかと頭を悩ませたのだった。

08

「陛下にお尋ねしたい。この未曾有の恥辱と、損害に、どのような対策を講じられるおつもりか？」

元老院議員であり、貴族の一人でもあるカーゼル侯爵は、議事堂があったはずの瓦礫の山に立つと玉座の皇帝モルト・ソル・アウグスタスに向けて歯に衣着せぬ言葉を突きつけた。

かつては薄闇の広間であったその場所は、今や青空の下の野外劇場と化している。

演じられるのはもっぱら喜劇か、笑劇か。最早、重厚さなど欠片も無く、前衛芸術と精神失調に基づく難解さとの区別も付かない半可通素人劇団の舞台背景のごとく、廃墟と成り果てていた。

吹きすさぶ風が議員達のトュガをそよがせる。

鼻にくすぶる刺激臭や、舞い散った粉塵が彼らの袖を汚していった。

熟睡時を襲った深夜の地揺れとその余震は、人々の眠りを破り、夜の闇を恐怖で満たした。こうなると貧弱な灯火による明かりでは、闇のもたらす不安をうち消すことができず、人々は夜が明けるまで眠りに就くことが出来なくなってしまったのである。

まんじりとしない時を過ごし、東の空が白んでいつもと変わらない帝都の朝を迎えたことで、よ

うやく人々は一息つくことが出来たのである。

ところが、太陽がのぼると同時に、天空を切り裂く大音響と共に光が走った。

それは雷鳴にも似た、耳を切り裂く大音響であった。

二本の巨大な剣が天を斬り裂くように横切ると、そこから投下された四個の物体が、帝都の丘にそびえ立つ元老院の建物に正確に吸い寄せられ、堅牢なはずの建物をものの見事に吹き飛ばしたのである。

帝国の権威の象徴たる元老院は、一瞬にして打ち砕かれた。

もちろん、帝都に潜伏する自衛官のレーザー誘導による精密爆撃である。だが、それを知るべくもない一般の市民達は、地揺れに続く神々の怒りの表明であると、恐れた。ひそひそと、皇帝が何か神に背く振る舞いを行ったのではというデマが、深く静かに広まり始めたのである。

帝国の知識層の代表とも言える元老院議員達は、それが神々の怒りであるとは思わなかった。それが人の為したことであると、知り得る立場にあったからである。

とはいえ、自分達の権威の象徴たる議事堂を襲った惨状には圧倒されていた。

一辺が、両手を広げるほどの巨石をもって構築された元老院の建物が、ものの見事に粉砕され、瓦礫と化しているのだ。これが神々の力ではないとするなら、敵はどれほどの力を有しているのかと思う。

議員達が座るべき椅子も、調度品も、大理石のレリーフ、諸外国からの貢ぎ物、戦利品、そして

巨大な神々の像といったことごとくが破壊され、地に落とし砕けた陶片のようになってしまった。
誰もが思って身震いする。
これが自分達が議事堂に集まっている時に為されていたらどうなっていたか、と。
あるいは、敵がこの力を無差別に帝都に振り下ろしたらどうなるか、と。
最早、座席もなく演説をするための演壇もない。各々は適当な石に腰を下ろし、あるいは、地面に座ることを良しとせず立ったまま、カーゼル侯爵の言葉に耳を傾けるしかないのだ。
「事の次第は、開戦前に敵を知るため、異境の住民を数人ばかり攫ってきたことに始まる。敵国の使者は、このことを知るやたいそう怒り、事も有ろうに陛下の面前において皇子ゾルザルを打擲するに及んだのだそうだが、陛下、間違い有りませんな」
見れば顔を腫らしたゾルザルが、皇帝の傍らの席で苦痛に呻いている。
一目見ただけでも『打擲』などという表現ではいささか遠慮が過ぎるように思われた。
これは、明らかに数人がかりで殴る蹴る、打って叩くの暴行による怪我であった。ところが聞き及んだ話では、ゾルザルをこんな目に遭わせたのが、たった一人の女性兵士だというから驚きだった。
女と言っても、巨人とか、オークとか、トロルといった怪異の牝だというならまだ分かるのだ。だが、加害者はただのヒト種、しかも非常に小柄な女性だったという。それが巨漢とも言えるゾルザルをどうしてここまで出来るのかが不思議であった。栗鼠が熊を殴り倒したと言われたほうが笑

えるだけマシかも知れない。
当然、ゾルザルは事件の存在そのものを認めない。
「俺は、殴られてなどいない。地揺れに足を取られ、転んだだけだ……」
「転んだだけでそうなりますか？」
「階段から……転げ落ちたのだ」
歯を失って、息の漏れる口から喘ぐようにして懸命に否定し続けている。
そうだろう。もし、たった一人の女にここまでされたと認めようものなら、彼の面子は永久に潰れたも同然だからだ。人々が『ゾルザル』の名を呼ぶ時、そこに『女にボコられた奴』という意味が付されてしまう。その名を呼ばれる度に人々から、クスッと笑われることになってしまうのである。
そんなこと、受け容れられるはずがなかった。次期皇帝候補としての威信を失ってしまう。だから必死になって否定しているのである。そのせいで公式には、謁見の間での戦闘は、自国民を救出しようとする日本国の使者と、奴隷の所有権を守ろうとするゾルザルの取り巻きによる争いとされた。
そうまでして守るような見栄か……と、カーゼル侯爵はゾルザルに軽蔑の視線を浴びせる。皇族に対する暴力という折角の外交カードが、誰かのくだらない見栄のせいで使えないのだ。個人の利益のために帝国の国益を損なっているのだから、ある意味ゾルザルの二重の失点と言える。そのこ

とに気付かない愚かしさが、また嗤えるのだ。

「敵国の使者は、我が帝国との講和を望んでいたとキケロ卿から伺っていた。その為に丁寧な下準備を積み重ね、会合をも繰り返していたと聞く。真実を明かせば、わたしの方にも紹介を経ての接触があり、近日会談を持つ予定であった。

なのにいったいどういうことか？　たかが奴隷女一人のことで、何故彼らがここまで怒ったのか。その奴隷が敵国の王族であったとかそういうことでもなかろうに……誰か事の次第や、彼の者らの考え方について知る者はいないのだろうか？　もしいたら、詳しく説明していただきたい」

カーゼルの問いかけに、みな俯いた。

事実の全貌を知る者など、どこにも居なかったからだ。敵国や、その使者の『ひととなり』について多少とはいえ知る元老院議員としては、キケロや、デュシー侯爵などがいる。が、彼らは昨夜、何が起こったのかを知らない。

マルクス伯爵は、内相として何が起こったのかについては、かなりの情報を得ている。だが、そのかわりに日本や、敵の使者については知らない。

従ってこの双方を知る者として、ピニャの名が挙がることとなった。

こうして、ピニャは産まれて初めて元老院の場へと招致されることとなったのである。

ピニャは三百人からの視線を受けて恐る恐る立った。三百人分の視線がピニャを弾劾しているように見えたからだ。

皇帝の身近に敵国の兵を近付けた失態を、ピニャとしてもどのように償うことになるかと頭を悩ませていたのである。だが、元老院議員達はそのことには触れなかった。とにもかくにも事情の説明を、ピニャの知る日本という国、日本人というものを説明するよう求められたのである。

「わ、妾が、知っていることを申し述べたいと思うが、発言を許されたい」

議長役たる第一人者が鷹揚に頷いて、ピニャに発言を許可した。

ピニャは咳払いをすると、事の次第を時系列に従って、説明することとした。すなわち、彼らとの初めての出会いからである。

「そもそも、妾が彼らと出会ったのはイタリカにおいて……」

こうして帝国の為政者達は、自分達が何者と戦争を行っているかを知ることとなったのである。敵の持つ武器は、弓も届かないところに立つ兵を次々と打ち倒す威力を持つ。敵は、それらの武器を槍や剣のごとく、兵に当たり前に装備させており、我が方の兵は手が届く前に倒されてしまうことになる。

それはいみじくも、帝国軍の連合諸王国軍が何故敗亡したかを説明するものだった。

その、荒唐無稽すぎる説明に、何割かの議員達が懐疑的に振る舞った。だが、キケロやデュシー侯爵といった園遊会に招かれた者達の補足証言によって、真実であることが裏付けられる。何よりも彼らは、それらの武器の試射すら許されたのだから迫真の説明をもって議員達の疑問に答えることが出来た。

ピニャは、さらに語る。鉄の天馬が、大地に蠢く盗賊を掃き清めるがごとくなぎ倒していった恐怖の光景についてを。

元老院の議事堂が吹き飛ばされた今となっては、それを疑う術はなかった。

「敵はニホンという国。門の向こうは、この帝都を遙かにしのぐ、摩天楼のごとき世界であった。それは地上をことごとく埋め尽くして、天空へ広がりを見せており、我らが墓所とみなす暗黒の地下すら、煌々と輝く光で昼の街のごとく照らし、人々はそこでも暮らしていた。豊かな文物と斬新な芸術に溢れ、整然とした秩序と、清潔さに充ち満ちていた」

また、仲介役を引き受けることを決めたことで日本政府から与えられた、捕虜の名簿をピニャは提出した。

「今まで黙していたことを許されたい。この名簿に載っている者は全てニホンに捕虜となって生きている」

ピニャの差し出した紙の束を、議員達はつかみ合うようにして奪い合った。「見ろノーリス。お前の息子の名があるぞ!!」「デカンツの名がある。ここに名が載っている者は皆生きているというのですかな？　ピニャ殿下？　確かに、生きているのですな？」「儂の息子が生きているゾ！　やったぁ！」

議場跡地は歓喜の声で満ちあふれた。と同時に、いくら探しても、身内の名が見つからず再び絶望する者もいて、その一喜一憂はしばしの間、議場を混乱させた。

「名簿に載っている者は、全てニホン国にて捕虜となっている。妾は仲介の役務を引き受ける代償として、その内の十数名についての身請けする権利を与えられた。そして、講和交渉の為に、キケロ卿やデュシー侯爵といった方々のご親族を身請けする約束で、帝国側の交渉役を引き受けていただいたのだ」

「殿下はおずるいっ！　それでは、他の者はどうなる？　このまま指をくわえてみていろとおっしゃるのか？」

ピニャの選から漏れた者にとって、それは当然の言葉であろう。だが、ピニャとしても講和交渉をきちんと担っていける人材を選ぶ必要があり、そのためだったと答えるしかなかった。

そう言われてしまえば、主戦論者で充ち満ちていた元老院の中で、妨害や各種の攻撃を跳ね返しながら、きちっと講和交渉を進められる人材はわずかになってしまうことは誰にでも理解できることである。講和交渉が進まなければ、捕虜返還の交渉すら出来ないのだから。その意味では、ピニャの選択も仕方のないことなのだ。

だが、事態がここまで明らかになったからには、残りの全員をいかに引き渡してもらうかを検討するべきだという話が出てくる。しかし、そのためにはどれほどの身代金を積まなければならないのだろうか？

「ニホンの外務担当者はこう言った。ニホンには奴隷という習慣はなく、身代金の有無を問わず捕虜の生命や安全は保証される。もし帝国に、ニホン側の捕虜がいればこれと交換となろうが、いな

いのであれば、今後予定されている交渉における、何らかの譲歩と引き替えということになろう……と」

「奴隷という習慣がない？　身代金もいらぬというのか？」

「ふんっ、交渉における譲歩と引き替えというのだから、やはり身代金も同然ではないか？　体裁の良い人質ということであろう？」

「とはいえ、奴隷に売られたりせぬという確約はありがたい。きっと救い出してやるぞ」

議員達が互いに交わす言葉が途切れるのを待って、ピニャは言葉を続けた。

「妾は思うのだ。彼の国の使節を激怒させたのは、このことではなかったか、と」

どういうことだ、と議員達は説明を続けるように求めた。

「彼の国の者が、我が帝国貴族の子弟を奴隷にするでもなく、捕虜として厚遇するのは、別に求められたわけではない。自発的なものであった。それは皇帝陛下が看破されたように、民を愛するという気性からきたものだと思う。そのような気性の者が、自国の民が捕らえられた上で奴隷とされていたと知ったら、そしてその生死すら定かでないと知ったら、どうなるか……我が子を奪われた翼獅子のごとくなろうことは、誰にも分かろう」

その結果がこれだ、とピニャは両手を広げて言った。

見渡せば周囲は元老院の議場跡地。粉々に砕けた壁石や柱が倒れ、瓦礫が積み上がっている。天井は青々とした空。雲がぽっかりと浮かんでいるだけであった。

ゾルザルは元老院の議事堂跡地に自らの居所を失って、誰からも気付かれることなく退席した。這うようにして自らの居館に戻ったのは、それから程なくしてのことである。

瞼は黒痣が覆い、唇は醜く腫れ上がって身体中がみみず腫れや、打撃痕で覆われていた。前歯数本を失って唇が腫れているために、呼吸は無様に漏れて、その声もかつての勢いを失っている。

まさに敗残の輩（やから）として無様な姿を曝していた。

戸をくぐった途端に、力を失い崩れるように倒れる。取り巻き達や、彼の奴隷娘達はあわてて介抱しようと駆け寄った。

テューレも言葉こそ少ないが甲斐甲斐しくもその肩を貸して、寝台へその身を運ぶのを手伝っていた。貴重な氷が惜しげもなく運び込まれ、醜く腫れた顔や身体が冷やされていく。

「これで元老院は講和論が大勢を占めることとなりますね。問題は、このままでは無条件降伏に近い形で講和を結ぶ羽目に陥ってしまうことです。これをどうにかするためには、やはり多少なりとも軍事的な成果をあげなければなりません」

ベッドに運ばれるゾルザルを眺めるように立っていた青年が、テラスから言葉を投げかけた。

その姿に初めて気付いたのか、ゾルザルは腫れ上がった顔を歪めた。青年は見るからに貴公子然としていて、粗暴なゾルザルよりも気品を感じさせ、その視線は理知的な気配があった。

「ディアボ」

「兄様。おいたわしい姿に成られて。もう無理はなされますな」
ディアボと呼ばれた青年は傍まで歩み寄ると、寝台の兄の顔を覗き込んだ。
「小賢しい奴め」
「兄様こそ」
ゾルザルは「これは自業自得よ」と腫れた顔に自ら手を当てた。
「俺は、お前のその脳天気さが羨ましい。お前のように、自らの有能を示して生きながらえられると到底思えぬ。父上はカティ義兄(あに)ぃを責め殺した男だぞ」
「あの時の父上はまだ若かったのです。ゆえに先代皇帝の遺児にして自らの養い児を恐れた。ですが、もう歳をとられました。そろそろ後継を考えてもよい頃でしょう。なにより我らは父上の血を引いている」
「だから、俺が馬鹿を演じている間に、後継の座を狙うということか？」
「兄様が、父上を恐れて馬鹿をやって下さったお陰で、わたしは存分に力を振るうことが出来ました。ありがたいと思いますよ」
お陰で次期皇帝の座を争うのに、勝ち目が見えてきたという。だがゾルザルは、肩を竦(すく)めてディアボの認識を甘いと指摘した。
「皇帝はお前ではなく俺を次期皇帝として指名するだろう」
ディアボは、兄が父のことを「皇帝」とのみ呼んだことが気になった。まるで他人を呼ぶかのよ

うだった。
「それはどうでしょう？　兄様に皇帝の座が守れましょうか？　わたしにはそうは思えません」
「だからこそなのだ。お前は、皇帝の権力への妄執を軽く見ている。此度の戦争の幕引きにあたって、さすがの皇帝も退位せざるを得まい。だが、ただ退位したりはするまいよ。実務に不安の残る俺を操り人形として玉座に据えて実権は自らが握る。おおかたそんなところに収めるつもりだろう。お前は自らの有能を示しすぎたのだ。皇帝もお前を意のままに出来るとは考えまいからな」
　この言葉に、ディアボは目を剥いた。
「しかし、それでは父上亡き後どうなるのです。あまりにも無責任すぎる」
「お前、よっぽど俺が無能だと信じたいようだな」
　皇帝の人柄を見抜き、恐れられぬように長年にわたって牙や爪を隠し続けるなど、並大抵のことではない。それが出来る男が無能なはずはないのだと、ゾルザルは言外に主張していた。
「テューレ……ノリコと共に捕らえられた、他のニホン人達の所在は？」
　問われたテューレは、深いお辞儀をすると、それまでの無力そうな弱々しかった表情を一転させた。知的な、そして覇気に満ちた笑みを浮かべていた。
「はい。他に二人ございます。鉱山奴隷として売り払われましたが、その所在の確認は済んでおります。まずノガミ・ヒロキという者ですが、残念ながら落盤事故で死亡いたしました。またもう一人、マツイ・フユキという者は、同じ鉱山で『まだ』生きております。ご指示があれば、ただちに

保護いたしますが、いかが取りはからいましょうか？」
「すぐに連れて参れ。……ノリコも、売っぱらわずにおいて正解だったな。興味本位もあったが、こうなると分かっておったら、もう少し優しく扱ってやればよかったか？」
全身が痛むのか、顔を顰めた。
「いいえ殿下、あれくらいでよいのです。所詮は何の技術も持たぬ女です。売られたとしても行く先は娼館あたりが関の山であったでしょう。不特定多数の慰み者になることを考えれば、次期皇帝のお情けをいただいた身を、誇りと思うべきなのです」
そのやりとりを見たディアボは、開いた口を閉じることが出来なかった。
これまで隠し続けてきた爪を、わずかながらも見せつけてきたということは大勢は既に決したということか？　確かに、講和交渉は始まるだろう。話をまとめるために皇帝の退位も必要になるだろう。しかし元老院は、ゾルザルを後継とした人事を素直に承諾するだろうか。
「あっ、そのためのニホン人か。ゾルザルが見つけてきたということで、ニホン国の使者を宥めてみせれば……やられたっ！」
捕虜を奴隷として扱うのは帝国では当たり前の習慣である。それを咎め立てする方が非常識なのである。従ってそのことについて言えばゾルザルに罪はないと主張できる。にもかかわらず、捕虜の消息を探し出して日本を宥めることに成功したとするなら、それは講和派から見れば功績となるのだ。議会で講和派が多数になりつつある今、それは帝位への近道にも見えてくる。

「今頃皇帝は元老院で、講和に際しては自らの退位をも辞さぬ決意と、後継として俺の立太子を発表している頃だろう。ピニャが、意外な成長を見せてきたが敵には成らぬ。ニホン人と親しすぎるからな。まあ、今後はニホンとの外交で重要な役割を担って貰うことになるだろうがな」

「では兄様、この戦争をどうされる？　このまま敗北にも等しい講和を結ぶおつもりか？」

「敵の何を恐れる必要がある？　元老院を破壊するのに、わざわざ無人の明け方を選ぶようなお人好しだぞ。まともに戦って勝てぬので有れば、戦わねば良いのだ。この程度のこと、皇帝だって考えておるぞ。ディアボよ、お前もそろそろ、俺と張り合うのはやめて、どっちにつくか今の内に考えておけ……」

ゾルザルはそう言い放つと寝台にテューレを引き込みながら、ディアボに去るように命じるのだった。もう、周りに誰もいないも同然の痴態で、取り巻き達や女達もそそくさと消えていく。

「で、殿下、お体に障りますわ」

「かまうものか……しばし痛みを忘れさせてくれ」

「殿下ったら、仕方のない方ですね、あ……」

＊　＊

大型輸送ヘリコプターＣＨ－47ＪＡチヌークがアルヌスの丘へと戻ってきた。

望月紀子は、ヘリの窓から見降ろす景色に、胸を締め付けられるような感触を味わった。帝都を出てから果樹園や農地、牧草地と荒野、あるいは樹海のような森が続いて、それが途切れてしばらくすると、遠望に飛行場や丘の頂上を六芒星型に取り囲むコンクリート製の建造物群が見えてきたのである。

そこには、わずかながらも日本の気配があった。

「帰れるんだ……」

ポツリと漏らすと、感極まって涙がとめどもなくこぼれた。

昨夜から何度泣いたろう。勿論、恋人の裕樹のことも心配だ。だが、自分が帰れることもまた嬉しいのだ。そして、自分を救ってくれた自衛隊は、恋人も救出してくれるに違いないと信じたかった。

早く、両親に会いたい。

紀子の両脇を抱えるようにして座る黒川と栗林が、何かと気を遣ってくれた。着る物も手配してくれたし、食べる物も、飲む物もと至れり尽くせりだ。チョコレートとか、お菓子の類を口に入れた時、その懐かしい味に、やっぱり涙が出てしまったほどだ。

捕らえられていた間に起きた出来事についても、何も聞かずに、そっとしておいてくれる。紀子も今は、辛かった日々を思い出すことより帰れることとなった喜びに浸っていたかった。

菅原と伊丹からの無線による報告を受けた、特地方面派遣部隊の最高指揮官たる狭間陸将は、た

だちに拉致被害者のアルヌスへの移送を命じると共に、皇帝ならびに帝国の政府当局者に対する威嚇として、Ｆ４ファントムの二機による爆撃を要請した。

そこに込められたメッセージは、勿論「直ちに拉致犠牲者を返還せよ」である。この手のことは、動物や子どもの躾と同じで、粗相の存在が判明したその時に、罰を与え叱りつけなければ意味が伝わらないのである。よって、間髪を入れず痛烈な一撃を与えるべきであるという発想の下、攻撃目標が選択された。

防衛大臣からも民間人に可能な限り被害を出さないという条件の下で、攻撃許可が与えられた。

森田内閣における防衛大臣の夏目（なつめ）は、受話器に向かって普段と同じような冷静沈着な言い回しのまま「やってかまいません。おおいに、やって宜しい」と語ったという。

後で夏目の報告を受けた森田総理は、「困ったもんですが、やっちゃったものはしょうがないでしょう」と眉根を寄せたというから実に対照的である。

チヌークは、アルヌスの陣地奥深くに設けられたヘリポートへと降りた。

そこで黒川と栗林は、紀子を両脇から抱えるようにして、待ち構えていた医官達と合流すると診療施設へと向かった。アルヌスには、戦闘による負傷者の発生に備えて、入院施設のある医療設備も整えられているのだ。

そこで彼女は、内科・外科・婦人科・産科・精神科等々の健康診断や、とりあえず心理的に負担にならない程度の聞き取り調査、例えば拉致された時の状況等の質問を受ける手はずとなっている。

また犯罪被害者支援を専門とする臨床心理士がカウンセラーとしてつけられ心の傷をゆっくりと癒すことになる。

残りの、第三偵察隊のメンバー達は、帝都から日本へと運ぶ各種のサンプルの入ったダンボール箱の荷下ろしをしていた。

やはり大陸の覇権国家の首都だけあって、帝都には各国の物産や商品、情報が集まっていた。お陰で大陸各地の鉱物資源の埋蔵状況も、おおまかだが掴めてきている。希土類については、その存在そのものを特地の人間は知らないためにこちらで探すしかないが、特地の者でも知っている資源として鉄、スズ、亜鉛、金、銀、銅、白金等といった金属資源の分布状況と、その土地から商人を通じて送られてきた鉱石のサンプルが入手できた。さらに南方には、燃える液体の湧き出る土地があるとされていて、今後の政府間交渉において、開発権や採掘権などを要求するのに非常に役に立つ。

また他には、種族・民族の坩堝とも言える悪所で撮影した映像の入っているＤＶＤとかもあった。その多くは、写真が趣味の笹川（ささがわ）陸士長が撮影した物だが、それ以外にも他の隊員達が撮影したものが含まれていて、被写体はもっぱら女性に偏っている。が、これはこれで、こんな容姿の種族・亜人が居ますよ、こんな服装の民族が居ますよ、という資料になる。これまでの資料が、銀座事件で捕虜になった兵士だったり、アルヌス周辺で出会った農民や商人のみであったから、全体としてはバランスが取れることとなるのだ。

他の……例えば第一とか、第五とかの偵察隊だと、集めて来る資料は帝都周辺の植物の種子とか葉の標本、昆虫、動物、鉱物、土壌といった至極真面目なものが多い。

対するに、第三偵察隊は伊丹の薫陶が行き届いているためか、亜人の習俗、風習の写真（担当：笹川）とか、現地の食べ物（担当：古田）といった文化面の物が多く、テレビとか、週刊誌が喜ぶようなネタが満載なのだ。

特に、参考人招致の件以来特地の人々（もっぱら女性）に対するマスコミの関心は強くなるばかりで、特地に取材に入らせろというテレビ局や新聞社の要望は、担当者に対する夜討ち朝駆けを通り越して、最早ストーキングか脅迫めいてきてさえいた。そんな圧力を躱すために、防衛省の担当者は伊丹達が時折持ち帰る映像資料を少しずつリークし始めたのである。

そんなものが写真週刊誌とかで『特地の女の子特集』といった記事で掲載されたりしているというのが今の状況である。特地の黒ゴス少女とか、金髪エルフ娘とか、銀髪魔法少女とか、猫耳のＰＸの店員とか、ウサ耳の居酒屋看板娘とかの写真集が、秋葉原にある本屋の店頭に並んだのも、最近のことであった。

と言うわけで、これらは大切な資料と認められていた。その積み卸しと、送り先ごとに分類する作業を伊丹等が丁寧に行っていると、そこに柳田がやってきた。

「よぉ伊丹、お帰り。また、やらかしたって？」

言われると思った、と伊丹は舌打ちしつつ頭を抱えた。よりにもよって敵の国家元首の前で乱闘

騒ぎを引き起こすという後先考えない振る舞いは、問題視されないはずがないからである。

具体的に例えてみると、某半島の北の将軍様との首脳会談の席で、総理の護衛が将軍様の息子に銃を突きつけて「拉致犠牲者、返してね」と言ったのに近いかも知れない。それで上手く行けば、確かに溜飲は下がるかも知れないが、外交的には信用を失うので絶対的に不味いのである。さらに言えば皇帝の第一皇子を半殺しにしたというのも充分に不味い。

「頭を抱えてんのはこっちなんだよ。お前はホントに状況を面白くしてくれる。なにしろ、今回『も』拉致被害者の救出っていう手柄つきだからな。罰したものか、賞したものか、はっきり言って困ってる」

「で、状況は？」

「四分六で減俸ってところかな。ところがだ、政府は拉致犠牲者の救出を大々的に発表したがっている。このところ下がりっぱなしの内閣支持率を上げるのにももってこいだからな。そうなると処罰ってわけにもいかなくなっちまうので、上としては決断できないでいるわけだ」

「狭間陸将とかは？」

「例によって苦虫を噛みつぶしたような顔をしてるよ」

伊丹は「迷惑をかけてすみません」と、狭間のいる方角に向かって柏手を打って両手を合わせた。自分のことなのに相変わらず緊迫感に欠ける男である。ま、出世欲のない伊丹からすれば、馘首されなきゃそれで万々歳なのだ。

「で、もしかして呼び出しとか？」
柳田がわざわざ伊丹の所へとやってきた理由である。滅俸にしろ何にしろ、いろいろとお叱りの言葉があるはずなのだ。だが柳田は違う違うと手を振った。
「流石に今日はない。首脳部の頭は、拉致犠牲者への対策だけで手一杯だ。実は、ご家族と連絡が取れないらしいんだ。娘の捜索願を警察に出した記録があった。その後、一家総出で銀座にいって『娘を知りませんか？』というビラを配っていたという情報がある。……あの日も、な」
伊丹が夏の同人誌即売会に行くために、ゆりかもめを待っていたあの日である。あの日、あの時、銀座は血で染まった。多くの人が亡くなったのである。伊丹が救うことが出来たのは被害の総数から見れば、極僅かでしかない。
「マジかよ」
伊丹は呻いた。
「ご本人には、まだ内緒だぞ。一応、医官と専門家が詳細を伝えるタイミングを見計らうことになっている。俺が来たのは、第四偵察隊を帝都に見送ったついでと、今の話をするためだ。お前等が余計なことをしないうちにな。それと、現場で何があったのか、報告書なんかじゃなく直接聞いておきたいと思う。立ち話も何だから、後で『街』で飲もう」
伊丹は、柳田の誘いに嫌な顔を隠さなかった。なんでお前と……と思ったりする。柳田の陰気な面(つら)を眺めながら呑むくらいなら、ロゥリィやテュカ、（レレイは、日本の基準では未成年なのでダ

メ。食事なら可）と飲んだ方が酒は美味いに決まっているからだ。あるいは、デリラをからかってもいい。倉田や富田なんかと飲むのも楽しいはずだ。

「まぁ、そんな顔するな。こっちはこっちでいろいろと面白いこともあったんで話してやるからさ。そういうことで十九時に……」

だが、そんなことはお構いなしに、柳田は約束を押しつけていった。嫌な顔をされて、それで怯んでいるようでは、柳田のような気性の人間はやっていられないのかも知れない。こうなったら、柳田に奢らせちゃる、ということで伊丹は納得することにした。

黒川と栗林は、拉致犠牲者の望月紀子に付き添って行ったために、彼女たちの荷物は、ヘリポート脇に放置されたままだった。他の隊員達は、荷物の整理・運搬やそれらの搬出で忙しく、終ったとしても今度は銃の整備をして、私物の整理等としなければならないことが多い。指揮官の伊丹としても、黒川と栗林の荷物を持って行ってやれと指示するのは、なんとなく憚られた。

そこで、後は桑原曹長に任せて自分が運ぶことにした。

とりあえず診療施設に行けばいいかということで、彼女らの変に重い荷物を抱え上げて歩くこと暫し。やがてコンクリート剥き出しの堅牢そうな建物が見えてきた。そこは、戦闘時に発生する大量の負傷者に備えてベッド数三百、また処置室および手術室の数も併せて二十という重傷の救命救急に特化した医療設備であった。

ただし現在は開店休業中。このところ戦闘もろくすっぽなく、あったとしても自衛隊側に怪我人が出ることもほとんどなかったからだ。あまりに暇なものだから、当初配置された看護師や医官達は元の所属である自衛隊病院に戻され、平常の勤務に就いている。

不意に大規模な戦闘が始まったら常勤している八名の医師で持ちこたえ、他の者が招集されて駆け付けるのを待つことになっている。これも『門』が銀座にあるからこそ出来る体制と言えるだろう。

だから、現在稼働中のベッドは十に満たない。入院患者は現在は四人。

時折運ばれてくる自衛官は、訓練中に転んで怪我をしたとか、頭を打ったとか、指に切り傷が出来たとか、風邪を引いたとか、特地の水が合わずにお腹を壊した、といった症例ばかりで入院に至る例は至極希である。

これに対して、重傷で入院が必要な患者は特地の者ばかりであった。

アルヌスの建築作業現場で、親方のドワーフに頭をぶん殴られた弟子とか、組合が雇った警備の兵が盗賊との戦闘で負傷したとかである。それと、ちょっと前に第四偵察隊が修道院で死にかけているところを保護した、正体不明の男性が入院している。

見た目で年の頃六十代。左上肢を上腕の肘寄りの部分から切断。左の下肢を大腿のほぼ中央で切断の上敗血症になりかけているという痛ましい姿であったが、抗生物質の投与で驚くほどの回復を見せて、現在は医療用の義肢をつけてリハビリ中だ。問題は、本人が名前以外出身地や家族の連絡

先を教えてくれないことだろうか。おかげで、退院の目処がついていない。

医官達は、おそらく連合諸王国軍の兵士の一人だったのではないかと推測している。修道院に保護されていたのだから、もしかすると貴族とか、結構身分が高い者なのかも知れない。敵の捕虜となることを恐れて口を噤んでいるのだろう。

そんな感じで閑散としている病棟。

伊丹から見ても、巨大なナースセンターに、一人か二人の看護師がポツンと座って記録を書いているという光景はなんともシュールであったが、そんな白衣の看護師に声をかけて、自分の部下がこのだだっ広い病棟のどこにいるかを尋ねた。

すると紀子の病室は個室だという。都心の病院で、個室なんかに迂闊に入ったら、室料として一日ン万円とられてもおかしくない。「部屋が余っているから大盤振る舞いってことか」と呟きつつ伊丹は長い廊下を進んだ。

女性の病室に迂闊に入ると大顰蹙を買うおそれがある（服を脱いで身体を拭いていたりすることもある）。そこで伊丹は廊下から栗林と黒川に聞こえるように「荷物を持ってきたぞぉ」と声をかけた。

ちょうど紀子の腕に看護師が注射針を刺して採血しようとするところだったようで、黒川がドアを開けてくれた瞬間、彼女の肌にプスリと刺さるのを目撃してしまった。見れば、栗林は自分に針が刺されたかのように痛そうに目を背けていた。伊丹も、注射される時は目を背けるタイプなので、

見たくなかったのだが……。

膿盆（病院とかで見るソラ豆型のステンレス製の皿）には、いったい何ccの血を採るんだ？　と言いたくなるほどの量の試験管が転がっていた。感染症、寄生虫、各種の毒物などなどと未知のリスクを検査する以上、検体が多くなってしまうのも理解できるのだが、これだけ血を抜かれたら健康な者でも貧血になってしまうような気がする。

病院では、検査を受けるのにも体力が必要で、検査を受けたが為に体調を崩したという笑い話があるが、結構深刻に現実な話である。実際、病床の紀子は顔色を青白くしていた。

伊丹は、紀子に「ご機嫌いかが？」と声をかけながら、黒川と栗林に荷物を引き渡した。紀子も、伊丹の気安い物腰に緊張を緩めて「だいぶ、いい感じです」と答えた。

紀子からすると、伊丹は自分を救出してくれた三人の自衛官の一人という認識なので最初から好感度が高いのだ。

「黒川。望月さんは、しばらくここにいることになるのかい？」

「そうですわね。この検査の量だと……短くても一～二週間は覚悟していただいた方がよろしいかと思いますが」

黒川は白衣の看護師が持っているボードを横から覗き込みながら、答えた。血算、生化学、レントゲン、尿、便、分泌物各種培養、胃カメラ、脳波、心電図、超音波、妊娠反応、内診……等々。今時、簡便な人間ドックなら一日で帰れる時代であるが、これだけの量をこなすとなれば結果が出

るまでに一～二週間の時間を要するのは仕方のないことかも知れない。
「だそうだ。ま、ここまで来れば帰ってきたも同然だからな。ゆっくりしてよ」
「それはかまいません。でも、できれば家に電話して無事を知らせたいんですが……」
それを聞いた栗林が、自分の携帯電話に手を伸ばそうとしたのを見て、伊丹は視線で制すると大きめの声で告げた。
「ああ、ゴメンよ。まだ、こっちには民間の回線が引かれてないんだ。門から銀座に出る前には検疫が必要だし、直接連絡するのはもうちょっと我慢して。いきなり僕等みたいな厳ついのが連絡を取ったら、ご家族だってびっくりするよ。背広組の、ホラ、菅原ってのがいたでしょ。あっちのほうで連絡を取ることになっているから」
と、伊丹はパンと両手を合わせ紀子を拝んだ。
紀子もこうも頼み込まれたら我が儘ばかりも言えないと苦笑してこれを受け容れた。すかさず看護師が「次の検査は……」と紙のコップを取り出してトイレの場所を教えている。
その間に伊丹は、栗林、黒川を廊下に引っ張り出して、柳田から聞いた紀子の家の状況について説明した。
「と、言うことで、家の話をするのはお医者とカウンセラーがGOサインを出してからだ。いいな？」
黒川は、そのあまりの痛ましさに絶句している。栗林は携帯をポケットの上から抑えながら「危

なかった」と呟いた。
「俺も、びびったぜ。お前が携帯ひっぱりだそうとしたからよ」
すると、看護師に案内された紀子がスリッパをパタパタ言わせながら病室から出てきた。
伊丹は「じゃ、また何かあったら来るから」と声をかけた。勿論、社交辞令である。黒川は看護師でもあるから、望月との関わりはまだ続くだろうが、伊丹や栗林との接点はもう無い可能性の方が高い。それが分かったのか紀子はきちんとお辞儀をしてお礼を言った。
「本当に、ありがとうございました」
その姿は、親から愛情を注がれて育ち、どこに出ても恥ずかしくないよう、きちんと躾られた娘さんのものであった。

＊　＊

一日の課業を終えて、国旗を降納する際に流れる君が代ラッパが耳に入ると、自衛官達の時間は止まる。国旗が見えるなら、国旗に向かって敬礼。見えずとも、その場で姿勢を正して直立不動になるのだ。そして、それが終わった瞬間、また動き出す。特に仕事や任務の無い自衛官達は、それぞれに余暇を過ごすことになる。
大抵は洗面器に風呂道具を入れて浴場へと向かい（シャワーなどという贅沢な設備は残念ながら

特地にはない）、汗を流したら食堂で食事をして居室で靴を磨いたり、洗濯をしたり、アイロン掛けをしたり、繕い物をしたり、本を読んだりして、時間を過ごすことになる。

就寝前の点呼までは、基本的に自由なのである。

伊丹は、柳田に誘われたのもあって、アルヌスの街に出てきて食堂へと向かった。

ちょっと数日留守にしていただけなのに、アルヌス協同生活組合の食堂、略して協生食堂の雰囲気はがらっと変わっていた。

野外席にも天幕が張られて、ちょっと雨が降っても困らないようになっていたのだ。さらにテーブルの数もかなり増えている。料理人も含めた店員の人数が増えていて、右肩上がりで増している客のニーズに応えられるようにもなっていた。

いよいよ屋台村的雰囲気が増して客で賑わっていた。

それでも、デリラはめざとく伊丹の顔を見つけると「よおっ、ダンナ。お帰りっ！」といつもと変わらず明るい声をかけて来る。それに釣られてか、見知った街の住民達は口々に声をかけてくれる。知らない顔には、彼らが伊丹のことを説明していた。

「イタミのだんな、お帰りっ！」

皆、気のいい連中である。殺伐とした帝都の悪所から戻ってきただけに、陽性の活気が身に染み渡る感じであった。

「で、なんでこの人数？」

柳田がうんざりしたような表情をした。その訳は伊丹の背後に控えている第三偵察隊の面々が理由であった。

「柳田二尉、本日はごちそうさまです」

二つ分のテーブルが占拠されて、「おねぇさん、とりあえず生ビール大を十二」という声に「は～い」という声が返ってくる。皆、飲んで喰う気、満々であった。

「おい、おい、おいっ、伊丹。ど、どうなってるんだ？」

「流石、柳田二等陸尉。太っ腹ですなぁ。みんな、多少は遠慮しろよ」

勘弁してくれよ、と柳田は財布を取りだして、中身のチェックを始めた。

いくらこの特地の物価は安いと言っても、十二人分を気軽に出せるほどではないのである。流石に、桑原曹長や仁科一曹あたりは苦笑して、調子に乗って高価な料理を注文しようとする若い連中を窘めていた。

隣のテーブルにはドワーフのおっさんが「がははは」と下品に笑いながら、隣にいるやつの頭をばしばしと叩き、ＰＸの売り娘さん達が、きゃぴきゃぴと黄色い声でお喋りを楽しんでいる。

そんな喧噪の中で、皆しばらくの間、飲んで喋って、食べていた。そして柳田は伊丹から帝都の様子や起きた出来事について報告書からは窺い知れない現場の声を聞き取っていた。

それも一段落した頃である。今度は柳田の方から水を向けてきた。

「伊丹よ、お前が居ない間に、面白い人物がお前を訪ねてきた」

「俺を？」
「緑の人ってのはお前達のことだろう？　その指揮官ってのはお前だ」
コダ村の避難民達が広めている噂は伊丹も知っている。その恩恵も充分に受けていると言って良い。実際にこの街の皆が伊丹に好意的なのも、組合幹部と伊丹が懇意というだけでなく、その噂が大本にあるからだ。
「で、どんな用なんだ？」
「ドラゴンを退治してくれとよ」
「へぇ、ドラゴンをねぇ……って無理に決まってるだろう？　あんな怪物相手なんて」
「まあ、実際の所は無理でもないんだが、諸々の理由で駄目だということになった」
柳田は、ヤオという娘が狭間陸将と面会し、ドラゴン退治を依頼したが、そのドラゴンが出没する場所が帝国とは別の国であるという理由で断られるまでの一連の経緯について説明した。その後、ヤオは片っ端から陸自の幹部に声をかけて回って、自分の同胞を救ってくれ、故郷を助けてくれ、と泣きついているという。
「痛ましい話だな」
「そう思うだろ？」
「でも、隊として駄目なら駄目だろう」
「確かにその通りなんだが、エルベ藩王国ってのは南にあってな。どうも石油が出るらしい。それ

とヤオっていう娘っ子はこんなでかいダイヤモンドの原石を抱えてきた。これも魅力的だ」
柳田は両手でスイカを抱えるくらいのサイズを示した。
だんだん話がきな臭くなって来た。伊丹としては、眉に唾を充分に塗りつけて、警戒心を喚起させたいところである。
「で？」と、俺にその話をする理由は何だ？　という意味を込める。
「お前、偵察に行ってみないか？　前も言ったと思うが、資源の探査という名目が付けば、お前達は相当自由に行動できる。気が付いたら国境を越えてました。ドラゴンと出くわしました。やっつけちゃいました……ってことになっても、問題は無いだろうと思ってな」
「おおありだっ！」
伊丹はテーブルをガンと叩いて立ち上がった。
「お前、アレと出くわしたことがないから簡単に言えるんだろうがな、アレはなっ、相当におっかないんだぞっ！」
伊丹の声に、皆静まり返った。食堂の客達も何事かと振り返る。
「どうしたんです？　隊長」
倉田ののんきな問いに、伊丹は声のトーンを一段と低くして答えた。
「俺たちだけで、ドラゴンを退治して来いってよ」
第三偵察隊の面々は唖然とした。自分達には、撃退するのがやっとだったからだ。追い払うのだ

って、もう一度やれと言われてもできる自信はない。
「ＬＡＭを百本ぐらい用意して、連べ撃ちでもしますか？」
勝本の軽口を無視して、伊丹は柳田の顔を覗き込むようにして言った。
「こいつらの過半数に死ねって言うのと同じだぞ」
ドラゴンの襲撃ではコダ村避難民の多くが犠牲になった。第三偵察隊に損害が出なかったのは、ある意味で逃げ足の遅いコダ村の住民達にドラゴンの注意が集中したからとも言える。真正面からぶつかったらどうなるか、容易に想像できるのだ。
「命令なら従うが、選択権がこちらにあるのなら、俺は嫌だね。死にたくないし、こいつらも死なせたくない」
すると柳田は、肩を竦めて「そうか？」というだけであった。伊丹の言葉など、聞くに値しないと言わんばかりである。そして、「だけど、お前はきっと行く。予言してもいい」とまで言う。
「そうなったら、形式は俺が整えてやるから、安心しな」と。
「なんで俺が、行くことになるんだ？」
「さぁな」
柳田はそこまで言うと「さてと……」と、伝票を持って席を立った。
「仕方ないから、今日は俺が奢ってやる。ま、これも、謝罪の前渡しだと思ってくれ」
「謝罪？」

訝しがる伊丹に対して柳田は右手を挙げながら、去っていった。
去り際にこう言った。
「金髪エルフの女の子のところに行ってみな……」

09

「ピニャ！」
「ディアボ兄様……どうされたのですか？」
慌てふためいてやって来る次兄を、ピニャは足を止めて待った。
いたずらに時間ばかり費やす議会を終えて、元老院議員達は今後の方策やら意見を互いに語りながら歩いている。その流れに逆らって、突然立ち止まった彼女によって、元老院議事堂跡地の回廊に、はた迷惑な渋滞が発生した。
かつて天井のあった場所は空に変わり、その空にも星が瞬く頃合いである。
突然の混雑によって肩をぶつけたり、押し合ったりで、手にした松明から飛び散った火の粉を浴びた壮年やお年寄りの議員達が、慌てふためいたり、眉を寄せたりしながら、ピニャの傍らをすり抜けていった。

そんな人の群れの中からピニャを捕まえたディアボは、他人の耳がある廊下を避けて、かつて小部屋があった場所へと連れ込んだ。そこは破壊された議事堂の中でも、比較的損傷が少なくて三方に壁が残っていた。内緒話をするには充分だろう。

「ゾルザルについてお前知っているか？」

「ええ。父上も兄様の立太子を決められ、帝位の継承が明らかとなりました。妾も一安心です。それが何か？」

「あの馬鹿が、何をトチ狂ったのか父上と張り合うつもりだ。この俺にもどっちに着くか旗幟を鮮明にしておくよう言い放ちやがった」

ゾルザルの部屋であった出来事を話して聞かせるディアボ。

だが、ピニャは次兄の言葉を理解するのに少しばかり時間を必要とした。

「……あの、実に兄様らしからぬ振る舞いですね。皇太子になっていよいよ増長して威張るとか言うなら分かるんですが。そのような賢しらな言動はものすごく違和感があります」

「俺もだ……いったいどうなってる？」

「妾に判じようがありましょうか？　それに兄様がいずれ皇帝に成られると言っても、父上の後見・監督を得てのこと。張り合えるはずがありません。いったいどうするつもりなのでしょう」

「当面の間は雌伏して機を窺うつもりらしいが」

「そのまますうっと雌伏していてはくれないということですね？」

ディアボは砂を吐き捨てるかのように言った。
「世の中には二種類の馬鹿が居る。一つは、自分が馬鹿であることを知っている、すなわち賢い馬鹿だ。もう一つは、自分を賢いと思っている本物の馬鹿だ。あいつはどうやら後者らしい」
「父上は当面は自分が後見して、自分亡きあとは、ディアボ兄の補佐で帝国を運営していくことを期待している……と、思っていたのですが」
「この俺が、アレの補佐だとっ!? そんなこと聞いておらぬ。この俺が、なんだってあいつの補佐を引き受けねばならんのだっ！ それならばこの俺が皇帝となっても良かったではないか！ くそっ、父上も早まった真似をっ！」
怒りに駆られたディアボは、崩れかけた壁を殴りつけた。弱っていた漆喰がその衝撃で崩れて埃が舞い散った。
「兄様。帝位の継承は長子相続こそが説得力を有します。人柄や能力の有無は、普段接する立場にない民草には理解できません。兵士達もです。ここで序列を乱して、能力の優劣によって帝位が得られるとなれば、自負心を持つ者なら誰しも『我こそは』と思うもの。そうなれば、国は千々に乱れましょう。
無論例外もあります。それ故に父上も、ぎりぎりまで迷っておられたのです。ですが、この国難の最中（さなか）、次子を後継に選んで兄弟が噛み合う事態になれば、いよいよ帝国が危うくなります。それを考えれば、ゾルザル兄様が帝位に就かれたほうがよっぽどマシだと思われませぬか？

ディアボ兄様は、ゾルザル兄様の背中しか見ておられぬようですが、ディアボ兄様の背中を見ている者は、この宮廷には大勢いるのですよ」

ディアボは、妹の理路整然とした物言いに驚いた。いつの間にここまで成長したのだろう。その言葉にも相当の説得力もあった。

ディアボは、兄と自分を比較して、実務能力も見識においても優れていると思うからこそ、自分が次期皇帝たらんと頑張ってきたのである。が、もし能力という物差しだけで次期皇帝を決めてもよいのであれば、自分の叔父や妹や弟達も競争相手となってしまうことを忘れていたのである。

そのことに気付いて見ると、この目の前に立っている妹はどうだろうか？

ゾルザルはこの妹を敵と親しすぎるという理由で競争相手と見なさなかった。彼女が所有する人脈を、利用することだけを考えていた。が、ディアボは逆に、敵国の軍事力とピニャの結びつきが恐ろしくなった。自分ならとっくの昔にその立場を利用しているからだ。

思わず背筋が寒くなった。

ピニャこそが、最も帝位に近い立場にいるということをディアボはこの時、はっきりと意識したのである。

自分に都合の良い王族を王に立てて、同盟関係を結ぶということは帝国もよくやってきたことだ。軍事において圧倒的な日本という国は、今それをできる立場にあった。そして皇帝たる父が、そのことに気付いてない筈がない。

ディアボは皇帝の思考を推し量る。推し量ろうとした。

あまりにも材料が少ないが、ピニャという存在を加味すると、ことさらこの時期にゾルザルを皇太子に立てたことで皇帝が描こうとしている将来の図絵がぼんやりとだが見えてきたような気がしたのだ。

日本という敵はお人好し。まともに戦わなければよい……。

その皇帝の言は、日本は利用しやすいという意味ではなかろうか？　民を愛し、義に篤く、信に過ぎる。そんな敵を利用するにはどうしたらいい？　ちがう、敵だった者すら味方にするにはどうしたらいいか？

それは、日本対帝国という対立の構図を変えてしまえばよいのだ。

どうやって？　その鍵となる者……それがピニャだ。

帝国内において、どうにかしてピニャと皇太子ゾルザルが反目し合う政治状況を作る。

一番良いのは、ゾルザルが軍事的な暴発を起こして日本との戦争を激化させることだ。ゾルザルに戦争を主導する役割を担わせる。そのためには一時的にでも軍事的な優勢か、優勢と錯覚させるような混乱した状況が必要となるだろう。これは政治とは別の技術的な問題なのであとで詰めることにして……。

もし、この構図が成り立つなら戦争を終わらせることを大義名分としたピニャと日本の共闘は容易に成立する。日本の力でゾルザルを廃して、ピニャが帝位に就くという目もあり得るわけだ。

こうなればそれまで敵だったはずの日本は、ピニャ＝帝国の同盟者だ。これによって日本は帝国の覇権を支える後ろ盾となり、さらに帝国はその進んだ文物を他国に先んじて吸収することもできる立場となるわけだ。退位することで責任をとった父は、その玉座をめぐる争いとは無縁の立場となる。ある意味、ゾルザルを生け贄とすることで、自分を安全なところに置くことが出来るわけだ。

ピニャのことだ、帝位に就いたとしても父を蔑ろにするようなことはしまい。というより国政に携わる人材を自前でそろえられないピニャは、兎にも角にも父の息のかかった者を用いざるを得ないのだ。つまり、裏で操ることが可能なのである。

「う～む」

こうして冷静に考えてみれば、ゾルザルの語った「退位した皇帝対現役の皇帝たるゾルザル」という対立の図式よりも、ピニャを隠し玉として日本という敵を味方としてしまう皇帝の絵図のほうが、遙かに現実的に思えた。

ゾルザルには父と競っていく意思はあっても、それを現実にしていく構想力で一歩も二歩も劣っている。さらに、構想を具体化していく現実的な『力』にも欠けているのだ。

ディアボは、兄のはったりにも似た詐術から目が醒めたような気がして、ホッとした。

こうなればゾルザルに味方することは、大変に危険なことである。かといって皇帝に味方したとしても、ディアボには生きる目がない……。精々、父の傀儡たるピニャの補佐をするだけの一生に成り果ててしまうだろう。

帝位を狙うディアボとしては、さらに考えるべきは、ピニャの立場に自分が割り込むにはどうしたらいいかであった。それには、とにもかくにも日本と縁を結ばなくては成らないがその点でもディアボは大きな遅れを取っている。

ディアボは考える。

皇帝の構想を真似てみては……と。

皇帝は、ゾルザルと自身の対立という単純な図式を、ピニャと組んだ日本という第三勢力を持ち込むことで、自分を天秤の支点とすることを試みている。

と、すればディアボに出来ることは、第四の勢力を構成することだ。そして状況に対するキャスティングボートを握ることで後継者争いの先頭に躍り出るしかない。

問題は何を味方とするかである。

諸外国や諸侯を糾合するというのも一手だ。勿論、皇位の座をめぐる争いに加わるには、帝国軍と互角な勝負に持ち込めるくらいの力は欲しい。もし、こちらに無いのなら、日本の国内、あるいは日本という国の外はどうだろうか。そういった力を持つ勢力はないのか？

「……？　兄様、また考えすぎておられるのでは？」

これだけの沈思黙考を続けていれば、誰もが変に思う。

「ゾルザルの兄様は考え無しなので困りますが、ディアボ兄様は考えに過ぎるところがありますね」

ピニャの呆れたような視線に気付いて、ディアボは自分の後ろ暗い思考を誤魔化すためか、あるいは考えすぎる性格に対する非難を糊塗するためなのか、ことさら言い放った。
「いったい誰だ!?　あのゾルザルをホントの大馬鹿に仕立て上げたのは」
「そんなに、馬鹿、馬鹿と貶さずとも……それに、ゾルザル兄様も、本当にそれだけの力をお持ちで、これまで韜晦してこられたのかもしれませんよ」
「あり得ない！　あれは馬鹿だ。だってそうだろう。皇帝たる父を恐れて、頭角を隠してきたのなら、父が亡くなるまで隠し続けているべきだ。それをこのような時期に暴露するなんて馬鹿でしかあり得ない」
「あの、兄上。いささか口が過ぎるのでは？　立太子された嬉しさに、自分を抑えきれなかっただけかも知れませんし」
「だってホントに馬鹿なんだもんっ、しょうがないじゃないかっ!!　俺たちが思っていたような小馬鹿だったら、まだマシなんだよっ!!
　それが身を守るために小馬鹿を演じているつもりで馬鹿に磨きをかけて、しかも、本当の自分は天才なんだと勘違いするぐらいの大馬鹿になっちまったんだ、あいつはっ!!
　いいかピニャ。大馬鹿は恐いぞ。なまじ変なところで小知恵がまわるから始末に負えないんだっ!!　小商売で成功して、大商売でずっこける大馬鹿商人が世に尽きぬように、あるいは天才とアレが紙一重なのと同じでな。大馬鹿はまわりを巻き込んで盛大に破滅してくれるんだ。

もう彼奴のことはいい。問題はピニャ、お前だ。お前も少しはこれからのことを考えておけよ」

最後のそれは、これからお前を中心にこの帝国が動いていくことになるかも知れないという警告であった。この帝国をどうするのか何の見識も持っていないようなら、後ろに立っている者（自分も含めて）がお前の背中を見ることになるぞ、という宣告でもある。

「妾なら、とうの昔に考えておりますが」

「そ、そうか？　やはりな、そうでなくてはならぬ」

やはり帝位もその視野にいれていたようだ。油断のならない妹である。だが……勝負は最後まで分からないものだ。負けるものかとディアボは拳を握った。ところがピニャの答えは、ディアボが予想したものの斜め上を行っていた。

「妾は、芸術の擁護者となります」

まるで自分の立場を理解していなかったのである。

＊　＊

テューレは、自らの首にかけられた革製の首輪をいまいましそうにむしり取って投げ捨てると、狭苦しい私室の、きしみを立てるほどの粗末な寝台に倒れ込むように身体を投げ出し、俯せに横たわった。

二の腕や首には、痣や真新しい歯形痕が残っていた。ごしごしと指で擦ってみても肌からその痕跡が消えることはない。擦ったところで消えることがないことは分かっているが、擦らずにはいられない。そんな心境であった。

「……」

小さなため息を一つ。すると寝台の下からくぐもった嗄れ声が聞こえた。

「テューレ様。ボウロでございまする」

横たわったまま、まるで寝言のように応じるテューレ。

「なに？」

「アルヌスへ送り込んだ手の者からの報告が参っておりまする」

「そう。そこにおいておいて、後で読むから」

何もかも忠節故とは思って感謝こそするが、今は疲れ果てている。こんな時はどのような親しい者であっても他人の存在は疎ましく感じるものだ。

報告を届けるだけなら用件も終わったことだしこれでボウロも去るだろうと期待する。だが、テューレの忠臣は立ち去らなかった。

「テューレ様。ゾルザルが皇太子となれば、いよいよ帝国も終わりでございますな」

思わず無音の舌打ちをするテューレ。見えないことを良いことに、眉根を寄せて唇を噛んだ。さっさと立ち去れという言葉が、喉元まであがってくる。だが、ボウロは彼女にとって唯一無二の臣

下であった。ボウロなくしては、自由のないテューレはゾルザルの籠の鳥でしかないのである。だから、あまり強い拒絶も出来なかった。

この醜男は報酬を求めているのだ。忠節に報いるのに報酬は当然のこと、であるが……テューレはうんざりとした気分になる。ゾルザルに続いて、この男にまで。

テューレは頭を抱えつつも、寝返りをうつように俯せから仰向けとなると、ベッドの淵から片足を落とした。

やがて、水の滴り跳ねるような音とともに、足をナメクジの這いずるような感触が伝わってくる。唇を噛んで不快感を堪えつつ、テューレは、気を逸らすように言った。

「アレを煽て上げて、自信過剰にまで追い込むのにも苦労したのよ」

貴方は偉大な人、本当はできるのに他人は貴方を評価しない。それは天才を凡人は理解できないから。言いたい人には言わせておきなさい。貴方のことは私が存じています。

貴方は力強くて凛々しい。その颯爽とした振る舞いに人々は目を惹かれます。貴方が、いえ、貴方だけが真に正しいのです。

貴方は素晴らしい。貴方の発想は斬新すぎるのです。凡俗には理解できません。

天才は、凡人のようにあらねばならぬ理由はありません。したいようになさってください、それが正しい答えです。

皇帝は貴方を恐れています。だから、立太子しないのではなく、できないのです。皇帝は恐ろし

い人、貴方の慕っていた義兄を殺しました。その恐ろしい人物が恐れるのだから、貴方はやはり素晴らしいのです。義兄のように殺されないためにもここは雌伏すべきです。才能を隠すのです。能力を隠すのです。無能を演じるのです。今の貴方は無能を演じているだけなのです。

テューレが甘い吐息と共に、彼の耳に注ぎ込んだ蜂蜜漬けの言葉は、ゾルザルの魂を確実に捕らえて太らせた。

彼女の語った耳心地のよい嘘を信じ、それを基盤としてさらなる嘘を信じ、それを信じるために自らに嘘を塗り重ねていく。ここまで来ると、本人は微塵も疑わずに信じ切っている。もとよりあった根拠のない自負心と自尊心がより膨れあがり、他人から吹き込まれた考えすら、自分の発想と錯覚する。それどころか、他人が自分の考えを盗んだとすら考えるようになってしまった。

「お人好しの異世界の軍など恐れるに足らない」、そんな皇帝の言葉が耳に入った途端、「俺のアイデアを我がもののように言いやがって」と考えているのだ。

「でも、油断しては駄目よ。講和は何としても潰さないと。何としても戦争を続けさせるの。火に油を注ぐの。この地上のヒト種が憎しみ合って、罵りあって、殺し合い、奪い合い、破壊し合って帝国が滅んで、王国が滅んで、街が滅び、村が滅び、ヒト種がこの地上から消えていくまで、決して手をゆるめては駄目。そうして初めて、私の復讐は完遂されるのよ」

「ならば良い考えがございまする。ニホン人奴隷を始末いたしまする。たかが一人二人の同胞が奴隷となっていたと知っただけで、元老院を破壊するくらいなのですから、残りの者が殺されてしま

ったと聞けば、大いに理性を失うこと請け合いでございまする」

「たかが、一人二人の同胞が奴隷になっていただけで、怒り狂って攻めて来た」のくだりはテューレの胸中にあった正体不明の苛立ちを怒りへと変えた。

自分の時には誰も助けに来てくれなかったというのにっ！

誰も助けてくれなかった。誰も同情してくれなかった。

誰も自分のことを案じてくれなかった。

しかも、生き残った仲間は、自分が一族を裏切ったという嘘を信じて、この身をつけ狙ってすらいると聞く。

それだけは、絶対に許せなかった。

自分は故郷を守るために自らを犠牲にしたのだ。なのに誰も、何も返してくれない、愛してくれないなどという理不尽は、断じて許せなかったのだ。そして、その怒りは同じ境遇にあったにもかかわらず、救いの手が差し伸べられた紀子へも波及する。

「甘いわね。とっても甘い。私たちが手を下しては駄目。帝室の者に手を下させる方法を考えなさい。できればピニャがいいわ。でも、無理ならディアボでもいい。どちらかにノリコを殺させるの。そうすればニホンと帝国、そして元老院と帝室の関係も最悪となるでしょう。戦争は続く。果てしなく続くわ。戦争が大きくなる。ヒト種が殺し合って大地は骸（むくろ）で覆われる。父と母と弟と一族の故郷を亡ぼしたゾルザルも、帝国も、何もかもが滅びるの。それは私にとって、大いなる喜びなのよ。

そうすればボウロ、私はお前の望みを叶えましょう」

テューレの腿にまで舌を這わせていた豚と犬をかけ合わせたような醜い男が、瞳を輝かせてその表情を歪めた。笑ったのだろう。

「かしこまりましたテューレ様。乏しい智慧を絞ってみます。ですからお約束、なにとぞお忘れ無く。いひひひひ」

＊　＊

アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、中国、そして日本の外相の集まる会議の場で、嘉納太郎（かのうたろう）は耳につけたインカムにふさがれた耳の穴が蒸れるのを、じゅくじゅくと痛痒く感じていた。

通訳の声が流れるインカムを外して、何度か外耳道の空気を入れ換えようと試みる。だが生来からの熱しやすい体質に加えて、交わされるやりとりの内容が彼の情緒を強く刺激するようなものであったために、いささか体温が上がり気味なのだ。それを抑えるのにも、理性の総動員が必要だった。

嘉納はため息を一つつくと、斜め前方に座るロシアのウラジミール外相に向けて語った。

「そのような要求は到底受け容れかねる。銀座と言えば、我が国の政治経済の中枢、首都東京であ

る。そこに武装した外国の軍隊を無条件で受け容れるなど、どうして出来ようか。まして我が国は貴国ロシアを信用できない。グルジアの南オセチア州でなされた極悪非道の侵略行為はつい最近の出来事である」

通訳が嘉納の日本語をロシア語に翻訳するのに、若干のタイムラグが生じる。この間に、嘉納は机の上に置かれたミネラルウォーターを口に含んで一息ついた。顔色を変えたウラジミールが、嘉納に向かって強い口調で何か言い始めたが、ロシア語など分からない嘉納は、それが日本語に翻訳されるのを素知らぬ顔で待つだけである。

通訳の翻訳は以下のようなものであった。

「そのような悪意に満ちた誹謗を我が国は受け容れるわけにはいきません。南オセチアにおける我が国の軍事行動はあくまでも自国民保護を目的としたものであり、非難されるべきは、民族浄化を図ろうとしたグルジア側にあります。我が国の軍事力の行使はあくまでも適正なものであり、何一つ非難されるようなものはないのです」

嘉納は「わらっちまうぜ」と肩を竦めながら、隣の外務次官へと一旦視線を向けた。外務次官は、この表舞台とは別の場……すなわち裏で為される影の交渉（別名「テーブル下の交渉」）の結果、アメリカ、イギリス、ドイツの賛同を得たことの報告を得て嘉納にメモを示した。

メモには「概ね賛同を得る。条件次第」と書いてあった。

「俺が見たのは、報道関係者に向かって銃をぶっぱなすロシア兵の映像とか、そんなんばっかりだ

ったぜ……」

通訳が嘉納のべらんめぇ口調をどのように翻訳したのかは分からないが相当に刺激的な意訳だったらしい。

ウラジミールはテーブルを拳で叩くと、顔を真っ赤にして腰を上げた。

「それは西側報道機関の捏造です！」

「現場生中継を捏造とはちゃんちゃらおかしくて嗤えるねぇ。後々になって出してきたロシア側の新証拠とやらの方が捏造だろうに。いずれにせよ、我が国は貴国を信用できない。よって、ロシア側の要求は断固拒否する」

ロシアの外務大臣は、握り拳を作ったまま他国の大臣の顔を見渡した。

この主要国外相会議は、経済や政治上の様々な問題を検討するために設けられた。当然、日本国の東京に忽然と現れた『門』という現象も議題に上がった。

それは日本国内で起きた出来事であるが故に、本来は日本だけの問題であった。そして『門』は日本だけの物のはず。

だが、その『門』が多大なる利益をもたらすことが分かると、『門』がもたらした負の利益、戦災のことは忘れ去られて利益ばかりが注目を浴びたのである。

各国の要求は、すなわち「独り占めするな、こっちにも寄越せ」というものであった。

『門』に多大な興味を示しているのはここに集まった八カ国ばかりではない。韓国、インド、台湾、

ブラジル、メキシコ、オーストラリア、シンガポール等々、新興の国々がそろっている。

首相の森田はこうした国々の国際圧力に屈する形で、大幅な譲歩を決断したのである。

もちろん譲ってばかりというわけにはいかない。日本には日本が求めるべき国益というものがある。人の家に欲しいものがあるからといって、土足でずかずかと上がって良いはずがない。言うべきは言い、突っぱねるべきは突っぱねなければならない。

閣議における嘉納や夏目の主張が取り入れられ、総論において受け容れても、各論において非常に強い制限を加えていくという方針が定められたのである。

こうして『門』の利用や、日本が他国を受け容れるための枠組みづくりが、ここに集まった八カ国で取り決められようとしていた。

今度は中国の外相が発言を始めた。

「我が国は、日本国が特地において、かつての帝国陸軍のような蛮行を行っていることを危惧しています。東京の治安や安全を脅かそうという意図はないので是非信用していただきたい。我々が求めるのは特地に立ち入り、日本軍の活動を監視し、我が国の権益を守るための最低限の戦力を受け容れていただくことだけである。あまりにも頑なに拒絶する態度は、何か人に見られたくないような行為をしているのではないかという疑念が生じるので注意していただきたい」

嘉納は、似たようなことを韓国の大使が言っていたことを思い出した。

「安心していただきたい。日本国は第二次世界大戦に敗戦して以来、民主主義の国家となっている。

ウイグルやチベットで某国が行っているような武力弾圧とか虐殺とかは一切していない。実際、我が国の野党が現地の住民を国会に招致して意見を求めたが、自衛隊の行動の適正さを証言してくれたくらいである。それでも疑わしい、どうしても見に来たいというので有れば、受け容れることも吝かではないが、当然のことながら条件がある」

続く言葉を各国の外務大臣達は身を乗り出して待った。

「まず『門』が東京にある以上、特地に入るには必ず東京を通過しなければならない。だが、一国の政治経済の中枢に、他国の軍事力を受け容れさせるという非常識をこの外相会議が強いる以上、以下の条件が認められなければならない。

それは、日本国領土内を通過する段階では、各国の軍隊、それに所属する兵士は、我が国の法に従わなければならないということである。我が国は武器管理においては厳重な法の規制下にあり、銃砲火器刀剣等の携行は絶対に認められない。これらの装備を特地まで輸送するに当たっては、分解し、完全に梱包し、弾薬なども我が国の爆発物取り扱い等の法に従って移送されなければならない。またこれらの輸送も、我が国の法に従って粛々と為されなければならない。則ち交通ルールを守れということだ。守られなければ当然、我が国の法に従って、刑罰を受けることとなる。また、これらの条件が適切に為されていることを確認するために、荷物等の検査も当然ながら受けていただく。これの拒絶もまた、ペナルティの対象となる。

もし万が一、外国の兵が、武装して『門』を出て銀座の土を踏んだら、我が国の法を犯した者と

して、その理由の如何を問わず、当該将兵はその場で射殺され、車両等は撃破される。また、その兵の所属する国家は、不法行為に対する賠償として兵士一人あたり米貨にて百万ドルの罰金を支払っていただく。さらに我が国の建物や施設財産等を損壊させた場合も、それに見合った額を加えて支払っていただく。

なお、これらの金員は、あらかじめ保証金として我が国に預けていただく……従って、特地へ派遣する兵の人数に応じた保証金を積んでいただくということである。十人なら一千万ドル、百人なら一億ドルということである」

もう、この段階で各国の外務大臣の顔は真っ青だった。

日米安全保障条約があるアメリカの外相だけは、苦笑いしている。米兵が武装したまま日本国内を移動することは、条約で認められているから、これらの条件はほぼクリアされるのである。問題は保証金だが、日米の関係においては、返還させることが決まっている限り何の心配もない。さらに、『門』から得られる利益はこれを度外視できるほどに大きいと試算されているのだ。

またイギリス、ドイツも、顔色を青くしながらも、次官とひそひそと何やらメモをやりとりしながら検討していた。

実は、両国とも大昔のようなやり方で特地に領土や権益を広げる意図を放棄していたからだ。両国ともアメリカ同様に、小さな『門』しか補給路のない特地に、大軍を派遣することの危険性に気付いたのである。従って、日本を応援して分け前を貰うという方針に切り替えていた。

そうなると必要な戦力は形ばかりの監視と、特地の情報収集に必要な少人数でよいことになる。その程度なら両国とも保証金は問題にならないと考えたのである。

カナダやイタリアは、何やら補佐官とひそひそとやって、本国と連絡を取り合っている様子が見受けられる。これも机の下の交渉が進んでいて、各論の問題で交渉になっても、総論では受け容れることになるだろう。

問題は、現代にもなお海外植民地を有するフランス、武力侵略もへっちゃらなロシア、領土領海の拡張と異民族の武力弾圧に余念のない中国であった。これらの三国は、日本の要求に対して苦い顔をして首を振った。

これらの国は、百年ほど昔になされたような、植民地的な権益を狙って特地に対する軍事力の大量投入を考えていたのである。

補給物資等の輸送の問題についても、フランスにはそれなりの考えがあるようだが、中国やロシアは自国と日本が近いこともあって、さほど輸送距離もなく、さらに自国で普段当たり前にやるようなノリで軍事優先が通じると思い込んでいるのだ。そのために日本の道路事情の特殊性に考えが至っていない。

さらに中国は、増えすぎた人口を、特地に移民させるという荒技を考えていた。

自国民を移住させて、自国民保護を理由として軍事的に支配していくやり方だ。しかし、これだと送り込む人数に応じて保証金を積めという日本の要求には、当然のことながら頷くことは出来な

い。

「我が国が、日本国の経済や政治に悪影響を及ぼすような行為をするはずがありません。従って、このような過剰の保証金は不必要だと思われます。それに、兵士が武装したまま『門』から東京に出たというだけで、その場で死刑とはあまりにも野蛮なことです。どうぞ、再考していただきたい」

嘉納は、フランス外相の言葉に対してこう答えた。

「嫌だ」

何を言われたのか分からないのか、フランス外相は目をパチクリとさせている。

「なんと言われましたか？」

「お断りすると申し上げた。これらの巨額の保証金は、過剰な戦力を入れることを防ぐためだからである。我が国は特地の秩序を乱したくない。特に、現在は特地内の『武装勢力』と非常にデリケートな交渉の真っ最中であり、これをいたずらに混乱させれば、終わる戦争も終わらなくなってしまうおそれがある。また、フランスは我が国の政治・経済の中枢を混乱させたり、攻撃したりするおつもりか？」

「そんなことあろうはずがありません」

「『門』を越えてフランス兵が銀座に出て来るおそれは絶対にないと言い切れるか？」

「無論」

ならば、問題ないでしょうと嘉納は大きく切り出した。
「フランス兵が銀座に武装したまま出て来ることなど絶対にないと言われるのであれば、多少重めのペナルティを決めておいたところで心配する必要はない。誰も罰されるような事は起きないのだから。そうでしょう？　それとも誰か罪を犯す予定がおありですか？」
嘉納のこの言葉を最後に、この日の会議は終了することとなった。

＊　＊

一方、世界の思惑や水面下の動きを余所に、伊丹はアルヌスの街をうろうろとしていた。
嫌な予感がした。
ものすごく嫌な予感がしたのである。
柳田の言った金髪エルフと言えば、このアルヌスではテュカしかいない。
伊丹はテュカが嫌いではない。いや、どちらかというと好きな部類に入る。……正直に言えば非常に好みである。見栄えだけ取り上げてみても、彼女の魅力を数え上げるのに苦労を要しない。美しい顔立ちに、透き通る蜂蜜のような髪、そして温もりを感じさせる肌に包まれた、ほっそりとした肢体等々。フィギュアにして飾っておきたいくらいだ。
その碧（あお）い瞳は、伊丹には見えない精霊の類を見通す力があって神秘的ですらある。

もし彼女が何も抱えていなければ、もっと積極的に話をしたいと思ったろうし、もっと関わりたいと思ったろう。だが、伊丹は彼女との間に越えられない壁の存在を感じて、それが出来なかったのだ。

その壁とは、彼女が精神に大きな爆弾を抱えていたことであった。

「金髪エルフのところに行ってみな」

柳田の嫌な表情。そしてその言葉の響き。

どうしたって、いつ炸裂するか分からない不発弾をかかえる彼女の精神のことを思ってしまう。

これまで伊丹がしてきたことは、その不発弾を炸裂させないように、不用意な衝撃を与えないようにすることだけだった。

それしか出来なかったというのもあるが、一度、彼女の心が平衡を欠けば何が起こるか分からなかったからである。

否、逆か。

何が起こるか予想が出来るからこそ、それを見たくなかったのである。見たくないから目を背けていたのである。

柳田と別れた後、伊丹は部下と別れると街の居住区、仮設住宅の並ぶ区画あたりで、うろうろとしていた。

テュカの様子は見に行かなければならない。だが、もし自分が恐れていた事態が起こっていたとしたら、と思うとどうにも近付けないのだ。そんな葛藤の間で揺れ動いて、四半時ほど行ったり来たりとしている。まるでストーカーのようであった。

女性の部屋の近くでそんな挙動不審なことをすれば、当然のことながら怪しまれてしかるべきものだ。が、アルヌスの協同生活組合の子ども達やお年寄り達は、伊丹の人となりをよく知っていた。だから、怪しむよりは気軽に声をかけてくる。

「イタミのおじさん。こんばんは……どうしたの？」

それはレレイよりも二つ三つ下の男の子だった。

洗浄した翼竜の鱗を入れた箱を抱えているところを見ると、こんな夜遅くまで作業をしていたようだ。

組合がここまで大きくなって、使用人の数も増えたというのに、コダ村の住民は働き者ばかりで現場から離れない。立場にあぐらをかかないのだ。人を雇っているという意識がないのかも知れない。どんどん増えていく従業員を見る目が、新しく村の人が増えた……ぐらいの感覚で、もちろん仕事の仕方や働き方には注文をつけるけれど、大抵は率先垂範。なので従業員達はボスの目を盗んでサボるということも出来ないでいる。って言うか、子どもが一生懸命働いていて給料をもらっている自分達が怠けていたら、不味いだろ大人として……と思わせてしまうのだ。

さらに彼らは、とても純朴なので、自分に出来ないことをする専門家、例えば傭兵とか、営業と

か、大工仕事といった技能を必要とする仕事をする者には、ちゃんと敬意を払うのだ。「これは、こうすると、うまく行くんだよ」「へぇ、おじさん、すご〜い」という感じである。これで、働く気になれない輩がいたら、相当なへそ曲がりだ。

こんなところが、ここが『天国』とか『良い職場』扱いされる理由かも知れない。それでいて、経理などの要の部分は、レレイとか、テュカとか、ロゥリィとか、カトーがしっかりと掌握しているので、舐められるということもない。しかも自衛隊の目も光っている。

かつて釣り銭勘定をごまかすことを試みたとある不真面目な従業員は、暗算という恐るべき技術を有する日本の兵隊（特地では普通、暗算が出来るような者は、同じ軍隊でももっと良い仕事をしているものだ）に看破されて、大いに冷や汗を掻いたらしい。ちなみにその男は、お金を扱う職場から配置転換された上に、ダークエルフの女性に対する婦女暴行未遂事件を引き起こしたので解雇されて、イタリカへと身柄を送検されている。

そんなわけで、少年が足を止めると一緒に働いていたホビットの男性があわてふためいてやってきて「あ、ぼっちゃん。私が運んでおきますよ」と鱗の箱を受け取って倉庫へと運んでいく。おかげで手の空いた少年は、伊丹の下へとやってきて、先ほどと同じく「どうしたの？」という質問を揶揄するような表情で繰り返した。

「いや、ちょっとな」

「もしかして、夜這いとか？」

なんともまぁ、ませた子である。だがレレイの二つ下なら十三歳。大人の間で育った子供ならこれくらいのことは口にしても変ではないかも知れない。こういう場合、普通の大人なら叱ったりするんだろうか？　放っておくのだろうか？

伊丹の場合は、どこでそんな言葉を覚えたんだろうと思いつつもそれ以外は何とも思わず、ただ「違うよ」と否定する。その上で「そういうことは、思っても口にするなよ。変な噂で傷つくのは女性なんだからな」と、しっかりと言い含めるのである。

「言って回ったりなんかしないよ。ただ、聖下（ロウリィ）の部屋なら裏手だし、レレイ姉さんの部屋なら向こうだから、もしかしてテュカさんにまで手を出そうとしてるのかなぁ、とか思っちゃったんだ」

「おいおい、レレイに手を出したら犯罪だぞ。日本には、児童福祉法とか、青少年育成条例というのがあるんだ。それと、テュカに用があって来たのは確かだが、夜這いとは違う」

ロゥリィのことをあえて言わないのは、年齢的には条件がクリアされているからだ。とはいっても、手を出した訳でもないのにレレイには既に手をつけた、と思われているのも心外なので、その点についても充分に抗議しておいた。

すると少年は、わずかに首を傾げた。

「……おじさん、もしかして、三日夜のならわしって言葉を知らない？」

「なんだそれ？」

「……駄目だ、こりゃ。もう、し～らないっと」

ぷぃと背中を向けて去っていく少年に、お前は、故いかりや長介氏か？　と思いつつも、伊丹は彼が呆れている理由には気を留めなかった。どちらかというと、少年に声をかけられたことでテュカの部屋へと赴く決心がいよいよ固まって、そのことばっかりに気を取られていたからである。

テュカの部屋のドアをノックする。

返事を待つ間、仮設住宅のドアの前で見たくない光景を想像してしまった。

浮かんでくるのは、かつての母の姿だ。青い顔をして髪を振り乱し、壁にゴツ、ゴツと額を打ち続けているその姿は、まるで幽鬼のように思え、見た瞬間に背筋が凍ったものである。

「生きてるのよ」「そう。生きてるの」「死んだりしてない」「生きてる」「だって、何もなかったもの」「だって殺さなきゃいけないようなこと、何もなかったもの」「そうよ何もなかったのよ」「でも、いないの」「いないのよ」「どこにいるの？」「あの人を探さなきゃ」「探

さなきゃ」「探さなきゃ」

恐い想像を振り払うように頭を振る。
寒さなどまったく感じてないはずなのに、全身が総毛立っていた。
しばらく待つと、戸が内側から開いた。
「よお、テュ……」
テュカへ挨拶するつもりが、伊丹を出迎えたのはレレイであった。ランプの灯された室内には、黒ゴスのロゥリィの姿もある。
「入って……」
表情の乏しいレレイの声には、まるで何かを周囲に知られることを恐れるような響きがあって、伊丹も素早く対応した。
すぐに室内に入って、後ろ手で戸を閉じる。
すると、都合三人分の視線が伊丹を迎えた。
一人は、ロゥリィ。緊張で強ばっていた表情が伊丹の姿を見て、わずかに緩む。
一人は、レレイだ。見ているこちらが不安になるほどに無表情だ。
そして最後の一人が、テュカだった。
木製の寝台に腰掛け、髪を振り乱して何かに怯え、恐れ、憔悴していた表情が、伊丹を見た途端に明るい笑顔に変わる。目を涙で潤ませておもむろに立ち上がると伊丹に体当たりするかのように駆け寄って、全身で掻き抱くようにしてしがみついて来た。

伊丹に抱きついて、テュカはロゥリィとレレイの二人に言い放った。
「ほら、見なさい。帰ってきたじゃない」
「……」
「……」
ロゥリィの痛ましそうな表情、レレイの情緒を含まない無機的な視線がテュカを経由して再び伊丹へと集まった。
伊丹は、何が起きているのかと困惑して、「なにが、どうなっている？」と説明を求めようとした。だがそれよりも早くテュカが言う。
「二人とも、いくら冗談でも言って良いことと悪いことがあるのよ。いくら二人でも度が過ぎると怒るんだからね。それに……あの嘘つきダークエルフっ！　あとで絶対にとっちめてやるんだからっ！　街から追い出してやるっ！」
伊丹を抱きしめる力がちょっとばかり増す。どうやらテュカは大いに憤っているようであった。
伊丹は、恐る恐る尋ねてみることにした。
「な、なぁ、テュカ。いったい何があったんだ？」
「聞いてよ。二人とも、父さんが死んだなんて言うのよ。もう、笑っちゃうわ」
「父さんが、亡くなった？」
伊丹は追加説明を求めてテュカからロゥリィとレレイに視線を向けた。だがロゥリィは痛ましそ

うに視線を背けるだけ。レレイもじっと伊丹へと視線を注いで成り行きを見守っているだけだ。
「そうよ。でも二人は悪くないの。悪いのは、あのダークエルフなんだわ」
「ダークエルフって？」
「知らないの？　もう街中で有名よ。故郷の集落を助けてくれって、緑の人に助けを求めに来たのよ。でも、自衛隊の人に断られ続けて……あたしたちも同情したから、とりあえず寝るところくらいは提供したんだけど、とんでもない恩知らず。何が気に入らないのか、いきなり父さんが炎龍に殺された。死んだと認めろ。認めて敵討ちをしろっ、緑の人に助太刀を頼めって言いだして。失礼しちゃうわよ」
「……敵討ち？」
「そう。いくら助太刀が欲しいからって、嘘をついてまでって呆れちゃうでしょ？」
「嘘なのか？」
「だって、父さんが死んだなんて。炎龍に喰い殺されたなんて、馬鹿みたいじゃない。こうして生きてるんだから。そうでしょ？　父さん!?」
テュカの紺碧の双眸は伊丹を見て「父さん」と呼びかけていた。
伊丹を見ているようでいて実は何も見ていてない狂気に満ちた視線と飾っておきたいほどの笑顔。
それは伊丹の記憶の奥底に閉じこめた古い記憶を、否応なく揺さぶり起こした。
瞬間、伊丹の胃袋は締め上げられた。

柳田に奢らせて、食べて飲んだもの全てが胃から逆流してきた。
思わず口を抑えるが、押し留めることは不可能だった。戸を開けてテュカの部屋を出るのが早いか、その場で吐いてしまう。絞るようにして根こそぎ吐いた。吐く物がなくなれば胃液を吐き、それでも吐き気は止まらない。
「いったい、どうしたの!?」
テュカの悲鳴にも似た声があがった。心配してなのか背後からしがみついて来たが、伊丹はそれを振り払う。絞り上げられる胃が激痛を訴え、じっとしていることなど出来なかったからだ。
「ちくしょうっ！　なんてこった」
吐瀉物にまみれながら伊丹はのたうち回る。
くそっ、誰だテュカを壊したのはっ！
背後からレレイの魔法の呪文を紡ぐモノフォニー（一人和声）が聞こえる。
途端、伊丹の意識は霞の中に沈み込むように途絶えた。

目が醒めると、仮設住宅の天井が視界に入った。
窓の外は既に深夜。だがランプの薄い暖色の明かりが、世界を闇と光の狭間に留めていた。
「ようやくぅ、お目覚めぇ？」
枕元の椅子に腰掛けるロゥリィが、左側の頬だけを微笑みの形に歪めた。ロゥリィの背後にはテ

ュカの寝台があって、小さくテュカが寝息を立てているのが見えた。
伊丹が寝ているのはテュカが父親の物と決めていた寝台だ。テュカは、使う者などいないのに定期的にシーツを替え、毛布を干すなどしていたのだ。
「げぇげぇ吐いてるヨージをレレイが眠らせたのよぉ。そしたらテュカったらぁ、すっごく取り乱しちゃってぇ……お父さんが死んじゃうってぇ」
ロゥリィの傍らに立っていたレレイの左頬は赤く腫れ唇が切れていた。
「どうしたんだ？」
答えないレレイに代わってロゥリィが「テュカを眠らせるのにちょっとね」と肩を竦めた。
伊丹は仰向けになったまま、大きく息を吐いた。
幸い、先ほどの吐き気は一時的なものだったようで、吐く物もなくなった空っぽの胃袋はわずかにしくしくとした痛みを訴えるだけだ。
「事情を聞かせてくれるな？」
「どう話したものかしらぁ？」
ロゥリィは、レレイに視線を送りながら足を組み替えた。レレイはそれを受けて、一歩前に出た。
レレイの説明に寄れば、事の発端は、レレイがヤオという名のダークエルフを連れて来て、彼女に宿を貸したことから始まるという。
「ヤオ？」

「わたしぃのことをガキって言い放った女がいたじゃない？」
ロゥリィと差し向かいで呑んでいた時に、何やら言いがかりをつけてきたあげくに伊丹にサーベルを向けたダークエルフを思い出した。
「ああ、彼奴か」
彼女は炎龍に襲われた故郷を救うために、緑の人を求めてやって来たという。ところが、自衛隊は彼女の求めを断った。
「その辺のくだりは柳田から聞いてる。だけどそいつがいったい何故、テュカにオヤジさんが亡くなったという話を吹き込むことになるんだ？」
「それは、此の身より話そう」
いつの間にか、ドアの前にダークエルフの女が立っていた。
頭や顔を覆うターバンを解きながら、ヤオは進み出て素顔を晒す。その表情は不敵を越えて最早邪悪なまでに歪んだ笑みを浮かべていた。
ロゥリィはチッと舌打ちしながらハルバートに手を伸ばし、レレイも杖を引き寄せる。二人とも明らかな敵意を示していた。
「挨拶が遅れた。緑の人よ……此の身はヤオ。ダークエルフ、シュワルツの森部族デュッシ氏族。デハンの娘ヤオ・ハー・デュッシ」
深々と頭を垂れる。

「名乗りなら、前に受けた」
「そうだったな。その節は失礼した。ロゥリィ聖下を稚い女児と勘違いしてな。御身を、子供をたぶらかす不逞の輩と思い込んだ。許されたい」
「で、なんでテュカに余計なことを言った？」
伊丹は横たえていた身体を起こすと、ベッドに座ってヤオへとまっすぐに眼差しを向けた。
「余計とは心外。事実を伝えたまでだ」
「では、問い直す。何故事実を伝えた？」
「決まっている。悪意があったからだ」
悪意だと？
伊丹の意外そうな表情をヤオは嗤った。
「悪意も悪意、大悪意。それ以外何があろう？　……御身は、ここにいる三方を特に大切にしているとヤナギダ氏より聞いた。この三方を救うためなら、多少の横紙破りでもやるだろうと聞き及んでいる。ならば、それをしないでどうしていられるだろう。
御身の同僚に、此の身は地に頭を付けて頼み込んだ。此の身に出来ることならば何でもするとも告げた。どのような要望にも応えるとすら……なのに誰も彼もが、狭量にも口をそろえて拒絶する。それは出来ないというばかり。こうしている今も、此の身の同胞は塗炭の思いに苦しんでいるというのに、炎龍を倒す力を持つ者が手を差し伸べてはくれないのだ。だが、そうした者共も冗談交じ

りに言ったそうだぞ。『イタミならもしかするかも』とな」

レレイへと視線を向けてみると、「通訳した」と彼女は呟くように頷いた。

「だから、壊したのだ。このエルフの心を救うには、父親が炎龍によって殺されたことを、しかと言い含め、その上で敵(かたき)を討つしかないぞ。さぁ、どうするっ、緑の人よ。このまま、そこのエルフを見捨てるか？　それとも武器を取って立つか？」

伊丹の歯が鳴った。

噛み合って擦れあう音に込められた怒りは、そのままヤオに対する冷たい視線となり突き刺す。

ヤオは、怒りとも泣き顔とも、嗤いともつかない複雑な表情で、大粒の涙を流していた。

一歩、伊丹に向かって前に出る。前に出つつ言う。

「人が、愛する者を殺めたなら、その下手人を追い求めれば復讐を果たすこともできよう。天のもたらした災害なら、どうしようもないから神を呪うしかない」

ヤオは、視線を一瞬、ロウリィへと向けた。

「だが、炎龍はどうか？　敵(かたき)は確かに其処にいるのだ。なのに、手も足も出ない。誰も捕らえることができず、罰することもできない。かといって天のもたらした災厄でもない。では……では、この怒りはどこへ向ければよいのか？　恨みのやり場はどこへ向ければいい？　愛する者を奪われた憎しみは、誰に向ければいいのか？」

さらにヤオは前に出る。

「復讐とは、愛する者を失った怒りと憎しみをはらし、自分の魂魄を鎮めるために必要な儀式だ。それを経てはじめて遺された者の心は癒され、現実に立つことも出来るようになる。明日を見ることもやがて出来よう」

伊丹のすぐ前まで来たヤオは、おもむろに膝をついて額を床に擦りつけた。

「お願いだ。この娘のついでいいから、此の身の同胞を救ってほしい。お願いします」

そのかわりに我が身を捧げるとヤオは言った。何をしてくれてもいい。八つ裂きにしてくれようとも何をされても文句を言わない。

そんな言葉を、ヤオは体の全てを絞るようにして放ったのだった。

10

結局の所、ヤオと柳田の目論見は見事に失敗し、彼女は臍(ほぞ)を噛む思いをすることとなった。伊丹が、テュカを受け容れてしまったからだ。

「おとうさん♪」

伊丹はテュカの悲しい妄想に付き合っている。

彼女が自分を父と思うことで、なんとか現実と狂気の崖縁に留まることが出来るならばと、それ

に応えることにしたのだ。
勿論、それは問題の先送りでしかない。というよりは完全な逃避だった。
明日撤収命令が出る可能性もある身なのだ。その時に、テュカを連れ帰ることは出来ないのだから、当然彼女はこの地に独り見捨てられることとなる。それはもう、精神的な殺人と言っても過言ではないだろう。
だが、どうしろというのか。
俺に何が出来る？　何をしろという？　伊丹は奥歯を噛みしめながらそう呟いては、無理矢理にでも表情筋を笑顔の形に引き寄せるのだ。
「なんだ、テュカ？」
テュカは鼻歌を歌いながら嬉々として朝食の支度をしていた。
二人でテーブルを囲んで食事をし、それを終えると伊丹は仕事と称して『隊』へと戻り、テュカは組合の仕事をしたり、近くの森の手入れをしたりする。
やがて夕方になると、テュカが整える食卓へと伊丹は戻って来る。そんな偽りだが、穏やかな日々を十日ばかり続けた。
「今日はどうするの？」
「自衛隊の仕事さ」
「随分と働き者になったものね」

「この街も大きくなったからな。自衛隊の仕事はちゃんと引き受けていかないと、みんなもやっていけないだろ？」
「……そうね」
「それと、明日から帝都へ行くことになった。ちょっと留守にする」
「帝都に？　なんで父さんが？」
「通訳とか、案内人とかが必要らしい。第三偵察隊の人達と一緒だから安心だろ？」
テュカの面倒を見ていたくても、伊丹の本来の身分は自衛官である。任務を疎かにすることは許されなかった。だから、適当な嘘を掻き集めて口にせざるを得ない。
「父さんが行くこと無いじゃないの？　出来れば家にいて欲しいな」
「そう言うな。家を空けることなんて、これまでも何度かあったろ？」
テュカは頷きながらも眉根を寄せた。襲いかかる頭痛に耐えているようだった。
いくらテュカが伊丹と父親を重ね合わせていると言っても、そこはやはり別人なのだ。
些細な仕草や物腰まで、どうしたって違うのである。
しかも伊丹はテュカの父親、ホドリュー・レイ・マルソーのことを全く知らない。知っていれば、多少でも似るような芝居をうつことも出来たろうが、何の情報もない中では、彼女の記憶にある父と伊丹の間には、どうしたってズレが生じて来るのだ。
このズレ……現実と夢想の矛盾点を、なんとか吸収して整合性を保つのはテュカの側だ。矛盾す

ることからは目を背け考えまいとする。おかしなことからは気を逸らす。見ない。聞かない。分からない。

その時のストレスが、強烈な頭痛となってテュカを襲う。

起居を共にして、食事を共にして、一緒に時を過ごせば過ごすほどに、そのズレはますます大きくなっていく。ズレの吸収が難しくなればなるほど、テュカには頭痛や各種の身体的な不調として現れた。それも日を追うごとに回数が増え、苦痛の度も増して来ているように見受けられるのだ。

伊丹は、テュカの美しい顔が苦痛に歪むのを見て唇を噛んだ。

「俺に、どうしろって言うんだ」

どうすることも出来ない。今のままでも精一杯なのだから。そんな思いを呟きながら、テュカの部屋を出て街を歩き始めると、あたかも待ち構えてたようにヤオが姿を現した。

「なんだ、またお前か？　まだいたのか」

「……」

その、恨みがましそうな視線に幾ばくかの疚(やま)しさを感じるのか、伊丹は目を逸らせてしまった。それがなんだか悔しくて唾棄するかのように鼻を鳴らし、ヤオのことを無視して悠然と通り過ぎてみせる。

美女の涙ながらの願いを受けて、勇敢なる戦士が立ち上がるという英雄譚は、伊丹が最も嫌う類の話だ。

何しろ戦いには、勝って生きるか、負けての死しか無いのだから。
物語であるからこそ戦士は勝利を得て、報酬も名誉も、そして愛をも手にするが、現実の多くはその逆の結末へと向かって突き進み、戦士は骸を野に晒す。
そうなったら美女はどうするだろう。
また、後払いの矮小な報酬で己の命を捨てるような、愚かなる犠牲者を捜すのだ。そして成功した例のみが美談として語られるのだ。
そのような物語では戦士の命は軽んじられている。
伊丹は、死にたくはなかった。これまで、良い人生を送って来たとはいえないのかも知れないが、それでも無闇に投げ出したいと思うほどには自分の命は無価値でもないと思っている。
失敗したけれど結婚だってしたし、なんだか最近女性の知り合いが増えつつあるような気もする。何やら良いことがこれからも有ると期待できるんじゃないかと思えるのだ。
なのに……。
「いつまでも続かないぞ。もう終わりはすぐ其処まで来ている」
ヤオのそれは、まるで呪いの言葉だった。
伊丹は、歩みを止めると背中を向けたまま吠えた。
「くそったれめっ!!」

「よお、伊丹。いつまで家族ごっこやってんだ？」
伊丹が、パソコンに向かって報告書を打ち込んでいると、柳田の声が背後から浴びせられた。テュカとのことを揶揄しているのだ。
「あんたの知ったことじゃねぇよ」
「ま、お前がそれでいいんなら、こっちも構わねぇんだがな。それより、いよいよ東京から捕虜返還の第一陣がやって来るぞ。首相補佐官も一緒だ。これをきっかけに講和に向けた本格的な協議もはじまるってわけだ」
「拉致被害者の件はどうなった？」
「それは、残りの捕虜返還の交換条件だな。今回の捕虜返還は、ピニャ殿下にきちっと義理を果たしておくという意味がある。それと、こちらがいかに捕虜を厚遇していたかを示すことにもなる。そうしておいて、『残りの捕虜の返還は、そちらの態度次第ですよ。場合によっては待遇も悪化するかも』とでも言ってやるわけだ。帝国側も『可及的速やかに』という言葉の意味を悟ることになるだろうぜ」
「そうかねぇ」
「なんだよ。随分と淡白な反応だなぁ。向こうさんの皇子様をぶん殴った奴とは思えんぞ」
「悪い。俺、今、全然余裕がねえんだ」
伊丹はため息をつくと、キーボードから手を離した。

仕事がちっともはかどらないのだ。柳田との雑談程度で、妙な苛立ちを感じるほどに。
元々柳田との会話は不愉快さを伴うことが多いが、このところ、それがより増強しているように感じられた。
「お前大丈夫か？」
「正直言って駄目だ。最近、頭がごちゃごちゃしている」
伊丹はそう言うと、ノートPCをパタンと閉じて、頭を抱えた。
「簡単な話だろ？　ドラゴン退治に行ってこいよ。そうすればお前の悩みなんて一発だ」
「で、部下の大半を死なせるのかよ。そりゃ駄目だ。俺はテュカも大事だが、あの連中も大事なんだ、どっちも引き替えに出来ねぇ。
なぁ、知っているか？　桑原曹長は娘さんが近々結婚するらしいんだ。定年を迎えて孫を抱くのをすっげぇ楽しみにしている。
仁科一曹は若い嫁さんが商社の総合職だから尻に引かれているって嘆いてるが、その実マゾ気質らしく喜んでいる。
栗林は俺が紹介した連中と、休みの度にデートをしてる。どうも選り好みが激しくてな、タイプの男が居ないってぶぅぶぅ言ってるぜ。
黒川は相変わらず理念先行型の性格だが、テュカの件があってから割と慎重になった。いいことだ。

富田は語学研修に来ているボーゼス嬢と交際中。禁令を破って夜這いに行ったりしているという噂だ。現場を見つけてとっちめてやらんと……。

倉田は、フォルマル伯爵家のメイド、ペルシアにご執心のようで、イタリカに行く任務があると、妙に張り切っている。

勝本は組合の子供達に懐かれている。

戸津はますます財テク技術に磨きをかけている。以前から株だの為替だのに異様に詳しかったが、組合の経済顧問を始めてから絶好調だ。

東はもうそろそろ実部隊配備の教育期間が終わる。いよいよ最終過程でそれが済めば晴れて三等陸曹だ。

笹川は写真を撮りまくってコンクールに応募するんだって張り切ってる。

古田は料理の腕に磨きをかけて、こっちの食材を生かした創作料理を考えてる。

な、面白い連中だろ。こんな連中を任務ならまだしも、俺の勝手で危ない思いをさせるわけには行かないんだよ」

柳田は手近な椅子を引っ張ると、腕を組んでデンと腰を下ろした。

「お前はそう言うがな、ダイヤモンドと、石油だぞ。そこから得られる利益も莫大だし、資源のない我が国にとって、その確保は額面以上の価値がある。要は国益を考えろということだ。ダークエルフの住んでいるところに、それだけの資源があるんなら、恩を売っておきたいんだよ。採掘とか

いろいろと後で良いことが多い」
「だったら柳田さん、あんたが行ったらどうだ？」
伊丹はそう言って柳田を突き放した。柳田とて自衛官なのだ。尻で椅子を温めてばかりいず、泥と埃にまみれて、特地の大地を走り回っても良いはずだ。
すると柳田は悪びれずに肩を竦めた。
「残念だが、俺は部下がいなくてねぇ。伊丹、部下を貸してくれよ」
「嫌だね。あんた一人で行きなって」
「俺一人で？　無茶言うなって」
「柳田さん。人間、自分の自由に出来る命は自分のものだけだ。石油も、ダイヤモンドも命を張るだけの価値があると思うなら、まず自分の身をチップ代わりにオッズテーブルに載せろよ。今なら賞金は、人の頭サイズのダイヤと、ダークエルフの美女付きだぜ」
「一人で行ってどうにか出来る相手なら、どうにかするけどよぉ。ドラゴンってのは、どうにか出来る相手なのかねぇ？」
「まぁ、ＬＡＭは効いたんだから、結局は当たりさえすればどうにかな……る……」
伊丹はそこまで口にして目を細めた。
戦車だって、だだっ広い平野で、真正面から戦えと言われたら勝てる筈がない。が、遮蔽物の多い隆起に富んだ地形や、木や林の隠蔽が効いた場所に引き込めるのなら、単独でも何とかなるかも

知れない。
もし、相手が戦闘ヘリだとしても……。
結局は戦い方次第なのだ。では空飛ぶ戦車ともいえるドラゴンならどうか。飛び回れない狭隘な地形……洞窟とかが良い。そのような地形の中に誘い込めれば、ＬＡＭの直撃を叩き込むことも出来るかも知れない。
「ま、相手は生き物だからな。餌に毒を仕込んだり、寝込みを襲ったりって方法もあるだろうけど……」
「……それも良いかもな」
何を考え込んでいるのか、妙に反応の悪くなった伊丹を柳田は訝しく思いつつも、話を切り上げるべく腰を上げた。
「伊丹よ。いずれにせよ、出かける時は言ってくれ。ちゃんとした形にしてやるからよ」
だが伊丹は柳田に目を向けなかった。ぼんやりとしてただ口先だけで応えた。
「……ああ、その時は頼む」

その夜、伊丹はテュカを連れだして食堂に行った。皆で酒盛りをするためだ。
エルフだから人付き合いが悪くてお高く止まっている、と見られがちだったテュカを、どうにか、街のみんなとうち解けさせようとする配慮だ。それと同時に、伊丹自身が、この瞬間だけは父親役

から解放されるという意味もあった。伊丹としては少しばかり考え事に時間を取りたかったのである。

テュカの周りには、街の人々や第三偵察隊の連中が集まった。しかも隣には黒川が座ってフォローしている。

黒川の話によるとテュカには両刀の気配があるそうだ。「もしかしたら自分に気があるのかも……」と少しばかり困ったような顔をしていた。そこまであからさまなものではないだろうが、いわゆる思慕の念に近いものかもしれない。

そんなこともあって黒川が傍にいると、テュカは「父さん、傍にいてよ」とは言わないので、伊丹は別のテーブルに座って、レレイやロゥリィなどを相手に杯を傾けるのである。

「自分より年上のぉ子を持った気分はどうぉ？」

ロゥリィの言い様に、伊丹は苦笑した。

「複雑だね。とっても複雑だ」

破綻点が近いぞとか、もう止めておけ……といった類のことは言ったとしても意味がないことを、ロゥリィもレレイも分かっているので口にしない。

伊丹はテュカと共に断崖絶壁に向かって全力疾走をしている。だが、これを止めることもまたテュカの破滅なのだ。だから、これを途中で止めるかどうかを決めることが出来るのは伊丹だけとなる。

二人とも、伊丹が決断するその時まで、自分には見守っていることしか出来ないのだということを充分に理解していた。ならばその事を、今、ここでつついて皆を嫌な気分にさせる必要はない。今は楽しむべき時なのだから。

「はい。お待ちどうさまなのですぅ」

よたよたと手元の頼りない猫娘が、追加の料理や酒を運んで来た。どうやら新入りの娘らしい。

「デリラはどうした？」

「先輩は、郷里から手紙が届いたとかで休憩中なのですぅ。はいぃ」

「そうか」

ロゥリィは、伊丹の正面に座ってグラスを差し上げると伊丹と乾杯する。レレイは伊丹の右脇に座って日本から送られてきたソフトドリンクのグラスを掲げていた。

二人とも、明るい雰囲気だった。

こういう気配りの出来る女性は、恋人にするにしても友達にするにしても、非常に希有な存在なのでとても得難い。小賢しいだけの女は自分の感情を優先させるから、分かり切ったことを、場所も弁えずに主張して、周囲に嫌な気分をばらまくのだ。

その意味では、ロゥリィもレレイも実に良い女だった。是が非でも大切にしたい。

そんなことを感じながら、伊丹は、自分に出来ること、為すべきこと。その問題について、ゆっくりと考えていたのであった。

＊　＊

伊丹の母親が病んだのは、彼が中学生の頃であった。
きっかけは、暴力がエスカレートした父親を止めようとした母親が、つい台所の包丁に手を伸ばしてしまったことにある。
正当防衛。どうしようもなかった。
母親の心を鎮めるために、警察官、弁護士、検察官、そして婦人相談施設の相談員など多くの人が多くの言葉を費やした。だが彼の母は、自身を恨むことを止めなかった。
自らを責め苛む心。
そして、仕方なかったという言い訳。
この葛藤とせめぎ合いに加えて夫を失った悲しみ、愛する夫を奪った『何か』への怒り、憎しみ、残された自分と子供の将来への不安の全てを、自身へと集中させてしまったのだ。
母親が、自らの心を救うために選んだ道が、現実を否定することだった。それしかなかったのだ。今となれば分かる。そうすることで伊丹の母は、かろうじて生きることが出来ていたのだ。
だが当時の伊丹には、そんなことは理解できなかった。
正しいとか、正しくないとか、そんな物差しは一義的な物であり、この世に生きる人々の救いに

は到底成り得ないものだ。だが、若い伊丹にはそれが分からなかったのだ。

毎朝、毎夕食卓に並ぶ父親の分の食事。それを見て苛立ち、怒り、そして……。

「オヤジは、あんたが殺しただろう！」

言うべきではなかった。

時間逆行ものの小説みたいに、あの時に戻れたらと何度思ったことか。戻れることを夢見ていた。戻れることを願い、請い、祈った。あの時に戻れたら、きっと違うやり方が出来た。出来たはず、出来ただろう。そう思うのだ。しかし、現実は戻らなかった。それが現実というものだからだ。

母のように狂えたらどれ程良いだろう。だが、それもできなかった。

こうして伊丹は、母が時間をかけてゆっくりと、そして確実に壊れていく姿を、日々見て過ごすこととなった。蛙を熱湯の入った鍋に入れると、その熱さに驚いてすぐに飛び出してくるが、水からゆっくり茹で上げれば、煮上がるまで鍋の中に居るという。それと同じで、ゆっくりとゆっくりと進行する狂気は、やがて破綻点が訪れると思わせても、それはまだ先のことのように感じられたのだ。そして月日が流れ、伊丹が見ている目の前で不意に破綻点が訪れた。母親がついに自らに火を放つに至ったのである。

結果として母親は入院することとなった。自ら傷つけ、他人を害する恐れあり。それが理由である。

その入院は、措置入院と呼ばれる形態で、知事の命令によるものだ。従って本人や親族の意思は

問われない。費用も、負担する余裕がなければ公費で賄われる。

「ここにはいたくない、退院したい」と縋るように叫ぶ母に、高校生の伊丹がしてやれることなど何もなかった。一緒にいて、壊れた母の世界に付き合い続けてやることなど、重すぎて出来ない。だから命令という言葉は都合の良い免罪符となった。

「命令なんだから、しょうがないじゃないか。そういう法律なんだからしょうがないだろ」

鉄の重たい扉が金属音を立てて閉まる音は、今でも耳について離れない。

そう、そこは通常の病院ではない。

病棟には廊下に座り込んで、雑談に勤しむ患者達の姿がある。

身体の病ではないが故に、皆肉体的にはそれなりに元気があり、そうした者は普段着を着て、何をすることもなく病棟で時が流れるのを待っている。

朝食をとった直後に昼飯のことを話し、昼食後だというのに、夕飯を待つ。

そうして気が付くと十年、下手すると二十年。いや、場合によっては三十年入院していたという現実が追いついて来る。しかし、彼ら、彼女らの時間は入院した二十歳、三十歳の時で止まっている。そこでは年齢相応の人生経験を積むチャンスなども無いのだから当然である。病の苦しみを日々耐えるのだけで精一杯だったのだから仕方ないのである。

当時の精神科病棟というのは、大きな和室があって、まるで旅館の大部屋のようなところに皆で布団を並べて眠るという、病室と呼ぶにはいささか違和感のある風景を持っていた。だが、それが

当たり前だったのである。今でこそ、近代的に『普通の病院』の『普通の病室』のごとく、一人一つのベッドが割り当てられているが、それが当たり前になってきたのは最近になってからだ。

廊下を歩けば、ヤンキー座りしたおっさんやおばさん達が給食用ホールトマトの空き缶を取り囲んで灰皿代わりにし、煙草を吸っている。

これらは病状の落ち着いている人だ。その隙間に、病状の激しい人を見かけることになる。

例えば、そこにいる筈のない誰かと話しているご婦人。

居丈高に威張り声を張り上げ、公衆電話で、何かを怒鳴りつけている青年。

強い薬のせいで朦朧となり、弛緩した表情でぺたぺたスリッパを引きずる足音をたて廊下を徘徊する若い女性。

身体に盗聴器が仕掛けられていると言って、看護室に調べてくれと訴え続ける男性。

素っ裸で駆け抜けていく少女。

おむつをつけられて抑制……ベッドに縛られて、喉も裂けんばかりに叫び続けている男。

病棟の空気は、煙草だけではない、何かすえたような独特の異臭で充ち満ちていた。トイレのドアは自殺を防いで早期発見するために極端なまでに背丈が低く、下は隙間が大きくて、背伸びをしても、しゃがんでもその向こう側が覗けそうなほどだった。

そんな世界に、伊丹は母親を置いてきた。置いてくるしかなかったのだ。

黒川に懐いて、腕に掴まったりして、周りの自衛官やら、売店の娘達にからかわれたり談笑して

いるテュカからは、そんな狂気は片鱗すら感じない。が、このまま放置しておけば母のようになる。なってしまうかも知れないのだ。いや、確実になる。

そして残念なことに、現代の精神医学は患者を治すことなど出来ないのである。

今の精神医学に出来ることは、薬物を用いて病状をとりあえず軽くする。そのくらいである。治らない者はどうしたって治すことは出来ない。薬を飲ませて自然に治癒するのを待つ、それだけなのだ。

伊丹は十数年の歳月で、そのことを身に染みて理解した。だから、テュカを救うとすれば、今しかないと感じていた。

あの日、あの時、自分は何も出来なかった。

当時の自分はガキだったからだ。

では、今の自分はどうだ。

今の自分には、何も出来ないのか？

父を殺したというドラゴンを、テュカが討てば、そのカタルシスが彼女を狂気から解放するかも知れない。父の死を受け容れ、同時にその敵を討ったことで自らを憎むことを止めるかも知れない。

だが、それは分の悪い賭だ。明らかに悪すぎる。

少なくとも、他人の命をオッズテーブルに載せることは出来ない。

伊丹が自由に出来るチップは一枚、自分の物だけだった。それをテュカのチップと重ね合わせて、

グリーンのテーブルに載せる。
だが……。
「本当にそれしか、無いのか？」
それしかないとして、自分に出来るのか。ドラゴンに向かっていくなんて……正直に言えばどうしようもなく恐ろしかったのである。

もう深夜に近い時間帯だが、伊丹は診療施設の玄関前にあるベンチに座っていた。
夜風に当たりたかったのだ。そして「どうしたものかなぁ」と頭を抱えていた。
四～五分も座っていると、カチャ、カチャという軽快な金属音が近付いてきて、薄闇の中で黒い人影が伊丹の前に立った。
「若いの、そこを退くが良い」
人影は、老人であった。いや、実際はもっと若いのかも知れない。だが額や頬を始めとした顔に刻み込まれた皺の数々は、老成した男の年輪を感じさせた。その老人は、歩くたびに金属音をさせていた。歩き方から見ると左足が義足なのだろう。言葉はこの特地のものだから日本人ではない。
老人の威厳がそうさせたのか、伊丹は気軽に腰を上げると座る場所を譲った。
何しろベンチは他にもある。この場所に座りたいという者に、意地悪するために頑張る必要など無いのだ。

「ほう。なかなか殊勝じゃの。ここは儂が毎晩使っておる場所だ。以後は、気を付けよ」
老人は、まだ義足に慣れないのか、よたよたとする感じで腰を下ろした。
「さて、若いの。いったい何を迷って、このようなところで黄昏れておる？」
「爺さんには関係がない」
「そうか。ま、喋りたくないなら、それでもいいじゃろ」
男は、深々とため息をつくと、左腕の義手の具合を気になるのか、がちゃがちゃといじっていた。
「どうにも、この細工が理解できぬ。お主らの世界に住む者は、手足を無くすと皆このような物を着けて生活しておるのか？」
話しかけてくる男性がどうにも煩わしかったが、邪険にもできなくて「ええ。全員が全員とはいえませんが、大抵は着けてます……」と答えた。
「医者はこんな物を着けて、走れるようにもなる等と言っておったが、実に疑わしい」
「走るための足を装着しますと、生身の足なんかより速く走る者もいますよ」
男は、本当かと訝しがった。そこで伊丹はパラリンピックという障碍を持った者の競技会があり、そこでは五体満足な者でも容易に超えることの出来ないような記録が次々とうち立てられているのだと説明した。
「そうかそうか。なんだお主、興に乗れば結構喋れるではないか。その調子で、なんでこんなところで黄昏れていたのか、喋ってしまえ」

「はぁ？」
「大の男が、何を躊躇っておる。情けないのぅ」
伊丹は、忌々しく思いつつも、不思議と話すことにしていた。考えを整理するためにも誰かに聞いて欲しかったというのも、あったようだ。
伊丹が用があったのは、この診療施設にいる精神医学ソーシャルワーカーだった。
そのソーシャルワーカーは、あまり男っぽさのない、どちらかというと中性的な感じで、年齢も見た目では分かりにくいタイプであった。見た目は髪を短く切りそろえて、丸いメガネをかけている。白衣を着ているからこそ医療関係者であることが分かるが、医者のような権威的な雰囲気はないし、どちらかというと学生と見間違えかねない弱々しい、というか、柔らかな雰囲気の持ち主だった。
「これは伊丹二尉。どうしました、こんな時間に？」
「実は先生に相談したいことがありまして」
その精神医学ソーシャルワーカーの男は、紀子のためにやって来ていた。彼女の様々な相談に応え、助言をするのが役割だ。
伊丹は紀子の支援に男性が来たと聞いて、意外に思った。
紀子のような状況におかれた被害者にとって、男性は恐怖の象徴となると思うからだ。実際に、彼女の心理的なケアには女性の臨床心理士がつけられている。だが紀子の場合については、支援の

メンバーに男性が入っていた方が良いという医師の判断があったらしい。
そうしなければ男性に対する不信感や不安感が固まってしまって、男性恐怖症患者を作ることになってしまう。ここで配慮に欠けたが為に、夫や恋人、婚約者と上手く行かなくなってしまう例もあるという。
確かに最初のハードルは高い。が、恐い男も、恐くない男性もいると認識するためには大切なことなのだ。ただ今回に関しては、その意味では楽であったという。何故なら、紀子には伊丹達が居たからだ。
伊丹と富田は、紀子にとって自らを救い出してくれた恐くない男性の代表だ。その象徴を引き継ぐという意味で、精神医学ソーシャルワーカーの男は、紀子との初顔合わせで、ふたりに紹介されるという形式を求めたのである。その時に面識が出来た。
ちなみにこのソーシャルワーカーは、一般陸曹候補学生を経て三等陸曹になりながらも退職してしまい、大学に入ったという変わり者だ。予備自衛官でもあったので『門』のこちら側への立ち入りが許可されたのである。
伊丹はソーシャルワーカーの前に座ると、おもむろに切り出した。
自分の父親を殺された娘は、父親の敵(かたき)を討つことで救われるだろうか、と。
ソーシャルワーカーは、肩を竦(すく)めるとケースバイケースなので何とも言えないと答えた。
「だって、人によりますから」

ただ、私見ながらと前置きして彼は言った。人間が敵を追い求める心は、最早本能に近いのではないか、と。

敵を捕まえ、処罰する。犯罪被害者や被害者家族のカタルシスは、現代では警察が犯人を捕らえ、裁判所が判決を下し、そして刑務所に送られる、という過程の中でなされる。

勿論、犯罪者を許すべきだという高邁な考え方を否定するわけではないが、それは被害者の側にそれを支えるような信仰心や哲学があってはじめて成立するものなのだ。そして、この場合は『許し』が、被害者やその遺族にカタルシスをもたらすことになる。

「復讐は虚しいとかよく言うぜ」

「そうですね。虚しいものなのかも知れません。でも、その虚しさを味わうことで、ようやく次へ進んでいけるんですよ。自分は詰まらないことに捕らわれていたなって思えたら、それはそれでいいんです。それが区切りになるからです。人のこころには、区切りというものが必要になるんですよ」

伊丹は、そんな言葉を受けて考え込んでいたのである。テュカを救うためにドラゴンを倒しに行くべきか否か、と。

気が付くと、老人に対して伊丹はテュカのことも含めて全てを喋っていた。

「儂も同じように思うぞ。復讐を果たせば、少なくとも気が晴れる。敵が大手を振ってうろうろしていると知れば、儂ならはらわたが煮えくりかえって、飯も喉を通らぬわ」

「でもね、敵が強いんですよ」
「なんだ、怖じ気付いておるのか？」
「ええ。だってドラゴンですから……こっちの言葉では炎龍でしたね」
「なんだと！　炎龍が出ているのか!?」
老人は眉間にしわを寄せた。
伊丹は改めて気付いた。老人の左目には眼帯がつけられていることに。さらに見れば、老人の身体はあちこち傷だらけだ。その頬にも大きな傷が残っている。
「ただ、場所が場所なので、大規模な戦力を送ることは出来ません。少数では部下の過半を失うのが必定」
「そうだな。強大な敵との戦では、持ちうる戦力の全てを投入するのが定石じゃ。ちまちまとした小戦力を送り込んだり、あるいは味方に敵の本質を教えず、突撃を命じたりするような馬鹿は、あいつらだけで充分じゃ」
何やら、ものすごく気持ちの籠もった言葉であった。
「いっそのこと、テュカをつれて二人だけで行こうかと思ったりしたんですけどね。無理に決まってるし」
「おお、なるほど。それならば無関係な他人を巻き込む恐れはないものな。ただそれは自殺に近いのう」

「そうなんですよ。無理心中と同じです。だから迷ってるんです」
「なぁ、若いの。自殺としか思えないようなことでも、しなければならない時というのはあるものじゃぞ。自殺にならないように知恵を絞るのだよ。工夫をするのだ」
老人はそう言うと立ち上がった。
義足の立てる金属音とともに、肩を揺する、一見ふらふらとした独特の歩き方で前に出る。そして伊丹の肩に手を置いた。
「危険と分かっていても退くことが許されない時がある。負けると承知していてもなお、進まねばならぬ時もある。頭の良いやり方ではないが、馬鹿にならねば男はやっていけぬ。そうは思わぬか？」

＊　＊

翌朝、チヌークの中に伊丹と第三偵察隊の面々はいた。
いつものように柳田が帝都に届ける荷物を運び込む。伊丹は、部下達が席に着くのを確認してから、自分も座った。
パイロットが、柳田と何か話し合っている。
ヘリポートの外には、テュカが見送りに来ていた。レレイがいた。ロウリィがいた。

テュカが泣きそうな表情でこちらを見ていることに伊丹は居心地の悪い苛立ちを感じた。だがこれが当たり前なのだ。自分は任務に従って、部下を指揮して、しばらく帝都に滞在して、外務省の担当者を護衛し、そして戻って来る。それまでのほんのちょっとの時間を留守にするだけだ。

ちょっと留守にするだけなのだ。

打ち合わせを終えた柳田が降りていく。

後部ハッチが閉じだすと伊丹の胸中に焦りに似た感情が沸き立った。

「では、行きます」

パイロットがそう告げた時、伊丹は「くそっ！」と舌打ちして隣の桑原に告げた。

「おやっさん、すみません。俺、行けません」

だが離陸のためにローターの回転数が高くなって騒音で声が耳に入らない。

「なんて言いました？」

「俺、降ります。後を頼みます！」

伊丹は指揮を放棄して、後部ハッチが閉じる寸前にヘリから飛び降りた。

ヘリはゆっくりと舞い上がって行く。

第三偵察隊の部下達は、伊丹が見送る中を飛び去っていった。

11

「どうしたの？」

ヘリが飛び去るのを見送った伊丹は、泣き笑いの表情で立ちつくすテュカの問いに「帝都に行くのは止めたよ」と答えた。

手袋をとって、重苦しい鉄帽（ヘルメット）も外した。

すると、なんだか自分を縛り付けていた枷を取り払ったような解放感があって晴れ晴れとした気持ちになれた。多分、いろいろと後で悔いることになるだろう。でも、鬱々とどうしようかと悩み続けているよりは決めてしまった今の方が、遙かに良いと思ったのだ。

「いいの？」

どうやらテュカは、自分の我が儘が父親を困らせてしまったのではないかと心配しているようだった。だが、独りぼっちにされずに済んだ喜びが先に立ったのか、ゆっくりと伊丹に歩み寄ってその胸に身を投げる。

「お前が、笑顔で居られるほうが大事だからな。俺が一緒にいてやるから、お前も頑張れ」

すっかり開き直った上に、気分の高揚している伊丹は、普段なら気恥ずかしくて絶対に言えない

ようなセリフを平気で口にしていた。
「な、何よ、それ!?　じ、実の娘を口説いてるの!?」
動揺を抑えきれないのか、抗議するテュカの声はどこかうわずっていた。
伊丹は「そんな風に聞こえたか？」と苦笑で返す。
実際、そんなつもりは毛頭無い。これからのテュカを待ち受ける運命の過酷さを思いやっての励ましのつもりだったからだ。
けれど問題は、そんな朴念仁な男の言葉が、女の胸にどんな風に響いたか、だった。お前が笑っていられるようにずっと一緒に居てやる……と憎からず思っている男性に言われて、それを口説き文句と思わない女性は、どれだけいるかなのだ。
テュカは、額をコツンと伊丹の胸に当てると「ばかっ」と詰った。
残念ながら完全武装をしていたために、彼女の温もりとか柔らかさを伊丹は堪能することはできなかった。チタンプレートの入ったボディアーマーはテュカの身体を硬く受け止めてしまい、その感触を伝えてくれないのだ。
出来ることと言えば、懐中の子猫を愛でるようにその髪を撫でるくらいだ。
細く軟らかく、流れるような髪を指で梳(くしけず)る。そしてテュカの形の良い頭蓋に掌を這わす。テュカの笹穂のような耳に指が触れてしまって、テュカがぴくっと身体を震えさせたりするのも、悪くない感触だ。敏感なタイプらしい。

伊丹は、小さく息を吐いて呼吸を整えると、旅の支度をしなさいと告げた。
「一緒に行こう」
少しばかり父親を気取ってみた。
三十と数年の人生においても、『女性を旅行に誘う』などというのは、数えようにも思い出すことすら難しい行為だ。断られるかも知れない、嫌な顔をされるかも知れないという恐れと不安を、冗談めかして誤魔化すのと同じ類の方便である。
そのための父親っぽい口調なのだが……それがテュカのツボにはまったようだった。彼女は「何処に行くの？」と喜び勇んだ反応を示した。
その表情は、驚きと喜びで彩られていた。伊丹には知る由もなかったが、無理に父親を気取るような口調こそ、テュカの父であるホドリューとそっくりなものだったからだ。父親としては威厳に欠ける男が、無理に背伸びして父親を演じる。そんな時の微妙な声色こそが、テュカが父親として愛した男のものであった。
無邪気に喜ぶテュカの笑顔に、伊丹の良心は激しく痛んだが、それを押し殺して微笑みの形に頬の筋肉を引き締める。
「南の方だ。嫌か？」
「ううん、行く行く！　お父さんとだったら何処だって！　一緒に旅が出来るなんてっ、凄く嬉しいっ!!　今すぐ出るの？」

「今から支度しよう。それが済んだら出かけるぞ」
「それじゃあ、急がなきゃね。お昼過ぎには出たいもの」
テュカはそう言うと、伊丹の手を名残惜しそうに掴んだまま身体を離した。少しずつ後ずさりして、もう指先を触れているだけで精一杯なところまで下がると、踵(きびす)を返して走り出す。
「すぐ支度してくるからねっ」
テュカは軽く振り返ってそう言うと、自分の部屋へと向かったのだった。

「伊丹。お前馬鹿か？　いや、前々から馬鹿とは思っていたが、ここまでとは思わなかった」
傍らで見ていた柳田は、テュカが去ると開口一番でそう言った。
「任務放棄の上に、単身でのドラゴン退治？　無茶が過ぎるだろう。こっちの身にもなれよ。どうやって、お前だけを派遣する状況を作れば良いんだ？」
「柳田さん、それを聞かれても困る。そいつはあんたの役割っていう約束だったろ？」
「とは言ってもなあ」
柳田は、頭をカリカリと掻いた。
「部外的には根回しを済ませてあるから、馘(クビ)になったりはしないと思うが、こんなやり方だと内部的にはもう駄目だわ。前の事件も保留のままだから、良くて停職、へたすりゃ降格の上で、配転ってところだな」

「覚悟はしたつもりだけど、改めて他人から言われるとずしっとくるなぁ」
伊丹は、顔を顰めると腹部をさすった。
流石に胃に来ているようだった。これだけ問題を重ねれば特地での任務から解かれ、北端の過酷な駐屯地とか、離島とかに回されることもあり得る。当然テュカにも会えなくなってしまうが、そんなこともまた覚悟しなければならない。
「悪いことは言わん。今からでも、３ｒｅｃの連中を追いかけて、とりあえず任務を果たして来いよ。それが終わってから、隊を率いてドラゴン退治に行くんだ。そういう形にすれば、部内的にも言い訳が効くんだよ」
「柳田さん、もう言わないでくれよ。私事に、連中を巻き込む訳にはいかないし、もう時間的猶予もないみたいだしな。するべきことを先送りしたがための後悔なら、嫌というほどしたんだよ。だから、今は動く」
「それにしたってなぁ、やることが過激すぎだぜ。お荷物を引き連れて勝てると思ってるのか？」
「なんとかするさ。悪いね」
伊丹は、柳田に向けて両手を合わせた。続けてアルヌスの丘の頂上にいる狭間陸将に向けて拝むように「ご迷惑をかけて申し訳ありません」と柏手を打った。
「ったく、なんだかなぁ。それだけの価値があの金髪エルフにあるのか？　いい女なんてそこらにいっくらでもいるだろうに。お前くらいに名声があって、すげぇコネを持ってて、その上に石油だ

の、ダイヤモンドだのが埋まってる土地の原住民に恩を売りつけることに成功すれば、業界が美味しい思いをさせてくれるんだぞ。いい女なんて掃いて捨てるほど寄って来るぜ」

確かに、それは美味しいかもしれなかった。

伊丹とて健全な男である。自分好みの女性ばかり集めた酒池肉林の風景が、脳裏によぎった。だが、思い浮かぶ光景はいささかギャグテイストに過ぎていた。例えばセミヌードなお嬢さん達に囲まれているという現実では決してあり得ないものだ。

ぶるぶると首を振って想像した画像を一旦抹消する。自分は、マンガの主人公ではないのだから。ここは冷静に現実的にならなければならない。そう、将来を考えるに当たっては、リアリティが大切なのだ。そこで無理矢理、現実的な将来像を想像してみたりした。

だが、次いで思い浮かんだのは伊丹の好みからは大きく外れたゴージャスな容姿のホステスさんとか、煌びやかな女性達に囲まれて窮屈な思いをしていたりとか、自衛官を退職してタレントみたいにコメンテーターとしてテレビ番組に出演させられていたりとか、誰が書いたんだか分かんない「二重橋の英雄」といったタイトルの本のサイン会に出席したり、保守系の政党から選挙に引っ張り出されたりといったものだった。

実に貧困な想像力である。

だが、柳田の囁く美味しい思いなんて、伊丹にはその程度のものとしか思えなかったのだ。何かを作ったり創造したりするという能力に欠けている以上、そんな形で自分を消費する将来しか考え

られないのだ。そんなものがテュカを見捨てて得られる未来なら、あまりにも酷過ぎるというものだ。

それだったら今まで通りの自衛官生活を続けて、テュカやロウリィやレレイ、ピニャとボーゼスを引き連れて同人誌即売会に突撃した時のような、大騒ぎで疲れるけれど、楽しい日が時々ある方が良いように思える。

「やっぱ無理だわ」

柳田は、伊丹のそんな言葉に対して肩を竦めて応じた。それが、馬鹿は救えないねという意味なのか、それとも言ってることが分からんという意味なのかは、伊丹にも分からない。だが、柳田が、伊丹のしようとすることを納得はしなくても、それなりに受け容れてくれたということは理解できた。

「ということで、柳田さん。つじつま合わせは頼むわ。それに、車両と武器と爆薬の用意も頼むぜ。予備の燃料と飯も必要だな……」

柳田は天を仰いで頭を抱えると「ちょっと待て、ちょっと待て」と慌ててポケットからメモ帳を取り出し、伊丹が口にした物品をリストアップしていった。

「武器は何を？　それと食糧だがどれくらい必要だ？」

「ＬＡＭ（110㎜個人携帯対戦車弾）を最低でも十。多ければ多いほど良い。食糧は、俺とテュカの二人だから二人分で頼む」

「おい、ヤオは連れて行かないのか？」
「ヤオ？　誰だそれ？」
「今回の元凶だよ。ダークエルフの女」
「ああ、あれか？　どうでもいいよ。柳田さん、それを言うならあんただって元凶その二だろう？」
「うへっ、とんだやぶ蛇だったぜ。俺は俺の職分で埋め合せを頑張るから、それ以上言うなよ……分かった、食糧は二人分だな？」
柳田は再度確認しながら、伊丹の肩越しに背後へと視線を向けた。
「ああ、二人分」
「本当に二人分でいいのか？」
「なにが？」
「……」
柳田は答えなかった。ただ、伊丹に対して、気の毒そうな、お悔やみを申し上げますと、言いたそうな表情をする。その途端に、伊丹の両足は強烈な力で払いあげられた。
いきなり視界に空が広がり、気が付くと地面に背中から叩きつけられていた。
その衝撃に咳き込みながらも見上げた視界には、伊丹の身体を跨ぐようにして立つロゥリィのフリルのちりばめられた黒ゴススカートと、パニエに包まれてその中へと消えていくスラリとした脚

があった。
黒のブーツとそれに続く黒い網タイツ。それを吊り支える黒のガーターが薄闇の向こうに見えたりした。さらなる向こう側で見える黒い何かについては、直ちに視野から除外して、冷たく見下ろすロゥリィと視線を交じらせる。
「ちょっとばかりぃ、水臭いんじゃないぃ？」
ハルバートの石突きが、伊丹の耳傍を掠めて大地に突き刺さった。
その傍らにはレレイもいて、大地に横たわる伊丹を見下ろしている。
「だって、いや、ほら、巻き込むわけにはいかないかなぁって思って」
ロゥリィは伊丹の腹部にズンっとお尻を降ろすと、その胸板を小さな拳で叩いた。とはいっても、埃を払う程度の衝撃だ。
「それが水臭いって言うのよぉ。いい加減、巻き込んで良いって思ったらどぉ？」
「いいのか？」
「寂しいこと言わないでよぉ」
ロゥリィはまた伊丹の胸板を叩いた。
「でも、危ないぞ。無事に帰ってこれるか分からないんだぞ」
「すっごくぅ楽しそぉ。ゾクゾクしちゃうわぁ」
微笑みながら言うロゥリィの双眸には、妖しい狂気にも似た挑戦的な輝きが満ちていた。今にも、

伊丹に噛みつきそうにも見える。
「でもさ、ほら、まぁなんだ……」
「お馬鹿さぁんねぇ。女を危険な火遊びに誘いたいなら、見栄を張らずに素直に言ってみることよぉ。女はその一言を待っているものなのだからぁ」
「でも、ドラゴン退治だぜ。一緒に死んでくれって誘うようなもんだろ？」
「いやぁよ。心中なんてもってのほかぁ。まだ四十年近くはこの肉の身体を使えるんだからぁ、たっぷり楽しんでから解脱したいわぁ」
「じゃぁ、駄目じゃん」
「もしかして、最初から負けるつもりなのぉ？　自殺なのぉ？」
伊丹は首を振った。自殺に等しい危険性の中でも、わずかでも生き残れる可能性があれば、それに賭けるつもりはある。
「じゃぁ、心中ではないわよねぇ……」
「……」
「……」
「……」
「……さっさと言えってのぉ。おい」
ゴスッとロゥリィの拳が伊丹の腹部に突き刺さる。硬質のボディアーマーも、その強烈な衝撃だ

けは素直に伝えてきた。
「うっ……わかった、わかった。言うから、待て待てって」
マウントポジションから放たれる、二発目を躱そうとして伊丹はロゥリィにしがみついた。それは、丁度ロゥリィのささやかな胸に顔部をつっこむ形となる。
「ロゥリィ、一緒に来てくれるか？」
剣呑な気配がさっと退いて、輝くような笑みが見えた。ロゥリィもこんな透き通るような笑顔が出来るのだなぁと、伊丹はしみじみと思う。
「高いわよぉ」
「借りておく。返せるかどうかわからんが」
「大丈夫ぅ。ちゃんと取り立てるからぁ。死後にぃ魂をいただくだけよぉ。眷属になってもらうわぁ」
「お前は悪魔かっ！」
ロゥリィは伊丹の突っこみを可憐なまでに無視すると、伊丹の身体に視線を巡らせておもむろに右腕へとギッと歯を立てた。
「痛いっ！　痛いっ！　痛いっ！」
肉に食い込む痛みに伊丹は叫んだが、ロゥリィはさらに歯を皮膚へとめり込ませていく。
「契約完了ぉ……」

伊丹の腕についた歯形。ロゥリィはそこからにじみ出る血をひと舐めして腰を上げた。
地面に突き立てておいたハルバートを引っこ抜くと、柳田に向けて指を三本立て「三人分ねぇ」と告げる。そして自分の部屋に向けて走り出した。支度に行くのだろう。
振り向かずに行ってしまったロゥリィの背中を見送っていると、今度は「四人分……」と柳田に注文するレレイの声が聞こえた。
「おいおい、レレイも行くのか？」
レレイの情緒に欠けた視線は、「何、自明のことを尋ねているのか」と小馬鹿にするような冷たさがあった。「夜が明けたら陽が昇るのか？」とか「物を落としたら地面に落ちるのか？」と真顔で尋ねたりしたら、きっとこんな視線を向けられるだろう。
こんなことも説明しなければならないのか？　とばかりに、レレイは手短かに説明をする。
「生還率をあげるには魔法が必要。同行の許可を……」
レレイの、物問いたげな色彩をもつ視線。
無表情という相貌の向こう側に、伊丹はレレイの様々な感情が揺らめくのを感じた。そしてそれは、レレイの怒りが心頭に発していると主張していた。
「レ、レレイさん？　も、もしかして怒ってらっしゃる？」
「……」
こうして、伊丹は「四人分頼む」と柳田に告げた。

ロゥリィに譲ったばかりで、レレイの申し出をはね除ける理由もないし、滅多に感情を表すことのない少女の怒りがとてつもなく恐ろしかったからだ。

伊丹が思いつくような「若いから」とか「組合に必要な人材」といった類の言い訳をしたとしても、レレイにかかれば赤ん坊の手を捻るがごとくに論破されてしまっただろうし、かえって怒りの炎に油を注ぐようなことになるような気もしたのだ。

伊丹の対応に満足したのか、レレイもまたこの場から立ち去る。彼女にもまた支度があるのだろう。

今度は伊丹の前に、ヤオが姿を現した。

無言のまま前に出ると、地に座り込む伊丹に向けて片膝をついて、胸にクロスさせた両の掌をあてて、深く頭を垂れる。

「なんなりと仰せ付け下さい。此の身は只今より永久に御身の物。御身の、いかなる仰せにも従います。今この場で命を絶てとおっしゃるなら、ただちに……」

伊丹は、神妙に忠誠を誓うヤオを見て深いため息をついた。本気で、自死しかねない迫力があったからだ。

「とりあえず、ここで死なれても後始末に困る。それなら道案内をしてくれ。ドラゴン退治でも役に立ってくれ」

「かしこまりました。囮でもなんでも仰せつけ下さい」

ヤオの言葉の端々には、自罰的な気配が見受けられた。

自嘲とか、自罰というのは、他者から罵られたり罰されることへの心的な防衛としてなされることが多い。ヤオも自らの罪と、それに対する伊丹の怒りを感じているのだろう。

そんなヤオを、伊丹は罰するようなことはしなかった。あからさまに憎しみを向けることもしない。ただ、淡々と彼女の役割を指図するだけである。

罰されることを求めている者を罰することは、逆に楽にしてやることを意味する。ヤオに良心というものがあるなら、その呵責を受け続けることが罰となるだろう……などと考えたわけでもない。ただ、腹を立てたりするのは、面倒なばかりで詰まらないと思っただけだ。愛情の反対にあるのは怒りや憎しみではなく無関心であるように、彼女に対して心が全く動かないのだ。

もう少し、ヤオの境遇とか想いを伊丹が知っていれば、別の感情が湧いたかも知れない。だが、伊丹にとってヤオという名のダークエルフは、いきなりサーベルを突きつけて来たり、テュカに対する精神的な狼藉を働いたという悪い印象しかないのだ。

そんな伊丹の距離を感じさせる冷淡さは、慚愧と呵責に凝り固まったヤオにとって心地良いものであったのが皮肉である。「しょうがなかったんだよな」、などと優しくされたらかえって地獄だったろう。

自分はそうされるだけの罪を犯したのだから、手頃な道具のように使い潰されて、そのまま打ち

捨てられるのが相応しいと思っている。それが不幸慣れした此の身らしい末路だろう。でも、適うなら罰が欲しかった。苦痛と罵倒を与えて欲しかった。侮辱と陵辱を欲していた。

ヤオは自分の深奥にある何かが嗜虐を求めていて、それを快楽と感じるのかも知れないと気付いて、背筋を震わせていた。

「結局、五人分ってことかよっ……」

一連のやりとりを見ていた柳田は砂を吐くようにして言い放った。何故だか急に不機嫌になっている。

「あのなぁ、伊丹。この際だからはっきり言わせて貰うと、俺はお前が嫌いだ。前から嫌いだったが、もっと嫌いになった」

何を言い出すかと思えば、柳田の口からこぼれたのはそんな罵倒であった。ボールペンとメモ帳を胸ポケットに仕舞いながら、伊丹の傍らで俯いているヤオにちょっと視線を向ける。

「俺は防衛大を出て、それなりに優秀な成績をあげて自衛隊に入った。第一選抜のエリートコースに乗っていると言ってもいい。だが、楽をしてここまで来た訳じゃない。軍事、法律、様々な勉強を暇さえあれば続けてるし、同僚や上司との付き合いだって慎重にこなしてきた。下げたくもない頭を下げて、言いたくもないおべっかをあっちこっちに言って回り、本省の背広組との顔つなぎも丁寧にやって、政界や財界の連中がつけてくる無理難題な注文もなんとか納めてきた。俺はな、組

織の苛烈な競争で生き残るべく、努力して来たんだよ。苦労して来たんだよ。頑張って来たんだよ。だからな、正直言ってお前みたいな奴は嫌いなんだ。はっきり言って、見下している。片手間な仕事をして、趣味を優先した息抜きの合間の人生？　嗤わせてくれるぜ」

柳田の罵倒は言葉だけ追えば、エリートの増長慢にも聞こえる。が、どこか調子外れで必死な気配があったために伊丹は聞き入ってしまった。

「お前はいったい何様なんだよ。やる気は無ぇくせに偶然の幸運で、ちゃっかり昇進して来て今や俺と同じ階級だとぅ？　それじゃぁ、俺のこれまでの苦労は何なんだよ。確かに、自衛隊ってのは戦闘組織だからな。実戦で戦果を挙げればその功績に報いるのは当然だろう。だがな、お前みたいな勝手なことをやってる奴がのさばって、俺のような裏方が苦労してるのってなんだか狡くねぇか？　だからよ、苦労しろよ。もっと酷い目に遭えよ。危ない思いしてくれよ。部下の家族に、息子さんは悲運にも特地でお亡くなりになりましたって手紙を書く立場になってみろって言うんだよっ！　そうしてやっと俺の努力と釣り合うってもんだ。違うか？　えっ？

なのに、何なんだよ！　私事だから部下を巻き込みたくないっ？

国益の為になるだろう？　体裁は整えるって言ったじゃないか⁉

俺たち自衛官が引き連れていけるのは上が付けてくれる部下だけなんだよ！　階級と編成で与えられた部下が全て。それが当たり前なんだよっ！　みんな、その部下を得るために、命令できる立場になるために努力するんだろ⁉　違うのかよ⁉

隊を離れたら、俺たち個人はなんにも出来ないんだよ。出来ちゃおかしいんだよっ!!
なのに、どうしてお前には、付いてきてくれる奴が居るの!?
なのに、どうしてお前だけに、自分から付いてくって言う奴が出て来るんだよ!?
くそっ、腹が立って来る。胸くそ悪いっ」
柳田はそう言うと地面を蹴って背中を向けた。
肩で息をしている柳田の背中を伊丹はしばらく眺めていたが、やがて居たたまれなくなって口を開いた。
「まぁ、そのお、何だ……悪いねぇってことかな？」
「うるせえっ、ただの八つ当たりなんだから、お前は黙ってろっ！」

＊　＊

「なによ、この女も連れていくの？」
ヤオの存在を見て愁眉を寄せたテュカに、伊丹は「この女性も、いろいろとあったみたいだけど、もう諦めて故郷に帰ることにしたんだと。帰り道だって言うし、途中まで送っていくことになったんだ」という説明をした。
レレイもロウリィも、この嘘については何も言わなかった。ヤオも、伊丹の嘘に即興で合わせ、

「しばらくお世話になる」と頭を下げた。
テュカは、二人きりだと思っていた旅の同行者が増えてしまったことについては、思うところがあったようだ。だが、ロゥリィもレレイも、もう仲の良い友人であるから、彼女達との旅も父との二人旅とは違う楽しみが期待できるとして、すぐに機嫌を直した。
旅装を整えたテュカ、レレイ、ロゥリィの周囲には、アルヌスの街の人達が見送りに集まっていた。
レレイは、カトーに後のことを頼み、子供達に向けて帳簿や経理について困ったことがあればカトーとよく相談するようにと申し送っていた。
ロゥリィは信者達や飲み仲間達と挨拶を交わし、ヤオは世話になった自衛官や警務隊の隊員が遠巻きにしているのを見つけて、目線で挨拶をしている。
そうこうしていると、クラクションが聞こえて人垣が割れて道を開く。そして柳田の乗った高機動車がゆっくりと伊丹達の前で止まった。
「よお、伊丹。さっきは恥ずかしいところを見せたな。よかったら忘れてくれ」
「何のことだ？　記憶にないぞ」
「それならいいんだ」
柳田はそう言うと、エンジンを止めて運転席を降りる。入れ替わるようにしてレレイが後部から乗り込み、ロゥリィ……そしてヤオが恐る恐るという感じで乗り込む。助手席はテュカが座った。

「頼まれたものは、積みこんで置いたぞ」
伊丹が運転席に座る。
「みんな、いいかな？」
伊丹は乗り込んだ女性達に声をかける。
「さぁ、行こ！」
「準備は完了済み」
「いつでもいいわぁ」
「こ、此の身は、本懐です」
伊丹はアクセルを踏み込んだ。
こうして、一行を乗せた高機動車は、あっけなくアルヌスを出発したのである。

アルヌスの丘にある診療施設。
その病室からは眼下にアルヌスの街が見える。老人はベッドに腰掛けて、街から出ていく車両を見送っていた。
「若者が行ったか……」
潰れて光を失った片目を黒い眼帯で覆い、左腕と左足に義肢を装着。服装を整えると、ナースコールのボタンを押した。

「デュランさん、どうしましたか？」
スピーカーを通じて聞こえる看護師の声かけに、老人は肩を竦めた。
「済まないが、一番地位のある人を呼んでくれぬか？」
「どうしたんですか？」
「いや、以前から誤魔化しておった儂のことなのじゃが、話そうと思ってな」
「どういった心境の変化ですか？　いくら尋ねても、『儂はただの農夫じゃよ』としか答えて頂けなかったのに」
「なに、若者がなけなしの勇気を示そうとしているのに、儂がこんなところでぬくぬくとしているわけにも行くまいと思ってな」
「分かりました。すぐに先生を呼びますね」

アルヌス協同生活組合、従業員宿舎。
ドワーフの大工が突貫工事で作り上げた長屋は、自衛隊が拵えた仮設住宅にも負けない住み心地を誇っていた。
そのなかの一室に、食堂の主任給仕のデリラの部屋がある。
石畳の床に、木造のベッド。その通常は藁を積むべき所に、なんと綿の入った寝具が置かれていて彼女を驚かせた。

さらに、据え付けの家具として小さなテーブルとタンスが置かれて、小さな台所までである。窓には、カラフルな彩りのカーテンがかかっている。信じられないことであるが、この空間と備品の全てが、デリラ一人に与えられたものだった。

思わず涙ぐんでしまったほどだ。

こんな好待遇は、自分のような雇われのヴォーリアバニーでは考えられないのである。

亜人に対する待遇が最もよいと評判のフォルマル伯爵家ですら、ハウスメイドは大部屋が普通で、古参格になってようやく二人部屋が与えられる。

ところが、今や自分は個室の主だった。

アルヌスの街は住民や出入りする人間が増えた。これによって手狭になった食堂は席数を増やしたのだが、当然のことながらデリラやドーラ達だけでは人手が足らなくなってしまった。その為に、給仕を増やすこととなったのである。そして新人の給仕を監督したり教育する役職として、デリラには主任という肩書きが付いて、これに伴って彼女の給料が増えて、居室としては個室が与えられたというわけである。

デリラは、はしゃいだ。

無意味に、窓を開けたり締めたり、カーテンを擦ってみたり、まだ埃も浮かんでないというのに拭き掃除してみたり、同僚や後輩を部屋に招いて「先輩、すごぃですぅ」と羨ましがらせて悦に入ったりした。

また気兼の必要な同居人がいないのを良いことに、裸でくつろいだり、へたくそな唄を歌ったりしてみた。その開放感と心地良さは例えようがない。

さらには、故郷の友達に手紙を書いて自慢したぐらいである。返事の手紙を送る余裕がないことを見越して、返信用の費用まで添えて。

手紙の最後にはこう付け加えていた。フォルマル伯爵家に赴いて自分からのこの手紙を見せ、推薦を貰ってこのアルヌスに来るように、と。

デリラは、自分も行くと言ってくるであろう友達の返事が待ち遠しかった。

朝、遅めに起きて支度をして、店に出て昼から店を開く。そして、一生懸命に働いて、客達と楽しくお喋りをして、そして夜遅くに店を閉めて、部屋に戻ってゆっくりと眠る。

食べ物の心配をしなくても良い。

寝る場所の心配をしなくても良い。

休暇をどう過ごそうかな、と悩むことの出来る贅沢。

それは夢のような毎日だった。

だが、昨夜届いた手紙の文面は、デリラが期待していたものとは異なっていた。

「なんで、こんな内容の指示書が、イタリカから？」

それは、フォルマル伯爵家からの秘密指示書であった。

その内容は、今のデリラには到底受け容れがたいものだった。もし、この指示をそのままに実行

したら、この街で自分はもう働けなくなってしまう。それどころか、この街で働く全ての亜人達が立場を失いかねない内容である。それはもう、決して許されないことだった。

「どうして!?」

どうして、このような内容の指示をフォルマル伯爵家が出して来るのか。今の自衛隊とフォルマル伯爵家の関係においては、絶対にあり得ないはずだ。しかもフォルマル伯爵家は、日本との講和を推し進めているピニャの後見監督下にあったから、二重の意味であり得ないのだ。

だが、指示には従わなければならない。

それが、フォルマル伯爵家の密偵としてのデリラの使命である。矛盾した命令と立場と、自分の幸福を考えたデリラは、手紙を前にして身動きを取ることが出来なくなってしまったのである。

せめて誰かに相談したかった。だが、誰が良いか。同僚？　駄目だ。上司の料理長？　もっと駄目だ。いっそのこと、伊丹や組合の幹部達ではどうか。

そう思った時、窓の外を高機動車のエンジン音が響いた。

「あ、イタミの旦那！」

窓を開いたデリラの前を、伊丹達の乗る車が走り去って行くところだった。

12

「神よ。天地を支える、使徒よ。我が祈りをここに捧げる。この身を供犠として、我は祭祀の炎をくべる者なり……。
戦いの神エムロイ
冥府の王ハーディ
盟約の神デルドート
復讐の神パラパン……」
デリラは祈りの言葉と共に、テーブルにしつらえた小さな祭壇に向かった。
神々を象徴する燭台に火を灯すと、片膝をついて頭を垂れる。その長い兎耳の尖端を床につけるほどに。
既にその身は、戦衣につつまれていた。
その美貌を隈取りで化粧し、手には煤(すす)で燻(いぶ)した抜き身の剣を掲げている。
「我を、あらゆる恐れ、慈悲、愛、迷いから守り給え。この身はこの時より、敵たる者の命を奪う一振りの剣と為らん。赤き血を受けてただ錆びゆく鋼となりしも、忠誠を誓いし我が魂魄は不滅不

変なり」

それは、ヴォーリアバニーの祈りだった。

ヴォーリアバニーは、大陸の東北域の平原に小さな原始的な部族国家を築いていた。

その性質は剽悍にして残忍、激しやすく、そして淫乱であると年代記に語られているが、ヒト種の一方的な記述だけで、彼女達とはこういう種族であると語ることは不公正のそしりを受けることとなるだろう。が、そのような記述が残されるには、やはり残されるだけの理由があって、そこには彼女たちの生活していた地域では、部族間の争いが絶えることなく毎日のように戦争にあけくれていたこと、そして彼女たちが種を残すために、部族外の男と好んで交わったことが年代記作家達に強い印象を残したのだろうと考えられている。

その社会は、純血種たる女王が絶対的な権力をもって大勢のヴォーリアバニーを従えるというものだった。君臨する女王を支えるために、貴族に相当する階層も存在する。だが、それらはもっぱら地位や血統を示したものであり、家によって継承されていく性質のものではなかった。何故なら、彼女たちには家という概念がなかったからだ。その理由は家を形成するのに必要な男という性が、極まれにしか産まれなかったことにある。ヴォーリアバニーは多産であるが、男はほとんど産まれてこない。故に稀少であり、稀少であるからこそ一族の男と交わって産まれて来る子供は純血種として女王候補とされていたのだ。

一族の男が稀少となれば、他の女達は他の種族の雄と交わってその精を得て、子をなすしかない。

夫婦という概念がないから気に入った者と気に入った期間、つがいとなって閨を共にする。そして飽きれば別れてしまうのである。実にあっさりとしたものである。だから、あえて言うならば、部族その物が家族として機能しているのだ。デリラも部族の女達を親として育てられ、部族によって教育されて成長したのである。

だが、その王国も女王の裏切りによって滅亡した。

帝国軍が攻めて来たのである。

それは軍事的な攻撃というよりは、狩猟に似ていた。そう、帝国軍の目的は領土や財貨ではなく彼女達そのものであったのだ。美貌に優れていると名高い彼女たちを捕らえ、奴隷として売り払うためだけに、仕掛けられた戦争であった。

彼女たちは果敢に抵抗した。個々の力量においてはヴォーリアバニー達は帝国兵士をはるかに凌駕していたから、帝国軍を苦しめ、翻弄した。だが、そこまでであった。

装備と数、そして戦力の組織的な運用において帝国軍は洗練されていた。各所でヴォーリアバニーの反撃に翻弄され、戦線を食い破られたりしつつも全体としての攻勢は怯まず、面で押し続けられた彼女達は、最終的には敗北してしまったのである。

最後まで刃向かった者は嬲るようにして殺され、力尽きて抵抗を断念した者は兵士達に陵辱された後に、烙印代わりとして片耳を中途で切り落とされる。そして市場でセリにかけられたのである。奴隷として。

もちろん、全員が捕らえられたわけではない。一部で、なんとか逃げ落ちることの出来た者もいる。ただ、逃げた者を待ち受けていたのは奴隷となった者よりも、さらなる過酷な毎日であった。

帝国軍の追跡を逃れるために、住み慣れた故郷を捨て各地を流転し、一日一日の糧を得るだけで精一杯。襤褸をまとい一握りの穀物のために盗みに手を染め、馬鈴薯の一つと引き替えに身体すら売る。こんな辛い日々が続くなら奴隷の方がマシと、あえて自ら片耳を中途で切り落として、捕らわれようとする者も出た。

その決断を、止める者もいなかった。

誰も彼もが、一片の誇りに縋って酷い生き方を続けるより、楽な生き方の方が良いかも知れない、と揺れ動いていたからだ。

だから、最後まで残ったのは、誇りを捨てるなら死んでしまった方がマシという思いの強い者だけだった。そして、それを支えたのは自分達を裏切った女王に対する怨念だろう。この誇りと憎悪の二つだけが、彼女たちを生かし続けて来たのである。

そんな彼女たちに、希望の光がもたらされたのは程なくしてからである。

フォルマル伯爵家先代当主コルト。

それが彼の趣味だったのか、それとも開明的な思想に基づくものだったのかは、今となっては知る由もない。彼をよく知る者ほど「趣味だろう」と評する。要するにヒト種の美女よりも、亜人の美女を好んだという説である。

実際、彼の寵愛を受けたというキャットピープルや、メデュサの女性の名が後々まで残っている。が、彼女たちの殆ど全員が、伯爵について問われても幸せそうな微苦笑をするだけで、口を閉ざしているので真相は謎となっていた。

後年、当主として成長したミュイ一人だけが後継者の特権として、年老いた彼女たちから父親の思い出話というか愚痴話を聞くことができたらしい。ただ、そのミュイ自身も、吹き出しそうになるのを堪えて、父親の名誉のために決して語らなかったということである。

そこから推測されることは、ただ一つ。彼が地位や権力を利用したり、彼女たちの弱みにつけ込んだりしたことはなかったということだろう。たとえ亜人趣味だったとしても、彼女たちの自由意思を尊重する開明的な趣味だった、と評して良いのかもしれない。

いずれにせよ、フォルマル伯爵家は、ヴォーリアバニーやキャットピープル、ハーピィ、メデュサといった、大陸の各地で虐げられているような亜人部族を集めて領内で庇護し、不当に取り扱うことを禁じた。これによって多くの亜人達が彼の領内で最低限ながらも生活を続けることが出来たのである。

流れ着いたヴォーリアバニー達が伯爵に与えられたのは、作物も育たないような痩せた土地ばかりの山中だった。だが、そこは彼女達にとっては唯一無二の安住の地となった。小さな家をつくり、集落を作り、仲間を呼び集めて、そこを第二の故郷として生活を始めたのである。

しかも伯爵は、彼女たちを貧困から救うために、希望する者のなかで条件に適う者をハウスメイ

ドとして雇い入れるということまでしてくれた。こうしたことで彼女たちの極貧生活は、わずかでも潤ったことは確かなのである。

この恩に報いることができるならば何でもする。それが彼女たちの総意である。

だから、伯爵家からの指図ならばそれに従う。それがデリラの最終的な決断だった。

デリラは、考えることを止めた。あらゆる疑念と迷いを捨て、彼女に与えられた責務を果たすべく剣を握ったのである。

＊　＊

伊丹等を見送った柳田は憤懣のやるかたない表情を見せていたが、しばらくすると、肩を竦めて「ちっ、しょうがねぇなぁ」と頭を切り替えて日常の業務へと戻った。

アルヌスの街の人々もそれぞれに、それぞれが担うべき仕事へと戻っていく。ＰＸの売り子はＰＸに、料理人や給仕達は食堂に、そして大工のドワーフ達は現場にと……。

柳田は、伊丹のせいで増えてしまった仕事を手際よく片付けていった。

苦虫を噛みつぶしたような表情をしている檜垣三等陸佐に、伊丹がしでかしたことを説明して、表情の苦さをさらに増強させたあと書類の差し替え等を進言する。

「つまり、『現地住民から重要な地下資源情報を得た伊丹二等陸尉はその緊急性と重要性を鑑み、

隊の指揮を桑原曹長に任せると、現地住民の協力を得て単身特地エルベ藩王国との国境方面へ調査に赴いた』ということになるわけだな……」

「そうです。以前より、伊丹にはこちらでのコネクションを利用して、戦略資源についての情報は優先的に集めるようにという訓令が出ています。今回の行動は、それにのっとったものであります」

「ま、地下資源が原油、ダイヤモンドとなればいたしかたないか」

「ええ。以前から『速く探せ、早く探せ、まだかまだか』と本省の連中にせっつかれておりました。こちらの言語に精通した各偵察隊の要員は、帝都での活動で手一杯でしたから、これまでは資源探査に手を付けることは出来ませんでしたが、これは極めて重要な任務と位置付けられております」

「目的については良しとしよう。だが、問題は緊急性だな。帝都に赴く任務を放棄するほどのものか？」

「はい。現在日本を取り巻く周辺状況は日増しに厳しくなっております。アメリカ、EU、中国、ロシア……世界の国々がこの特地に踏み込んで来るのも、そう先のことではありません。今のうちに資源の正確な位置情報をおさえておかなければ、我が国のアドバンテージは失われてしまいます。これは国家戦略上極めて重要な任務であり、可及的速やかになされなくてはなりません。伊丹は適切な判断を下したものと思われます」

「だが、単身での活動は危険ではないのか？　ドラゴンも出ると聞いているぞ」

「奴も、覚悟の上でしょう」
「そうか。覚悟の上か……」
檜垣三等陸佐はそう言うと、書類を前にしばし瞑目して、判子に手を伸ばした。
「よし。そのように理解した」
印影もまだ乾いていない書類を受け取った柳田は、一礼して檜垣三佐の前から退出しようとした。
そんな柳田の背中に檜垣の言葉が浴びせられた。
「俺は思うんだ。彼奴はいったい、何を考えてるんだろうか、と」
柳田は基本教練の教範通りに回れ右して向き直ると、破顔して言い放った。
「自分は以前から馬鹿であると理解しておりました。本日、その確信を深めたところです」
檜垣は視線を窓の外に向けると、独り言のように言う。
「なんで、あそこまで馬鹿をやれるんだ、あいつは」
柳田は檜垣の問いをあえて無視した。
「ルールや規則というのは、守るために存在します。ただ、それを遵守するだけなら、我々人間の存在は、いずれ世に出てくるであろう人工知能を搭載した人間型のロボットに劣ることとなるでしょう」
「なんだ、それは？　ＳＦの話か？」
「いいえ。さして遠くない未来の話だと心得ています」

「そうか。だとしたら人間の価値はなんだ？　何の意味がある？」
「人間の価値は、ルールや規則を逸脱できることにあります。いつ、何を理由として、ルールや規則を破るか。そして破ったか。そこに人間の価値は見出されることでしょう」
檜垣は柳田にすら聞こえるほどに、深く嘆息した。
「ヤオという娘が地面に頭をこすりつけて言ったんだ、自分の故郷を、一族を救ってくれってな。俺の足に縋るんだ。あの綺麗な娘がさ。そりゃもう、こっちの胸が苦しくなるような声で泣くんだぜ。あの時ほど迷ったことはない。だが俺は動かなかった。動けなかったんだ。俺にも養うべき家族が居る。部下にだって家族が居る。勝手が出来る立場ではない」
「三佐。それが普通です」
「お前の言い様なら奴だけが人間としての価値を示したことになる。奴が羨ましいな」
檜垣はそう言うと椅子を回して背を向けた。
柳田はその背中へと告げた。
「三佐。貴方にとっての『その時』が、たまたま今でなかっただけだと存じます」

柳田の仕事は続く。
「はいはい、お次は、と」
走るようにしてやって来たのは、陸上自衛隊特地方面派遣部本部・作戦幕僚部の第二科執務室。

二科長の今津一等陸佐は、特地内における『情報』を一手に取り扱う責任者である。

彼の部下は基本的に制服組自衛官だが、この特地においては背広組を含んだ情報本部の要員や、公安調査庁、外務省、そして警察の公安からの出向者等も含まれて、寄り合い所帯の体を成している。ある意味、それぞれが本局の出先機関として第二科に陣借りしていると言っても良い。そして、それぞれが得意とする分野で特地における情報収集の糸を繰り、あるいは情報を分析、評価、方針の策定に携わっている。これを統御することが今津の任務なのである。

「今津科長。書類に判子をお願いします」

柳田の差し出した稟議書を、今津はちらりと眺め見た。これは伊丹の単独行動の合法性を裏付ける書類でもある。既に、檜垣の判が押されていて、残る空欄を埋めれば完成である。

今津は、さらさらと斜め読みすると印鑑を押した。

「柳田。天然資源関係の情報なんじゃけんど、もうちぃと急げないものかのぅ？　ものすごい矢の催促なんだが……」

「今でも偵察隊の人員の殆どが、二科主導の帝都工作に取られてるじゃありませんか。これ以上は、なかなかままならないのが現状です」

「そこをなんとかならんかのう。カトー先生とか、レレイちゃんみたいな学者さんからもろうた情報と空自の航空写真だけではどうもな。やっぱり現地に赴いての調査が必要なんだわ。講和交渉も大事だが、こっちはこっちでやっぱり大事やから、たのむわ」

実際、現地語が使えて、調査・各種工作といった活動に従事できる人員は限られているのだ。講和交渉の支援や帝都内での活動にほとんどの手が取られているため、資源状況の調査は遅々として進んでいないというのが現状である。

柳田はこうした関係各部署の要望を調節して、実働部隊に任務を振り分けていく実務を担っているために、こうした要望が直接ぶつけられてしまう。だが現状では、抜本的な対応などとうてい見込めない。だからどうしても、その場しのぎや場当たり的な対応、時間稼ぎなどで対応せざるを得なかったのである。

「ホイで思ったんじゃが、この伊丹っちゅう奴の今回の行動。これからも続けられんかのう？」

「どういうことです？」

「要するにや。幹部自衛官に、雇った現地人を三〜四人つけて、あちこちに偵察に行かせるっちゅうことや。さすれば人員も少なくて済むやろ？　六個ある偵察隊それぞれから、一人か二人を引っこ抜ければ、資源探査のチームが少なくとも六個くらい作れるやないか。偵察隊だって一人か二人ぐらいなら、都合つくんやないか？」

確かにその通りである。

資源探査と言ってもどんな鉱山があるか見て来るだけだから敵と会ったら逃げればよいのだ。これなら通常装備の隊員が二人も居ればよい。ただ人員が少ないと危険が多いから、これを補うために信用できる現地人を雇って連れて行けばいい。名目が必要なら案内人ということにすればいい。

つまり、今回の伊丹のように、である。
ただ、何かあったらすぐさまサポートできる体制が必要となるかも知れない。これも、特戦や西普連（西部方面普通科連隊）が使えるなら、現実的なアイデアとなり得る。
「頭に入ったようやな。別に今日明日までに何とかしろとは言わんから、しっかり頼むわ」
今津はそう言って、次の書類を手にした。
柳田は、資源探査チームの構想を練りながら二科を後にしたのである。

国旗降納のラッパが鳴った。
すでに、陽も落ちようという頃合いだ。隊員達の多くは訓練や各種の仕事を終えようとしていた。それぞれ隊舎前に集まって、課業終了の挨拶を中隊長にして、武器の手入れを始めたりして、武器庫に収める作業に取りかかっている。それが終われば、飯を食い、風呂に入り、洗濯や靴磨きなどを済ませ、居室の清掃と身辺の整理をして、余暇を過ごすこととなるだろう。
勿論、夕方や夜間に任務がある者はこの限りではない。付近の偵察や警戒のために、これから武器に弾薬を装填し行動を始める者達もいるのだ。
柳田も、時間が来ても仕事を終えることの出来ない者の一人であった。
まだ、この特地における自衛隊で最も偉い人に、書類について説明を垂れて判子を貰うという大仕事が待っていたからである。

「そうか、原油埋蔵の可能性を示唆する情報を得た伊丹二等陸尉は、エルベ藩王国方面の国境地帯に、現地人協力者数名の案内を得て資源探査に赴いた、ということなんだな」

重々しい口調の狭間に、柳田は背筋を伸ばして直立不動のままに頷いた。

陸将室の厳粛な雰囲気は、柳田をして緊張させる重々しい雰囲気で満ちていた。何故なら、第一、第二、第四、第五、第六と、特地に配備されている全ての戦闘団の隊長達、そして空自から来ているパイロット四名も顔をそろえていたからだ。

特に、加茂一等陸佐（第一戦闘団長）、健軍一等陸佐（第四戦闘団長）の戦闘的なほどの鋭い視線は、柳田の身体を貫いて、無言の重圧をぐいぐいとかけて来る。彼らにみなぎる怒気がひしひしと伝わって来るようだった。何か彼らを怒らせるようなことを俺はやったか？　などとびくびくしつつ、緊張を高めていく。いくらエリート意識に凝り固まった柳田であっても、この場では下っ端二尉でしかないのが現実なのである。

柳田は、奥歯を食いしばりながら、狭間の問いに「はい。その通りでありますっ！」と答えた。

「彼奴（あいつ）は何を考えている？」

「本省訓令五の３０４号『特地における戦略資源探査について』が、伊丹の行動の根拠となります」

「それは分かっている。私が言っているのは表向きのことではないことは分かっているんだろう？」

「わかりません。表も裏も、伊丹は資源探査に出かけただけであります」
柳田の迷彩服は、水でも浴びたかのようにその迷彩色をくすませていた。絞れば滴が垂れそうだ。
「そうか。ならば良い」
狭間は、柳田から視線を逸らして書類に視線を向けると、椅子に深々と腰を下ろし、その場にそろったそうそうたる部隊長達に問いかけた。
「諸君。どうするかね？」
「陸将のお心のままに」と健軍は告げる。
「我々も、いつでも準備が出来ています」
空自の神子田二等空佐の言葉に続いて、久里浜二等空佐、西元二等空佐、瑞原三等空佐の四名は胸を張った。
「宜しい。大変宜しい」
狭間は腰を上げた。
「今の中国についてはさておき、古代中国には尊敬すべき人物も、我々が参考とすべき逸話も多い。申包胥という者の話がそうだ。彼は中国戦国時代における楚国の臣だった。楚が呉の軍によって滅びようとしている時に、彼は援軍を求めて秦に走った。だが秦王は『楚が滅びようとしているのは、身から出たサビである。なぜ、我が秦の兵を危険な目に遭わせなければならないのか』と言って断ったという。すると申包胥は秦宮の広場で七日間昼夜を問わず号泣して援軍を求め続け、これに心

動かされた秦王は援軍を約束したという。……どう思うかね？」
これに答えたのは空自の神子田二佐だった。
「余所の国の戦争に引っ張り出されて、命を落とした秦兵からすれば、たまったもんじゃないねぇ。馬鹿のやることですな」
「そうだ。だが、我々の中にも馬鹿が居たようだ」
久里浜二佐がため息と共に言った。
「馬鹿とはいえ、日本国民です。こいつを見殺しにはできませんね」
「というわけだ、諸君。馬鹿を死なせるな。加茂一等陸佐っ！」
「はいっ！」
加茂は伸ばしていた背筋をさらに伸ばした。
「第一戦闘団に待機を命じる。適切な戦力を抽出して、伊丹二尉の資源探査支援の準備をせよっ！次に神子田二佐っ！」
「はっ！」
「航空支援を要請する。あらかじめ予想することの出来ない万が一の不測の事態、例えば特地甲種害獣との遭遇に備えていただきたい」
「了解ですっ！」
それぞれの隊長達が散開して、陸将室から出ていった。

何が起こっているのか理解できず、あっけにとられていた柳田は、おそるおそる狭間に尋ねた。
「あの、エルベ藩王国との国境を越えられないからこそ、我々は手をこまねいて見ているしかなかったのでは、ないでしょうか？」
柳田が、伊丹を焚きつけたのもそれが前提条件だった。こうもあっさりと、部隊を派遣できるなら、テュカを追いつめるような、悪どい手段をヤオに唆さずに済んだのである。
狭間は、柳田を見据えた。
「今となっては何も言うまい。奴が行動を起こさなければ、彼の人物も自ら名乗り出ることはなかったのだからな。柳田、お前こっちの言葉は結構使えるようになっていたな」
「ええ。日常会話くらいなら、なんとか」
「これから診療施設に行って来てくれ。会って貰いたい人物がいる。お前の任務は、その方の要望を聞いて、こちらの要望を伝えることだ」
「了解しました。ですが、その方はどんな方でありましょうか？」
狭間は、柳田の問いに大きな咳払いをひとつするとまず汗まみれの上衣を脱ぐように言うのだった。

＊　＊

「エルベ藩王国の国王が、ここの診療施設に入院してる？」

狭間の話に柳田は驚きを隠せなかった。

こんな重要人物が身近にいたとは。もし本当なら、今回の件についてもそうだが、藩王国との国交も日本にとって有利に展開することが出来そうである。

「で、本物なんですか？」

「ああ。先ほど、ボーゼス嬢から連絡を受けた。語学研修生の一人でスィッセスという娘さんが、本人と話をしたことがあったということで、間違いないらしい。彼女たちも大いに驚いていたよ」

狭間も抜け目なく、語学研修生達に国王が本物かどうか確認させたようであった。帝国の貴族なら、帝国の諸侯国の君主と面識があるかも知れないと考えたのが、何気に正鵠を射ることとなったのである。

こうして、柳田は診療施設の病室へと赴いたのであるが……。

柳田の見た光景はベッドに座った隻腕隻眼の男性が、晩飯をがつがつと口に運んでいるところだった。病み上がりとも思えない、なかなかの健啖（けんたん）ぶりである。

「おおっ、来たか。待っておったぞ……儂の留守中、政務は継嗣の王太子がとっておるはずじゃが、

儂からの手紙が届いても奴は喜びはするまい。おそらく黙殺するじゃろう」

デュランは、柳田の顔を見るなり、脈絡のつながらない状況の説明を始めた。自己紹介も、前ふりも無しだった。

柳田が、状況を把握できるまで何の反応もしないと見るや、デュランは「ふむ」と再度料理に挑み始める。どうやら話の主導権を取ってなし崩しに要求を畳みかけて来るつもりだったようだ。

柳田はタフな交渉になると気を引き締めた。何しろ相手は小なりと言えども一国一軍を一身で率いた男だ。甘く見て良い相手ではないのである。デュランは、料理をつつきながらここでの食事について論評した。

「儂としては、酒が付かんことが常々不満じゃった。じゃが医者と看護人が煩いでな、ずっと我慢しておったのじゃよ。が、今宵からは晩飯だけは下の食堂からまわして貰うことにしたわい。このアルヌスの庶民達は、随分と良いものを食べているようじゃな。まつりごとが上手く行っており、民が豊かな証左じゃよ」

見れば、トレイに載せられていたのは肉や野菜を炒めたものだった。

何を食べているのかと思えば、街の食堂で出される普通の定食である。特地の新鮮な食材に、日本の調味料という組み合わせだから、確かに美味い。だが、陛下などと敬称付けで呼ばれる立場の人が、お気に召すほどに凄いとも思えない、ごく普通の食事なのである。ただ、病院の食事は不味いというのが定番である。どれくらい入院していたかは知る由もないが相当長い期間、味気ない病

院食を食べていたのかも知れない。そのせいで、まともな味付けの食事が数倍美味く感じるのだろう。

「まぁ、下の街は我が国の影響下にありますからね。当然と言えば当然です」

柳田はそんなふうに日本という国を誇ってみせながら、国に残っている王子が自分からの手紙を喜ばないだろうという理由を尋ねた。

「ああ。あ奴はの、日頃から儂を疎ましく思っておったのじゃよ。だから儂がいなくて今頃清々しとるはずじゃ。使者など送ってもいい顔はするまいて」

「そうでしたか」

国境を越えての軍事活動について、国王個人の承諾を得たとしてもエルベ藩王国が彼に従ってないのであれば意味がない。エルベ藩王国政府に、国境を騒がせる旨をきちんと知らせておかなければ、軍事侵攻と受け取られかねない。

「そこでな、この手紙をクレムズン公爵と、ワット伯爵に送ってくれ。この二人は儂に味方してくれる。場所も地図に示しておいた」

デュランは柳田に、二通の信書と手描きの略地図を差し出した。

「この二人を通じて、国内の有力な貴族をまとめて貰うつもりじゃ」

柳田は、これを素直に受け取らなかった。両手を振って「とんでもない」と断った。

「お家騒動は嫌ですよ。我が国には関わりのないことです」

「何を言う。藩王国は本来儂の物じゃ。それを取り戻すのにちょっとぐらい協力せい」
柳田は、デュランの要請に対して眉根を寄せながら「そういう話は、宗主国の帝国にご依頼下さい」と突き放した。
するとデュランは「帝国はもう嫌じゃ」と憮然とした表情を見せる。相当の恨みを帝国に対して抱いている様子だった。
「しかし陛下にご助力して、我が国に何の利益がありますか？」
「炎龍退治のために国境を越えることを許可する。それでどうじゃ」
柳田は首を振った。そして非常に狡賢そうな表情をするとこう言い放った。
「陛下の首を塩漬けにして王子様にお送りしても、ご許可が頂けそうですな」
デュランは「ちっ」と舌打ちした。
「なんとまぁ、喰えない奴。儂の首を塩漬けにするというか？　他人のために命がけで、炎龍退治に出かけるようなお人好しもおれば、お前のような嫌らしい奴もおる。どっちがニホン人なんじゃ？」
柳田はどちらが本物と言われても、どちらも日本人であるとしか言い様がないのだと嘯いた。日本人にもそれぞれ個性があり、一人を見て全員を規定するのは間違いなのだ。
この陰険漫才は、それぞれの国益をかけた舌戦である。
本来ならば外務の官僚がするべきことであるが、彼らの担当だからと言って、今此処にいる柳田

があやふやな対応をすれば、それをきっかけにズルズルと利益だけ取られて、こちらは何も得られないという状況になりかねない。実際、日本政府はこの手のことで、利益を得ることが苦手で、いつも気前よく損ばかりしている。だが柳田は日頃の仕事の関係か、それとも元々の性格か、得られる可能性が少しでもある利益は、狡賢く立ち回って根こそぎ掻き集めることに馴れている。

狭間が、あえて自分をここに差し向けたのも、デュランとの交渉を有利に進めるためだと柳田は理解していた。

「で、何が欲しいんじゃ？」

ようやく、デュランは韜晦を止めて単刀直入に要求を聞くという態度を見せた。デュラン個人には取引の材料がないことを素直に認めたのである。

柳田は、遠慮無く欲しいものは欲しいと素直に告げることにした。

「地下資源の採掘権。税の免除」

「金山と銅山は、我が国の富の源泉じゃ」

「ことごとく寄越せとは申しません」

「しかしなぁ……」

「では、金と銀と銅については半分。そして金銀銅以外で、有望な資源があったら、それらについては全てということで」

「ちょっと待て。今、ある金鉱も半分か？」

「では、新規に開発する金、銀、銅の鉱山については半分と、金銀銅以外の未開発の地下資源については全てということで」
「容易に答えられぬなぁ」
「何故ですか？」
「お前さんが、金銀銅以外は全て寄越せと口にする理由じゃ。妙に気になる。金銀銅以外で価値のあるものが、我が国に埋まっておることを知っておるのではないか？」
「それを知っていて、教えて差し上げなければならない理由がありますか？」
デュランは、「欲をかいては損をするぞ」と場の緊張を解きほぐすように笑った。
柳田は、損をするのは陛下の方だとそっぽを向いて呟く。
「知らないのですから、ないのと同じでしょう。これからも知らずに居てください。それとも、やはり塩の用意が必要ですかねぇ？」
「分かった、分かった。金銀銅など貨幣に用いる鉱物以外の、地下資源一切でどうか？」
柳田は立ち上がると、デュランの差し伸ばした手を取りつつ念を押した。「免税特権をお忘れなく」と。これを忘れると、油田や鉱山の利益、そして通商と通行に莫大な税金をかけてくるおそれがある。
「ちっ、抜け目無い奴。致し方あるまい」
「では、引き替えとして我ら自衛隊が、陛下のご帰還を護衛いたします。ドラゴン退治のついでで

す。さして手間もかかりません」
「よしよし。これより、我が国はニホンと同盟関係じゃ」
「それについてはお約束いたしかねます。残念ながら自分は下っ端なんで、外務担当者が後日、城に戻られた陛下の下を訪ねることでしょう。その際に、お話し合い下さい」
「なんじゃ、アテにならん奴だのう」
帝国から距離をおいて自立しようと考えるデュランとしては、この条件を認める見返りとして、日本からの庇護を確かなものにしたかったのだろう。
デュランは不満そうに鼻を鳴らした。だから柳田は付け加えてやることにした。
「陛下が、地下資源についての約定をお守り下さる限り、お国と、日本は好意的な外交関係を結ぶことが出来ますよ」

＊　＊

アルヌスにおける医療施設をわざわざ『診療施設』と呼んでいるのには、実はそれなりの理由がある。日本では、医療機関についての定義が医療法によって明確に定められている。ベッドが十九床以下の医療機関を『医院』または『診療所』と呼び、ベッド数が二十以上の場合は『病院』と呼ぶ……というようにである。

アルヌスの診療施設はベッド数で言えば百を超える収容能力を持つ。その意味では都内の大病院に匹敵する。だが、今のところ稼働ベッド数はわずかに五。法に従うなら、施設基準とか人員の配置基準の都合上『医院』としておきたいところである。が、しかし一度医院として届け出てしまうと、万が一の場合、二十人を超えた患者は受け容れることが出来なくなってしまう。戦闘地域という性質上いつ何時大量の負傷者が出るか分からないのだから、これは不味いということになる。

だから、法律上の医療施設としては届け出ず、どちらともつかない『診療施設』などという言い方をして誤魔化しているのである。どれほど立派な建物を持っていても、被災地などにテントで作った臨時の診療施設と同じ扱いなのだ。

とはいっても、そんな診療施設も外見的には立派な病院だった。

そんな診療施設の玄関口にはベンチが置かれて、一人の女性が座り込んでいた。

紀子だ。

空には無数の星が瞬く頃合い。

消灯時刻を過ぎた病院では、病室はもとより喫煙場所と定められた廊下などでも煙草を吸えなくなる。だから玄関先やその周辺でパジャマを着た患者達が屯して煙草を吹かしている光景を、大きな病院などに行くと見ることができる。

余り褒められたことではない。だが元気だけは余っている整形外科系（骨折とか……）の入院患者がストレスを溜め込むのもよくないので、医師や看護師も本人の体調が許す限り黙認しているの

である。

だが、ここの診療施設では入院中の患者は全部で五人しかいない上に、喫煙者は紀子一人だけ。普段はこの時刻に、デュランとかいう義足義手の爺さんがやって来て、紀子が鬱陶しく思うほど話しかけて来るが、そんな彼も今夜に限っては来ないので、紀子は一人静かに煙草の煙をくゆらせていた。

ありがたかった。今夜に限っては、独りであることがありがたかった。

今日、医師立ち会いの下、精神医学ソーシャルワーカーから告げられた言葉があった。

それは、「貴女のご家族は全員、銀座事件以来連絡が取れません。おそらく皆さん、お亡くなりになったものと思われます」というものだった。

「うそでしょ」

「……」

当然のように発した紀子の懐疑に、医師は首を横に振るだけである。そして携帯電話が与えられた。

「なんだ、電話使えるんじゃない。嘘つき」

当然のように、紀子は実家に電話した。だが電話は通じなかった。兄妹の携帯電話にもかけたが、別の人が出た。

「変よ。電話、故障してるんでしょ」

次に、電話をかけようとしたのは大学の友達だった。
だが、親しい友人の電話番号は無くしてしまった携帯電話のメモリーの中だ。使わない記憶は頭の中にはほとんどを残っておらず、親しい友達に電話をかけることも出来なかったのである。
幸いなことに知り合い程度の友人が、たまたま末尾四桁が１１１１と、とても記憶しやすい番号を持っていたのを思い出したので、震える指を押さえつけるようにして、ボタンを押した。
するとその友人は、紀子からの電話に驚き、続いて紀子の無事を喜んでくれた。そして、紀子が行方不明になってから家族に起こったらしい出来事をかいつまんで教えてくれたのである。こうして彼女を通じ、紀子の友人に無事が伝えられて多くの友達と連絡が取れることとなったのだが、皆一様に、紀子の家族と連絡が取れないこと。それどころか彼女の家が火事で焼けてしまい失われてしまったことなどを教えてくれた。数ヶ月間帰る者のなかった家だけに、家電製品が過熱したらしいという。
人は、あまりにも激しい精神的な衝撃をうけると、ブレーカーが落ちるように何も感じなくなってしまうものらしい。
脱力感と倦怠感だけが紀子の中に残った。
悲しくなっても良さそうなのに、全くもって全然悲しくないのである。
こういう時は、普通は傷悴していないといけない。テレビや映画にあるように、号泣して枕を涙で濡らすとか、わめいたりとかしないといけない。そんな考えから、今の自分の状況に相応しい行

動をとることにして、悲しんだような表情をしてみる。だが、それがどうにもしっくりこなかった。まるで他人のよう。自分のことでは無いような感じだったのである。お陰で、なんだか可笑しくなって笑ってしまったほどだ。

何をしても、自然な感じがしない。手を叩いてみれば痛いのだが、それは自分とは関係ないところで起きた出来事のようにも感じる。痛みとしての実感が湧かないのである。自分が自分でない感じとでも言うべきか。ふわふわと浮いているような感触だった。どこに居ても身の落ち着け所がない。ベッドに横になっても、座っていても、本を読んでも、壁を叩いてみても、自分の頭を叩いてみても、落ち着かない。

さすがの紀子も気付いた。「どうも、自分は変みたい」と。

考えてみれば当たり前だ。恋人と一緒に拉致されて、彼はどうなったか分からずじまい。そのあと思い出したくもない毎日が続いて、助けられたと思ったら、実は家族全員が死んでいて、しかも帰る家も無くなっていたというのだから。変にならない方がおかしい。

紀子の頭脳はそう結論付ける。

そう、変なのが普通なのだ。紀子はそう考えて、気持ちを落ち着かせるべく玄関先にまで来て、煙草をふかしていたのである。

ため息と共に煙草の煙を吐いて、ふと思う。

「いっそのこと、死んじゃおうか」

そんな言葉を口にしてみた。普通なら、何考えてるんだ自分は……と思ったり、死に方を連想してゾッとしたりするのだが、それもない。ただ、「そっか、あんた死にたかったんだ？　よかったぁ」という安堵の響きの籠もった女声が耳に届いただけであった。

拉致されてから、虜囚生活の中で生き残るために特地の言葉を会話程度ならこなせるまでに必死で学び取ったのが幸いして、紀子はその声の主と会話をすることが出来た。

「誰？」

「そう言うあんたは、ノリコでいいかな？　人違いだったら困るからね」

紀子の前に立ったのはヴォーリアバニーの女だった。怖そうな隈取りと、女性的な身体のラインが妙に合っていて妖艶な感じだった。

「あたいも、死ぬのは嫌だって奴を殺すのは気が引けてたんだけどね、死にたいんなら、いいよね。手伝ってあげるだけってことで……」

「私を殺したかったの？」

「うん。ちょっと訳ありでね」

「そっか。私、死んじゃうんだ」

紀子は死の影をまとった女が前に立っても、心が動かなかった。恐いとも、嫌だとも、逆に嬉しいとも思わない。ただ、そうなのか……と思うだけだった。だから、紀子は真っ直ぐ女に目線を向けた。これから自分に何が起こるのかを黙って見つめる。

ヴォーリアバニーの女は煤で燻された剣を腰から引き抜くと、ビリヤードのキューを構えるかのように、紀子の喉元に切っ先を当てた。
「ゴメンよ。ホントにゴメンよ。ちょっと痛いけど我慢してな。なるだけ痛くないようにするからさ」
「どっちなの？　痛いのは嫌なんだけど……」
すると喉元に感じていた剣先の力がすっと抜ける。
「困ったなぁ。あたい、痛くないように刺す方法なんて知らないんだ。どうすればいいんだろう。出来るだけ、早く死ぬようにするってことでいいかな？」
「早くってどのくらい？」
「参ったなぁ。どうしよう……」
ヴォーリアバニーの女は本気で困っているようだった。
「死にたくないと抵抗したり逃げようとする人間を殺す覚悟は決めてきたけど、死にたいって言うのを手伝ってやるなんて、思っても見なかったんだよ」
などと言いつつ、長い耳の後ろを掻きむしる。
そんな所作が、知り合いのヴォーリアバニーと妙に似ていたので紀子は笑った。
「くすっ。今の貴女って、なんだかテューレさんみたい」
紀子が何気なく漏らした名前に、女は凍り付く。

「……今、誰だって言った？」

喉元に突きつけられた剣が突き出されるのを、今か今かと待ってた紀子は、「どうしたの？」と改めて目の前にいる女性を見直す。その時である。

「そこで何をしているかっ!?」

デュランとの打ち合わせを終えて出てきた柳田は、ベンチの女性に対して剣を突きつけているヴォーリアバニーを見て、即座に九㎜拳銃を抜いた。

ヴォーリアバニーも反射的に動いた。

柳田は九㎜拳銃を目標に向けると、躊躇い無く引き金を三回引いた。だが、バニーの身のこなしは、柳田の予想を遙かに超えていた。中空に跳躍して柳田の放った銃弾を躱すと、そのままの勢いで正面から剣を振り下ろしてきたのである。

これを避けることが出来たのはおそらく単なる偶然だったろう。

跳躍した目標を視線で追うために顎をあげてしまい、バランスを崩したのである。半歩の後退が柳田を救った。

鋭い切っ先がわずかに額をかすって柳田の足先にバニーの剣が食い込む。柳田は自分の腹の高さまで伏せられていたバニーの頭部めがけて、前蹴りを放つ。半長靴の固い爪先は充分な凶器となる。だが、これをバニーは後転跳躍で避けると、そのままに距離をおいて剣を構えた。

すかさず、柳田は銃口をバニーに向けようとしたが、バニーは銃口の延長線上を見えない槍か剣

でもあるかのように避けて狙わせてくれなかった。発射された銃弾はよけられないが、銃口を相手に向けるのはあくまでも人間。撃剣に馴れた者なら充分に可能な芸当と言える。

「ちっ」

当たらないのは承知でも柳田は続けて引き金をひく。

銃声が巡察（パトロール）の注意を惹いて、駆けつけて来ることを期待してのことである。実際、遠方が騒がしくなってきた。

銃口を避けるために地に伏せたヴォーリアバニーは、そのままに柳田に向けて突進してきた。腰溜めに剣先を向けて。

下から下半身に向けて突っ込まれると柳田には対応できなかった。

無様に身を捩って躱すのが精一杯。おかけで脇腹に焼けた火箸でも突き立てたような感触がある。

「あちっ！」

その衝撃で引き金を握り込んでしまう。だが幸いなことに、銃口の前には敵の背中があった。柳田は狙いをつける必要もなく弾が尽きるまで引き金を引き、弾が尽きても引き金を引き続けたのである。

「くそっ、くそっ、くそっくそくそっ！」

意識が続く限り。

13

暗い地下倉庫を照らすのは、わずかな数の燭台の灯火。湿気を含んだ空気は重くぬめり、冷たい石の壁はあらゆる温もりを奪い去る。光と音の双方において、外界から途絶されたそこは地獄のような暗さで満ちていた。そんな場所に、唯一とも言える調度品があった。

朽ちかけた椅子だ。

長年の酷使によって継ぎ目も緩み、全体がきしむようになった上に、しばらく放置されていたのだろう。埃が厚く積もっていた。

フォルマル伯爵家の老執事は、そんな危なっかしい椅子に座らせられ、額から脂汗をながしながら肩で息をしていた。その視線は虚空の闇を睨むような、それでいて怯えるような弱々しさが感じられる。

「わ、私は知らないっ！」

喘ぐような返事は、誰に向けたものか。

闇の中に複数の人影が浮かんで、その中の一つが老執事の頬を平手で打つ。

「あうっ」

鈍い音と共に、執事の呻き声が地下室内に響いた。口角の唇が切れて、赤い血が流れ出す。
「バーソロミュー。貴方が当家の信篋を横流ししたことは、分かっているのですよ」
黙々と執事の襟首を掴みあげて、ぎりぎりと締め上げていくのは猫耳メガネメイドのペルシア。
その背後に立つ老メイド長は、苦痛に歪む老執事の表情を無機的に見つめながら尋問を続けていた。
「し、知らない。私ではない。断じてない。信じてくれっ！」
「本当のことをおっしゃいなさい。今ならまだ間に合いましてよ」
数度にわたる殴打が続く。だが、老執事は強情なまでに口を割らなかった。
「本当に違うんだ、私は知らない！　だいたい何を証拠に私を疑う。私は此処にいる誰よりも長く当家に仕えている身なのだぞ。私よりも疑わしい者は大勢いるではないか。お館様の書斎に立ち入ることなど、誰にだって出来るのだからな！」
「しかし伯爵家の公印だけは、貴方が管理しています。違いますか？」
老メイドの視線を合図に、ペルシアは再度の打撃を老執事へと加えた。致命傷を避け、いたぶるように苦痛を味わうように、痛めつけていく。
だが、老執事は頑として口を割らなかった。
「イッソノコト、ココロヨム」
アウレアが前に出ようとした。メデュサ種の彼女の髪は、犠牲者の『精』を吸う際に、それとともにその思考や記憶を深層表層を問わず読みとることができる。ただし吸われる精の量によっては、

犠牲者は死ぬが。

だが老メイド長は、それを止めた。

「お待ちなさい。貴女が心を読んでも証拠になりません。自分の口から話させなければ……」

老メイド長は地下倉庫の隅で、この場を監督するかのように立っている人影へと視線を向けた。

この尋問も、フォルマル伯爵家と、後見人たるピニャにかけられた疑いを晴らすためのものだ。少なくとも、この場に立ち会う者を納得させるものでなければならない。アウレアがいくら「心を読んだ、真相はこうだった」と主張しても、証拠能力に欠けるので他人を信じさせることなど不可能なのだ。

同じように部屋の片隅で、身体を震わせていたマミーナが怒気を含んだ声で言った。

「ペルシア、代われ！　私がやるっ！」

ヴォーリアバニーのマミーナが割って入り、執事に拳を振り下ろした。デリラとは同族でもあり、それなりに交流もあったから、彼女が暴挙を起こした責任がこの老執事にあると思うと、どうしても怒りを堪えることが出来なかったのである。

「お止めなさいっ！　我々は疑われている身なのですよっ。怒りにまかせて打って、死なせでもしたらどうしますっ！　口封じとしか思われませんよっ！」

老メイドの言葉にマミーナの拳が止まった。

老執事は椅子ごと床に倒れて呻いている。

マミーナは口惜しそうに舌打ちすると、肩と耳を震わせながら後ずさり、壁に身体を預けた。

デリラの起こした事件は、アルヌスの街を震撼させた。発展しつつあるとはいえ小さな街だ。警務隊が従業員宿舎のデリラの部屋を調べ始めたことは、瞬く間に知れ渡った。

そして、「どうやらデリラが何かしでかしたらしい」という推測に、入院中のドワーフの弟子から「ヴォーリアバニーと柳田が血だらけで担ぎ込まれた」という別角度からの情報が合わさって、「デリラが柳田を刺した」という正確な推測として、皆に広まったのである。

料理長は、あらかじめデリラに通告した通り、警務隊の菊地（きくち）が職務質問にやって来ると「ええ。以前から、彼女は何か探るような振る舞いがありました」と正直に答えた。

「これで、あっしらは街から追放ですかね？」

料理人やＰＸの娘達はうなだれていた。仲間がしでかした不祥事の累が自分達に及ぶかも知れないと考えていたからだ。だが警務隊の菊地は「なんで？」と首を傾げる。

「お前達は関係ないだろう。それとも関係有るのか？」

この言葉で、アルヌスの住民達は安堵のため息と共に、胸をなで下ろしたのである。

だが、フォルマル伯爵家は、そのようにはいかない。デリラの部屋から、彼女に暗殺を指示する文書が発見されたからだ。それは、この伯爵家の信箋に書かれており、伯爵家の公印まで捺された状態で、ノリコという女性の暗殺を命じていた。

その荒唐無稽な話には、笑うしかない。

今のフォルマル伯爵家は、帝国と日本の間の中立地帯として安定し、繁栄している。だから日本との関係を損ねるようなことは、自分の家を支える柱を切るようなものなのだ。

また、万が一にも、それをしなければならない事情があったとしても、誰の仕業とも分からないように実行させる。わざわざ、暗殺を命じた証拠を残させるなど、馬鹿のすることとしか言い様がない。だが、この事実を知らされた時、老メイド長は反射的に伯爵家は、もうお終いだと思った。

日本側の世界においてもかつてそうであったように、この特地でも要人暗殺の現場に、その家の紋章の入った剣が落ちていたとか、国王を呪った符が出てきたというだけで、幾ら身に覚えが無くとも証拠とされてしまった例が数え切れないほど有るのだ。しかも、デリラがフォルマル家の密偵だったことは事実だ。しかし、間違っても日本人女性の暗殺を命じたことなどない。これだけは確かである。紀子などという女性が存在していること自体知らなかったからだ。とすれば、誰かが嘘の命令をデリラに送ったとしか考えられないのである。

老メイド長は、証拠の文書を携えて「この文書はおたくから出たものですか？」と、第四戦闘団の四〇一中隊を率いてやって来た用賀（ようが）二等陸佐の詰問に「直ちに真相を調べるから待って欲しい」と告げて、家内の取り調べを始めたのである。

やがて疑わしい者の名前が挙がった。伯爵家の執事、バーソロミューである。

理由は彼が伯爵家の公印を管理していたからだ。

もちろん、老執事が自身でこのような命令書を出したとは言わない。彼とて伯爵家の一員であり、

伯爵家が危機に陥れば災厄をその身に被る者の一人だからだ。だが、公印を捺した信簽をそのような用途に使われるとは思わずに横流ししたとしたら？

ペルシアが老執事の身体を痣で綺麗に染め上げ、もう色付ける場所が無くなった頃、部屋の片隅で監視していた男達が、いよいよ動き出した。

「もう、結構です」

用賀二等陸佐と、通訳として付き添う第一偵察隊の陸曹だ。

二人とも無表情そのもので突き放したような態度だ。その冷淡さが、伯爵家に対する日本の感情を表しているように見えて、老メイド長も、マミーナもペルシアも、不安であった。

「いえ。いけません、事を明らかにしなくては」

老メイド長は必死だった。何としても真相を、真犯人を明らかにしなくてはという思いで用賀に訴えかける。真犯人を明らかにすることで誤解が解ける。そのことに一縷の望みを繋ごうとしていた。

「しかし、この男は喋らないでしょう」

「いいえ、必ず喋らせて見せます」

「婦長さん。時間の無駄です」

無駄の一言が、伯爵家に対する死刑宣告のように感じられた。

「そんなっ！」

そんなやりとりをしている最中、地下倉庫の戸を叩く音があった。
「二佐。お呼びですか？」
「おぅっ、待ってたぞ。入ってくれ」
「なんです、ここ？　暗いですね……」
場の空気を読まずに不躾な感想を告げたのは、医官の二等陸尉だった。だがせっぱ詰まった雰囲気が彼のお陰で霧散する。老メイド長も、メイド達も用賀が何をするつもりなのか見る気になった。
「悪いが、打ち合わせたように頼む」
医官は「ふん」と小さく鼻を鳴らすと「了解です」と頷いて、鞄から注射器を取り出した。アンプルを取り出してその首を切ると、シリンダを引いて注射器へと薬液を移していく。
「さてと」
用賀は、ペルシア達メイドに下がるように伝えさせ、執事の顔を覗き込むようにして言った。
「我々は、叩いたり殴ったりしない」
この言葉に、執事は縋るように言った。
「そ、そうか。ならば聞いてくれ。私は、本当に知らないんだ」
通訳のタイムラグの間、用賀は図嚢から一枚の紙を取り出した。デリラの下に送られた文書そのものではないが、それをコピーしたものだ。しかも、文字ばかりでなく触った者の指紋もしっかりと浮かび上がった状態での写しだ。

「では、デリラの下に送られたこの文書も知らないということで良いな？」
「当然だ。私は見たこともない」
「そうか？　思い出すなら、今のうちだぞ。ここを、よく見ろ」
用賀は、文書の文字ではなく指紋を指さした。
「この文様は、爪印なんかで使われるから、お前にも分かるな。指の痕だ。この指の痕が残っているということは、この指示書の実物に触ったことがあるという証拠だ」
老執事は、通訳の言葉を聞いてその顔色を青ざめさせた。小刻みに震えてもいる。
「赤い丸で囲ってるのは、デリラの指。そして彼女の物でない指紋が、あと二種類あった。さて、残された二種類のうち一つがあんたの物でなければいいな」
そう言うと、用賀は老執事の手を、ぎゅっと握った。通訳の偵察隊員が朱肉と紙を取り出す。
老執事は、体中を硬直させて抵抗した。
「どうした？　何で嫌がる。はっきりさせるのに丁度良いじゃないか。この指紋がお前の物でなければ、疑いも晴れるんだぞ」
老執事は、歯を食いしばって手を握って、絶対に指を開かないという態度だった。
「諸君、手伝ってもらえるか？」
用賀の言葉に、ペルシアもマミーナも嬉々として手を伸ばした。老執事の手をねじり上げ掴み上げると、こじ開けるようにして指を開かせて、その十指全ての指紋をべっとりと採取した。

「私じゃない。私じゃない。私じゃない……私じゃないんだっ！」

全身を震わせて懸命に言い訳する老執事の前で、用賀は朱色の指紋と、コピー紙の指紋とを照らし合わせた。とはいっても、薄暗い地下室で精確な照合作業が出来るはずもない。なんとなく見比べただけであった。しかし、照合作業などするまでもないことは、指紋を採取する際の態度で明白と言えるだろう。

「う～む、残念ですな。少なくとも貴方は嘘をつかれた。その訳を伺いたい」

全身を震わせる老執事は、この期に及んで尚、頑なであった。痙攣なのか拒絶なのか見分けの付かない、引きつったような首の振り方で口を噤んだ。

「何か言えない理由があるのかも知れませんね」

通訳をしている陸曹の言葉を受けて、用賀は医官を振り返った。医官は老執事の腕をとるとゴム管を巻いて、その二の腕を酒精綿で消毒を始めた。

何をされるのかと、老執事は驚いたような目で腕を見つめる。

ペルシアやマミーナは、ここまで来たらもう何であっても協力するという姿勢で、老執事の両脇からその腕を動かないように固定していた。老メイド長も、用賀のやり方ならば事の真相に迫れるかも知れないと感じて黙って見ている。

ゴム管で静脈を浮かせておいて、トンボ針（点滴用の針）を刺す。そのチューブの先には注射器が取り付けられていた。これなら多少暴れても、針が抜けるような恐れはないので精神科病院など

で混乱して暴れる患者を、薬物で抑制する際に用いられる手法だ。

医官は底意地が悪そうに告げた。

「これは、アミタールという薬です。この薬液があなたの体内にはいると、考えることも出来なくなって、問われたことを貴方の意志とは関係なく、喋ってしまいます。いいですね。貴方の意志とは関係なく、無理矢理、喋らされてしまうんです。ですから貴方は（誰かと交わした）約束を破ることにはならないのです」

映画や小説に出てくるような自白剤という薬の存在は、一種の都市伝説である。

実際には、問われたことをべらべら喋るような薬はない。しかし、このアミタール面接、あるいはバルビタール面接と呼ばれる技法は現実に存在し、精神分析臨床の現場では結構行われてきた枯れた技術の一つと言える。

勿論『自白剤』などというほどの効果はない。しかし、証拠を突きつけた上で「自分の意志に寄らずしかたなくしゃべってしまう」と薬を打つ前に言い聞かせた言葉が、老執事の中での抵抗を和らげる言い訳となるのだ。

医官はゆっくりと注射器のシリンダを押し込んでいく。ゴム管を弛めると、静脈血の流れに従って老執事の体内に薬液が流れていく。老執事の意識はゆっくりと霞がかかっていき、やがて朦朧となった。

医官は、さらにゆっくりとシリンダを押していった。アミタールは催眠鎮静薬だ。一度に沢山の

薬液を入れてしまうと本格的に眠ってしまう。眠るか眠らないかの丁度良い加減に調整することが、難しいのである。だが医官は手慣れた様子でそれを為す。

「どうぞ」

医官の合図で、用賀は質問を開始した。

＊　＊

陸上自衛隊特地方面派遣部隊・作戦幕僚の第二科長である今津一等陸佐は、用賀から送られてきた報告を読んで舌打ちした。

そこには、日本と帝国の講和を妨害しようとする地下組織の存在が示唆されていたからだ。今回の事件を概括すれば、何者かが、フォルマル伯爵家の秘密工作員に嘘の命令を送りつけて、事件を引き起こしたものである。

老執事に対する尋問の結果、『信篋』の流出先は判明した。だが、イタリカにある『その者』の投宿先はすでに引き払われてもぬけの殻となっていた。痕跡を辿ろうにも、その糸は途切れてしまったのである。

惚れ惚れとしてくるほどの手際の良さである。

素人の仕業とは思えない。今津は、これまでの一般的な情報収集とは性格の異なる、積極的な諜

報・工作活動の必要性を強く感じていた。
　事件の発生を防げなかった段階で、初手は敵に取られた。デリラによる紀子暗殺を防げたのは、偶然の産物……たまたま柳田が居合わせただけ、だからだ。しかし、敵がそこに存在すると分かったなら、巻き返しの方法は幾らでもある。
「問題は、敵の正体やな」
　折角集まった選りすぐりのスタッフ達である。防衛、警察、外務、内閣府、公安……それぞれ本局との情報交換だけさせておくのももったいない話だ。今津は、彼らを集めて意見を求めた。
「敵の正体を掴み、逆撃を喰らわす方法について討論してや」
「最初に言えることは、敵は『紀子』という女性の存在と、容姿を正確に掴みうる立場にあるということです」
「そうだ。彼女は女優でもなければ、有名人でもない。この地に知る者のほとんどいない異邦人だ。日本と帝国の関係において、彼女の重要性を知る者は限られている。まして容姿を知る者など、面識のある者以外あり得ない」
「皇太子ゾルザル。ここまでは普通に考えることだな」
「たしかに。『そう思わせる』ように作られているシナリオとも考えられるからな。奴ばかりでなく、その周辺にいる者も考えておく必要がある。奴の人間関係について、望月紀子さんに問い合わせて、しっかり裏付けしておく必要があります」

今津は頷くと、部下の一人に早速手配させた。
「その中で、帝国と日本の講和を快く思わない者」
「なんだか、ゾルザルが一番怪しく思えてきた」
「ああ。奴が怪しい」
ゾルザルが主戦論者であり、日本との講和を快く思わないことは、菅原達帝都の外交官達が、貴族との付き合いから得てくる一般情報からでも充分に読みとることが出来るからだ。
男達は敵の思惑に嵌った会話をあえてすることで諧謔的に笑いあった。
「もう一つあるぞ。フォルマル伯爵家が、このアルヌスに諜報員を潜り込ませていることを知る立場にある者だ」
「それは、執事のバーソロミューじゃないのか？」
「バーソロミューは今回の件では捨て駒として利用されただけだ。事件について詳細に調べていけば、疑いがかかってくることは誰にでも分かる。逆説的に言えば奴が消えていなかったことが無実の証と言える」
「つまり、別の誰かが伯爵家に居る」
用賀からの報告書に寄れば、執事バーソロミューには、女性に対する素行の悪さと借金という弱みがあったらしい。行商人から、伯爵家の公印の入った白紙の信篋を高く買うと持ちかけられて、思わずその誘いに乗ってしまったということだ。その上に美人局に類する方法で弱みを握られて脅

迫されたようだ。従って敵は、彼の借金と女癖の悪さを知り得る立場にあった。
「伯爵家内を探せば、敵と繋がりを持つ者を見出すことが出来るだろう。切れたと思った糸が繋がったな」
「伯爵家ばかりじゃない。このアルヌスにも居るかも知れない」
「ところで、イタリカから帝都までの情報伝達速度はどのくらいだ？」
「不味いな、資料がない。距離から見れば馬で十二～十三日ってところかな」
「夜通し走らせるわけではないからな。そのくらいだろう」
「敵の工作員は、デリラが事件を引き起こしたことを今日知った。ただ、まだ事件の結果を知らない。敵は今頃、事の結果を探ろうと必死だろう」
「ああ」
「敵の工作員に特別な情報伝達能力がない限り、事件の報告は十～十三日前後で帝都に届くことになる」
今津もここまで聞いて、大まかな方針を得ることが出来たが、自分一人で決めようとせず、「どうすれば良いか？」と尋ねて二科全体の方針とすることにした。
背広組の科員が総括して答えを出した。
「伯爵家には諜報員の存在を伏せるか、ごく少数に限って知らせておく。そして伯爵家に欺瞞情報を流し、その伝達ルートをたどって、糸が何処まで伸びているか手繰るという手法が古典的ではあ

りますが、効果的です」
「欺瞞の必要はないかも知れません。暗殺の失敗。それと、講和交渉団がいよいよ入ってくる。イタリカで第一次捕虜返還と、講和交渉が行われるって情報を流しましょう。第一次捕虜返還も、白百合補佐官がやって来るのも予定通りですが、まだ帝都には伝えてませんので使えると思います」
「講和をぶち壊したい敵さんとしては血相を変えるだろう。この講和交渉の妨害をしてくる可能性もあるな」
「提案。皇太子ゾルザル周辺にも探りを入れておくべきです。中途で『糸』を見失っても、その欺瞞情報を受けて、誰が反応を示すかを見ることも出来ます。内部に入れ込めそうな人材も確かいたはず……」
言いながら、テーブルの上に置かれた資料から、現在帝都にいる人材についてのリストを引っ張り出す。
「そうだ。こいつも役に立つぞ」
科員の一人が、背後の事務机に積み上がった書類の山からひと束の報告書を発掘した。
「悪所で特殊な職業をしている女性達から提供されたものだが、これには帝都の貴族の子弟とか、令嬢とか、議員の皆様、それと家々のメイドさんとかの下ネタとか醜聞に類する情報がたっぷり書かれている。ゴシップに関わるものだから、今までうっちゃっていたんだが、コレを使って我々側の協力者になっていただくのはどうだろう？」

男達は、互いに顔を見合わせると悪戯をたくらむ子供のような表情で笑った。
今津が腰を上げると会議を総括する。
「デリラは悪い娘じゃぁなかった。食堂の華の一人やった」
皆頷いた。此処にいる誰もが、街の食堂で彼女と親しく言葉を交わしたことがあるのだ。
「諸官。彼女を騙してあんな真似をさせ、我々の仲間の血を流させた奴に落とし前をつけさせてやってくれ。確かに敵には地の利があって我々は不利や。だが、こっちには敵さんを上回るスピードがある、少なく見積もって十日。それを生かすんや。いいな！」
こうして二科主導による、カウンターテロの戦いが静かに始まった。

「このブランデーという酒はいいねぇ。評判が上々だよ。誰かが献上品にしたみたいで、最近貴族様の需要が増えている。有ればあるだけ買うっておおせだよ。俺も試してみたが確かに美味い。舌が肥えた連中はもう止められないさ」
アルヌス協同生活組合、帝都支店。
ここには帝都中の商人が商品の仕入れにやってくる。
ネコ耳やイヌ耳の娘さん達にまざって店の仕事を手伝っていた倉田は、商人達と親しく雑談を交わしながら、それとなく皇太子周辺のことに誘導していた。
「でも、貴族様よりは宮廷でしょ。例えば、皇太子殿下のまわりに売り込めるような話はないかな。

皇太子殿下御用達ってなれば、売値も上がるだろうし」
「皇太子殿下か。難しいぞ。やんごとなきお方達は御用商人ががっちり固めて、入り込む隙なんてどこにも無いからな」
「やっぱり無理かね」
倉田は嘆息した。いつも、帝室関係者は御用商人の壁が立ちはだかり、近付くことさえ難しいという話で、終わってしまうのである。
すると突然商人は声をひそめた。
「おいおい、簡単に諦めるなよ。話はこれからなんだから……」
「っていうと？」
「実はな、最近殿下はいろいろな貴族のお屋敷を借りたりして宴席を頻繁に催しているんだ。要するに非公式って奴さ。だから俺みたいな小さな商会でも商いの機会が廻ってくるってわけだ。後は言わなくても分かるだろ？」
「なるほど……やっぱり、注文で『特別な便宜』を図るってのでいいかな？」
「ああ、それで良い。あんたんとこの商品なら儲けは確実だからな」
二人はがっちりと固い握手を交わした。
「お宅の注文品は、優先的にそろえさせるよ。で……それっていつ頃？　場所は？　お前さんのコネで、料理人とか送り込めるかな」

「なんだそれ？　かわった商売のやり方だな」
「ほら。酒や、料理の材料を売り込んでも、その上手な使い方ってやつが分からなけりゃ、商品の真価は伝わらないだろ？　腕のいい料理人を送り込んで、舌の肥えた連中を病みつきにさせるのさ。それで儲け倍増！」
「商魂逞しくて、実に頼もしい。それなら、俺もおこぼれに預かれそうだし、良いぜ、引き受けた」
二人は再度固い握手を交わした。

「フルタさん、このマ・ヌガ肉評判良いね。後で、作り方教えてよ」
厨房で燃え上がる炎を前にしてフライパンを振る。
臨時の料理人として厨房に紛れ込んだ古田は、厨房と宴席をせわしなく行き来するメイドさんの一人に声をかけられた。
「いいよ。その代わり、客について教えてくれないかな。舌の肥えた人だったら、それなりの味付けをしたいからね。女性が多ければ、甘いものが喜ばれるだろうし……出来るだけ詳しく、何処の誰とかも」
「え～っ！　今日は、軍人さんとかが多いけど……そのくらいじゃ駄目？」
「もうちょっと詳しく知りたいな。若い軍人さんなら塩味が強い方が良いし、年寄りのお偉い人な

ら、塩と油分を抑えて香辛料を増やした味付けをしたいからね。できれば名前とかも知りたいなぁ」

「うん、分かった。そういうことなら、ちょっと聞いてくるね」

メイドはそう告げると、古田の焼いた肉を皿に盛って宴席へと向かった。

すると、しばらくしてゾルザル自身が厨房にずかずかとやって来た。

「このマ・ヌガ肉を焼いたのは誰だっ!?」

怒声とも罵声ともつかない大音声に、古田は一瞬どきっとした。やはり潜入しているという後ろ暗さがあるだけに、バレたら不味いという心理があって脅かされると心臓が強く反応する。

しかもゾルザルは、厨房の料理人達の視線が集まった古田を発見して、凄い勢いで近付いて来た。

(やばいっ。怪しまれたか、正体が露見したかっ?)

思わず懐中の九㎜拳銃に手が伸びる。

が、どうやら心配する必要はなかったようで、ゾルザルは古田を見るとその肩をバンバンと叩いた。

「お前がこれを焼いたのか?」

「は、は、はいっ。そうですっ!」

「探したぞ。前にピニャの宴席でも料理を采配したであろう。いや、分かっている。俺はあの味を忘れておらん」

「え、あ、はい、確かにピニャ殿下のお仕事を、い、いたしましたっ」
思わず直立不動になって胸を張ってしまった。
「やはりそうか、この味は他にはなかったものだからな。実は、お前に申し付ける仕事がある。明日宮殿に来い。いいな」
「有無を言わせない」という言葉があるが、これはもう最初から断られることなどあり得ないと思っている尊大さであった。そして、手元にあった焼き上がったマ・ヌガ肉を抱えられるだけ抱えると、用件は終わったとばかりに背を向けてしまう。
緊張で身体の固くなった古田は、そんなゾルザルの背中を見送るので精一杯であった。
そしてそんな古田に対して、ゾルザルにぶら下がるようにしていたヴォーリアバニーの女性が、まるで値踏みするような視線を向けていた。
「なんだ、あれ？」
戻ってきた、メイドが肩を竦めた。
「あのヴォーリアバニー？　知らなぁい。でも、殿下のお気に入りの愛玩奴隷でしょ。いつも連れて歩いてるわ。でもあの目、生意気よね。殿下のお気に入りかなんだか知らないけど、ヴォーリアバニーの癖に」
メイドが言うには、あの女があのような視線を向けるのは、別に古田に対してだけではないということであった。

＊　＊

特地の空を白銀の翼を翻して二機のファントムが征く。
雲上の空。
天空の蒼を背景に、眩しい太陽が輝いていた。その光をさえぎるものはなにもなく、照りつけるような陽射しが、ファントムの機体を熱いまでに照らしていた。
「現在、高度一万一千フィート」
二機の編隊は、小揺るぎもせず安定した速度と高度を保って飛行していた。
コ・パイの久里浜が、キャノピーを画板代わりに地図に線を描き込んでいた。燃料消費量と照らし合わせながら航路の変更を記していく。
パイロットの神子田はまるで機械の仕掛けのように、顔や視線を周辺へと留まることなく廻らせて警戒していた。斜め後方に位置する僚機のパイロットと担当する方角を手分けしてのものだ。
「神子田。国境地帯まであと、十分。速度二百八十ノット。進路百九十。ターンヘディング（進路変更）……ナウッ」
「おうっ」
『了解』

見事に右後方を追従してくる僚機。
「コンプリート」
コンピュータとすら評される精緻な管制を行う久里浜の指示は繊細だ。並の神経の持ち主には煩わしさしか感じられないだろう。だが、それに従っている限り機体は進路を失うことも、迷子になることもない。そして機体が持つ性能を最大に引き出すための前提条件を作り上げてくれるという安心感が神子田にはあった。
これまで誰も飛んだことのなかった特地の空。
ここにはGPSも、航空管制網もない。実際の地形と地図、そして計器だけを頼りに現在位置を見出し、進路を定め、気象条件と燃料消費量を勘案しながら航路を決めていかなくてはならないのである。まして戦闘機動をするならば……だが、それらの作業も久里浜なら任せて確実だ。
だからこそのファントムでもある。
だからこその神子田達でもあった。
「今日で三日目……いい加減見つけたいねぇ」
「カレを見つけてもいきなり攻撃するなよ。今回の目的は、カレの戦力評価なんだからな」
「分かってるって」
『そう言っても、いざとなると神子田さんは手綱離した猟犬並みの勢いでぶっとんでくからなぁ』
僚機の瑞原の声がレシーバを通じて入ってきた。

『もう、おっさんって言われる歳なんだから、ちっとは自重しろ』
そんな冗談が西元から飛んだ瞬間、計器が小さな電子音をあげた。
「レーダーに感、百二十七度。高度三千二百五十。コンバットマニュバ、ゴッ」
「おうっ」
神子田はまるでスイッチを入れたかのごとき勢いで、スロットルをあげると機体を傾けた。エンジンが唸り、力尽くで速度が上がっていく。
水平であるべき大地があたかも壁に立てかけたように視界に広がった。そう、まるで巨大な壁だ。強いGが二人の身体を締め上げる。雲の隙間を抜けて大地へ向かって突っ込む。

「くっ、ふぅ……目標進路百八十八度、高度そのまま。距離……近い。やっぱり生き物だ、電波の反射率はえらく低い。こんなに近付くまで『感』がないとはステルス並だ」
「ふんっ、要は目視下での近接戦闘ってことだろっ。ギッ、基本通り後方からアプローチするぞ」
腹筋を使った呼吸でGを堪えながら、あっという間に打ち合わせを済ませる。
僚機は高度を上げて観戦である。万が一の支援と、彼我の動きを余すところ無く調べ上げることが任務だからだ。
空気を切り裂き、エンジンは咆哮をあげる。
ヘッドアップディスプレイ（ＨＵＤ）の中心付近に、ドラゴンの赤い鱗で覆われた身体が入る。

その悠然と空を滑空する姿は、美しくすらあった。
「あれだ」
「目標。特地甲種害獣、通称ドラゴンと確認。間違いない」
この地にはこの地における弱肉強食の摂理がある。
ある意味、カレは本能のままに餌を捕食しているに過ぎない。その行為を害と決め付けるのは人間のエゴである。ドラゴンはこの世界において、捕食ピラミッドの頂点にいただけなのだ。
だが人間であるが故に、これを狩る。ヒトが殺されているのを黙って見過ごすことは出来ない。それもまたヒトの条理だ。
「撃てば当たりそうなんだけど」
「当たっても落ちない。20㎜じゃ豆鉄砲。無駄な攻撃をして、こちらの武器情報をカレに与える必要なし」
「あいよ」
予定通り、神子田は機体のパワーを全開にさせるとドラゴンの背後から、その近くを掠めるようにして追い抜いた。要は、挑発である。
激しい乱気流に巻き込まれ、驚いたようにドラゴンの飛行は乱れた。
神子田は機体を旋回させるとドラゴンの周囲を廻るような進路をとった。犬だって頭を叩けば噛みついてくる。ドラゴンは羽ばたくと、彼の誇りをいたく傷つけたファントムの後を追おうとした。

「へっ、怒ってやがるぜ」
高度一万五千フィートで、神子田とドラゴンの接触を見守っていた瑞原は西元に言った。
「旋回半径が、めちゃくちゃ小さいですね」
「身体が自由に曲がるからな。巴戦は駄目だな」

「次、上昇性能」
神子田はわざとパワーを抑えめにして、ゆっくりと上昇を始めた。
ドラゴンが後に続いて来るが、追いつけそうでいて追いつけないよう、少しずつパワーを上げて引き離し、ドラゴンの限界を見極める。
「高度三千六百、三千七百、三千八百……羽ばたいてる癖に以外と推進力があるな」
「次、急降下」
上昇から転じて機首を下に向けての急降下。
重力に引かれて自由落下が始まる。ドラゴンも羽ばたくのを止めると、翼をすぼめるようにしてこれに追従して来た。
「まずいっ神子田！　パワーアップ！」
これは翼をすぼめて空気抵抗を自在に調節できるドラゴンの方が優勢のようであった。
瞬く間に距離が詰められてしまう。

「高度一千、七百、五百」
コクピットにロックオンされたときのような警告音はないが、それを受けた時に匹敵するほどの緊張感が二人の背中を襲った。神子田はドラゴンを引き離すために、地面を掠めるようにして機首をあげて、高度を上げた。
ドラゴンもこれに追従しようとしたが、上昇性能の差で追いつけないことを理解したようで、中途で翼を広げ中空に停止した。
「ホバリング能力あり」
「V・STOLで格闘戦にも秀でている」
「機動力から見れば、戦闘ヘリ並ってことだな。それに、おつむの具合も悪くない……」
神子田は機体を安定させると、高度二千フィートでゆっくりと旋回させた。
「久里浜、そっちのテストは終わりか？」
「ああ、だいたい分かった」
「んじゃ、今度はこっちの番だな」
「そう言うだろうと思った」
久里浜はそう言うと、しっかりと顎を引き締めた。神子田はこんな時、性能限界ぎりぎりまでぶん回してくる。
「戦闘ってのは、機体の性能だけじゃなくて、スピリットのぶつけ合いでもある。ドラゴンの野郎

がどの程度据わっているか。こいつを確認しないと中途半端ってもんだ。そうだろ？」
神子田はそう呟いて、機体をドラゴンの正面に向けた。
ファントムとドラゴンは、互いに向かい合って急速に接近していく。
ＨＵＤの中心にドラゴンの顔が見えた。
「衝突コースに乗った……こいつ、片目だぜ」
ドラゴンの身体が、視界の中で点に始まって急激に拡大していく。
「そいつは良い情報だ」久里浜が言った。近接するための死角として利用できるかも知れない。
パワーマキシマム。アフタバーナーオン。
音速を突破し、衝撃波が轟いた。
まさに、チキンラン。
ドラゴンも、悠然と翼を広げるとそのままに身じろぐでもなく、慌てふためくこともなく真っ直ぐ突き進んでくる。それは、空の王者としての誇りをかけた意地の張り合いであった。

「で、これか？」
整備班長に睨まれて、後ずさる神子田と久里浜。
「もう、部品のストックは少ないんだぞ。しかも、耐用年数もギリギリいっぱいと来てる」
「それはもう、重々」

神子田と久里浜の機体は機首が見事なまでに、こんがりと焦げていた。相当の高熱だったようで正面のキャノピーも白濁している。

外見的には分からないが、レーダーなどの電装品も熱で損傷を受けたようであった。

整備員達は覗き込んで、非常に危ないところであったことを確認し合っている。燃料系統のパイプが高熱に晒された形跡があったからだ。

その強靱な爪による一撃を避け得ただけでも幸運と言えたかも知れない。

神子田は握り拳を固めて訴えた。

「あの野郎、武器を使わないはずのガチンコ勝負で、火を噴いたんですよ。火を。男らしくないと思いませんか!?」

「馬鹿野郎っ!!　でかいトカゲ野郎に、んなこと分かるか！　だいたいメスかも知れんだろうがっ！」

こうして、整備班長の罵声が飛ぶのであった。

14

土砂降りの雨の中、進路が水に浸かり立ち往生した。

空は分厚い雲に覆われて暗く、そこかしこに出来た水たまりも水面下がどれだけ落ち窪んでいるのかの判別もできなくて、車輪がはまり込んでは車体が大きく揺れた。
迂闊に泥濘（ぬかるみ）に踏み込むと脱出するのも難しい。このまま行くのも退くのも危険と判断した伊丹は、高機動車を停車させると、エンジンも止めた。
「この辺りは、降り始めると凄い勢いで降るが、上がる時はあっさりとしたもの」というヤオの説明を受けて、伊丹はこのまま天気が変わるまで待機することにしたのである。
エンジンの喧騒が静まると、雨が車体や幌を叩く音だけがする。
伊丹が借り出した高機動車は、ドアが外されていて天井も幌だ。両サイドも幌がないから、外の風がそのままに吹き抜けていく。比較的陽射しの強いこの地では、このほうが心地良いのである。
雨が両脇からわずかに吹き込んでくるが、車体の大きさがそれを救った。同乗者達は雨宿りの軒先から外の雨を見るような表情で、雨雲が去っていくのを待ち続けていた。
手が空いた伊丹は、図嚢から地図と方位磁石を引っ張り出してここまでの進路とこれからの進路の確認を始める。
「現在位置はＰＤＧ・３４・ＲＥ２４９・４８７３１１……と」
特地ではまだ緯度経度が定められていないため、航空写真から起こした地図にはＰＤ座標と呼ばれる線が均等に引かれて、位置を表記するようになっている。
進路の参考とするために、ヤオにいったいどんな経路をたどってアルヌスまで来たのかと尋ねて

みた。
モダバーデンの村からコルロ山の麓を南に迂回、その後、テリリア平原を突っ切って、メタバル、グレミナ、ヘブラエ、トングート……。
ヤオの語った経路を繋いだ線は、地図上で見事なまでにジグザグと折れ曲がっていた。後戻りしているとしか思えない線まである。
直線距離……とは言っても、山や谷はどうしたって迂回しなければならないから、やはり直線移動は無理なのだが、それにしたってシュワルツの森のある国境付近からアルヌスまでの道のりを、ヤオは見事なまでに迂回しまくって、一ヶ月の時をかけたようである。
「仕方ないだろう。緑の人の噂を拾いながら来たのだから。最初からアルヌスにいると分かっていれば、此の身とて真っ直ぐに進めた」
ロゥリィとレレイの呆れたような視線に、ヤオは唇を尖らせた。
そう言われてみればそうだ。街や村があれば立ち寄っては噂を尋ねて歩き、そして頼りない情報を元にしてアルヌスにたどり着いた一ヶ月という時間は、もしかしたら短い部類になるのかも知れない。
「現在位置はテリリア平原」と伊丹は地図に赤ペンでマークする。
「さて、ドラゴンを見つけるのに、コルロ山麓を迂回するか、グルバン川沿いに進む道を選ぶか。どっちを進んでも、道が悪くて、大して進めそうもないけどなぁ」

朝から夕方までずっと走り続けても移動距離は大して稼げなかった。何しろ、道無き道を行くのだから高速道路を疾駆するような訳にはいかなかったのである。

このテリリア平原にしても、地図上では真っ平らになっていたから距離を稼げるかなと期待していたら、実際には巨石がゴロゴロとしていて、四六時中ハンドルを右へ、左へと切って進まなくてはならず、歩くほどの速度しか出せなかった。

目的地まで、あとどれくらいの時間がかかるか。伊丹は、地図を見ながら荷台を振り返った。

荷台の三分の二は、ガソリンの詰まった予備タンク、ＬＡＭ（110㎜個人携帯対戦車弾）、膨大な量の爆薬、各種機材、弾薬箱や水と食糧の入ったダンボール箱。迂闊に火がつけば、この辺りには大きなクレーターが出来るだろう。

その他には各種の荷物。これらが引っ越しか夜逃げと間違われそうなほどに積まれ、その隙間に嵌るようにして毛布を厚めに敷いたテュカが眠っている。顔色はそう悪くないが、時間的余裕はそんなに無いようだ。

アルヌスを出てからテュカの症状は酷くなる一方だった。考えてみれば当たり前かも知れない。テュカの父親が高機動車なる不思議な乗り物を自在に操っているなんて、彼女からすれば盛大な矛盾だろうから。

あまりに強い頭痛を訴えるので、睡眠薬代わりにレレイが魔法を使って眠らせたのである。だが、そのお陰でテュカには聞かせられない話も出来るというものだ。

「ヤオ。ドラゴンが出るのは、シュワルツの森なんだな」
伊丹を地図を指さして尋ねると、ヤオは首を振った。伊丹の指さした範囲を含めた、もっと広い地域を囲む円を指で描いた。
「厳密に言うならばシュワルツの森を含む、南部地域全域だ」
「こんな広いのか？」
「炎龍を探すのなら、シュワルツの森から南に出たロルドム渓谷に行けばいい。炎龍は餌がとれなくなるまで、同じ餌場を漁る性質があるからな。待ち伏せが可能だぞ」
ロルドム渓谷にはヤオの一族が隠れ住んでいる。
「俺達の目的は、テュカに敵を討たせることであって、お前の仲間を救うことではないんだがな」
「だが、炎龍の巣の場所を知る者がいるぞ」
「確かにそうだ」と伊丹は、ヤオの言い分を認め、ダークエルフが隠れ住んでいるという渓谷へと向かうことにしたのである。
ヤオが、満足そうに笑ったので、伊丹は釘を刺しておくことにした。
「言っておくが、そこでは戦わないぞ。ドラゴンが自由に飛び回れる場所で会敵するのは不利だからな」
「では、どうする？」
「今は、奴の巣を襲おうかと思っている。地形や状況によるけどね」

「どんな地形だと良いんだ？」
「例えば……」
ドラゴンが自由に飛び回れないくらい狭隘で入り組んだ場所。もし、炎龍の巣がそういった場所でないとすれば、別の場所を戦場として設定し、敵を引っ張り込んで叩き潰すやり方に切り替える。
「囮が必要なら言ってくれ。必要なら同胞にも協力を求めることも出来る」
ここまで来たなら簡単だ、とヤオは朗らかに言った。
「以前から不思議に思ってたんだが、逃げるという選択肢は無かったのか？」
村を捨てたコダ村の村民達のように。そういう選択肢もあったはずなのだ。
だが、ヤオは言う。「ヒト種には出来ても、エルフには無理だ」
エルフにはエルフに適した生活の場というものがある。
ヒト種のように、臨機応変にどこにでも移動できて、街や集落を作って住めるというものではないという。だから、どうしても住み慣れたシュワルツの森から離れることが出来なかったのだ。ロルドム渓谷に隠れ住んでいるのにも、心身に相当な疲労が溜まるという。
「ただ、旅をする程度なら出来るのにな」
そうヤオは自嘲的に笑うのだった。
伊丹は我々が船で旅をすることは出来ても、船で生活をすることが出来ないのと似ていると理解することにした。もちろん海上で生活することが出来る人もいることはいるが、誰も彼もというわ

けにはいかないのが現実だ。人間が、揺れない大地の上でしか暮らせないようにダークエルフ達には、森が必要なのだ。

考えてみればテュカだって、アルヌスの丘の麓にある森を、丁寧に手入れしていた。彼女にとってはそれが必要な環境なのだろう。

「でも、いいのぉ？」

ロゥリィが、眠っているテュカに視線を向けて問いかけてくる。

当然のことながら、テュカには旅の目的を話していない。南に向かうのも、ヤオを彼女の住んでいたところの近くまで送り届ける為だと思ってる。

「ああ。炎龍の前までつれてって、あれがお前のオヤジの敵だぞって言ってやるつもりだけど」

「きっとぉ、騙したって怒るわよぉ」

おそらく怒るだろう。だが、テュカの妄想に乗じて、父親を演じている段階で充分に騙していると言える。伊丹は「今更だろ」と笑った。

「ここにいる全員、共犯者」

レレイの言葉にロゥリィも苦笑した。

「しょうがないわねぇ。一緒に怒られてやりますかぁ」

ロゥリィはそう言って伊丹の肩を叩くのだった。

＊　＊

シュワルツの森は、樹海と呼んでも良いような広大な地域である。
その深さ、険しさは想像の範囲をはるかに超える。最深部では、倒木の折り重なった上に腐葉土が積もり、その上に大木が根を張る。木々の枝に、木々が根を張るから、見下ろしても大地はどこまでも見えず、天は樹冠によって完全に覆われている異世界の如き空間なのである。
当然のことながら、徒歩で踏み入るのが精一杯で、車両で此処を通過するのは無理。そこでこれを迂回することにする。一旦南に向かって中途で一泊。翌朝になってから樹海の畔を西へと向かうことで、ようやくロルドム渓谷へとたどり着くことができた。
ここの洞窟などにダークエルフ達は隠れ住んでいるという。
見てみると、ここも入り組んだ地形であった。
渓谷の名が示すように、平らかなる大地を渓流が削り取り、かなり狭くて深い谷となっている。
もし、この谷底まで炎龍が降りて来れるのなら、ここで待ち伏せをしても良いかも知れないが、ここは狭すぎて炎龍の巨体は入らないように思われた。
もともと、ここはダークエルフ達が身を守るための場所として選んだところだ。炎龍が入れるようでは困るのである。
見降ろせば谷底も狭い。川原は丸みを帯びた大小の石がごろごろしていて、心得のある者なら渓

流釣りが楽しめそうである。が、そんな地勢だけに、ダークエルフ達が生活していく上で必要で充分な食糧を得ることはほぼ無理。また、燃料としての薪なども谷を出て外に求めなければならない。だから、どうしても谷から出る必要があり、炎龍はその時を狙って来るのだ。

しかも、少し多めの雨が降っただけで川の水はたちまち増水して彼らが生活の場としている洞窟内にまで侵入してくる。その度に、家財や食糧などが押し流されてしまい、生きた心地のしない毎日が続いているのだ。

「ちょっと待っていてくれ」

崖の上に伊丹達を待たせたヤオは、雨上がりでぬかるんだ地面も気にせず、一人で目も眩むような谷底へと下って行った。ヒト一人歩くのがやっとの狭い階段様の通路が、崖上から下に向かって斜めに切り開かれていた。

伊丹は、エンジンを停止させた。

丁度、眠りから覚めたテュカが両手をあげて万歳するかのような欠伸をしている。こしこし目を擦る子供っぽい所作が可愛らしくもあった。

が、すぐに「油臭い」と顔を顰めた。

テュカが寝ていたのは予備タンクと弾薬・爆薬の隙間なのだから、当たり前と言えば当たり前であった。正面を除けば、ドアもなければ窓ガラスもない高機動車は、走行中は外の空気が吹き込んで来るから換気も充分だが、停車してしまうと、中毒にならなくても鼻につく程度には揮発油の臭

いがまとわりついてしまうのだ。
「よく眠れたか？」
「ええ。とっても」
テュカはそう言いながら車から降りた。
改めて大あくびをして、外の空気を胸一杯に吸い込んでいる。
伊丹はそれをしばし眺めていたが、小銃に手を伸ばすと車から降りた。一応、このあたりは炎龍の出没地域なのだから気を配る必要がある。とはいっても、7・62㎜弾など通じないけれど。それでも双眼鏡を目に当てて周囲、特に空へ警戒の視線を巡らせた。
「ここはどこなの？」
テュカの問いに「ロルドム渓谷だと。ヤオの同族が避難してるところだね」と応える。
「そっか、着いたんだ。ようやくあのダークエルフを降ろせるわね」
テュカのヤオに対する感情はお世辞にも良いとは言い難い。ヤオの旅の終着点はここだと思っているから、息苦しかったのがこれで楽になると言いたそうな口振りであった。
「でも、住みにくそうなところね……」
恐る恐る、切り立った崖下を覗き込んでみると、遙か下を川の水が勢いよく流れていた。
エルフの好む森だの緑は、申し訳程度しかない。
この崖の上にしても、岩や、砂礫ばかりで植物と言えば灌木やら雑草が地面を覆っているだけだ。

「なんで、こんな所に住んでいるのかな？」
どうやらヤオ達がドラゴンに襲われて滅亡に瀕しているという事自体、失念しているようである。どうも炎龍に関わる記憶は徹底的に削除されるらしい。だから伊丹も「さあな。きっと、何か理由があるんだろ」とだけ応じることにした。
そんな会話をしていたせいだろうか、あるいは注意が空に向いていたからか……。
「お前達、何者で、何しに来た？」
弓を構えたダークエルフの男女が七～八人。伊丹は周囲を完全に取り囲まれてしまったことに全く気付けなかったのである。

「ヤオよ、よく戻った。だが、我らが汝を送り出した理由は何であったか、忘れたのではあるまいな？」
光の届かない渓谷の洞窟の奥。薄暗い灯火の下で、ヤオは七名の長老がつくる馬蹄形の中心に片膝を付くと、顔を伏せたまま「はい、忘れておりません」と丁寧に応じた。
「お前を送り出してより、およそ二ヶ月になろうとしている。その間に多くの同胞が命を失った。分散して隠れ住んでいる者達とも、連絡が取れなくなって来ている」
「御身の帰還があと少し遅ければ、我らもいよいよ諦めねばならぬかと思っていたところだ」
ヤオは長老達の中でも主立った三人へと顔を向け、はっきりと告げた。

「炎龍を撃退したことで知られている、緑の人を連れ帰りました」
「おおっ！」
一斉にどよめく長老達。
「よくやった、うむ。よくやった」
「で、その緑の人はどこにおられる？」
「いきなりここまで案内すると無用な軋轢を起こしかねませんので、谷の入り口にて待っていただいております」
ヤオのこの答えに、長老達は眉根を寄せた。訝しげに問いかけてくる。
「遠来の客人を待たせるとは、何という無礼。どうしてこちらにお連れせぬ？」
「そうだ。礼を失しては、我が一族の品格が問われようぞ」
今すぐにでも、腰を上げて走り出しそうな長老達。だがヤオは、「ちょっと、お待ち下さい」と前もって説明して置かなくてはならない事情があることを打ち明けて、押し留めるのだった。
「その事情とは何だ」
「緑の人が、炎龍退治をすると決断されるまでの、経緯です。此の身は、罪深きことをしてしまったのです」
ヤオはそう前置きするとアルヌスにおける自分の所行。特に、テュカに対してしたことについて、事実をそのままに話したのである。

「我らの立場では、何故にと問うてはならぬのは分かっている。問うことは責める意味があるからな。だが、あえて問いたい。何故そのようなことを、いちいち気に病んでおる？」

ヤオには意味の分からない反問であった。何故そんなことをした？　と責められると思っていたからだ。ヤオには、自身が人倫に反する行為をしたという認識があった。

ところが長老達はまるで意に介していない。ヤオは、自己の持っている倫理観が微妙に歪むような気がした。

「イタミと申す者は、そのエルフを救うために立ったというのだな」

「そうです。そして、そのイタミという者こそ緑の人の名で謳われた者の一人でありました」

「知・慮兼ね備える者ならば、見知らぬ者は見捨てるという判断を下すこともあろう。それが危険なことならば、なおさらじゃ。当然のこと」

「だが、仁・情兼ね備える者なら、自らの知る者のために、危険を承知で踏み入り、時に則を破る」

「うむ、好漢と言えるな。物欲色欲名誉欲に釣られて動く者より、はるかに信用できるようじゃ。で、そのエルフには、炎龍退治のことは伏せているのだな」

「はい。イタミはテュカを炎龍の前まで連れて行き、そこで全てをうち明けると申しております」

長老達は、今ひとつ飲み込めていない表情のヤオを見て、ため息とともに互いに顔を見交した。

「ヤオ。御身はどうやら分かっておらぬようだな。我らも、窮すれば御身と同じことをした。使命

を果たすために必要ならば、どのような不評を買おうとも、あらゆる手段を尽くす。それは、我らダークエルフにおいては美徳と見なされる」

「そうじゃ。奸計大いに結構。此度はヤオの手柄である」

長老達はヤオの行為を部族の道徳に照らしても、素晴らしい行為であると賞賛した。

「御身は、目的が手段を浄化しないと、気に病んでおるのであろうな？　だが、それは御身一人が気に病むべきことではない」

「そう。我らは汝に、使命を果たすのに手段を問うなと命じた」

「御身はそれに従ったまでのこと。責は我ら全てが負うべきものなのじゃ」

長老達は、ヤオの行為を部族全体の行為として、その償いをどのようにするべきかと論じ始めた。

「しかし、此度の一件はあくまでも此の身の為したこと。償うべきは、此の身ではありませんか？」

あくまでも自分が償うと言い募るヤオに対して、長老達は鬱陶しそうに応じた。

「どうやって？」

ヤオは澄んだ表情で「お任せ下さい」とだけ答える。

「御身の事だ。どうせ一命に賭けてとか、その程度の浅はかな考えに浸っておるのであろうな。それこそ恥の上塗りだ。それは一見して贖罪に見えるやも知れぬが、実は楽になろうという狡い道なのだ。罪に罪を重ねて何とする」

「汝らしいと言えば汝らしい。じゃが、本当の償いとは、軽々な方法でもたらされるものではない。もっと手間暇のかかる、長く険しい道のりじゃ。その全てを汝に被せては、我らの軽重が問われようぞ」

「我らとしては、何が出来ようか？」

「炎龍討伐に助勢は当然のこと。また、緑の人が大切にしているというエルフの身も守らねばならぬな」

「当然だ。戦士達を集めよう」

「それと緑の人は、軍を勝手に飛び出してきたという。戻れるならばその立場が悪くならないように気を遣わねばならぬ。軍の上層部とやらに賞賛と感謝をたっぷり送りつけてみてはどうか？」

「我らだけでは足りぬよ。炎龍に苦しめられている国や部族は多いでな、そういった全ての部族と共同して賞賛と感謝を贈れば、軍の上層部も面目が立つであろう」

「うむ。それがいい」

長老達が、今後の方針を談合していく。そこには、ヤオが考えもしなかった方策が次々と立てられていく。

ヤオは自分の考えや思いが長老達に一蹴されるだけでなく、伊丹の名誉回復など現実的な意味でも役に立たないという事実を改めて認識して呆然としていた。

「では、緑の人を迎えに参ろうか」

「おう。炎龍退治のことは伏せて『緑の人』を迎えることとしよう」
ヤオは、長老達に付き従って洞穴を出た。
だがその時、渓谷には爆発の衝撃と大音声が木霊したのである。

「くそっ！　炎龍だ！」
ダークエルフ達の声が響いた。
伊丹を取り調べるために近付いたダークエルフの男が、突然舞い降りてきた炎龍によって攫われてしまったのである。炎龍の牙の隙間に、ばたつく手足が見える。それをバリッ、ボリッと咀嚼して飲み下す巨大な獣。
「ああっ、あ、あっ、ああわ、ああ、あ」
その一部始終を目の当たりにしてしまったテュカは凍り付いていた。炎龍の目前でのそれは自殺行為とも言えるだろう。
他のエルフ達は、懸命に走って手にした弓をかまえて連べ撃ちを始めた。だが、堅牢な鎧にも似た鱗にはじかれるばかりで効果は全くない。
炎龍はエルフ達の懸命な抵抗など意にも介さず、目前で凍り付いてる金色の髪を持つテュカに縦割れた爬虫類の瞳を向ける。そして血の付いた炎龍の顎が、テュカに向かって大きく開かれた。
死の顎がテュカを捕らえようとした瞬間。巨大な岩石が砕けるような音が、渓谷に響いた。

まるで強風に舞った黒い花びらのような勢いで、駆け寄ったロゥリィ・マーキュリーが、ハルバートの一撃を放ったのである。その鉄塊は炎龍の頬を捕らえていた。

その凄まじいまでの斬撃も、強靭な鱗を破ることは出来なかった。だがハードパンチャーの一撃のごとき衝撃は、ものの見事に炎龍の顔をひしゃげさせた。

それは、蟻が巨象を殴り倒すにも似た非常識な光景だった。

だが事実として炎龍は、翼と手足をじたばたさせながら大地を転げる。砂塵を巻き上げて吹き飛んでいく。その衝撃に大地すら揺れて、鳴動したほどだ。

「すげぇ」

思わず漏らすダークエルフ達。

「duge-main」

既に魔法を起動していたレレイの目前には、魔光による連環円錐（Hesseu amni）が形成されている。

レレイが指を鳴らした瞬間、それが弾けて凄まじい爆轟波の奔流が炎龍に叩きつけられる……かに見えた。

しかし、その射線は地を転げていた炎龍から、微妙にそれて大地に突き刺さったのである。

炎龍は転がりつつも巧みに翼と脚を動かしてバランスを取り戻した。大地にいては不利であることを悟って、地を蹴る。

ロゥリィが跳ねるようにして追撃を試みたが炎龍の吐いた炎が彼女の前に立ち塞がった。

戦いの神エムロイの使徒は、巨大なハルバートを振ってその風勢で、高熱の壁を吹き飛ばす。だが、防御が甘くなったところに鋭い爪を持つ炎龍の右腕が鋭く振り下ろされた。

「きゃんっ！」

身を捩って爪の尖端こそ躱しても、その掌の衝撃はロウリィな小さな体躯をはじき飛ばすのに充分であった。

砂を蹴り地を擦りながら、叩きつけられた勢いを殺してハルバートを構え直すロウリィ。その泥にまみれた頬を自らの拳で拭いつつ、切れた唇の血をペロリと舐めた。

「やってくれるじゃなぁい？」

戦いは膠着して、不意の一撃による勝機は諸共に失われた。

レレイが二発目の連環円錐（Hessu-amni）を目前に作り上げたが、それが何であるかを既に理解している炎龍は正面を避けて狙いを外していく。

一度浮かべた光円は容易には向きを変えられない。地面に大穴を穿ちながら、レレイは小さな舌打ちをして胸中の不快を顕わにしたのだった。

「は、はっ、はは、はっ、はっ……」

震えるかのような呼吸で痙攣するテュカ。

伊丹はロウリィが炎龍に強烈な一撃を叩きつけるとほぼ同時に、テュカの身体を抱えると地に伏

せていた。
「あ、あ、あわ、な」
喘いでいるテュカに伊丹は言い聞かせた。
「見ろ、あれを見るんだテュカ」
テュカを背後から抱きすくめる伊丹は、両手で彼女の顔を挟み持つと炎龍へとその顔を向けさせた。
「あれが炎龍だ。お前の父さんを殺した敵(かたき)だ。分かるか？」
テュカは、目を閉じて必死に顔を背けようとした。だが伊丹は渾身の力でそれを禁じる。
「見ろっ！　よっく見ろっ！　あれがお前の住んでいた村を全滅させた炎龍だっ！　あれがお前の父親を殺したんだっ！」
「う、嘘よ。お父さんは死んでないわ。だってお父さんは……」
「俺はお前の父さんじゃない。ただの赤の他人だ。お前は、俺の娘じゃないっ！」
「ひいいいいい。いやぁ、どうしてそんなに酷いことというの？　誰か助けてっ！」
テュカの心が軋んだ。伊丹の言葉によって、そして突きつけられた冷酷な現実によって無惨なまでに引き裂かれていく。
炎龍対ロゥリィ&レレイタッグの一瞬の交錯を終えると、炎龍はジロリとその場にいた全てを見渡した。それはまるで敵(かたき)の顔を記憶する為のような視線であった。

炎龍の片目に突き刺さっている矢が、テュカの視界に入る。
その矢羽こそ、父の愛用したもの。
テュカの目前には、自分を逃がすために井戸に突き落とす父の姿が大きく広がった。そしてその背後には、鋭く尖った牙の並ぶ炎龍の顎。
「……あ、あれは」
「そうだ。こいつが、お前の父親を殺した敵(かたき)だっ！　撃て、討て、やっつけろ！　怒れっ！」
「無理よっ！　できっこないわよっ。あんな化け物に勝てるわけないじゃないっ！」
伊丹は、テュカを抱きかかえたまま、高機動車まで下がる。そして後部に積まれていたＬＡＭを引っ張り出した。いつ会敵してもよいように、即座に使用できる状態で積みこんで置いた一本だ。
「これが、彼奴の片腕を引きちぎった、ＬＡＭだ」
テュカにＬＡＭを見せた瞬間、炎龍は絶叫の如き咆哮をあげると、地を蹴って飛び立った。その耳を劈(つんざ)く大音声に腰が抜けそうになったが、伊丹は前に一度経験したことがあったために、どうにか呆けずに済む。
「くそっ、彼奴こいつに痛い目に遭わされたことを覚えてやがる」
空に飛ばれてしまっては、ロウリィのハルバートも届かない。激しく動かれてはレレイの魔法も狙いを定められない。
ロウリィは跳躍して、数度にわたって炎龍に襲いかかったが、その全てを右腕にはじかれ、ある

いは炎によって妨げられてしまう。
レレイの魔法も破壊力に優れていても、即応性に欠けた。
そして、ダークエルフ達の矢は当たりこそしても効果がない。
このまま、炎龍が飛び去るのを黙って見送るしかないかと思われた。
炎龍はロウリィが飛びかかれない距離まで高度をあげると、悠然と背を向けてさらに高度を上げようと羽ばたいたのである。
だが、伊丹はＬＡＭを手に取るとテュカに背後から構えさせた。
もう二度と、現実から逃避しないように。自分達は炎龍に対して無力ではないと示すために。
飛び去っていく炎龍の背中に照準をあわせて、テュカの手をとって引き金を握らせる。これだけは自分でさせなければならない。
「いいか、しっかり見ろ。あれが敵(かたき)だ。真ん中に入れて引き金を引け。いけっ！」
テュカの耳に怒鳴る。
「無理よ、駄目に決まってるじゃないっ！」
泣き叫ぶように嫌がるテュカを懸命に抑え込んで、伊丹はＬＡＭの尖端を、離れていく炎龍に向け続けた。
「いいから、引き金をひきやがれっ！」
それが、耳元での罵声に怯えたからか、それともだだ無我夢中だったのか。テュカは掌をぎゅっ

と握り込んだ。
引き金は引かれ、ロケットの噴射音とともに対戦車弾頭は発射される。
当然のごとく、その弾頭は炎龍から大きく外れる。だが、その着弾による爆発と衝撃は、渓谷に大きく鳴り響いたのである。

＊　＊

炎龍を追い払ったという知らせはダークエルフの間に瞬く間に駆け抜けていった。
「緑の人が来た。ロゥリィ・マーキュリーと魔導師の娘までいる」
一方的に捕食されるだけであったダークエルフ達にとって、それは朗報となった。今こそ、炎龍を退治し、安心で快適な森の生活を取り戻そうという掛け声に、誰も彼もが武器に手を伸ばした。
炎龍を退治する。緑の人とならばそれが可能。ましてや、エムロイの使徒ロゥリィと、リンドン派魔導師もいるというのだから。
こうして、周辺の谷や、野に、そして山へと隠れていた者達が復讐心に燃えてロルドム渓谷へと続々と集まりだした。夜半には狭い渓谷の川原がダークエルフの姿で一杯になったほどだ。明け方にもなればもっと多くの者が集まって来るだろう。
長老達には、「まだ、これほどの数が生きていてくれたか」という思いと、「もう、これほどし

か残っておらぬのか」という両方があった。耐乏の時間が長すぎたのかも知れない。だが、座して滅びを待つ時は終わりを告げた。ダークエルフの存亡を賭けた戦いに討って出る時が訪れたように思われたのである

伊丹達の歓迎の為に、そして集まった戦士達の為に食料庫が開け放たれて、乏しい中からも工夫を凝らした様々な料理が振る舞われた。

また、伊丹等を連れ帰ることに成功したヤオには、友人や仲間達から賞賛の声が惜しみなく浴びせられた。

日頃から『不運』の二つ名をもって呼ばれた彼女も、これによって大いに面目を施した形になるのだが、どうにも居心地が悪く落ち着かない思いである。

自分が、皆が言うような賞賛に値する者とはとても思えなかったからである。何かがあった時に、自分の身をもって罪を濯ぐ。そんな風に考えていた贖罪方法も、長老達に「軽率」の一言で一蹴されてしまって、どうしたらいいか分からなくなってしまったのだ。

そんな彼女の屈託を、多くの者は彼女が不在中の出来事を聞かされたからと誤解した。

「トドゥロムはどうした？」

「彼奴は、喰われた。お前が旅だった翌日にな」

「まさか、彼奴までもか？」

「お前と使者の座を争ったほどの奴だったが……残念だ」

見渡してみても、随分とその数を減らした同年代の仲間達。その訃報の多さに、不幸慣れしたヤオもさすがに肩を落としたくらいである。

「ヤオの馬鹿っ！　どうして、もっと早く帰ってきてくれなかったのよっ！　そうすればっ、メトサはっ！　メトサはっ！」

ヤオは、愛する人を失った友人の嘆きを全身で受け止めた。

「ヤオの馬鹿ぁ。あんたなんかっ！」

友人が口にする理不尽な罵倒を黙々と受けるヤオの姿を、誰もが寛容と見なした。だが、ヤオにとっては、遠慮無しに投げかけられる罵声の方が、今の自分に相応しいもののように感じられたのだ。

さらに、かつて自分を捨てて親友に走った男が、妻を亡くしたと言って近付いて来た。

抱き合い抱かれ合ったりする行為も、ヤオは嫌いではない。だが、自分を捨てて親友に走った元恋人というのは、さすがのヤオもお断りである。お断りのはずであった。なのに、こんな自分でも抱くことで慰めになるというのなら、相手してやるのも吝かではないと思ってしまって、我が事ながら驚いている。

ここまで来ると相当自虐的になっているのだなあと気付いてしまう。

ただ、ヤオはもう自分のことであっても勝手に出来る立場ではない。

その事を思い出して、「み、緑の人達のお相手をしなければならないから」と告げて、かつての

友人達から逃げ出したのである。
ところが、伊丹達の表情も暗かった。

「不味いなぁ」
焚き火の傍ら、テュカが伊丹の膝に縋りついて眠っている。泣き疲れたのだろう。
様子を見てくれたダークエルフの長老によると、悲しみに向かい合わずに閉じこめておくことで心の平安を得ていた者が、現実に立ち返り全てを知ると、それまでに溜め込んでいたあらゆる情緒を一時に集中して味わうことになるという。その悲嘆は通常よりも強く激しいため、耐えきれないテュカは懸命に伊丹を父だと思い込むことで逃げようとしているのだろう。
ここで間違えると、取り返しのつかないことになりかねないので、今は休ませておくようにと警告されてしまったのだ。
そんな状態のテュカをどう扱うべきか。伊丹は頭を抱えていた。
「イタミ殿。どうされた？」
ヤオの問いに、伊丹は嘆息して見せた。
「テュカの件さ。お父さん、お父さんって、俺が幾ら否定しても頑として聞かないんだ。絶対認めるものかってムキになってるような感じだった」
「此の身も、婚約者を失った時、立ち直るのにひと月くらいはかかった。今でも何かの拍子に胸が

痛くなる時がある」
「なんだ。婚約者がいたのか？」
ヤオは、「いては、おかしいか？」と、唇を少し尖らせた。
伊丹は、そんなことはないと首を振って、テュカの事へと話題を戻した。
「まぁいいさ。いざとなったら、引きずってでもドラゴンの前に連れて行っちゃおう」
そんな伊丹の決断にヤオは首肯で応じた。
「既に、此の身はイタミ殿のもの。なんなりと指図して欲しい」
ヤオは、そう告げると伊丹の指図を待つかのように、その隣に腰を下ろした。

「ハルバートの刃が立たないのは困っちゃったぁなぁ」
ロゥリィは、ハルバートの刃を研ぎながら愚痴をこぼしていた。
下手するとハルバートを鈍器として用いて、炎龍が動かなくなるまで殴り続けるしかないかも知れない。勿論、炎龍とて黙って殴られていてはくれない。片腕でもロゥリィを地面に叩きつけるだけの力と敏捷性を持つのだ。負けるとは思わないが、勝てるとも思えない。炎龍はロゥリィにとっては相性の悪い相手と言えた。
「撲殺ってぇ趣味じゃないのよぉねぇ」
第一手応えが良くない。やはり、すぱっと切断する感触でなければ……などと呟いていると、ダ

ークエルフの長老が近付いて来た。
「聖下。このようなむさ苦しいところまでおいでいただき誠にありがとうございます」
ロゥリィはハルバートをタッチアップする手を止める。刃先の立ち具合を指先で確かめながら嘯いた。
「別にぃ、あなた達のために来たわけじゃないしぃ」
「それは重々承知しております。ささ、こんな所におられず、どうぞ中に」
長老が洞穴の中へと迎えようとした。「こんな川の畔よりはくつろげるでしょう」と。だが、ロゥリィはげんなりした表情で首を振った。
「わたしぃが、地面の下とか駄目なのぉ、知ってるでしょぉ？」
「我が主神との確執は、言い伝えの通りでありましたか？」
「……」
「……いや、お怒りはごもっとも……ですが、そんなに悪い話ではないと存じますが」
「どうしてわたしぃがあんな奴の、お嫁さんにならないといけないわけぇ？　要は、自分の駒に出来る、肉の身を持った亜神が欲しいってだけでしょぉ。そんな詰まらないことに、残りの約四十年を費やすのは嫌ぁよぉ。まぁ、お陰で興味深い男とは出会えたけどねぇ」
「おや。聖下のお心を射止めた者がおりましたか？」
「其奴（そいつ）がどんな老い方をして死んでいくかぁ、看取ってやりたいくらいにはねぇ」

ダークエルフの長老は、ロゥリィの視線に釣られるようにして伊丹を見た。
テュカの頭を膝に置いて、座っている伊丹。
その傍らにはヤオが立って、伊丹に話しかけている。
「でもぉ、どうしてハーディはあんな大穴をアルヌスに開けたのかしらぁ？」
そんなことを言いつつも、ヤオが伊丹の側に寄り添うように腰を下ろすと、ロゥリィは、ニィと唇を歪ませて腰を上げる。
「穴？　アルヌスに？」
一人残された長老は、ロゥリィの言葉の意味について問うことが出来なかった。

レレイは自分の魔法の重大な欠陥に、悩んでいた。
動かれると、狙いを定めることが難しいのである。
炎龍が、攻撃準備が整うまで動かないでじっとしていてくれることなどあり得ない。なんとかして、動けないようにしなければならないのだ。
もちろん、現段階のレレイ個人の技量では不可能である。
伊丹やロゥリィとの連携が必要であると考えて伊丹を捜すと、テュカの頭を膝に乗せて、ヤオとロゥリィに挟まれている伊丹の姿が見えた。その光景に、何となくむかつき感を覚えたレレイは腰を上げるのだった。

いつの間にか伊丹を中心に、人が集まっていた。
ロゥリィ、レレイ、そしてヤオ。この三人は当然だが、ダークエルフの長老達、それに部族の戦士と言った者達が周囲にいた。
長老達は、明日の出立には部族の戦士を随伴させると告げた。伊丹としては、炎龍の巣の場所さえ教えてもらえればよかったのであるが、そこまでの道の険しさや、周辺の様子などを説明されると、長老達の申し出を有り難く受けることにした。
「では、明日の朝に……」
「恐縮です。荷物運びなんてさせてしまって」
「なあに、炎龍退治の場に居合わせたいと思う者が、これほどに集まったのです。何か仕事の一つも言いつけてやりませんと、拗ねかねませんぞ」
「そうそう。若い連中にも自慢の種を作ってやらねばなりますまい。皆にとって明日という日は特別なものとなるでしょうな」
「とはいっても、明日一日では終わりませんけどね。行くだけでも二〜三日かかるでしょう。下手すると、もっと……」
伊丹の言い様に長老達は皆破顔した。
「分かっておる。空き巣狙いはその家の主が留守でなければできないからのぅ。しかし、緑の人も

なかなかに奸智に長けておられるようじゃ」

伊丹の立てた炎龍攻撃のプランとは、炎龍が留守の間に巣に忍び込んで、持ってきた粘土爆薬（Ｃ４）七十五キログラム全てを仕掛け、炎龍が帰ってきたところで吹っ飛ばす、という凶悪かつ卑怯な手段だった。どこぞの勇者宜しく、正面から戦いを挑むなど、伊丹の趣味ではないし不確実すぎる。難しいことは可能な限り避けて通る。可能でなければそもそもやらないという伊丹の本領発揮とも言えよう。

もし、それでも生きているようなら、肉迫してのＬＡＭの連べ打ちでとどめを刺すことになる。いくら炎龍とはいえ、ダメージは受けているだろうから、有利に事を運べるだろう。

長老達は伊丹が口にした『爆弾』とか『爆破』という単語がどれほどのものか理解できなかったが、緑の人が言うのだから、相当のものだろうと受け止めていた。

「若い連中に見習わせたいのぅ」

とはいっても、長老達の言う若い連中とは皆、伊丹から見ればお年寄り揃いだ。

例えばヤオは見た目三十女っぽい艶やかしさだが、実際は三百十五歳だと聞くと伊丹としてもなんとも言えない複雑な気分になる。ここで変に年齢を意識すると、自分より若く見えるはずのテュカやロゥリィの実年齢まで思い出してしまうので、伊丹は話題を変えることにした。

「それにしても、同じ狩り場の獲物を取れなくなるまでしつこく襲うというやり方は、あまり賢いやり方ではないように思えるんだが、炎龍っていうのは頭が悪いのか？」

こんな伊丹の疑問に対する答えはレレイからもたらされた。
「炎龍の活動期と休眠期のサイクルは長い。だから餌となるものを採りつくしたとしても休眠期中に増えるので、これまであまり問題にならなかったのではないかと思われる」
「ふ～ん。活動期かぁ」
「本来なら五十年は先だった」
「休眠期間中って、何をしてるんだ？」
「動物の冬眠に類似する状態で眠っている、と博物学の書物には記されている」
「活動期に喰い、休眠期に寝る。随分とお気楽な人生……いや、龍生だねぇ」
羨ましいぞと伊丹は思う。息抜きの合間の人生をモットーとする伊丹にとっては、そこに遊びさえ加えることができるなら、理想的とも言える生き方だ。
「それほどお気楽ではない。あらゆる動物は活動期にするべきことがある。例えば捕食の他に、巣作り、場合によっては縄張り争い、そして……あっ」
レレイの一言に人々の時間は停止した。
この世の中で「……あっ」と口にしてはいけない時と場所と状況が存在する。
例えば、治療中の歯医者が患者の歯を削っている時。
例えば、お客の髪にハサミを入れている時の理容師。
客からすれば、安心して任せていたらいきなり「……あっ」と言われたら、そりゃあもう得も言

われぬ不安に襲われること間違いない。
あるいは、お客を乗せて離陸したばっかりの旅客機の機長が、客室にアナウンスしている最中、
「当機は只今順調に飛行を……あっ」などと告げようものなら、誰の背中にも、氷を押しつけられたような悪寒が走ることだろう。
それと同じである。レレイの漏らしたささやかな一言が、伊丹のみならずエルフ達の背中に、ある種の不安というか戦慄を駆け抜けさせた。
これまで気付けなかった重大な欠陥が、今明らかになった。そんな、恐ろしくも冷たい感触であった。
「……どうした？」
レレイは恐る恐るといった体で答えた。
「……あらゆる動物は、活動期に繁殖、子育てをする」
「おいおいおい、嫌だよ。行ってみましたら、炎龍がいっぱい居ましたなんてオチ」
「し、新生龍は炎龍ほど脅威ではない」
「あれと比較されてもなぁ」
「古代龍＞新生龍＝歳を重ねた亜龍＞飛竜」
大して変わらないじゃん。
伊丹はそれを聞いた途端、発作を起こしたかのように腰を上げた。

「忘れ物をしたから、帰ろうかな」と、いきなり帰り支度を始める伊丹に、ヤオは涙目になって
「今更それはない」としがみついた。長老達も大慌てだ。
そんな伊丹も、テュカを抱いたロウリィの一言で伊丹は鎮まった。
「この娘をどうするのぅ？」
大きくて太いため息を一つ。
「龍は卵を一度に一個か二個しか産まない。しかも古代龍の繁殖期は数百年に一度と言われている」
場を取りなすようなレレイの説明が入ったおかげで、伊丹は二重の意味で胸をなで下ろした。
「すなわち、確率的に言っても非常に少ない」
「そうですぞ、イタミ殿。我らも炎龍は一頭しかみておらぬ」
「だな。滅多にないことに出くわすほど不運だと思いたくないしな」
そう言って伊丹は安堵したのである。
が、傍らで聞いていたダークエルフ達は、伊丹の発した「不運」という言葉の響きに、びくっとその身を震わせてヤオへと視線を集めた。
「なに？　どうしたの？」
突如空気が変わったように感じられた伊丹は周囲に尋ねる。
「いえ。その、あの……あははは」

ヤオは、誰かが呟いた不運という言葉に、脂汗をじっとりと流していた。

15

炎龍に対しては通じないと分かっていても、それでも武器を持たずにいられないのは戦士としての性か。ダークエルフ達は、それぞれに得意とするサーベルやジャマダハル（カタール）、弓や剣で武装し、黒革鎧で身を固めていた。

しかし、黒革のボンテージを纏った集団というのは独特の雰囲気がある。女性だけならまだ良いが、半分以上が男というのが特にいけない。ちょっと混ざりたくないなぁ、という感想を密かに抱いた伊丹は、精神的にはすでに後方に向けて駆け足状態だ。

「イタミ殿。此の身を含めた九名がお供いたします」

そんな伊丹の心境を知ってか知らずか、雑然と集まる男女を代表してヤオが挨拶をしてきた。ヤオがひとりひとりを紹介してくれる。

クロウはヒト種で言えば四十男のような外見だ。メト、バン、フェン、ノッコはヤオと同じくらい。そして少年っぽさを残したコム。尋ねてみると一番年若く見えるコムですら百五十四歳ということで、微妙に敬老精神が歪む気がする。女性の方は、セィミィ、ナユでヤオと同じか、やや若い。

とりあえず集まってくれたヤオの同胞達に「よろしくたのむ」とだけ告げ、高機動車から荷物を振り分けていった。荷物とは、ＬＡＭと粘土爆薬。それと信管やコードを巻いたリールなどの各種機材である。

「これが、鉄の逸物か……」

ダークエルフ達は、長い筒を渡されるとその重量感に浸っていた。

「これは魔法の品ではなく武器という話だが、どう使うんだ？　我々にも使えるのか？」

「ああ。今から言うようにしてくれ」

知性のある相手に、運搬だけの役割を担って貰うにしても、武器を預けるからにはその扱い方を教えておく必要がある。驢馬や、馬だったら勝手にいじくることを心配する必要はないが、人間なら変ないじり方をして暴発させる危険性がある。

そのために、伊丹はＬＡＭこと110㎜個人携帯対戦車弾の扱いを一から説明していった。

使い方を知った彼らが、これなら炎龍を倒せるから、と勝手に使用するリスクもある……というか彼らの炎龍に対する憎悪の深さや目の色から察するに、必ずやるだろうなと思える……が、それならそれでいいのである。目的は炎龍を倒すことなのだから。そして、トドメをテュカが刺すことだ。要は、不用意に引き金に触らないこと。また後ろに誰か立っている状態で発射してはいけないということを分かってもらえればよいのだ。

まずは筒からＬＡＭの弾頭部を持ってゆっくりと抜き出していく。発射筒の保護を取り外して、

照準器と発射装置を取り付けていく。これは、工具の扱いに馴れないダークエルフ達より自分がやった方が早いと、伊丹が取り付け作業をするのだが、それを待つ間に男女のダークエルフ達はきわどい冗談を言い合っていた。

ちらと見ると、「こんなに太いもん入れたら裂けちゃう」と言い放つのが楚々とした雰囲気のセィミィだったり、「俺の物の方が凄い」とバンが豪語したりで、ダークエルフというのはセクシャルなことを開けっぴろげに扱う部族らしい。良くも悪くも奔放で、恥ずかしがるこっちの方がおかしく思われているようだ。

発射筒に書かれている注意書きが読めないダークエルフ達のために、伊丹は使用時に弾頭の尖端部分に埋没しているプローブを引っ張り出して、保護キャップをはずし、矢印の方角に軽く回して固定させることを説明した。対戦車（対装甲）で用いる場合は、これを飛び出させる。対人などに用いる場合は、これを引っ込ませたまま用いる。炎龍相手なら当然プローブを出して使う必要があるだろう。

「すると、この先っぽが飛んでいくというのか？」

伊丹に指導された形でＬＡＭを構えるフェン。筋肉質で、体付きなど伊丹よりもしっかりしているため、構える姿もなかなか堂にいった物だ。

「その頭の部分が当たると爆発を起こして、説明の難しい何とか効果で穴を開ける仕組みだ。発射する時の反動を吸収するために、後ろ向きにも凄い勢いでカウンターマスってのをまき散らす。こ

いつは危険だからな、後ろに誰も立っていないことを絶対に確認しろ」
「う〜む。なるほど……」
ダークエルフ達は、それぞれに適当なものに狙いをつけて、構え方を練習していた。弾頭の部分が重たいので、素早く動くものに狙いをつけるのは難しいということに、皆気付いたようである。
「こっちの箱とか紐とかは？」
見た目少年だが実は百五十四歳のコムが他の荷物などを見ている。ＬＡＭと併せれば一人頭、二十キログラムにはなる荷物だ。
「ああ、そっちが爆薬と発破備品だ。普通に運んでくれればいい」
伊丹は、実はＬＡＭなんかよりそっちの方が本命なんだ、と笑いながら告げた。

＊　＊

伊丹は草や蔦葉を用いた徹底的な偽装姿で、テュバ山麓を這いずりまわるようにして登っていた。顔にも、緑、茶色のドーランで迷彩を施し、装備の金属部分にはテープや布を巻いてわずかな音も漏らさないという備えである。炎龍の生態に詳しいわけではないが、野生動物としての感覚に優れているという前提での対応だ。
その上で、眠っているテュカを背負っている。

「お父さん、怖いよ。何か来るよ」などと言って、あまりにも怖がるからレレイに眠らせて貰ったのである。そんなこともあってテュカの服装はいつもと同じ普段着のままだ。しかしこれだと目立ってしまう。そこで伊丹は、自分が着ていたボディーアーマーを彼女に着せることにした。これならば迷彩柄だし、中に入ってるチタンプレートが何かあった時に彼女を守ってくれるだろう。炎龍相手にどこまで有効かは疑問だが。

付き従うのはロウリィ、レレイ、そしてヤオ達九名のダークエルフ達。皆、伊丹を真似るようにして、顔や身体に偽装を施していた。

「この臭いがきつい」

クロウが鼻をおさえながら漏らした。それを聞いたヤオは「イタミ殿の指示なのだから仕方あるまい」と答える。皆、偽装の他に獣脂を身体の各所に塗っているのだ。

「臭いを嗅ぎつけられないためってのは、分かるけどな。逆に、臭いが強すぎて見つかるんじゃないのか？」

ノッコは、そんなことを言いながら地面を這い続けていた。

道など無く、その険しさから高機動車も入れないところを徒歩で、ずりずりと地を擦るようにしながら、溝や窪地、大木の影などばかりを選んで進んでいく。その都度、地形に合わせて偽装を更新し、陽が落ちれば野宿し、朝には再び進むという状態である。

そんな遅々たる歩みでも、続けてさえいればいつかは目的地に到着するものである。三日目の夕

刻近くには、テュバ山の中腹まで登り着いた。あたりには独特の硫黄臭が漂って、臭いの偽装も気にならなくなってしまった。

皆の外見も砂や灰を身体にまぶした偽装へと変わっている。伊丹も自分とテュカの手足と迷彩柄を泥で汚し、その緑を目立たないようにしている。

立ち止まった伊丹は、全員に伏せるように合図すると、案内のクロウを手招いた。この男は、以前にこの地に来たことがあるということで、案内役を買って出たのである。

「なんでしょう？」

クロウは伊丹の傍らで腰を下ろした。

「あの山頂から、炎龍は出入りしているってわけだな？」

「はい。噴火口内の岩棚に巣を作ってました」

クロウは説明を始めた。

彼が此処にやってきたのは、火山付近で採れる硫黄を集めるためだった。硫黄を焼いた際に出る煙で、干した果物などを燻すと長持ちし色もよくなるのだ。

硫黄を探してここまで来たが、この少し先で洞窟を見つけた。その洞窟に入ってみたところ、洞窟は火口内部にまで繋がっており、火口内の岩棚に炎龍が眠っていたのである。

「見た瞬間、こいつはやばいって思いまして、逃げ出してきたってわけです」

伊丹は火口や洞窟内の様子を詳しく尋ねた。特に空気については関心を払う。

クロウの説明では、噴火口の底はかなり深く落ち窪んでいて深部の様子は不明。ただ、そこと繋がっている洞窟内の通風は意外にも良くて、地面から臭気のあふれ出るこの場所よりは、よっぽど空気が良かったということであった。

「炎龍の巣ってぇ、洞窟の中なのぉ？」

側にいたロゥリィが何かに驚いたようで、慌てて口を挟んできた。

「いいえ。火口の中でした。洞窟は火口へと続いてるだけです」

「じゃぁ、山頂から降りられるのねぇ？」

「いいえ。火口内部は切り立った崖状でした。無理だと思います」

地下に入れないロゥリィは眉根を寄せた。伊丹は「気にするな」と笑う。

「大丈夫。ロゥリィは外にいて、俺たちが中にいる間に炎龍が帰ってこないか警戒してて、帰ってきたら連絡してくれ」

予定通り、中を偵察して炎龍が居なければ、爆薬を仕掛ける。もし居たら何もせずに出てきて、炎龍が留守にするのを黙って待つ。どちらにしても戦わないのだから、順調にいく限りロゥリィが前に出なくてはならない場面は、存在しないのである。

「炎龍を止めなくていいのぉ？」

「ああ、怪しまれたくないからそのままやり過ごしてくれ。俺たちも準備が済むまでは、すぐに隠れて奴が留守にするのを待つことにする」

伊丹は、こいつの使い方は分かるな？　と自分の耳と首元にまで伸びているマイクに触れた。ロウリィも慌ててマイクを口元まで引き上げる。ロウリィとレレイには無線機を持たせてあった。

「とりあえず、中を偵察してくる」

伊丹はテュカを降ろすと、小銃だけを手に前に進もうとした。すると、ヤオを含めたダークエルフ達が伊丹を押し留める。

「そのような些末なことは我らにお任せ下さい」

伊丹は彼らの申し出を素直に受けることにして、ヤオとクロウの二人を偵察へと送り出した。

ヤオ達が戻って来るまでしばし時間がかかる。伊丹は、この場で皆に休憩を取らせ、携行食で夕食をすませるように指示した。この場所なら、食べ物の臭いも硫黄臭にうち消されて広がらないだろうという配慮だが、食欲的にはどうかと思うような環境だった。

しかし、この後を考えるといつ食事を摂れるかは分からない。幸いなことにこの場に集まった者は一人残らずそれを理解していて、食べられる時はどこであろうと食べることの出来る神経の太さを持ち合わせていた。

レレイとロウリィは荷物から自衛隊の戦闘糧食Ⅱ型（ビーフカレー／ツナサラダ／福神漬け／白飯）簡易加熱剤（加水型）を取り出した。ダークエルフ達は谷から持ってきた乾燥させた肉や魚、干した果物、豆類を口に運んでいたが、ロウリィとレレイのしている作業に興味津々である。レレイが袋に水を入れると瞬く間に湯気が出始め、食事が温まることに真剣に驚いていた。

傍らには、小さな寝息を立てて眠り続けているテュカ。
伊丹は彼女をずうっと背負い続けてきたが、意外なほど軽く感じられたのでさして疲労してはいない。とはいえ、緊張していると疲れとは感じにくいものだ。伊丹は胃に負担をかけないように、出来る限りゆっくりと食事をとった。
「テュカにも喰わせておきたいところだけど、起こすと泣いたり暴れたりするからなぁ」
「仕方がない」
レレイはそう言うと、カレーを口に運んだ。
そうこうしているうちに、ヤオが仲間と共に戻って来る。
「どうだった？」
「うむ。洞穴の奥は火口へと繋がっていた。そこに岩棚があり、巣らしきものが見られた。炎龍は居なかった。留守だ」
「よしっ」
ヤオの的確な報告を受けて伊丹はテュカを背負った。
いよいよ、洞窟へと向かう。皆、これから敵地へと乗り込むという思いからか、それとも緊張なのか表情は引きつって言葉数も明らかに減っていた。
「じゃ、ロゥリィ、頼んだぞ」
「うん。火口近くまで登って見張ってるわぁ」

ロゥリィは、無線機のマイクをトントンと叩いて告げた。「聞こえるぅ？」
「感あり。って、交信規則なんてどうでも良いか。いいぞ、聞こえてる」
洞窟の入り口前で、ロゥリィと別れた。
茜色に染まる稜線の向こうにハルバートを抱えた彼女が軽快な足取りで消えて行くのを見送ると、伊丹達も洞窟へと入った。

洞窟の内部は幻想的な空間の広がりを持っていた。
溶けた溶岩が流れ、それが冷えて固まる。また、新たな溶岩が流れて、冷え固まるという繰り返しによって、積もった積層構造は長い階段のようでもあった。
その連なりは、まるで神殿の入り口を感じさせる。壁も、ごつごつとしたものがなく、まるで長大なカーテンのようだ。本当に誰かが神殿として内部に手を入れたのではないかと疑わしくなる。
回廊、高台。さらには祭壇とおぼしき物まである。これが全て自然の悪戯によって作られたのだから侮れない。もし、どこかの宗教家を連れてきたら、このまま此処を教会にすると言い出すかも知れなかった。
伊丹は周辺を懐中電灯で照らしながら祭壇を抜けて、奥へと進んだ。
ダークエルフ達は松明を焚いている。それぞれの灯りによって作られた陰影は、閉鎖された空間のもつ独特な音響効果と相まって、神秘的な雰囲気を醸し出していた。

「イタミ殿、ここの先です」
伊丹は洞穴の先がわずかに明るくなっているのを感じた。
テュカを降ろし、荷物を降ろすと、小銃だけを持って恐る恐る進む。上に火口を通じて星の瞬く空が見えた。わずかに明るいのは、火口から月の光が差し込んで来るからだ。
見れば確かに岩棚である。
とはいっても、相当広い。火口は野球場くらいの広さを持つ鉢状。そして、その中心付近に、さらに深く落ち窪んでいく穴があいている。その丁度、落ち窪んでいこうとしている部位である。
岩棚のサイズは、バスケットコート二面分くらいあるだろうか？　砂と石の入り交じった浜辺のようになっていた。そこに炎龍の巣らしきものが見られた。砂浜に石でストーンサークルが作られている。そういう感じである。
クロウに確認してみると、これが炎龍の巣らしい。以前、ここに炎龍が眠っていたという。
さすがに鳥の巣のようなものがあるとは考えなかったが、余りにもあっさりとしすぎで、本当に此処が炎龍の巣かと疑わしく思われた。
だが、実際にその場に立って見るとそこが炎龍の巣であることに納得がいく。
龍の物としか思えない巨大な足跡が無数に残っていたし、そこかしこに卵の殻の破片が散らばっていたからだ。
「古い物ではないが、子育ては終えた様子。既に巣立ちしたと思われる」

卵の殻を調べたレレイの報告に、誰もが胸をなで下ろした。
砂浜に転がる石のように見えた物も、よくよく見れば鎧や兜の残骸や武具であった。どれほどの月日をここで待ち続けていたのか、煌びやかな剣や武具が、半分砂に埋もれるようにして、そこかしこに散らばっている。
「これは？」
ヤオや、ダークエルフ達は武具や剣を手にとって調べはじめた。
「おそらく、これまでの歴史の中で炎龍に戦いを挑んだ者達のものでしょう」
「これなんて魔法の剣だぜ」
ノッコがその輝きに目を奪われている。持ち帰ればどれほどの値が付くか、などと言っているくらいだ。
ダークエルフ達は、鎧や剣の持ち主達の冥福を祈って瞑目した。炎龍との乾坤一擲の戦いを挑むために戦士達が求めた武器と武具。きっと、優れた名匠、名工の手による名品ばかりに違いない。
「よし、仕事を始めよう。レレイはテュカを見ていてくれ。それと皆は手元を照らしてくれ」
伊丹の合図を受けて、皆が荷物を持ち寄ってきた。
箱から取り出されたのはチーズのようにも見える塊だった。それが七十五キログラムだから、一山となった。
「まるで乳漿（にゅうしょう）みたいですね」

パッケージから取り出された物体を見て、コム少年が呟く。少年は思わず、ひと欠片ちぎりとって口に運ぼうとしたが、伊丹はその手を叩いて止めた。

「こいつは毒が混ぜてあるんだ。食べたり舐めたりするなよ」

コムは、毒の一言に驚いたように欠片を元に戻した。

伊丹はその一欠片を拾うと少年が持つ松明の火に寄せる。すると白い塊は、青白い炎を放って静かに燃えはじめた。それは、とても爆薬とは思えない静かな燃焼であった。

「こいつは、火をつけただけならただ燃えるだけなんだ。爆発させるにはそれなりの手続きが要る」

伊丹は、まずシートを広げた地面に白い塊を置くと、まるで陶芸職人のようにこね始めた。

映画とかでパッケージにそのまま雷管を突き刺して爆破するシーンがあるが、それだと不完全な爆発で終わる可能性がある。プラスチック爆弾の性能を完全に発揮させるには、こねなければならない。こねればこねるほどよく爆発し、こね方が足りないと爆発しない時もある。

伊丹の手はたちまち薄黄に汚れていった。

七十五キログラム全部を一人でこねるのは大変なので、皆にも手伝わせる。そして、それぞれにレンガくらいの塊を作らせた。

伊丹は手掌を地面に付けてから、次の道具を取り出した。

それは電気式の雷管だった。

あらかじめ地面に手を付けたのは、静電気が溜まっていると、触れた瞬間雷管が爆発してしまう可能性があるからである。そのためのアースだ。

ここから先の作業は、それなりの知識と技術が必要なため、出来るのは伊丹一人だ。伊丹はコードとニッパを取り出すと、リールから適当な長さのコードを補助母線として何本も切りだしていった。

これらの断端の被覆を剥いで、雷管から伸びる脚線とコード（補助母線）を繋ぐ。

黙々と仕事を続ける伊丹。その手元を照らす為に、ヤオ達は松明を寄せていた。

「何か手伝うことは？」

「炎龍の巣のド真ん中に穴を掘ってくれ。それほど深くなくて良い」

これを受けて、バン、フェン、ノッコの三人が炎龍の巣の真ん中に穴を掘り始めた。

伊丹も額に汗をしながら、手早く的確な作業を続けていく。適切な長さにそろえた補助母線を束ねて、これを最終的に一本の発破母線へと集約していくのだ。

こうした爆薬を用いる技術は、通常は施設科に所属しないと学ばないが、特殊作戦群に入った伊丹は一般教養として叩き込まれている。不真面目な生徒ではあったが、学生時代と同様に不合格には成らない程度には励んだので、それなりに伊丹の血肉となっていたようである。

ふと、教官の罵声と拳骨を喰らった時の苦痛が蘇った。

伊丹は手を止めると、そおっと雷管から離れて、プレストークスイッチを押した。

「ロゥリィ。聞こえるか？」
繰り返してもロゥリィからの返事がない。電波は厚い岩盤を通り抜けることは出来ないようであった。これでは彼女に外で見張りをしてもらっている意味がない。だが、ここまで進めた作業なら、途中で止めずに一気に済ませてしまいたくもある。
「ちっ、まずった……みんな、上の方を警戒しててくれ。レレイっ、電波の通りが悪いみたいだ。時々そっちからロゥリィを呼んでみてくれ」
そう告げておいて、再び作業に戻る。
そして無線機のスイッチを切ると、無線機本体も身体からはずした。電気製品はスイッチを入れた瞬間に火花を発するおそれがある。それを忘れて爆薬と雷管を扱っていたのだから冷や汗が出る。危うくみんなを吹っ飛ばすところだったと知られたら、みんなどう思うだろうと思って辺りを見る。幸いなことに、皆、伊丹の視線の意味がわからず「ん？」と首を傾げるだけであった。
さて、いよいよ練り上げた粘土爆薬を仕掛けるわけだが。
バン達が掘った穴に、レンガ状の粘土爆薬を丁寧に並べ、積み上げていく。そして、それら一つ一つに雷管を突き刺していった。発破母線が絡まないように、丁寧にリールから引き伸ばしていく。
「そこらに散らばってる剣をとってくれ」
「？」
ヤオ達は首を傾げたが、伊丹は爆薬の上に魔法の剣を並べていった。

テロリストは、粘土爆薬を使う際にボールベアリングや木ねじを一緒に置く。殺傷力を増強するためである。実は単純な爆発は、一般の人が思うほど殺傷力は大きくない。爆発の衝撃で吹き飛ばされる無数のこれらが周囲にいる人を殺傷するのである。同様に、対炎龍用に殺傷力を高めるならば魔法の剣や名刀が有効だろう。上手く行けば、非業の最期を遂げた戦士達の剣が、炎龍に突き刺さることになるから鎮魂にもなるはずだ。

爆薬に薄目に砂をかけて埋め戻し、その上を足跡や手足が残らないよう綺麗にならしていく。そしてリールを抱えて発破母線を岩棚から、洞窟へと伸ばしていった。もちろん、外から見えないように発破母線も、浅く埋める。

最後に、リール側の断端を起爆装置である発破器へと繋いだ。

こうして、爆破準備は終わった。あっという間のようにも思えるが時計を見れば、いつの間にか五時間近くを作業に費やしていた。

ずっとしゃがみ込んで作業をしていたので、肩は凝ったし腰も痛い。大きなため息をついて「よし、終わった」と周囲を見渡すが、誰も彼もが凍り付いたように動かない。

「どうした？」

額の汗を拭って顔を上げると、伊丹の正面に炎龍がいた。

＊　＊

火口近くで炎龍を警戒するロゥリィは、陽が沈み空に星が瞬き、天球がゆっくりと回転するのを身じろぎもせず、ずうっと眺めていた。

しばらくすると夜空の向こうから炎龍が近付いて来るのが見える。

予定通りと言えば予定通りである。ロゥリィは、炎龍に姿を見られないように隠れながら、伊丹へと炎龍の接近を告げた。だが、返事がない。

「うん？　これで良いのかなぁ。もしかして通じてないのぉ？」

ロゥリィは背筋が寒くなった。

伊丹にも責任はある。言葉が普通に通じるようになって、ロゥリィを日本人と同様に扱ってしまったのだ。電波が通じないとなれば、電波を発する器具の扱いに馴れた日本人は見通しの良いところに移動する。例えば窓の近くとかだ。火山の噴火口の上と下で会話するなら、おそらく火口に近付くだろう。だが、ロゥリィは伊丹達に近付くために、洞窟の入り口へと向かってしまった。火口から下ること、それはますます電波を通じ無くさせてしまう道だったのである。

「ねぇ、返事してよぉっ！」

懸命に呼びかけるロゥリィ。しかし、炎龍は火口へと近付いて、その中へと降りていった。

このままでは、無警戒の伊丹達が襲われてしまう。どうしたらいいか。

これでは、自分が外に残った意味がない。そう思ったロゥリィは、なんとしても危急を伊丹に告

げるべく、洞窟の入り口に向けて走る速度を上げたのだった。
だが、
「……うそぉっ!!」
ロウリィは目前に広がった光景に、絶句するしかなかった。

＊　＊

翼を大きく広げた炎龍と目が合う。
不意の遭遇に、伊丹達は凍り付いた。炎龍の方も、まさか自分の巣に人間が居るとも思わなかったのだろう。訝しげにこちら側を見ている。
吐く息すら、なま暖かく感じるほどの至近距離。実際、それほど近いわけではないのに、それぐらいに感じられたのである。
伊丹はゆっくり、ゆっくりと後ずさりしながらも、腿の拳銃におそるおそる手を伸ばした。こんなものが、玩具ほども効かないのは分かっているが、小銃は作業している間に離れたところに置いてしまった。
誰かの唾を飲み込む音が聞こえて来るほどの静寂が辺りを支配している。動いたら殺される。使い古された言葉だが、この一瞬誰も彼もが同じように感じて、身を動かせなかった。

どれほどの時間が流れたろうか。それは、ほんのわずかな時間にも思えたし、とても長い時間のようにも感じられた。一秒は、七十五刹那。ならば、一呼吸、二呼吸の時の流れも、刹那として数えれば膨大な量の時を数えることになるだろう。

いつまで続くとも分からない睨み合いの緊張に耐えかねて、コムが狂乱したかのように叫きながらＬＡＭを構えた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

それを号砲に、静寂は激動へと打って変わった。

走る伊丹。

テュカを守るべく、彼女の身を引きずって洞穴の奥へと逃れようとするレレイ。

同じく、テュカを守るために走るヤオ。

そして少年に続いて、ＬＡＭを構えるダークエルフ達。

外しようのない至近距離で発射された少年のＬＡＭは短い噴射音の後、見事に炎龍の喉を捕らえて炸裂した。

閃光に続く衝撃、まき散らされる爆煙。

「やった！」

一瞬の喜びは、爆煙の向こうから突如姿を現した炎龍とその右腕の爪によって凍り付く。少年の身体は、炎龍の鋭い爪によって上半身を吹き飛ばされていた。その上半身は噴火口の壁に原型も分

からない有様でべちょりと張り付いた。
しかも、少年の後方にたまたま居合わせたダークエルフ達は、少年の放ったＬＡＭのバックブラストによって、容易ならない損害を受けていた。バンとナユの男女が即死。カウンターマスを至近距離から全身に浴びてのショックが原因である。
わずかに離れていた他の者もその余波を受けて地面に倒れていた。が、彼らにとってはそれが逆に幸いしている。炎龍の尾による一撃が、全員をなぎ払うように放たれたのだが、地面に倒れていた彼らはそれに触れることがなかったのである。呆然と立ちつくしていた、コムの下半身だけがこの衝撃で吹き飛んだ。
炎龍の咆哮が狭い火口内を揺るがす。
これを受けてもなお起きあがってＬＡＭを構えるダークエルフ達。皆、動転して伊丹の教えたことなど頭から吹き飛んでいた。
安全装置をＳからＦに変えることなく、ただ闇雲に引き金を握る慌て者ノッコ。
そこまでは覚えていても、プロープを引き出すことを忘れたクロウの一撃は、有効な打撃を与えられなかった。ノイマン効果が発揮され、主力戦車の装甲にも似た炎龍の鱗を貫くには、これが適切に伸ばされている必要があるのだ。至近距離での爆風と飛び散る破片は、自分ばかりか味方をも傷つけてしまう。
「プロープだ、プロープを伸ばせっ！」

怒号と爆音の轟く中、誰の耳にも伊丹の声は届かない。テュカを、レレイとともに抱え上げ洞窟の奥へと運ぼうとしていたヤオは、伊丹に気付くと「御身は、洞窟へっ！」と叫んだ。

伊丹は、それを無視するとヤオに預けていたＬＡＭをひったくった。

こうしている内にも、ダークエルフ達が一人、また一人と犠牲になっていく。

ノッコが、その鋭い牙にかけられ、メトは剛腕によって叩き潰されてしまった。

無論、炎龍とて無事ではない。叩きつけられる爆発は、炎龍にとっては強烈な苦痛をもたらす打撃以外の何物でもないからだ。

だから炎龍も必死になって足下をうろつく人間を焼き、払いのけようとする。

ただ致命傷にはならなかった。炎龍の鱗は一枚一枚が、強固なことに加えて、体表上を斜めに若干折り重なるように配置されている。そのために殆どの部位で、互いに隙間を持った中空装甲的な緩衝能力を有するのだ。

そのため忌々しい小動物が抱える黒い棒も、衝撃のすさまじさには閉口するが、左腕をもぎ取られた時のような鋭い力はない。一瞬驚いたが、これなら虚仮威(こけおど)しだと性根を据えて、自分の巣に蔓延る害虫を追い払おうとしたのである。

伊丹は、プローブを引き出して矢印の方向にねじって固定。

肩に構え、息を堪えて狙いを付ける。

安全装置をSからFへ。
だが構えた途端、吹き飛ばされて来たセィミィの身体が伊丹にぶつかった。
伊丹は彼女の下敷きになるようにして倒れた。全ての衝撃を引き受けた伊丹は、しばらく起き上がることは出来なかった程だ。その分ダメージの薄かったセィミィは伊丹のＬＡＭを拾うと炎龍に向ける。
「馬鹿、撃つな」
真後ろにいた伊丹は、這うようにして必死でその場から逃れた。それが間に合うか間に合わないかのタイミングで、放たれたＬＡＭの弾頭は炎龍の脚部に直撃する。
噴火口内で炎龍の絶叫が轟いた。
モース硬度で九を誇った炎龍の鱗を貫いたメタルジェットは、炎龍の大腿に牙を突き立てたのである。
砕けた鱗と肉片がまき散らされ、炎龍は激痛に悶えた。

「テュカ、起きなさい」
少女の優しい眠りは、父親の声に破られようとしていた。
「お父さん、どうしたの？」
目を擦り擦り、身を起こすテュカ。

見渡して見ると、そこは懐かしい自分の家。居間にはうららかな日射しが差し込んでいて、おだやかな一日が感じられた。

懐かしい父の声。頭がまだはっきりとしない。ただ、自分を起こした父の優しい声にテュカは幸せを感じた。今まで嫌な夢を見ていたような気がしたから、なおさらだった。

窓の外から、雑多な足音や喧噪、爆音が聞こえて来る。だけど遠い世界の出来事のようだ。今は、父との会話を楽しみたかった。

「お父さん、どうしたの？」

辺りを見渡してみても父の姿はなかった。代わりに見えたものは、幼なじみの少女が炎龍の牙にかけられる瞬間だった。

「ユノっ！」

愛する親友が食べられてしまう。とっさの判断でテュカは素早く弓矢を番えた。いつの間にかテュカは弓を手にしていた。

渾身の力を引き絞り狙い定めて矢を放つ。だがテュカの矢は、はじかれてしまった。

テュカの矢ばかりではない。エルフの戦士達が無数の矢を龍に浴びせかけていた。その矢が爆発する。しかし分厚い鱗に阻まれて傷一つ負わすことが出来ない。

バリバリとダークエルフの女性セィミィをかみ砕いた炎龍は、縦長の瞳を巡らせると次なる獲物としてテュカを選んだ。

炎龍に見据えられた瞬間、テュカの全身は恐怖にすくんだ。
逃げようにも足は動かず、叫ぼうにも声すら出ない。
この時、テュカは魂を奪われたかのように動けなくなった。いや、逃げようとすることすら意識にのぼらなくなっていた。どうしてこんな化け物に戦いを挑もうとしたのだろう。自分は間違っていた。怒りや、憎しみをこんなものに向けても、決してかなわないのだと思い知った。だから代わりに、テュカは自らの愚かさを憎んだ。
「テュカ、逃げなさい!!」
立ちすくむテュカを守ろうとする父。
「君はここに隠れているんだ。いいねっ！」
そしてテュカは、レレイとヤオによって洞窟へと投げ込まれた。
投げ込まれる最後の一瞬、彼女が見たものは自分の身代わりとなって炎龍の顎に捕らわれる父の姿だった。
自分の身代わりとなって、喰い殺される父親の姿だった。懸命に手を伸ばしたが、届かなかった。
そればかりかどんどん離れていく。離れていく。
父さんが、あたしの身代わりとなって……。
あたしの身代わりとなって。
あたしのせいで、あたしのせいで、あたしのせい、あたしのせ……。

「それは違う」
テュカの耳にレレイの声が響いた。
「貴女の父親を殺したのは、炎龍。貴女ではない」
「でもっ」
「伊丹は間違っている。悠久の時を生き続ける貴女にとって、心の病など些細なこと。十年、百年の月日が、貴女の心をきっと癒す。自己を責める心が薄れるまで静かに待っていればいい。だから、彼は貴女を救う必要などない。今そこにある問題を、なんとかしなければならないと思うのは、命に限りあるヒト種の発想」
テュカはレレイが何を言っているのかと見直した。
どうやら、それはレレイの愚痴のようである。小さなため息を一つついたレレイは、テュカへと眼差しを向けた。
「貴女は炎龍に勝てないと決め付けている。だから、その怒りを向けやすいものに向けた。それが自分自身」
「だって、勝てるわけないでしょ？」
「盗賊によって肉親を殺されたら、盗賊を恨むべき。だけど盗賊の出るようなところへと行ったのが悪いと言いがち。病気や怪我で家族を失ったら、病気や怪我を恨むべき。医者のせいではない。だけど人間は、医者のせいと言いたがる」

「だったら何を呪ったのいいの？　誰に怒りをぶつけたらいいの？　自分を呪うしかないじゃないっ！」

テュカが叫んだ途端、ダークエルフの女が放ったＬＡＭの一撃が、炎龍の大腿を穿ち抜いた。

爆風と共に飛来した弾頭の破片が、レレイの頬を掠る。まるで張り手をくらったようにレレイは顔を伏せた。

「よっしゃ！　行けるっ」

残ったクロウ、フェン、ヤオの三人は、喘ぎながら、血まみれになりながらも戦いの興奮に恐怖を忘れ、ＬＡＭを構えた。誰一人として無傷な者はない。

「今、勝てるかどうかの分水嶺にいる。貴女はアレを……」

顔を上げたレレイの頬を血が流れていた。

「アレを……私が倒すのを、指をくわえて見ていればよい」

レレイは腰を上げると杖を構えた。喉歌とも呼ばれる独特のモノフォニー（一人和声）で『起動式』を立てた。

レレイとて、故郷をこいつに奪われたのだ。少なからぬ知人がこいつによって殺されたのだ。

「abru-main!」

突き進んでいくレレイの背中を見送ったテュカはようやく、今此処で起きていることが夢でも妄想でもない、現実であることに気付いたのである。

「rihommun!!」

レレイは、そこらに散らばっている剣を一本、魔法で浮かせると飛ばした。

弓で放ったような勢いこそついたが、剣の切っ先は炎龍の固い鱗を突き破ることはかなわず、空疎な音を立てて弾けた。魔法で加速しても駄目。やはり無理なのか。

手傷を負って、さらに手のつけられないくらいに暴れる炎龍。

ＬＡＭの爆発から逃れようとして噴火口の壁に激突し、崩したバランス取り戻そうと翼を広げる。

ダークエルフ達は、これまでと変わって、炎龍がＬＡＭを恐れ避けようとすることに、驚喜した。

「いけるぞっ！」

クロウは叫ぶ。だが、ＬＡＭは残り少ない。

ナユの遺体の側に落ちていたＬＡＭを拾って、プローブを引き出し、構えて……数秒のことだが、それだけの時間を炎龍は許さない。自分の巣であることももうお構いなしになって火を立て続けに放ち、フェンは火だるまになった。

全身に炎をまとわりつかせたフェンは、そのままＬＡＭを炎龍に向けて走った。そして至近で倒れ込みながら引き金を引く。

この特攻によって、炎龍の鎧袖（がいしゅう）に二つ目の傷が抉られた。

レレイは考えた。龍の鱗を貫くほどの速度に、これらの剣を加速するにはどうしたらいいか。そ

して伊丹が、爆薬の上に剣を並べたことを思い出す。そうだ、爆発の力で剣を投射すればいいのだ、と思いつく。

剣の一本を拾って、その柄に小サイズの連環円錐（Hessu-ami）を纏わせる。

剣を魔法で投射し、炎龍にぶつかる瞬間……爆発した勢いによって、剣は深々と炎龍の脇腹に突き刺さった。

ヤオに爪を立てようとしていた炎龍にとって、それは軽微な苦痛でしかなかったようだ。その体格から見れば、剣の一刺しなど棘ほどのものでしかないだろう。無視しようと思えば無視できる。だが、大したことないと無視してきた剣が、鱗を貫いたことは炎龍の誇りをいたく傷つけた。

これまで無敵を誇った炎龍の鎧はもう絶対ではない。動きを止めた炎龍は、レレイへと視線を向け、そして我が身に刺さっている小さな棘に視線を向けた。その不条理な出来事を信じられないかのような表情を浮かべている。

悲鳴にも似た咆哮が漏れる。この世の不条理を嘆く響きがあった。

その悲嘆にも似た叫びが、耳に心地良く響いてレレイはほくそ笑んだ。

「ふふふふふふふふ。死ね、くそったれのトカゲ野郎」

レレイは、そこらに散らばっている剣を空に浮かべた。

朽ちた剣も、砕けた剣も、魔法の剣も、無名の剣も、宝石の剣も、大剣も、利剣も、神剣も、蛮刀も、十本、二十本と。

どれほどの戦士が、炎龍に挑み倒れてきたか。無念の思いを噛みしめて死んでいったか。その魂魄の籠もった剣を、能力の限りを尽くしたレレイが炎龍の頭上へと高々と持ち上げた。

16

「うっ」

暗転した視野に光を取り戻した伊丹は、額を押さえながら頭を振った。

動かないはずの大地が、ぐるぐると動いているように感じられて、自分が倒れているのかさかさまになっているのかさえ、分からなかったのだ。セィミィの身体を受け止めたダメージとＬＡＭのバックブラストを喰らいかけた衝撃で、三半規管に狂いが生じたらしい。

汗をたっぷりかいたところに浴びた埃や、ＬＡＭのロケット噴煙で全身砂だらけの埃だらけ。口の中にも侵入したそれらに、唾がざらざらとして実に不快だった。

乾いた口中の水分を掻き集めるようにして、数回唾を吐く。そして、顔に帰ってきた唾の感触にようやく自分が仰向けに倒れていることを自覚した。

どれほどの時間を失ったのだろうか。一瞬か、数秒か、数分か。

世界の回転が静まるのを待って、周囲を見渡してみる。

すると、セィミィの顔が腕枕の距離にあって伊丹をじっと見つめていた。その近さと微動だにしない眼差しに思わず驚いてしまう。何事かと思って、視線を彼女の美しい顔から、喉、そして曲線美豊かな胸へと降ろして行くと全てが理解できた。

屍体となっていたのだ。

炎龍は牙を立て噛み砕いたからといって、必ずしもそれを喰い、飲み下すというわけではないらしい。楚々とした魅力を持った彼女が、わずかな間にこうなってしまったことに伊丹は不思議を感じる。もうこの娘は動かないのだ。動けない。物も言えない思えない、ただの骸だ。

伊丹はそっと手を伸ばすと、セィミィの顔を撫でるようにして瞼を下ろした。

まだ軟らかく、温もりすらあった。整った顔には傷一つ無かった。だから、瞼を下ろしてしまえば眠っているようにも見える。だが、胸のあたりから非現実的なまでに破壊された肉体を見ることで、彼女はもう目覚めることがないということをどうしても理解できてしまうのだ。

突然、爆音が轟く。破片が熱波が伊丹に激しく降り注いだ。

慌てて頭を抱える。体のあちこちで切り傷なんだか、打ち身なんだか火傷なんだかよく分からない苦痛を激しく感じた。そのどれもが、酷い怪我を負ってもおかしくないような衝撃を伴っていた。だがそれらが、炎龍との戦いが始まったばかりであり、まだまだ続いているのだということを、伊丹に実感させるのだ。まだ生きているのだ、と。

人は首だけになっても脳細胞が死に至るしばらくの間、意識があるという。もしそうならばセィ

ミィは死の瞬間に至るまで、世界が暗くなっていくわずかな末期の風景として、伊丹を選んだのだ。もし、そうだとしたら、どんな思いで伊丹を見つめていたのか……。

「行ってくるぜ」

伊丹はセィミィの頭をひと撫でして別れを告げると、身体に力を入れた。

身体を俯せにかえして匍匐前進を始める。始めてから『てっぱち（ヘルメット）』がないことに気付く。くたびれたチンストラップを使っていたので、フックが甘く爆風で吹っ飛んでしまったようだ。首がもげずに済んだと喜ぶべきか、それとも失敗したと悔しがるべきか……。

飛来して来る破片や爆風、炎龍の炎の熱などから頭を抱えるようにして庇いながら、周囲を見渡し、手探りしながら、発破器とリールを探す。

程なくして、砂と埃が降り積もり半分埋まりかけていた発破器を見つけた。

伊丹はそれに手を伸ばしたが、持ち上げた際に感じるはずの手応えがないことに舌打ちした。

発破母線が中途で切れていたのだ。ＬＡＭが炸裂した際の衝撃か、破片によるためか。

「くそっ!!」

折角の苦労も水の泡だ。

仕掛けた爆薬が使えないとなれば、ＬＡＭに賭けるしかない。が、ダークエルフ達は統制もなく闇雲に進んでは倒れていった。見れば、どうにか動けているのはクロウにフェンにヤオだけだ。しかも三人とも満身創痍。血まみれ怪我まみれ、しかも火傷なのかＬＡＭの噴射炎を浴びてのカーボ

ンなのか分からないが、身体の各所を炭化したみたいに黒くさせていた。
ヤオがバンの遺体の下からＬＡＭを引っ張り出すと炎龍に向かって突っかかっていく。彼女は伊丹が教えたことを忠実に行った。プロープを引き出し、安全レバーをＦへと合わせた。命中すれば間違いなく炎龍の鱗を引きはがすだろう。
狂乱状態の炎龍は、身を火口の壁にぶつけることも厭わず、跳ねるようにしてこれを避ける。その巨体が地にぶつかり、壁にぶつかるたびに岩棚は大きく揺れて、火口の壁が派手に崩れた。雪崩のように、火山灰や軽石や岩盤が降ってくる。
そんな中、フェンが炎龍の炎を浴びながらも、そのまま特攻をかけて炎龍にダメージを与えた。
伊丹は「馬鹿野郎っ！」と身を起こす。
わずかな間に、ダークエルフ達が死んでしまった。セィミィが死に、今フェンが死んだ。この一瞬を躊躇ったら次は、レレイや、テュカ、ヤオ、クロウだ。そう思っただけで伊丹の身体は動いた。壮絶な覚悟とか、決意とか、そんな精神的なきっかけはない。考えもしない。頭の中は空っぽだ。ただ反射的に訓練の結果身に付いた動作として、走り出したのである。発破器を拾い、リールを拾い、ニッパを持って。
炎龍の足下を駆け抜けて、発破母線を埋めた場所を手探りで掘り返していく。
剣をぶつけ合うばかりが戦いではない。銃砲火器を撃ち合うばかりが戦いではない。穴を掘り、伝令に走り、爆薬を仕掛ける。それぞれがそれぞれの部署で、課された役割を誠実に果たすこと。

それが全て戦いなのだ。伊丹は、炎龍を吹っ飛ばす最後の切り札を確保すること。それを自らの役割と見なしていた。

ちぎれた断端を見つけだして、被覆をニッパで剥いて、断端を繋いでいく。

口で言えば簡単な作業だが、頭上では炎龍が暴れ、火を吐き、ＬＡＭの爆風が吹き荒れる。

炎龍の悲鳴にも似た鳴き声が響く。いよいよ逃げ腰となった炎龍が、翼を広げて岩棚を離れようとした。

伊丹は、頭上から降り注ぐ土砂に何度も咳き込みながら、リールを抱え上げて、繋ぎ終えた発破線を伸ばしていく。そこへ、誰かの甲高い調子外れの嘲笑が響いた。

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふっ」

誰かと思って振り返ってみれば、レレイ。

ポンチョにも似たローブをひるがえしながら、緑の瞳を輝かせて立っている。

その小さな体躯から伸びた腕の向かう先、掲げ上げる手の向かう先、その突き立てられた指の向かう先、それは上空。天空を覆うように、まるで吊り下げられたように無数の剣が浮いていた。

「死ね、くそったれのトカゲ野郎」

レレイのものとも思えない罵倒をきっかけに、土砂降りのように降り注ぐ剣。

さしもの伊丹も、これに巻き込まれては堪らないと走った。ヤオも、クロウもその凄まじさに、慌てふためいていた。

「くっくっくっ」

どうやら、レレイは我を忘れると人格ががらっと変わるのかも知れない。白い無表情のレレイに感情の色が付いた。それは禍々しいほどに狂怒の色を湛えていた。

「わぁっ、待てまてまてまてっ！」

頭を抱えて、身を投げるようにして伏せる。ヤオやクロウも伊丹を真似て頭を抱えて伏せたために三人で額を寄せ合うかのようになった。

歯を食いしばって着弾を待つ。だが、予想された衝撃は訪れなかった。

宙を舞う剣は、ただ重力に引かれて降り注ぐのではなく、勢いそのままに炎龍目がけて突き進んでいたのだ。的確に誘導され、導かれた剣は、全方位から逃げようとする炎龍へとまとわりついて、弾ける。

爆発の勢いによって撃ち出された多くの剣が砕け、多くの剣が切っ先を失って跳ね返った。もちろん、その中には強靱な鱗を突き破る剣もあった。が、全体としてみれば、極僅か。確率的には十本に一つか二十本に一つ。それだけ多くの商人が、剣に命を託した戦士達を裏切っていたということだ。

だが、レレイが浴びせかけた剣は非常に多い。

母数が多ければその中の稀少の剣の割合も増えていく。真に名匠の打った剣、真に名工の研いだ剣が炎龍の身体に突き刺さった。しかも、レレイは逃げ去ろうとした炎龍の翼を集中的に狙った。

翼をずたずたに引き裂かれた炎龍は、その巨体を支える浮力を失う。
炎龍が、ついに墜ちた。

その巨体が岩棚に叩きつけられる衝撃は凄まじいものとなった。
岩棚が大きく揺れて、岩盤に亀裂が走ったほどだ。そして炎龍もまた、落下の衝撃によるダメージに身悶えていた。大空に舞うための翼を失い、身体の各所に穿たれた穴からは、出血が続いている。そして何本もの剣が、槍が、刀が刺さり、立ち上がる気力も失ったかのように見える。
その証拠に、唸り声にも力が無い。
「やったぜっ！」
クロウとヤオは、炎龍の水に墜ちた犬のような姿に勇躍すると、それぞれに剣を、サーベルを抜いて走り出した。だが、飛べなくなったとしても、炎龍は戦車並みの防御と攻撃力を持つと見ている伊丹には、まだまだ危険極まりない存在に見えた。
「馬鹿、止めろっ！」
どうにかヤオの後ろ髪を捕まえることに成功したが、クロウを立ち止まらせることは出来なかった。しかも、目の前で精根尽き果てたようにレレイが膝を付いて倒れていく。ヤオを捕まえ、レレイを支える。伊丹に出来ることはこれで精一杯だった。
クロウは剣を抜くと、脇目もふらずに渾身の力を込めて炎龍に叩きつける。

その跳ね返ってきた甲高い音には、どうしようもないほどの堅牢さを感じさせられたが、剣を叩きつけることに成功したクロウは、直接の手応えが嬉しかったのか我を忘れて連打した。
「この野郎っ、この野郎っ！」
調子に乗って、繰り返し繰り返し剣を叩きつけ、それでは適わないと思って剣先を突き立てる。あまりの鱗の頑強さに、業を煮やしたのか次は鱗の隙間に剣を差し込んで引き剥がしにかかった。
虫の息となっていても、やはり炎龍は炎龍であった。
身を捩らすように首を起こしたと思うと、まとわりつく蠅でも払うかのように炎を放ち、クロウの身を焼いたのである。
「うわぁっ！」
「クロウ！」とヤオが手を伸ばす。だが伊丹は、ヤオの腕を捕まえて決して離さなかった。
「駄目だ、ヤオ。駄目だ！」
「クロウ！　イタミ殿、離してくれっ！」
「止めろ、お前まで巻き込まれるぞっ！」
ヤオの叫びも虚しく、火だるまとなったクロウはしばらく転げ回っていたが、やがて動きを止める。
炎龍の隻眼には殺気が、まだまだ満ちていた。わずかに火を放ちながら、伊丹達を威嚇する。その目には死の瞬間まで屈しない、古代龍としての意志の光があった。

「何故だ、何故止めるっ！」
「馬鹿野郎。いい加減に、頭を冷やせっ」
伊丹は、激昂しているヤオを離すまいとする。今にも火を吐き出しそうな炎龍から離れて洞窟へと退却しようと、彼女の腕を懸命に引っ張っていた。

「あ、ああっ、ああ」
レレイに指をくわえて見ていろと言われたテュカは、目前で繰り広げられた戦いを呆然と見下ろしていた。
ダークエルフの男が、炎で焼かれ七転八倒している。
そんな仲間を助けようとヤオが手を伸ばす。だが、伊丹は彼女の手を離さない。そればかりか懸命に引っ張って炎龍から距離をとろうとしている。頭に血が上っているヤオは伊丹の制止に従わず、炎龍に向かおうとして伊丹を振り払おうとさえした。
そんなヤオの姿が、自分に重なる。
馬鹿だ、馬鹿だ、馬鹿だ、馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿。
向こうの炎龍がわずかに身を捩らせて伊丹に牙を剥いた。伊丹は炎龍に背を向け、レレイを抱きかかえ、ヤオの腕を牽いて、逃げようとしていた。
炎龍の顎が大きくひらいて、その鋭い歯列が剥き出しとなる。その中心に、伊丹の姿。

それが、炎龍に背を向けた父のものと重なった。
「父さんが、死んじゃう」
この瞬間、テュカの頭の中はそれだけで一杯になった。
奥歯を噛みしめ、テュカは一歩を前へと出した。
手には剣はなく弓もない。ならば、わずかに使える精霊魔法以外に武器はない。テュカは徒手単身で前に出た。
森の精霊種たるエルフは風木の精霊魔法との相性がよい。まして上位種たるテュカならば、発動に僅か二節。
「teruymmun! hapuriy!」
それは雷撃の召還であった。
いけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！
碧眼から流れる涙をまき散らしながら、渾身の雷撃をテュカは召還した。
雷撃などで、炎龍がしとめられるとは思っていない。できるなら、父が、あるいは数多の精霊使いが炎龍をしとめただろうから。
だが、それでも良かった。炎龍の気を一瞬でも逸らす。僅かな時、数舜(すうしゅん)、数刹那、寸毫(すんごう)の時を稼ぐことが出来れば、テュカが父と見なした男は、死の顎(あぎと)から逃れ得るかも、知れないのだから。
青白い閃光が瞬き、大地の表面が軽く跳ねた。

その衝撃に、伊丹はレレイを抱えたまま、ヤオを引きずったまま、こちらに倒れ込んでくる。テュカは両手を広げて伊丹に抱きついた。勢いそのままに伊丹はレレイ、テュカ、ヤオごと、洞窟へと転がり込んだのである。今度は、テュカは独りではなかった。皆を抱いたまま、皆と共に洞窟へと飛び込めた。

炎龍の体表面を電撃は走る。通常ならそのまま地へと流れていく電流の迸り（ほとばし）は、各所に突き立てられた剣にまとわりついて体内に深く侵入した。

電流は『流れやすい所』を流れるという法則に従って、炎龍の肉体を突き抜けた。そして、伊丹が配置した発破母線に触れ、駆け抜ける。それは地中に埋められた七十五キログラムの粘土爆薬に突き立てられた無数の電気雷管へと至った。

炎龍の心臓が、大きく鼓動する。

瞬間。

炎龍の爆発的な断末魔の悲鳴が轟く。それは巨大な鉄の塊を引き裂くような音だった。それに続いて火山の噴火を思わせる大爆発が続く。それは洞穴内で共鳴し、大地を震わせた。その衝撃は、地面に伏せる伊丹の耳を貫き、テュカの耳を貫いた。誰も彼もがその魂魄を打ち砕くほどの衝撃に貫かれた。

炎龍の巨体は、強烈な破壊力によって引き裂かれた。

傷つけられた心臓壁から吹き出した血液は空気に触れた途端、炎のように燃えた。

炎龍の心臓が鼓動するたびに、その心臓から血炎が溢れた。赤い血潮の代わりに、辺りには炎が溢れた。飛び散った血炎のしぶきは、炎龍の身体を内部から焼き、浸食し、包み込み始めた。

堅牢な鱗は見事なまでに叩き割られ、しかも体内までも焼かれていく。こうなれば最早助かる術はない。その巨体を打ち震えさせ、身体の各所に穿たれた傷跡から、紅蓮の炎をまき散らし、苦しそうに悶えながら炎龍は崩落する岩棚と共に、地の底の闇へと堕ちていったのである。

そして、その瞬間から大地が崩壊を始めた。

支えを失ったかのように洞窟の天井が崩れ出す。洞窟の床にもひびが走り、亀裂が広がり、大きな地割れが口を開いていった。あたかも、四人を奈落へと引きずり込もうとするかのように。

「逃げるぞっ！」

伊丹はヤオの頬を叩き、動けない人形のようなレレイを担ぎ上げ、テュカを励ます。

テュカも身体をしたたかに打ち付けていて全身が悲鳴を上げていたが、今は痛いとか疲れたとか言っている暇もない。「走れ、走れ、走れ」という伊丹の声に急き立てられるように走った。

天井、柱、大地、あらゆるものが、少しずつ崩れ始めた。

終わりのない地震。それは、激しさを増していくだけだった。このままでは大地の全てが壊れ崩れるようにも思えたほどだ。

洞窟の内部。神殿のようだった階段。伊丹達が走り抜けていく端から、地面が消え失せていく。落ちた瓦礫は、地の底に広がる暗黒の空間へと飲み込まれていく。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

足の下が崩れ落ちて転落の恐怖に喉から声を振り絞るテュカ。

「テュカっ！」

伊丹の右手が、テュカの左手を捕らえた。伊丹が必死の形相でテュカを掴み上げ、地上に結び付けている。

「しっかりしろっ！」

テュカを引き上げようとする伊丹。その伊丹の背後からヤオの手も伸びてきて、テュカの手を更に支える。二つの手がテュカの手をしっかりと掴んだ。

足下では大地に無数の、そして地の底まで続いているようなひび割れが走っていく。

それまで堅牢な硬質を維持していた地面が、砂のように頼りなくなってしまった。柱が崩れ始める。岩の天井を支えていた柱の、ことごとくが折れて、朽ちていく。

ここも危ない。あそこも危ない。安全な所などどこにもない。

伊丹は、テュカの手を握り込んだまま、その崩落する洞窟を駆け抜けていく。

懸命に走る一歩一歩の踵、そのわずかな後ろから地面が崩れ落ちていく。その崩落の速度は、四人を深淵へと引きずり込もうと激しく追い立てた。

落盤の恐怖と全力疾走の疲労は、テュカの体力を容赦なくそぎ取っていった。
彼女の流れるような金髪は、砂を浴びて、煙に汚れた。汗にまみれた肌は、砂礫を浴びて泥のようになっている。
早鐘のような鼓動は、胸が張り裂けそうなほどで、一呼吸一呼吸が熱く、痛く、辛い。
天井から大きな岩が降ってくる。大崩壊の名に相応しく、あらゆるものが堕ちていく。だけど、生きている。まだ、生きている。
自分は生きている。
伊丹も生きている。
レレイも生きている。
ヤオも生きている。
テュカは、伊丹の手を握り返してその感触の確かなことを味わった。
死なせずに済んだ。亡き父の敵を討った。
いつの間にか地面を蹴る足に、力がとどき始める。引きずられてるから動かしていた脚に意志の力が蘇っていた。

＊　＊

崩れゆく洞窟から命からがらどうにか逃れ、外の空気に触れた伊丹達は最早動くことも出来ずに、崩れるようにして地面に横たわった。
肩で息をして、咳き込んですら居る。
吸い込む空気が熱く、胸が焼けるように痛い。手足はもう鉛のように重く、我が身ながら恨めしく鬱陶しいほどだ。
洞窟はその崩落が出口近くにまで達して埋まってしまい、周囲には砂埃が立ちのぼっている。
空は、西側ではまだ星が瞬いていたが、東側では幻想的なまでに紅く染まりだしている。
「はぁ、はあ、はあ……みんな、無事か？」
問う言葉も、簡潔にして要点のみ。テュカは「生きてる」とだけ、ヤオは「なんとか」、レレイは「損傷はたいしたことがない……」と答えた。「遅いぃよぉ」という弱々しい声はロゥリィだ。
どうにか全員の無事を、とはいっても誰も彼も傷だらけでこれを無事と言ってよいかどうかは分からないが、とりあえず生きていることだけは確認した伊丹は、安堵のため息をつく。
「……」
しばしの時の果てに、はたと気付く。
「ロゥリィ！」
顔を上げた伊丹の目に入ったのは、ボロくずのような有様に成り果てて転がる、黒フリルの塊（かたまり）だった。

手足が引きちぎれそうになり、無数の傷を受けて転がっていた。
無事なところを探すことの方が難しいぐらいだ。傷からは沸騰した湯のような蒸気があがり、瞬く間に回復していくのだが、傍目にはそんなことでは到底追いつかないと思えるほどの出血と、怪我だ。生きているのが不思議なくらいである。
「どうしたんだ。いったい、何があった!?」
伊丹は、全身の疲労もよそにロゥリィに近付くと彼女の身体を抱き上げた。
力無く落ちる腕に、思わず慌てる。彼女の左腕は、どうにか皮一枚で繋がっていただけだった。あわてて、伊丹はロゥリィの腕を元のように付けあわせようとした。非理性的な振る舞いだが、この時ばかりはそれが正解。傷口同士がくっつこうとしはじめた。
「お姉さまったら、ヒト種なんかに心配されて。随分と腕が鈍ったんではなくて?」
背後から投げかけられる声に、振り返る伊丹。
見上げた山の中腹に、二頭の新生龍を従えた白ゴス神官服をまとった女性が立っていた。

17

その女は、白ゴスを纏っていた。

見た目二十代前半の肢体。
深縹色の肌をフリルに充ち満ちた白い衣装で包んでいる。包んではいるのだが胸元のあわせが足りず豊かな双丘で構成された谷間から、ピアス輝く臍部までを見事なまでに露出。その、ぬめるような肌を紐できつく編み止めるというデザインとなっていた。袖も肩で切り落として、フリルのスカートも裾がぼろぼろ。深々としたスリットが入ってるも同然で美脚を全く隠せてない。露出されている腹部や、腕、腿、頬などには、トライバルのタトゥーが入っている。もしかすると全身に刺青が施されているのかもしれない。
灰色の髪をたなびかせた彼女は、縦に割れた金色の瞳にどんよりとくすんだ輝きをたたえ、死神が振るうような大鎌をよっこらせと肩に乗せて舌なめずりした。まるで錆びた刀剣のようなやさぐれた雰囲気だ。それゆえに通った後には、辺り構わずゾロリとした凶悪な傷跡を残して歩くような危険な気配を湛えていた。
「お姉さま。主上さんの奥さまになろうってお人が、汚らわしいヒト種なんぞに気安く肌に触れ、触れさせるとは不調法が過ぎまっ、せんか……」
丁寧な言葉遣いに馴れないのか、自ら舌を噛みそうになって「ちくしょうめっ」などという小さな罵倒が漏れ聞こえた。
「煩いっ。あんな女の嫁に、誰がなるもんですかっ！」
ロゥリィは文句を言いながら、震える体をぎこちなく起こした。

両腕の切断面が繋がり、血まみれの手足もどうにか彼女の言うことを聞くようだ。だが、やはり力は充分ではない。普段なら軽々と振るうハルバートも、手をかけるのが精一杯で持ち上げることすら難しそうである。

「主上さんに、見初められて嬉しくないんすか？」

「何度も言っているでしょう。わたしぃの主神はエムロイ。死と断罪と狂気、そして戦いの神よお」

「はぁ、マリッジブルーってやつかねぇ。不憫なこって」

ここはやっぱりひとつ、無理矢理にでも連れ帰らねばなるまいか、などと剣呑なことを呟いていた。

「何が、マリッジブルーよっ！　何が不憫よっ！　そっちが勝手に決めて、勝手に言ってるだけじゃないぃ」

「もう、嫌っ」と、ばかりにロウリィは伊丹に子供のように縋った。今にも泣き出しそうだった。

それを見た白ゴス女性は、伊丹に胡乱な視線を向けた。

ロウリィに対しては、一応の敬意を示そうとして気を遣う白ゴスだが、伊丹相手となれば、もうあからさまなまでに蔑んだ視線と口調になる。

「そこのヒト種のオス。てめぇ、主上さんの妻女になろうってお人を寝取ろうとか考えてんじゃねぇだろうな？　もしそうならそのケツに二つ目の割れ目をこさえてやっぞ」

伊丹からすれば、何で俺？　寝取る？　滅相もないと訴えたい気分だ。だから首をブンブンと大きく振った。だが、縋りついてくるロゥリィに、小さな声で、まだ力が戻ってこないから、時間を稼いで欲しいと囁かれれば否応もない。この状況を、この白ゴス女性とロゥリィとの間にどんな確執があるのか見極めるためにも、少しばかり言葉を交わす必要を感じた。

「質問っ、質問っ！」

伊丹は手を挙げた。すると、白ゴス女性は「なんだよ、めんどくせぇなぁ」と、舌打ちしながらも実は律儀な性格らしく「分かった、分かった、さっさと質問しろよ」という態度で耳を貸してくれた。

「まず最初にお尋ねするのは、貴女はどちら様で……おっと失礼、自分は日本国は陸上自衛隊特地派遣隊・第三偵察隊長・伊丹耀司二等陸尉であります」

白ゴス女性は、その背中に巨大な羽を広げた。そのドラゴンのような翼を大きく広げるとふわっと滑空して、音もなく伊丹達の前に降り立つ。そして、まるで品定めするかのように、伊丹のことを右から、左からジロジロとなめ回すように見ていった。その縦割れた瞳と所作に、やっぱり爬虫類系だなぁという感想を伊丹は抱いた。

「ご丁寧に自己紹介あんがとよ。オレはジゼル。見ての通りの使徒さ。主上ハーディに仕えてる」

ペコリと頭を下げる姿は、行儀見習い中の居酒屋バイトみたいな雰囲気があった。ロゥリィの囁きによるとこの女性は竜人出身の亜神で現世に存在する一番若い使徒らしい。

「ハーディ……さまと言いますと、やはり神様で？」
「そだよ。って言うか、んなことも知らねぇのかよ。常識無ぇ奴」
特地についての無知を指摘された伊丹は、「あはは、よく言われます」と、まるで追従するかのように笑った。そして、現在の雰囲気が途切れないよう「今のやりとりを聞いてて思ったんですが、そのハーディって神様は女性でらっしゃいますよね。それが、女のロゥリィを嫁にしようとしてるってことですか？」と質問を続けた。
「そだよ。何か変か？　おかしいかよ？」
「いや、別に。ただ人間的な感覚だと、女性が女性を嫁にするっていうのは、まだ珍しいことでして。外国ではあるって話ですが、卑近にそういう話がないんで確認だけしておきたくなりまして」
「本人達の好きずきだろ。いちいち文句たれるなよ、おっさん」
「おっ、おっさん？」
確かに、おっさんと言われてもおかしくない年齢ではある。が、あからさまにそう言われたのは、意外にも初めての経験である。結構、傷つくものであると、しみじみと実感してしまう今日この頃。人知れずして精神的なダメージを受けたが、それを押し隠して明るく振る舞う健気な伊丹であった。
「神様ってのは進んでるんですねぇ」
すると、ジゼルは「ああっ、もうっ！」と、自分の後ろ髪を掻きむしって肩を竦めた。
「ホントのことというと、オレにも分かんねぇんだよっ。けどよ、差別はいけないだろ？　だからそ

れなりに理解はしようと思ってんだよ。ま、普通は分かんなくて当たり前なんだろうけどな」
「わたしぃは嫌よぉ。男がいいわぁ」
「と、まぁ、こんな有様でさ。まいってるぜ」
主上の想いが広く理解されるには、まだまだ道は遠い、とジゼルはため息と共に太陽が昇りつつある地平線へと視線を向けるのだった。
「まぁ、こうしたことは本人の意思が問題ですからねぇ。時に、ジゼルさんはハーディさまと同じように、同性が好みで？　それとも異性がお好みで？」
「オレか？　オレは男がいい」
「では、実際どう思われます？　本人の意思を無視して、暴力で無理矢理連れて行って、しかも好みでない同性の相手に娶せようというのは。ご自身の身に置き換えてみたら、やっぱり嫌じゃないですか？」
伊丹の言葉にジゼルは眉根を寄せた。視線を背けて小さく舌打ちする。
「それを言われっと参るんだよなぁ。けどよ、使徒としちゃあ、お姉さまを連れてこいっていう主上さんには逆らえねぇし。御意に従うしかないだろっ」
「それで、先ほどから戦っていたと？」
「そうさ。まさかこんなところでお姉さまに出くわせるとは思っても見なかったけどな。出会ったからにはってことでな」

「ロゥリィって結構強かったと思うんですが、貴女一人でこんなにしたんですか？」
見るからにロゥリィの傷は酷かった。もちろん治りかけてはいるが、最初に見た時は身体のそこかしこに深々とした傷が残っていたのだ。黒ゴス故に分かりにくいが、着ている服は乾いた血が大量にこびりついていた。
するとジゼルは、愁眉を寄せる。
「馬鹿かお前ぇ。んなの、お前の傷をお姉さまが代わりに引き受けたからに決まってるだろうよ」
ジゼルはそう言うと、砂でも吐くように唾を大地にぶつけた。
「どうりでおかしいと思ったぜっ。本当ならオレ独りじゃ絶対に無理なんだよ。戦いの神、エムロイの使徒。死神ロゥリィ相手に、オレなんて互角に持ち込むのが関の山のはず。それがどうだい、まるで動きが悪い。何もしなくても傷を負う……、最初は舐められてるのかと思って頭に来たが。そりゃ、そうだろさ。お前ぇの傷をお姉さまが引き受けたんだからな」
見れば繋がっているのが分かる、とジゼルは言った。
そう言えば、不思議と大けがの無い伊丹は唖然としてロゥリィに視線を下ろして「なんでそんなことを」と尋ねた。
するとロゥリィはペロッと舌を出して、肩を竦めた。「別にぃ良いじゃないぃ」
この態度に、伊丹としては、どうしようもない気持ちになった。心臓を鷲掴みにされてしまった気分だ。

「ま、事情が分かれば話は別だ。今度は、全力でやってもらうぜ」
ジゼルはそう言って、背後の新生龍二頭を振り返る。いつの間にか、二頭の新生龍も近くに寄ってきていて、ジゼルにその巨体を撫でられて気持ちよさそうに喉を鳴らした。
「オレ独りでなんとか互角。だがこの二頭がいれば、お姉さまにだって勝てるんだぜ」
二頭の新生龍は、身体の赤いものと、黒いものとがいる。おそらく炎龍の巣にあった卵の破片、あれから孵ったのがこの二頭だろう。身体を覆う鱗の形状や、全体の雰囲気に炎龍の荒々しい面影を感じる。それでも親に比較すれば、トゲトゲというか風格に欠けるきらいがあり、大きさも二周りほど小ぶりだ。とはいっても、巨体であることは間違いないが。
「ず、随分と、懐いてますね。危なくないですか？」
「ああ？　産まれた時から世話したかんな。眠っている炎龍を起こして、わざわざ水龍と番(つが)わせて、卵を産ませて、ようやくここまで飼い慣らすことに成功したってわけよ。そりゃ苦労したぜ。それだけの価値はあったけどな。炎龍と新生龍、そしてオレ。この組み合わせなら無敵だぜ」
そう言って、ジゼルはほくそ笑んだ。
「な、なんでまた、そんなことを？」
「お前、本気で馬鹿だな。お姉さまを含めて、他の亜神に勝つために決まってるだろ。ところで、ロゥリィお姉さま。体力の回復具合はいかがでしょうか？　そろそろ、二戦目と参りたいんですが、今度こそ手加減抜きでお願いします」

ジゼルは、ロウリィに告げると大鎌を構えた。背後の新生龍二頭も翼を広げ、距離をおいてそれぞれに身構える。

ロウリィも、伊丹から離れてどうにかハルバートを構えた。だが、その重みで身体が微妙に傾いで揺れた。傷の回復が進んでいるとはいえ、やはり受けたダメージが彼女を蝕んでいるようだ。

「ちょっとお待ちいただきたい、ジゼル聖下。今のお話によるならば、炎龍を起こしたのは聖下であらせられるか？」

緊張の走った両者の間に水を差したのはヤオだった。

左の二の腕に出来た傷を右手で庇いながら、片足を引きずりながら少しずつ前に出て、ジゼルに問い詰める姿は鬼気迫るものがある。

「なんでぇ、お前は？」

「何故、そのようなことをっ！」

ヤオの怒気を孕んだ詰問に、ジゼルは無礼を感じてか、ヤオに向ける視線をすぅと細めると少し低めの口調で言葉を返した。

「オレのやることに文句があるってのか？」

「ありますともっ！　此の身らはハーディを主と仰ぐ者。これまで、それなりに誠意を持って仕えて参ったつもりです。なのに、その代償として与えられたのが、炎龍という名の災厄。それはいったい何故なのですか!?」

ジゼルは苛立ち混じりに、盛大なため息をついた。
「主上さんのご意志を、いちいち何故なんて尋ねてんじゃねぇんだよ。親分が黒っつったら、白かろうと赤かろうと、黒なんだ。お前等信徒は、それに従うってのがスジってもんだろうよ」
「し、しかし」
「上には上の考えってやつがあんだよっ！」
「それが、我が同胞を滅亡に導くものであってもですか？」
「当たり前だろう。信仰心が篤いって言うなら、なおさらだろう？　お前等はな、主上さんのお役に立てることを喜ばなきゃだめなんだよ。それが死ぬことなら黙って死ぬ。それが信仰心ってもんだろ。違うか？」
ジゼルの、何故そのような分かり切ったことを問うのだという態度に、ヤオは身を震わせて唸った。
「こ、此の身に限って言えば、主神の仰せならば従いましょう。ですが同胞や一族すべてに生贄となれとは、あまりにも無体なお言葉。此の身の一族を炎龍の餌とすることは、本当に主神のご意志だったのですか？」
この言葉にジゼルは笑みを浮かべて手を打った。
「なんだそれ？　へぇ、餌になっていたのはお前らだったのか。炎龍の奴、どこから餌を獲って来るのかって思ってたんだけど、それがダークエルフだったとは知らなかったぜ。災難だったな、お

前」

この言葉には、さしものヤオも唖然とした。

ダークエルフが炎龍の餌となっていた。それがハーディの意志だった、というのならまだしも、知らなかったという。それはつまり、信徒達が苦境に置かれていたことに、関心を払ってなかったということを意味する。

「災難？　災難の一言ですか!?」

ヤオは、力無く膝を屈して両手で大地を叩く。

「何度祈ったか。何度泣いたことか。何度悲しんだことか。何度問うたことか。何度救いを求めたことか。何度、絶望したことか。その都度主神を想い、自らを励まし、立ち上がり、希望を求め、旅に出て……そんな此の身の祈りに、神々は応えてくれないばかりか、耳すら貸してくれてなかったというのですか」

血涙を流しながら問うヤオに対して、ジゼルは困ったように眉根を寄せて言い放った。

「いちいち、信徒の言葉に耳を傾けている神なんているわけねぇだろ。金をくれ、救ってくれ、出世できますように、くじに当たりたい、豊作祈願、勝負に勝ちたい？　恋愛成就？　んな、欲まみれのお祈りなんざに耳を貸してたら、きりがねえんだよ。おんぶにだっこと縋ることしかしない信徒なんぞ、炎龍のエサになってろってんだ」

この言葉にヤオが切れた。自らの魂をかけた祈りを、そんな欲ぼけた頼み事と同列に扱われたこ

とが、頭に来たのだ。
サーベルを抜剣するのが速いか、ジゼルへと斬りかかった。
だが、それよりも速く鋭い大鎌の一閃が振り下ろされた。

咄嗟のことだった。
伊丹は、ジゼルに斬りかかろうとするヤオに飛びつくと彼女の胴を抱えながら引きずり倒した。
ここで喧嘩を始められたら巻き込まれること必定だからだ。
ジゼルの大鎌はヤオの身体を、皮一枚の差で掠った。そこへロゥリィがハルバートを振るって斬りかかる。
ジゼルは、身を逸らすことでこれを躱した。そこへ割って入るようにして、赤龍の鋭い爪が振り下ろされ、今度はロゥリィが跳ねるようにして、その一撃を避けた。
伊丹は、ヤオを抱えて地を転がると、腿から9㎜拳銃を抜く。おおよその見当をつけて連射。三発の弾丸が、ロゥリィを追撃しようとする赤龍の巨体に当たったが、その強靭な鱗にはばまれて傷一つ負わせることが出来ない。とはいえ、その攻撃は赤龍を牽制することに成功した。ただ、その代償として二頭の新生龍と白ゴスの亜神に、伊丹を敵と認識させることとなる。
交錯した一瞬が終わり、間合いが開く。
ロゥリィはハルバートを構えなおし、伊丹はヤオを起こして、ロゥリィの傍らへと立った。レレ

イやテュカは、黒龍に牽制され、これから逃れるだけで精一杯の様子。二人とも、有効な攻撃手段を持っていないことに加えて、レレイに至っては炎龍戦で精神力の殆どを消耗し、回復できないでいるのだ。

「くそっ……」

巻き込まれることを防ぐために動いたつもりだったが、かえって巻き込まれてしまった。伊丹は、新生龍には効果無しと見て、銃口をジゼルに向けたが、それを見たジゼルは、「おいおい、ヒト種がこのオレに挑もうとは」と、嬉しそうに微笑む。

「お前ぇ、なかなかいい目してるじゃねぇか。そういう無謀な奴って、好きだぜ」

「当たり前じゃないぃ。これでも、炎龍を倒した程の男よぉ」

肩で息しているロウリィは、精神的な優位を保とうとしてかそう言った。

「なんだと!?　って失礼。いや、今、何を倒したって言われましたか？　お姉さま」

「炎龍を、倒したって言ってるのよぉ」

無事に出て来たからにはそうよね、とロウリィは伊丹に尋ねる。

ジゼルの刺すような視線に、別に俺が倒した訳じゃないと叫びたいところである。

伊丹がしたことは粘土爆薬を仕掛けただけだ。戦ったのはもっぱらヤオ達ダークエルフだし、レレイだし、とどめを刺したのはテュカだ。が、今、この瞬間のロウリィの負担を軽くするには、自分が容易ならない敵だとジゼルに思わせる必要性も理解できる。やせ我慢して、即興で、はったり

をきかせることにした。
思わず呟く。「俺って、こんなんばっか」
特殊作戦群でも、欺瞞のためとかで偽経歴が各方面に流され、大したことしてないのに二重橋壕では英雄とやらに持ち上げられる。実際と評判の乖離たるや甚だしい。実力以上に振る舞うことを強いられるのがどれほどにしんどいか。だが、ここは下腹に力を入れて、余裕に振る舞う。余裕に見えるように振る舞わなくてはならなかった。
「嘘かホントか、火口を覗いてみれば分かりますよ。炎龍の屍体が転がってるはずです。あっ、勢い余って岩棚を吹っ飛ばしちまったから、埋まっているかも知れませんけどねぇ。あはは」
内心、ガタガタ震えているのは秘密である。ロゥリィが軽く肘でつつきながら言った「良くできましたぁ」という小さな声も、危うく聞き逃すところだった。
確認のためかジゼルが顎をしゃくると、黒龍が火口へと飛び上がって行く。
「へへへ、命からがら逃げて来たってんなら分かる話だぜ。お姉さまの加護があったとはいえ、ヒト種に出来るわけがねぇからな。だが、嘘にしては底が浅すぎる。と、すればホントか？　もし、そうなら面白れぇ。そこのヒト種のオス。もう一度名前を言え。さっきの名乗り、聞き流してて忘れちまった……」
「耀司よぉ。伊丹耀司」
伊丹よりも先にロゥリィが告げる。そしてさらに伊丹の腕に、ロゥリィは見せつけるようにして

腕をからめた。
「耀司とは眷属の契りを交わしたわぁ。あんたはぁ、新生龍二頭を手に入れたかも知れないけれどぉ、わたしぃは炎龍すら倒す男を伴侶にするというわけぇ」
「そういうことか……やってくれるじゃねぇか、お姉さま」
そうしている内に、火口付近を飛ぶ黒龍から、叫びが響いた。
自らの親を失ったことを知らせる、悲痛な叫びだった。
「おほっ、嬉しいねぇ！　こんな奴がヒト種から出てくるとは思わなかったぜ。使徒になった甲斐があるってもんだ」
大鎌を構えなおすジゼル。
「この耀司とわたしぃを相手にぃ、新生龍二頭とあんただけで、はたして勝てるぅのかしらぁ？」
ロゥリィとジゼルの舌戦の横では、伊丹が必死になって「さっさと、帰れ。適わないと思って逃げてくれ、行け、去れ。神様……」と、祈っていた。だが、祈るべき対象が目の前にいては、なんだか効き目もなさそうである。というより、いちいち祈りに耳を貸したりしてないと今、言われたばかりである。
「へっ。面白くなってきた。トワト！　モゥト！　お前等も親の敵(かたき)だ、手を抜くんじゃねぇぞっ！」
二頭の新生龍はジゼルの呼びかけに応えて、朝日の昇った大空へと舞い上がった。ジゼルも大鎌

を振りかぶった。ロゥリィもハルバートを振りかぶる。
「行くぜっ！」
「ヤベっ！　やぶ蛇だったっ！」
戦うことを、最初から考えていなかった伊丹は、進もうとしたロゥリィを抱えると、後ろに向かって全力で走り出した。
「ヤオっ！　レレイを頼む。テュカ、走れ！」
伊丹の指示を受けたヤオは、自らの傷も忘れてレレイを抱え上げた。テュカもはじかれたように走る。それまでの余裕な態度から一転しての見事な逃げっぷり。あっけにとられたジゼルはしばらく何があったのか、理解できなかった程だ。
誰もいなくなったテュバ山麓に、隙間から吹き抜ける空気にも似た、肌寒さを感じさせる風が走っていく。遠くからカラスに似た鳥の鳴き声が聞こえた。
「あ……」
どういう逃げ足をしているのか、下り斜面を転がるようにして走っていく伊丹達は、気が付いた時には、既に遠く小さくなっていた。
「ば、ば、ば……馬鹿な」
どうする？　と問いかけるような感じで、黒龍と赤龍がジゼルへと視線を向ける。
「お、追えっ！」

慌てて、飛び上がる二頭。
いかに人間が走ろうとも、大空を舞う龍からは逃げ切れない。
翼を大きく広げ、高度を上げて速度を上げた。そして、上空から火を浴びせかけようと顎を開いた瞬間。
蛇にも似た軌跡を描いて飛来した四条の筋が、二頭の新生龍を襲った。

「久里浜。『カレ』のサイズ、以前見たのと比べて、ちと小さくねぇか？」
ロックオンさせた熱源追尾型空対空ミサイル・サイドワインダーを発射しながら、神子田は久里浜に言った。
「二頭居るし。完全に別目標だ」
『とはいっても、あの二頭に伊丹二等陸尉達が追われてるのは確かです』
僚機の瑞原三等空佐の声に、神子田は頷いた。
「パワー、マキシマム。フルウェポン、フリー。コンバットマニュバ、ゴウ、ゴウ、ゴゥッ」
久里浜の声に、神子田は「吶喊（とっかん）！」と叫んだ。
「神子田は目標、赤。西元は目標、黒」
空対空ミサイルの近接雷管が作動し、新生龍は爆炎に包まれた。だが、それでくたばるようなら苦労はない。神子田は、ヘッドアップディスプレイのピパーに、赤龍を捕らえると、引き金に指を

かけた。
　M61バルカン砲は、毎分六千発の速度で20㎜弾を発射する。わずかな瞬間であっても交錯時に浴びせられた土砂降りを遙かに越える鉛玉の嵐は、新生龍の身体をミキサーのように激しく揺さぶった。
　平衡を失った二頭の新生龍は、中空に浮かび上がる機能を失って大地に叩きつけられた。
　よろめいてもすぐさま立ち上がろうとするのは流石である。翼を広げて、大地から離れようとする闘争本能は素晴らしい。年若い新生龍とはいえ、空の支配者たる龍種である。が……。
『だんちゃ～く、今っ！』
　七五式自走155㎜榴弾砲十五門から放たれた砲弾に充填された合計百五キログラムのＴＮＴが炸裂。新生龍を含む、その周囲の空気と大地を徹底的にかき回して立ち直る隙を与えなかった。
『効力射撃はじめっ!!』
　ダークエルフの長老達は、ずらっと列ぶ七十五式自走155㎜榴弾砲の砲口から放たれる炎を、両耳を押さえながら不思議そうに見守っていた。あたりには煙が立ちこめて、ほとんど周りが見えなくなっていく。そのなかを特科の隊員達が、忙しく立ち働いている。
「いったい、何をしてるのだ、この連中は？」
「何かの儀式じゃろか？」

けたたましい雷鳴の如き砲声も、それが数十キロ離れたところを攻撃するためとは、思えなかったのである。

だが、次から次へと撃ち出される榴弾は、確実にテュバ山麓を耕していった。

「おほほっ。凄まじい威力じゃのうっ！」

エルベ藩王国王デュランは、乗機に指定されたヘリから双眼鏡を覗きながら、感嘆の声を上げた。山の中腹が度重なる爆煙に包まれ、新生龍がその衝撃と破壊力によって袋だたきにされている様子が見えた。

「儂も、あれを喰らった時は、何が起こったのかさっぱりじゃったが、こうして離れて見るとよくぞ生きておったと思う凄まじさじゃ」

エンジン音の煩い機内ではどうしても声が大きくなる。デュランは怒鳴るようにして、隣に座る加茂一等陸佐に告げた。

「陛下には御武運があったのでしょう」

加茂は、大きく頷きながら返事した。

「武運か？　それが、幸いかどうかはこれからのことじゃよ。さぁ、次を見せてくれんか」

「よし。コブラ隊前へ！」

加茂がプレストークスイッチを押して、命令を下す。

すると、並行して飛んでいた二機のＡＨ－１コブラが、速度を上げて前へと出た。二機の攻撃ヘリは、攻撃位置に遷移すると小脇に抱えたＴＯＷミサイルを発射する。

有線で誘導されるそのミサイルは旧式であるが故に、人間が目標と定めた初見の標的に戸惑うこともなく正確に突き進んだ。

主力戦車すら撃破する力を持つ天空からの矢を受けた新生龍は、その巨体を大きく弾けさせた。炎龍には及ばないにしても、強固な防御力を誇った鱗がいとも簡単に引き裂かれ、肉を露呈し、そこから鮮血を吹き出す。連べ撃ちによって、二本三本と対戦車ミサイルを受けた赤龍、黒龍、二頭の新生龍はこうしてテュバ山麓をまな板として、肉塊へと解体されたのである。

「な、何だっ！　なんて、こった……」

一斉砲撃の爆発に巻き込まれたジゼルは、巻き上げられた土砂に半身を埋められながら、子飼いの新生龍が爆発の中に飲み込まれていくのを呆然と眺めていた。戦いの興奮の中に入ると、元々視野が狭くなる傾向もあって、他の一切が目に入らないのだ。

だから、遠方から飛来する砲弾、ミサイル。その実体の持つ破壊力のみに目を奪われる。何から発射されたかを見ていない。そして誤解する。

「こ、これがイタミヨージの力というのか!?」

もし、伊丹が傍らにいたならば「違う、違う」と大いに訂正を試みただろう。が、それは適わな

い。

さらには、爆音が止んだ向こうから「じぃ～～ぜる～～ぅ？　どこにいるのぉ～？」と地の底から響くような声。振り返ると、そこにロウリィ・マーキュリーの姿があった。

襤褸切れのようになったフリルスカートを、滞空するヘリのローター風によってたなびかせながら、乾いた血に汚れた腕でハルバートをかかえながらジゼルの姿を探している。

上空のヘリからはロープが下ろされ、普通科の隊員達が次々と降下してくる。降下した隊員達は、食卓に乗った海老か蟹に等しい状態となった新生龍に歩み寄って、それが最早死んでいることを確認している。

それらを背景としたロウリィの壮絶なまでの笑みは、背筋が冷たくなるまでに美しく、凄惨なまでの恐怖感をジゼルにもたらした。

「お、お姉さま……」

震える足と、震える手。ずりずりと後ずさって、見つからないようにと伏せて隠れる。

「まずいぜ。このままじゃ見つかる」

攻守代わって、今度は自分が狩られる側に回ってしまったのである。

「じぃ～～ぜる～～ぅ？　どこにいるのぉ～？　幽閉してあげるからぁ、でてらっしゃぁ～い」

亜神は死なない。逆に言えば死ねない。それは恩恵でもあるが、同時に呪いにも近い。

腕を切り落とそうが、脚を切り落とそうが、首を切っても死なないのだ。そして傷口を合わせれ

ばそこから回復できる。もし、腕や脚を切り離して磨り潰し、焼いたり獣などに喰わせたりすると、切断された端から手足が伸びてくるという始末。

故に、亜神達の戦いにおける勝利とは、相手の自由を奪うことである。負けた者は、両手両足あるいは胴を腰斬され、時には首だけにされて解放されるか、あるいは誰かに救い出されるまでの数百年の長き時を、神殿などに幽閉されてしまうのだ。

肉の身体より解脱するまでの千年間を、ただ地の底に埋められたまま過ごしてしまった神もいる。千年の長きにわたって、暗黒の地の底に埋葬され続けた亜神が、陞神後どのような禍神となるか、想像するに難くないだろう。

残忍な者に捕らわれて、再生する内臓を獣に喰われ続けるという扱いを受けた者も実際にいる。肉の身体である以上、快楽もあれば苦痛も受ける。それが摂理だ。だが死なないのだ。死ねないが故に、敗北した亜神には死よりも恐ろしい運命が待ち構えている。

「じぃ～～ぜる～～ぅ？　どこにいるのぉ～～？」

ジゼルは、ロゥリィとその傍らに立つ、伊丹、レレイ、テュカ、ヤオへと視線を巡らせた。ヒト種が二人、エルフが二人。普段なら歯牙にもかけない相手だ。なのに、今は勝てる気がしなかった。炎龍を倒し、新生龍二頭を屠ったあの攻撃をしてみせる伊丹という男を前にしては、勝てる気が全くしない。

ジゼルは、逃げることにした。大地に隠れ泥にまみれても、この場から逃れることを優先したの

である。

＊　＊

戦いの終わったテュバ山麓。

第一戦闘団の隊員達が続々と、周囲に降り立つと新生龍の屍体の確認作業を始めた。上空を旋回していた二機のファントムは、二度ほど翼を振ると去っていく。

また伊丹の報告を受けて、火口内部へと降下した隊員が炎龍の死骸を見つけたことで、テュカの敵討ちは終わったことが確認された。

災害救助に手慣れた自衛隊らしく、炎龍の犠牲となったダークエルフ達の遺体が火口内部から丁重に収容され運ばれてくる。また、炎龍と二頭の新生龍の遺体は、研究のためにここから運ばれるということで、玉掛け作業が進められていた。

そんな様子を伊丹達は、肩を寄せて座りこけて眺めていた。

テュカとレレイが伊丹に凭れるように座り、ロゥリィは伊丹の膝を枕に眠っていた。ヤオにいたっては、伊丹の背中に、自分の背中を預けて呆けていた。自らの信じていた神に裏切られたショックは相当なものだったらしい。

喜ぶにしても悲しむにしても体力が必要だ。これだけ疲れると感情が動かず、ただ、ぼやっとす

るだけになってしまうのだ。
「生きてるな、俺たち」
「そうね……」
呟くような伊丹の言葉に返事を返したのはテュカだけだった。この中では彼女が一番疲労度が低い。戦いが始まる寸前まで、眠らされていたからだ。レレイもすやすやと眠っている。
「やっつけたな」
「うん。敵討ち、したわ」
テュカは、短く答えた。
「もう、俺のこと父さんなんて呼ぶなよ」
テュカは、ゆっくりと視線を伊丹へと向けて抑揚に欠けた言葉で告げた。
「嫌」
「なんで……」
「言い慣れちゃったから」
「そか」
伊丹は、もう、どうでも良くなった。

＊　＊

「停職二週間と、減俸一ヶ月……ですか」

帰還早々、伊丹は直属の上司である檜垣から書類を受け取ると肩を落とした。まぁ、そういうことになるだろうと覚悟はしていたが、現実に懲戒処分を受けるとなると、これまた別でそれなりに気持ちが沈む。

他の偵察隊隊長達は、伊丹の方に視線を向けないように、そらぞらしいまでに机仕事に没頭していた。

「それに加えて、第三偵察隊の隊長職を解く」

檜垣が、机の上から新しい書類を取り上げて、伊丹に突きつける。辞令だった。

「はぁ」

「当然だな。何しろ、自分の部下を放り出していっちまったんだから」

檜垣の言葉に、伊丹としては頷かざるを得ない。

「ここまでが処分人事だ」と檜垣が告げる。すると、

「気を、つけっー！」

背後からの号令に伊丹は背筋を伸ばした。隊長達もみな、一斉に起立して直立不動の姿となった。

背後から靴音を鳴らして現れたのは狭間陸将だった。狭間の側には賞状紙を載せた黒い盆を掲げる女性自衛官達が続いていた。

「伊丹二等陸尉。一級賞詞が防衛大臣より届いておる。日本人拉致被害者救出の功績を特にたたえてこれを授けるものである」

狭間は、伊丹に賞状と略章を押しつけた。

「次に、特地の各方面から、いろいろと来ているぞ。まず、エルベ藩王国国王デュラン陛下より、日本国政府宛と、伊丹二等陸尉個人に対しての感状が届いた。炎龍を退治してくれてありがとうだとよ。それに伴ってお前には卿の称号が贈られた。お前、こっちじゃ貴族様だな。次に、シュワルツの森のダークエルフ族長会議からも、自衛隊特地方面派遣隊と、お前個人の双方にそれぞれ感状が来ている。お前には、これまた名誉族長の称号と、こいつだ」

狭間は、伊丹の手にヤオが持ってきた金剛石の原石を、ドスッと押しつけた。人の頭サイズあってずしりと重い。金額に換算したらいくらになるか全く不明だが、下手すると、宝くじに十回連続して一等と前後賞をとったくらいの価値があるかも知れない。

「人身売買は日本じゃ重大な犯罪だからヤオって娘の扱いをちゃんとしておけよ」と言って、ヤオの権利証が伊丹に押しつけられる。こちらでは人身売買が行われているので、人間の所有権に関する証書類も存在するのだ。

「それから次はなんだ？　ドワーフのルベ村？　そこからの感状。レイゾパムってところからも感

状。トルーテ村からも感状。どれも炎龍退治してくれてありがとうって奴だな。それと……」

次々と女性自衛官が、漆塗りの盆に乗せた巻物とか、紙とかを運び込んでくる。最後の一通が、黒い羊皮紙の手紙だった。しかも、黒いリボンに黒い封蝋で封緘してあって非常に禍々しい気配がある。

「ベルナーゴ神殿？　そんなのあったっけ、まぁいい……」

賞状に略綬に、ダイヤモンドの原石と、書類の束。そろそろ両腕で抱えきれなくなっているところに来て、こうして羊皮紙の巻物まで押しつけられた。

そして、最後の女性自衛官が狭間に一枚の紙を差し出した。

「でだ。これだけ各方面から賞賛される仕事をしたお前さんを処分しましたっていうだけでは、通りが悪い。そこで、お前さんに新しい任務がある」

狭間はそう告げて、辞令を読んだ。

「伊丹二等陸尉。特地資源状況調査担当を命ず」

「資源状況調査？」

「ああ。要するに、特地を好き勝手にほっつき歩いて役に立ちそうな資源を探せってことだ。お前向きだろう？」

「そりゃ、まぁ」

「停職期間が明けたら、早速その任に就いてもらう」

「はぁ。謹んで上番します」
狭間は伊丹の肩をトンと叩くと、連れてきた女性自衛官達とともに去っていった。
皆、荷物を抱えてひとり佇む伊丹を無視するかのように机に向かっての仕事を再開した。だが、今度はチラチラと、やっかみを含んだニヤついた視線が浴びせられていて、なんともこそばゆくて居心地悪い。
「あ、どうも」
伊丹がそう口にしたのをきっかけに四方八方から一斉に「馬鹿野郎めっ」というやっかみの罵声と書類の束が投げつけられたのだった。

＊　＊

「ベルナーゴ神殿？」
ロゥリィは伊丹に尋ねられると、ニヤと頬を歪めた。
「そこってぇ、ハーディの神殿よぉ」
梨紗の運転するワゴン車の助手席に座る伊丹は、真後ろからのロゥリィの言葉に眉を寄せた。窓の外は、関東地方の郊外の風景が流れていた。畑があり、田圃がある。県道は車の通りも少なく、農道との交差点ではトラクターが土をまき散らしながらのんびりと走っている光景も見えた。

「行くぅ？」
黒い神殿からの手紙は、伊丹に対する招待状だったのである。
ロゥリィに問われて、伊丹としては首を振った。特地の神様というのは、どうにもこちら側の常識では測れない存在だ。何を考えているのかも分からないので、伊丹としてはご遠慮したい。だが、ロゥリィは、一度は行ってみるべきだと言った。
「向こうからお呼びがかかったんだからぁ、こちらとしては大手を振って、ハーディの領域に入ることが出来るわぁ。しっかりとぉ、あんたの嫁にはならないって告げてやりたいしぃ、何を考えているか尋ねてみるのもいいわぁ」
「ベルナーゴの手前に、学都ロンデルがある。もし、行くなら同行したい」
論文の発表と導師号の申請をするとレレイは言った。
「へぇ、カトー老師、博士号を飛び越して導師号挑戦を認めたんだ」とテュカは喜んだ。
導師号とは、免許皆伝のようなもので、魔導師として独り立ちを認めることを意味している。レレイの年齢としては異例のことであるが、炎龍を倒すという功績を持つ魔導師が弟子の身分のままなのもおかしな話だということでカトーは許可したのだ。
「レレイが導師号を貰うところは、絶対に見に行かないとね」と、テュカも同行することを暗に告げる。
「此の身としては、ベルナーゴ神殿に赴く機会を頂けるなら、主神にしっかりと三行半を突きつけ

てやろうと思っている。そこで、ロゥリィ聖下にお願いがあるのだが……」
「分かってるけどぉ、ホントにいいのぉ？」
「ええ。是非」
「どういうこと？」
テュカの問いに、ヤオは微笑む。
「名乗りを、シュワルツの森部族デュッシ氏族。デハンの娘、ヤオ・ハー・デュッシ。改め、ヤオ・ロゥ・デュッシにしようと思っている」
「うわっ！」と、テュカは目を丸くする。
「ああ、話が見えないんだが……」という伊丹の問いに、テュカは解説してくれた。
「例えば、あたしの名前は、テュカ・ルナ・マルソー。このルナは、音楽の神ルナリューを指しているの。あたしは、ルナリューを主神と仰ぐ信徒というわけ」
「なるほどね……で、ロゥってことは」
「当然、聖下のことだ」
「亜神の内に、直信徒をかかえるなんて、前代未聞じゃない？」
「祈りに耳すら貸してくれない神などより、直接話を聞いて、言葉を返してくれる亜神の方々の方が、信じるに値する」
ヤオはそう言うと胸を張った。

「ところで、ロゥリィ。あんた陞神したら何の神様になるの？」
テュカの問いに、またまた伊丹は解説を求めた。今度は、レレイが答える。
「死と断罪と狂気、そして戦いの神は、エムロイ。使徒が陞神すると、このうちのどれかを分け担う神となるか、あるいはまだ誰も担っていない事象、領域を切り取って守り神となる」
「へぇ……」
「で、何の神様になるの？」
「死かな？」
「戦いではないだろうか」
「断罪が似合う」
「狂気ってのも、ロゥリィっぽいよね」
こんな予測が飛び交う中、ロゥリィは俯いて頬を赤くしながらボソリと答えた。これによって言葉を解さない梨紗を除いた一同はしばしの間、石像になってしまう。
「お～い、みんなぁ。どうしたんだぁ」
梨紗は、硬直してしまった皆に、声をかけるが誰一人ぴくりとも動かなかった。疎外感著しいが、運転士まで石像化していたら、きっと事故を引き起こしただろうから幸運だったともいえる。
皆をして、ここまでなさしめたロゥリィの答えは……。
「愛……なんて、駄目かな？」

だった。

「ついたよ～」

梨紗の言葉で、伊丹達は車から降りた。

そこは、農村地帯の森を敷地とする、中規模の病院だった。古ぼけていて、築三十年は経っていそうな建物ばかりだ。建物の古ささえ我慢できれば、あるいはここは居心地の良い場所なのかも知れない。

「ここに、伊丹殿の母君がおいでか」

「耀司ぃの母親ねぇ？」

「お父さんのお母さんなら、お婆さまってことね」

「……お義母さん」

伊丹は、なかなか第一歩を踏み出せなかった。そんな伊丹をテュカが追い詰める。

「母親に会うこと」

テュカは父親を騙った上に、炎龍退治を強いた伊丹を許すにあたって、そのような条件を出していた。もちろん伊丹が、テュカのために父親を演じたことは分かっている。だが、テュカとしては、いつまでも罪悪感を抱えられて関係がギクシャクするのも不愉快なのである。そこで、それとこれとは話は別という論法で強引に罰を言いつけ、二人の間に出来たわだかまりにケリをつけようとし

ているのだ。
そしてそんなこともまた、伊丹は理解している。とはいっても、それで母親に会いやすい心境になれるわけではないのだが。
「分かってる、分かってる……」
伊丹はそう言うと、大きく深呼吸しようとした。だが、そんな怖じ気づいたような態度に苛付いた梨紗やテュカ、レレイやロゥリィは「さっさと行けっ」とばかりに伊丹の尻を蹴ったのだった。

ALPHAPOLIS
アルファポリス 作家 出版原稿 募集!

アルファポリスでは才能ある作家 魅力ある出版原稿を募集しています!

- 既存の賞の傾向や審査員の嗜好の枠からはみ出た小説
- これまで知られてこなかった仕事の裏側事情
- 目からうろこの生活・情報ノウハウ ……などなど

アルファポリスではWebコンテンツ大賞など
出版化にチャレンジできる
様々な企画・コーナーを用意しています。

まずはアクセスして下さい!

アルファポリスからデビューした作家たち



恋愛小説

市川拓司
『Separation』
『VOICE』



ファンタジー

吉野匠
『レイン』シリーズ



児童書

川口雅幸
『虹色ほたる』
『からくり夢時計』



ホラーミステリー

椙本孝思
『THE CHAT』
『THE QUIZ』

*次の方は直接編集部までメール下さい。

- 既に出版経験のある方
  (自費出版除く)
- 特定の専門分野で著名、
  有識の方

詳しくはサイトをご覧下さい。

アルファポリスでは出版にあたって
著者から費用を頂くことは一切ありません。



フォトエッセイ

吉井春樹
『しあわせが、しあわせを、
みつけてきた。』
『ふたいち。』



心理エッセイ

本多時生
『イヤな人がいる!』
『幸せになる考え方』

電網浮遊都市

ALPHAPOLIS

アルファポリス

http://www.alphapolis.co.jp



アルファポリス　検索

モバイル専用ページも充実!!

携帯はこちらから
アクセス!
http://www.alphapolis.co.jp/m/

Webコンテンツが読み放題

登録コンテンツ7000超!（2009年12月現在）

アルファポリスに登録された小説・映像・ブログなど個人のWebコンテンツをジャンル別、ランキング順などで掲載!　無料でお楽しみいただけます!

Webコンテンツ大賞　毎月開催

投票ユーザにも賞金プレゼント!

恋愛小説、ミステリー小説、旅行記、エッセイ・ブログなど、各月でジャンルを変えてWebコンテンツ大賞を開催!　投票したユーザにも抽選で10名様に1万円が当たります!（2009年12月現在）

その他、メールマガジン、掲示板など様々なコーナーでお楽しみ頂けます。もちろんアルファポリスの本の情報も満載です!

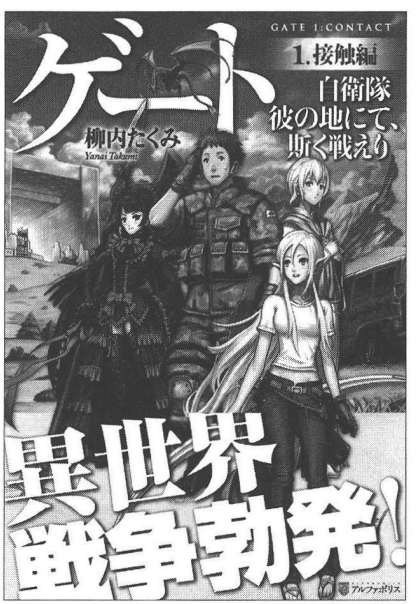
GATE 1:CONTACT
1.接触編

ゲート 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ
Yanai Takumi
装丁イラスト：Daisuke Izuka

異世界戦争勃発!

かつてないスケールの超エンタメファンタジー、開幕!



爆発的人気のネット小説、待望の書籍化!

20XX年、突如として東京銀座に「異世界への門（ゲート）」が開かれた。
中からあふれ出た鎧や剣で武装した「異世界」の軍勢と怪異達。阿鼻叫喚の地獄絵図。陸上自衛隊はこれを撃退し、門の向こう側『特地』へと足を踏み入れた——

◉単行本／1700円＋税

シリーズ第3弾! 最終章!
「ゲート 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり 3.冥門編」
今冬発売予定!

アルファポリス文庫

川口雅幸

MASAYUKI KAWAGUCHI

虹色ほたる

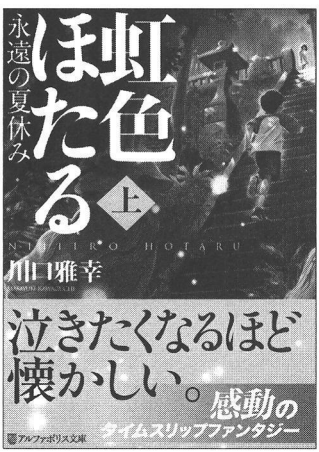
永遠の夏休み

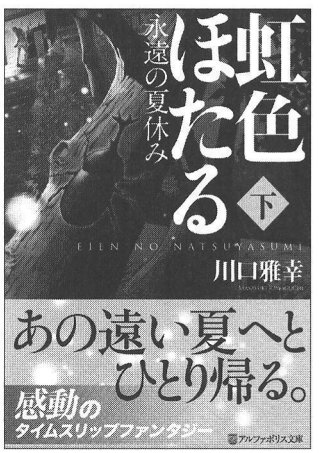
上 下

一年前に交通事故で父親をなくした小学6年生のユウタは、夏休みに一人、父親とよくカブトムシを取りに来た山奥のダムで足をすべらせる。目を覚ましたユウタの前には、一人の小さな女の子とダムに沈んだはずの村が。どうやら三十年以上前の村にタイムスリップしてしまったらしい。そしてそれはユウタにとって、かけがえのないもう一つの夏休みのはじまりだった……

累計17万部突破!

泣きたくなるほど懐かしい。
あの遠い夏へとひとり帰る。





◉文庫本／上巻 570 円＋税、下巻 540 円＋税　◉装丁イラスト：丸山薫

誰の心にもある永遠の夏休みを描いた、感動のタイムスリップファンタジー、待望の文庫化!


今後も順次
文庫化!
吉野匠
レイン
シャントリス、復活す
文庫化、第3弾!
シリーズ70万部突破!
人気爆発!! 剣と魔法の最強戦士ファンタジー!
文庫化
第4弾!
剣と魔法の
ファンタジー
文庫1～4巻も好評発売中!

レイン

吉野 匠

Illustration：MID

シリーズ80万部突破

人気爆発!! 剣と魔法の最強戦士ファンタジー!



単行本 本編8巻+外伝 好評発売中! 今後も順次刊行予定!

柳内（やない）たくみ

東京都在住。自衛官を経験した後、2006年に自営業を開業。本業に従事する傍ら、インターネット上で精力的に執筆活動を展開し、人気を博す。2010年4月、「ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　1.接触編」で出版デビュー。幅広い世代の読者に支持され、一躍注目を浴びる。

イラスト：Daisuke Izuka
http://www.kcc.zaq.ne.jp/d-trench/

ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　—2.炎龍編—

柳内（やない）たくみ

2010年 8月 8日初版発行

編集—太田鉄平
発行者—梶本雄介
発行所—株式会社アルファポリス
〒153-0063東京都目黒区目黒1-6-17目黒プレイスタワー4F
TEL 03-6303-1388
URL http://www.alphapolis.co.jp/
発売元—株式会社星雲社
〒112-0012東京都文京区大塚3-21-10
TEL 03-3947-1021
装丁イラスト—Daisuke Izuka
装丁デザイン—ansyyq design
印刷—シナノ書籍印刷株式会社

価格はカバーに表示されてあります。
落丁乱丁の場合はアルファポリスまでご連絡ください。
送料は小社負担でお取り替えします。
©Takumi Yanai 2010.Printed in Japan
ISBN978-4-434-14763-0 C0093



9784434147630

ISBN978-4-434-14763-0
C0093 ¥1700E

1920093017008

定価：本体1700円+税
発行 アルファポリス
ALPHAPOLIS
http://www.alphapolis.co.jp/
発売 星雲社